
chaos

日向 剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

chaos

【Nコード】

N47050

【作者名】

日向 剛

【あらすじ】

・私たちの世界…あなた方の世界…どうして、相いれないのですか・
時は20xx年…そこは人の文明が栄える国、日本…、そこでは今までにない科学の力が生まれていた…そしてその人たちは、ある事件を境に別空間に隔離されてしまった…それから数年たった…

開始の扉

主人公、烈火 瑠奈（れつかるな。以下烈火）は高校3年生。何も起こらない人生に不満を抱き続ける18歳。だがある一人の女の子の出会いを機に様々な事柄に巻き込まれていく…

（このお話は10話進むたびにサイドストーリーが入ります）

1～8話までの登場人物

烈火 瑠奈

属性：炎

性別：男

年齢：18歳

日向 香恋（ひなたかれん。以下日向）

性別：女

年齢：18歳

泉野 弥恵（いずみのやえ。以下泉野）

性別：女

年齢：18歳

重山 飛鳥しげやまあすか

属性：無

性別：女

年齢：21歳

光 瑠璃ひかりるり

属性：????

性別：女

年齢：17歳

土屋 尽太郎つちやじんたろう

属性：土

性別：男

年齢：55歳

キャラ設定は本編中に随時紹介します。

一幕1話：平凡

瑠奈「遅刻だああ!?!」

瑠奈は暁学園高校3年の18歳。一人暮らしで平凡な日常を過ごしている。部活は帰宅部、特技は剣道。一応家には真剣を置いてある。

今日は後期が開始する日だったが、それを瑠奈はすっかり忘れていた

瑠奈「やべえ、急げえっ!」

急いで支度を済ませ、飛んでいくように家を飛び出した…

「暁学園」

瑠奈「ハア…ハア…セーフ…」

登校時間にギリギリ間に合ったようだ。瑠奈は息を切らせ、ゆっくりと掲示板に向かう

瑠奈「え〜つと…」

????「おは〜つす!」

いきなり後ろからデカイ声と共に後頭部を殴られた

瑠奈「いつて…何しやがる香恋!」

この子の名は日向 香恋^{ひなたかれん}。瑠奈の幼稚園からの幼馴染みである。頭

はそこそこよく、クラス…と言うより学校の元氣印である

日向「大層な挨拶だねえ〜?それが幼馴染みに取る態度!?!」

瑠奈「いや、ただめんどくさいだけ」

日向「めんどくさい!?!?こんな美女に対してめんどくさいって…

一生後悔するよ?」

瑠奈「後悔してもいいわ」

日向「ちえっ、可愛くないの〜!」

????「…また痴話喧嘩…うるさい…」

そこにまた一人女の子がきた。

瑠奈「泉野。痴話喧嘩じゃねえよ」

日向「そ〜だよ〜!だって私の王子様はもっとカッコいい人に…」

瑠奈「あ〜はいはい」

日向「そこ、流すなっ！」

泉野「…うるさいってば」

この子は泉野 弥枝^{いずみのちえ}。こいつも幼稚園からの幼馴染みだ。成績はトップ。ただ、若干オカルトチックな風はあるが…

日向「弥枝が静かすぎるだけだよ！」

泉野「…朝なんだから少しだけでも静かにしてよ」

瑠奈「泉野の言う通りだ」

日向「むきーっ！もういいっ！」

いつもの時間、いつもの会話。ただ、瑠奈にはもう少しインパクトが欲しかった

普通じゃつまらない…もっと…何か…

2話：変化

〓 暁学園、教室 〓

瑠奈「あゝ…」

日向「どくした〜?」

瑠奈「行くのめんどくせえ…」

日向「そ〜言えば、なんか呼ばれてるんだっけ?」

瑠奈「ああ…」

瑠奈は昼休みの前に担任から呼び出しを受けていた。瑠奈「仕方ねえ、行つてくるか…」

日向「ひつてらっは〜い」

日向は口いっぱいにパンを頬張っていた。口の周りにはクリームもついている

瑠奈「…口のクリームは更けよ」

そして事務室に向かって歩き出して行くと…

……すか

瑠奈「…?」

…ますか

瑠奈「!?!」

耳、いや、脳に直接語りかけるような声が瑠奈に聞こえる

瑠奈「誰だっ!」

…聞こえるのですね…

瑠奈「…ああ、姿はみえないが…」 …屋上に…来てください…

瑠奈「はあ!?!?…ちっ、分かったよ…」

瑠奈はダッシュで屋上に向かった…

〓 暁学園、屋上 〓

瑠奈「…」

瑠奈は屋上に出た。だが、人の姿はない。いつもなら学生の昼食の場所として賑わっているのだが…

瑠奈「…出てきやがれ!!」

瑠奈が大声で叫ぶと

????「…やはり来ましたか…」

瑠奈「!?!」

驚くのも無理は無かった。知らないうちに背後に人がいたのだ

瑠奈「…!?!」????「驚かせてすいません…」

瑠奈「…!」

年齢は瑠奈よりひとつ下くらいの白いドレスに身を包んだ女の子が立っていた

瑠奈「…」

????「…私の名は光…光瑠璃です…」

光 瑠璃（ひかりるり。以下瑠璃）。それがこの子の名前らしい。

瑠璃「…貴方に、お願いがあります…」

瑠奈「…」

瑠璃「明日の…夜、ここに来てください…」

瑠奈「…明日?」

瑠璃「その時…たち、を…」女の子の姿が消え始めている。

瑠奈「!まてっ…」

瑠璃「…ねが…ま…」

そして消えてしまった。ただ、確実にSOSなのは分かる

瑠奈「…明日の夜、ね」

瑠奈には何か胸騒ぎがするものの、何かが起こる気がしたから、明日の夜、またここに向かうことを決意する…

3話：DOOR

「暁学園」

瑠奈は瑠璃という女の子に言われた通り、暁学園の屋上に向かっていた。胸騒ぎがするから木刀を護身用に携えてる。…本当に必要かは不明だが

瑠奈「…満月の夜…満天の星…」

ぶつぶついいながら階段を昇る瑠奈。そして屋上につくと…

瑠奈「…！？扉…！？」

昨日見た場所には無かった、あるはずのない扉があったのだ。それは空間に無造作につけられたような扉だった

瑠奈「…」

身構える瑠奈。扉が開くような気がしたのだ。そして、扉が開くと…

瑠璃「きゃあああつ！？」

「…？」「瑠璃様っ！！」

瑠奈「なっ…！？」

中からは二人の女の子が出てきた。

「…？」「！？誰だっ！？」

瑠璃を庇う長い黒髪の女。年は瑠奈より1〜2歳上か。ただ、拳をこちらに向けている

瑠奈「ま、待て！？」

「…？」「…？変な出で立ちだな。組織の人間じゃないのか？」

瑠奈「組織…？」

「…？」「なら地上の人間か…」

拳を引く女。ただ、警戒は解いていないようだ。そして、不可解なことが1つ

瑠奈「…？？」

その女の手の甲に「無」と言う字が光っていたのだ

「…？？」とにかく、瑠璃様を安全な場所に移したい。どこかにその

「ような場所はないか」

瑠奈「あ、ああ……なら、俺の家、来るか？」

「????」「ふむ……悪くない。すまないが、そちらに行かせてもらおうぞ」

そして瑠璃を抱き抱える。……ずいぶんな力の持ち主である。そして、

瑠奈と瑠璃、そして女は瑠奈の家に向かった

4話：奇・夜・満月にて

〓 烈火家、居間 〓

瑠奈「…」

????「…」

瑠璃「…z…z…」

家に来たのはいいが、何を話せばいいのかわからない。瑠璃は確かにあの日に会った子である。だが、急に消えた。そして、謎の扉からは二人。さらに切羽詰まったような空気。そして「組織」…。頭で色んな事を考えていると

????「名を名乗るのがまだだったな」

瑠奈「あ、ああ…」

黒髪の女が口を開き始めた。瑠璃は疲れて寝ているらしい

????「私の名は重山飛鳥。お前たちから見たら（地下）の住人だ」

瑠奈「…地下だと!？」

彼女の名は重山飛鳥（しげやまあすか。以下重山）らしい。ただ、

地下には些か違和感を覚える

瑠奈「地下つて…でもお前らは扉から急に…」

重山「じゃあ何だ、私たちは宇宙人とでも言うか？」

瑠奈「いや、そうはみえないがよ…」

平然と言い放つ重山。ただ、瑠奈には疑問が山積みであった

瑠奈「じゃあ、地下からきたとして、何をここにきた？」

重山「（安住の地）探し。」

瑠奈「地下の生活に不満でもあったのか？」

重山「それは答えられん」

瑠奈「…じゃあわかんねえじゃねえか！なんで傷だらけなんだよ！」

扉から出てきたとき、重山は傷を負っていたのだ

重山「…」

瑠奈「黙ってたんじゃわかんねえよ!」

そういう瑠奈を尻目に立ち上がり

重山「表、出てくれるか」

瑠奈「はあ!？」

重山「確かめたいことがある」

瑠奈「何をだよ」

重山「いいからこい、バンダナ」

瑠奈「俺の名は瑠奈!烈火瑠奈だ!」

重山「烈火…やはりお前か」瑠奈「何がだよ!」

重山「とにかく来い。その刀を持って」

そう言い残し、重山は外に出た

瑠奈「つたく、こっちは混乱してるつてのに…」

刀を取り、不満げながら外に向かう瑠奈。この夜が平凡を一変させる夜となる…

〓 暁学園、屋上 〓

兵士「…はつ。直ちに」

????「…やはりここに来たみたいだね」

????「瑠璃様はここに逃げ、安息を得ようとしてるみたいですが」

????「そんな事はさせない。姫はこの計画に大事なピースなんだ…いなくなれると困るんだよ」

????「では、今回の任務は…」

????「いたって簡単。瑠璃を逃がした重山飛鳥の抹殺。それと、

その手引きをしたものを抹殺」

????「後は…」

????「そう。(炎の守護者)の捕縛さ。この地に間違いなくいるんだ…そんな感じがするよ…」

????「了解しました」

????「さあ…パーティーの始まりだ…!」

5話：月夜の下で

〓 微風公園 〓

瑠奈の家には近くに公園がある、重山はここに瑠奈を呼んだ。肌寒さがある9月。夜で分かりにくいが公園の紅葉が始まっていた

瑠奈「…で？ここで何を話したい？」

重山「…瑠奈。お前の父の名前は烈火 大悟ではないか？」

瑠奈「！！」

何故地下の人間が瑠奈の父の名を知っているか、理解が出来なかった

瑠奈「…だったらなんだ」

重山「確か、半年前から行方不明のはずでは？」

瑠奈「…何故知ってんだよ！理由をせつめい…」

重山「死んだよ、地下で」

瑠奈「！！」

瑠奈の父親、烈火 大悟（れつかだいご。以下大悟）は、半年前に急に姿を眩ましたと母親から聞いていたが、まさか死んでると思いもしなかった

瑠奈「…な…」

重山「国家反逆罪。最期まで瑠璃様の命をしつかり見ていたのだが…。その男を殺したのは私だ」

瑠奈「…」

重山「私に対して憎しみもあるう…。だから」

すると重山は手袋をはめ、瑠奈に構えた

重山「今ここで息子の命脈も断つ。いつ、瑠璃様に手をかけるか分からないからな」

瑠奈「…ふん。だからどうしたよ」

すると瑠奈も刀を構えた。応戦つもりだ

瑠奈「親父も潔い奴だ。武人なら戦死なら本望だろうさ。ただ、俺には関係ねえ。こんなとこで死ぬ訳には行かねえんだよ」

間合いを読み、いつ攻めるかをうかがう両者。そこに一人

瑠璃「止めてください！」

瑠奈「…？」

重山「瑠璃様！？何故ここに…！」

瑠璃だった。息を切らしている様子を見ると、走ってきたらしい

瑠璃「ここまで来て、人を殺める必要はないよ、飛鳥！」

重山「た、ただ…！」

瑠璃「いいから、止めてください！」

重山は手袋を外す。瑠奈はそれを見て刀をしまった

瑠奈「…！」

瑠璃「飛鳥は悪気はないんです。ですけどあまりにも真っ直ぐなので…！」

必死に弁解しようとする瑠璃。その姿を見ると、屋上で会った瑠璃とは別人のようで笑えてきた

瑠奈「ま、別にきにしていらないせ？」

瑠璃「…ほんと？」

瑠奈「別にやりあう意味もないしな」

重山「…ふん」

瑠奈「まあ、どのみちお前ら行くところないんだろ？」

瑠璃「はい…！」

瑠奈「だったら別にいがみ合うのは余計に無しだ。俺ん家で休むといいわ」

瑠璃「ほんと！？ありがとうございます」

瑠奈「いいってことよ」

重山「…世話になる」

「…？」「そろそろと登場とは…中々滑稽だなあ！？」

重山「！？」

全員で家に向かおうとすると、くろずくめの集団に囲まれた
「…？」「さあ…姫君を返してもらおうか！？」

姫の守護者vs黒ずくめ

6話：戦士として

〓微風公園〓

????「ヒヤハア…それにしても今日の獲物は上玉だなあ!？」

重山「ふん…下衆が」

重山が前に出る。やる気だ

瑠奈「お前!一人でやるのか!？」

重山「ど素人は瑠璃様を頼む」

瑠奈「んなつ…!？」

瑠奈を一蹴する重山。そして

????「じゃあ…死んでもらおうかあ!？」

相手は爪を装備し、飛びかかってきた。だが、重山は動じず

瑠璃「飛鳥ッ!」

重山「心配無用です。瑠璃様!姫護衛隊大将、重山飛鳥の力を…みよ!」

すると拳を降り、相手を殴り飛ばした

????「げふうっ!？」

重山「ふん、やはり雑魚だな…次いつ!」

重山の手の甲には再び、無の文字が浮いていた

瑠奈「…威力がおかしい。女があんな馬鹿力を出せるわけが…」

瑠璃「驚きました?あれは私たち地下の人が使える力ですよ」

瑠奈「はあ…」

重山はさらに黒ずくめの集団をさらに吹き飛ばしていく

瑠璃「そして私たちの地上へ来た目的。それは…」

????「炎の守護者の捕縛」

瑠奈「!!!？」

瑠奈と瑠璃の後ろに男が斧を振りかぶっていた。振り下ろした斧は

瑠奈が反射的に出た刀と弾きあい、瑠奈は壁まで吹き飛ばされてしまった

瑠奈「ぐううっ…!!」

???「ふん…軽いな」

するとその斧を瑠璃に向け、振りかぶった

???「さらば、光の姫君」

瑠璃「…!!」

瑠奈「ぐ……………」

瑠璃はとっさにかわすが、相手はさらに斧を振り下ろす。

瑠璃「きゃああっ!!」

重山「!瑠璃さ……………」

???「おらあああっ!余所見すんなああ!!」

重山「くっ…!!」

重山は黒ずくめに囲まれてて動けない。そして瑠璃はとっとう追い込まれてしまった

瑠璃「…う……………」

???「はあ…早く死ねば、楽になるのによ…。でも、これでラストだ」

瑠奈「やらせるかあっ!!」

瑠奈は瓦礫から出てきて、マントの男に斬りかかったが…

???「ガイア・インパクト」

斧が瑠奈を襲った。瑠奈は防御が間に合わず、攻撃をもろに受けてしまった

瑠奈「があああっ!!」

???「眠れ」

すると敵の手から岩が現れ、それを吹き飛んでる瑠奈に投げつけた。

瑠奈「…!!」

それももろに受けた瑠奈は地面に叩きつけられた。刀が吹き飛び、大地に刺さった

瑠璃「瑠奈さんっ!!」

???「…この俺にケンカを売った根性は見事なり。だが、所詮は地上の人間だ」

そして再び斧を光に向ける

???「次こそ…死ぬ」

瑠璃「…！」

振りかぶられた、その時だった

瑠奈「やめろおおお！」

瑠璃「…！」

7話：炎の守護者、来る

瑠奈「やめろおお！」

瑠璃に相手の斧が振り下ろされた、その時であった。瑠奈が瓦礫の山から飛び出し、相手の一撃を食い止めたのだ。その姿にその場にいた全員が呆然とする

????「あ、赤髪だと…!?」

瑠璃「まさか…本当に…」

瑠奈の風貌が変化していたのだった。吹き飛ばされた影響で額が流血していたが、髪の色が赤く変化し、巻いていたバンドナには“炎”の文字が浮かび上がっていたのだ

????「ちいつ…」

慌てて距離をとる男。ただ瑠奈は平然と瑠璃に話しかけた

瑠奈「…」

瑠璃「…見つけましたよ…“炎の守護者”」

瑠奈「難しい話はあとで聞く。とにかく…この場は何とかしたい」

瑠璃「…」

瑠奈「号令を」

人格が変わったのか、頭を打っておかしくなったのか…随分落ち着いた話し方をしている

瑠璃「…この場の打開を、お願いします！」

瑠奈「了解！」

そして相手の男に対峙した

????「…礼を失したようだ。名を名乗ろう。我の名は土屋 尽太郎。地下王国の“土”の守護者だ」

土屋尽太郎（つちやじんたろう。以下土屋）。添れが襲撃してきた大将の名だ

土屋「予想外だよ。地上の人間に素質があるとはな」

瑠奈「…言いたいことはそれだけか？」

土屋「…何？」

すると瑠奈の足もとから炎が巻き上がり、刀に集まって行った

瑠奈「こっちは何が何だか分からない状態でこんなことに巻き込まれてんだ。イライラしてんだよ！」

すると瑠奈は飛び上がり、刀を構えた

土屋「…！」

瑠奈「好き放題やってくれたんだ！返してやるよお！」

その刀を振り下ろした！土屋はとっさに防御態勢に入るも、武器が触れ合った瞬間に爆発が起き、土屋は壁にぶち当てられてしまった

土屋「ぐっ…」

瑠奈「…」

土屋「がははは！」

瑠奈「…何がおかしい」

土屋「まだまだ粗い…が、なかなか面白い若造だ。この場で倒すは惜しい…故に、ここで退かせてもらう」

瑠奈「…」

土屋「また会おう！その時まで、姫君を頼むぞ！」

そして敵がすべて消えていった

瑠奈「…やった…か…」

緊張の糸が切れたのか、瑠奈はその場に倒れ伏した

8話：自分の立場

「?????」

瑠璃「…」

瑠奈「…う…」

瑠璃「あ、気付きました?」

瑠奈「…こ、ここは…」

公園で倒れた後、とある場所に運ばれたようだが…瑠奈にはなぜか見覚えが…

瑠奈「…まさかな」

瑠璃「香恋さん」

日向「お、目覚めたみたいだね、少年!」

瑠奈「…やっぱりか」

ここは日向の家だった。あの公園の近くに日向家はあったのだ。それで話を聞くとたまたま帰宅途中で、その時に助けを探していた瑠璃に出くわし、今に至ったらしい

日向「いや、公園で倒れてるあんたを見たときはびっくりしたよ」

瑠璃「あの、ほんとに急にお邪魔してしまつてすいませんっ!」

日向「いーんだよっ!どーんとお邪魔になりなさいっ!」

瑠奈「んな事言つてられっか、俺は帰…」

そして身体を起こそうとしたが、痛みで動けなかった

瑠奈「…つつ!」

日向「ああ、まだ動かない方がいいんじゃない?けっこうボロボロだったしね?」

瑠奈「…でもなあ…」

日向「四の五の言わない!」瑠奈「…はあ…」

日向「なんだよ!文句あるの!?」

瑠奈「…別に」

瑠璃「その…今日はお邪魔になりましたよ？ね？」

横から瑠璃が割って入る

瑠奈「…重山は」

瑠璃「公園にまだ居るみたいですよ？何か気になることがあるとか…」

瑠奈「…へえ…」

日向「とにかく、今日は家にいなさい！」

瑠奈「分かったよ…世話になる」

瑠璃「決まりですね」

未知の扉から現れた二人の女。黒づくめの襲撃。親父の死。自分の刀から放たれた炎。いまでも現実離れしすぎて信じられない瑠奈。そして、この件が瑠奈にとっての始まりとなる…

〓公園〓

重山「…」

公園では瑠奈が炎で焼いた土地を見つめる重山がいた

重山「炎…か。瑠璃様を守る盾となるか、瑠璃様を狙う凶刃となるか…」

土を触り、何かを考える重山。そこに

瑠璃「飛鳥…？」

重山「瑠璃様？瑠奈は目覚めましたか？」

瑠璃「とりあえずは寝ましたよ？」

重山「そうですか…」

瑠璃「…あの人がやつぱり、炎、なんですか」

重山「ですね。それ以外に説明が付きません」

瑠璃「…ねえ、飛鳥…」

重山「何か？」

瑠璃「…あの人に命運を預けるのは荷が重すぎませんか…？」

重山「ですが、瑠奈は仮にも能力者の血が…それも大悟の血が流れているんですよ」

瑠璃「それは…」

重山「壊された地下を取り戻すには守護者は必ず必要です。…分かっていただけますか？」

瑠璃「…」瑠璃は悩んでいた。地上の民間人を戦いに巻き込みたくないのだ。

瑠璃「…明日、瑠奈さんに全てを話します。」

重山「それしか無いですね。その上で地下の戦争を食い止めなくては…」

瑠璃「ごめんね…私がいなければ…」

重山「瑠璃様。それは言わない約束では？」

瑠璃「…」

重山「私は瑠璃様と約束しましたよ。絶対に瑠璃様に自由を、そして、地下と地上が手を取り合えるように頑張る、と」

瑠璃「…そう、ですね…」

???「へえ、他人の処遇を当人無しで決めるのか？」

重山、瑠璃「!?!」

振り返った先には瑠奈がいた…

瑠奈「へえ…そりゃあ、大変だわなあ」

重山「盗み聞きとは…無礼な!」

瑠奈「ん〜…内緒話もどうかと思うがな…」

重山「くっ…」

瑠奈「それで？俺をどうしたい？」

重山「…」

瑠璃「…私は…貴方を巻き込みたくない…」

瑠奈「だとき、重山さんよ」重山「…瑠璃様の決断ならば…」

瑠奈「だがな、俺を巻き込んだいてそれはつれないんじゃないかい？」

瑠璃「でも…」

瑠奈「親父もそっちに行つてんだろ？だったら俺も行く。あのバカ親父に負けたくないしな」

重山「遊びに行くわけではないんだぞ」

瑠奈「わぁーってるよ。地下世界の回復、だろ」

重山「…ふん」

瑠璃「…本当に、来るんですか？」

瑠奈「お姫様、くどいぜ？」
「そういい、困った様子の光の頭を撫でた

瑠奈「お姫様にはしっかりしたナイトが必要だろっさ。それを俺は
やってやる、ってだけだから、気にすんなよ？」

瑠璃「…はい」

9話：希望の光

「烈火家」

「……い」

瑠奈「zzz……」

「……て……さい」

瑠奈「……ん？」

瑠璃「あ、おはようございます」

瑠奈「……おはよう」

瑠奈はまだ日が昇り始めた頃に起こされた。……地下の人は皆早起きなのか

瑠奈「ふああ……」

瑠璃「あらら……」

大きく欠伸をする瑠奈を見て少し戸惑う瑠璃。瑠奈は、ある違和感に気付く

瑠奈「……何で俺の部屋にいる？」

瑠奈はやはり二人は女だから別に部屋を用意していたのだが、何故か瑠璃はこちらの部屋にいた。

瑠璃「飛鳥が公園で呼んでますよ？」

瑠奈「あいつが？何の用だよ……」

瑠璃「なんでも、力を見極めたい、だそですよ？」

瑠奈「……ああ、なるほどね」

先日の戦いの後、地下行きを決めた瑠奈だが、重山はまだその言葉を信じきれないようだ

瑠奈「ふん……」

そして刀を持ち、瑠璃と共に公園に向かった

「公園」

重山「……遅かったな」

瑠奈「お前が早いだだけだ」

重山は既にあの手袋をはめ、戦闘体勢に入っていた。

瑠奈「…手合わせか」

重山「ここで私に倒される位なら、地下では確実に殺される。だから、私に打ち勝て。」

瑠璃「…私が、見届けさせていただきます」

瑠奈「ふん…」

そして瑠奈は刀を抜く

瑠奈「俺の力を試すのは勝手だが、怪我しても知らねえぞ」

重山「それは私の台詞だ…ちええいつ！」

重山がまず間合いを詰めてきた

瑠奈（重山は拳で戦うタイプ…なら、間合いを取れば！）

そして瑠奈は間合いを取ろうと下がったが…

重山「悪いな」

既に重山は瑠奈の懐に飛び込んで、拳を構えていた

瑠奈「なっ…！？」

重山「私の属性は、無…身体能力強化が主な力だ」

そして…

重山「圧撃拳！」

渾身のストリートパンチを瑠奈に打ち込んだ。

瑠奈「がぁぁあっ！」

瑠奈は血を吐きながら数メートル吹き飛ばされた

重山「自分を守護するには…このような力が必要だ！」

瑠璃「…あ、飛鳥！もういいでしょう？」

重山「…やはり、この男は連れては行けませんよ」

瑠璃「…」

重山「まだまだ弱いです。諦めてください…」

瑠奈「勝手に決めんなよ…」

瑠奈が立ち上がった。口からは血が流れている。かなりの一撃だったのだから。足元がふらふらしながらも刀を構え

瑠奈「まだ…俺の一撃を受けてねえだろ…受けとれよ！」

そして間合いを詰め、刀を振り下ろしたが…重山には当たらなかった
重山「あら、一撃を食らわすのではなかったのか」

瑠奈「…！」

先日戦った炎を出そうと瑠奈は振り下ろしたが、炎が出なかったのだ、刀は空を斬り、瑠奈はバランスを崩したところにまた重山の拳が襲った

瑠奈「…っ…！」

瑠奈は宙に舞い、地面に叩きつけられた

重山「あの力、易々と使いこなせるものか！」

瑠奈「…う…！」

重山「あのとき出たのは、幻だったようだな…残念だ」

そして止めの拳を振りかざしたが、瑠璃に止められた

瑠璃「駄目えっ…！」

重山「る、瑠璃様…！」

瑠璃「分かりました…この人を連れていくのは諦めます…だから…これ以上は」

そう説明してた時、いきなり爆発が起き、重山は吹き飛ばされた

重山「くうっ！」

瑠璃「飛鳥!？」

瑠璃が振り返った先には、鉄の爪を付けた男がいた

???「…飛鳥よ。お前も大悟と同じ事をするのか」

重山「…くっ」

重山が立ち上がるうとするが、その男は間合いを詰め、爪を構え

???「爆炎爪」

その爪から炎が上がり、重山に触れた瞬間に爆発した。重山はさらに攻撃を食らい続ける

重山「がっ…は…！」

???「あの炎といい…瑠璃様の周りにはゴミばかりがいるようだな」

瑠奈「…!!?」

瑠奈が刀を構え間合いを詰めていたが、見切られていて、刀を弾かれた後に爪で身体を引き裂かれた

瑠奈「うあああっ！」

瑠璃「瑠奈さん！飛鳥っ！」重山は膝から崩れていて、瑠奈は身体から血がにじみながら倒れていた

瑠璃「あ…あ…」

???「すまぬ…瑠璃様」

そしてその男はその爪を瑠奈に向ける

???「姫様にとってこの男は毒ですよ…」

しかし瑠奈の前に瑠璃が立ちふさがる

瑠璃「う…」

???「おや、姫様。地上の人間をかばいますか」

瑠璃「…」

???「だつたら…貴女も死んでいただきますよ」

そして爪を振った。その爪は瑠璃に当たったように見えたが、その時だった。瑠璃が首にかけてるの宝石が光を放つと、その光が男を弾き飛ばした

???「ぬっ…」

瑠璃「…」

その光は瑠奈を包む。すると瑠奈の傷はきれいに消えた

瑠奈「う…」

瑠璃「…瑠奈…さん…」

瑠奈「！瑠璃っ！」

倒れる瑠璃を抱き抱え、周りを見渡す

瑠奈「重山…瑠璃…！てめえ…」

すると、あのときのような感覚が瑠奈を捕らえ、また髪が紅く染まり、剣に炎がまとった

瑠奈「許さねえぞ…てめえは…！」

???「ほう…炎か…奇遇だね…俺もなんだ」

するとその男の爪にも炎が集まった

「……？」

「……食らええっ！」

そしてその炎を瑠奈に打ち付けた。だが……

10話：勝利。 & 次幕予告（日向、零編）

相手の炎が瑠奈に襲いかかった。炎に包まれていく瑠奈

瑠奈「…」

???「ふははは！どうだ、我が奥義（業火柱）の力は！」

瑠奈は炎に完全に包まれてしまった

???「その炎は相手の場を削り、身を削り、息を削る！もうてめえの命はないぞお！」

炎がさらに激しく燃える

重山「…！！」

???「さあ…次は君の番だ。重山」

重山「…くっ」

その時だった。その炎が爆発音と共に消えると、中から瑠奈が無傷で現れた

???「何っ!?!」

瑠奈「へえ…これで俺を殺す気だったのか？」

瑠奈の髪の毛は紅く染まり、鉢巻きには（火）の文字。瞳も紅くなり、完全に力に支配されていた

???「くっ…なら！」

瑠奈「はあああっ！」

そして爪と刀の激しい撃ち合いが始まった

???「お前が死ななきゃ…俺の計画に邪魔なんだよお！」

瑠奈「てめえの計画ごときで殺されてたまるかあっ！」

初めは五分だった撃ち合いも、少しずつ瑠奈が押していった????

「うっっ」

瑠奈「…弱いつ！」

そして瑠奈は爪を弾き…

瑠奈「だあああっ！」

???「!?!」

懐に飛び込み、男を爆風で打ち上げた。そして踏み込み、高く飛び上がった。そして…

瑠奈「うおおっ！」

???「…！しまった、立て直せな…」

瑠奈「砕け散れええ！崩壊花火、つつ！！」

刀を振りきると、まとっていた炎が男に当たり、大爆発が起こった。男は地面に叩きつけられ、血を吐く

???「ぐはあっ…」

瑠奈「…へっ…様あ…見やがれ…」

ただ瑠奈も能力を酷使したせいで倒れてしまった

???「…くっ…ここは…退くしかないか…」

ただ男も傷が深く、深追いをせずに撤退していった。公園には気を失った瑠璃、意識があるが傷だらけの重山、能力の酷使で倒れた瑠奈がいる…

重山「…とにかく…ここを離れなければ…」

そして重山は能力を使い、二人を担ぎ烈火家へ戻っていった…

零 冬児（れいとっじ。以下零）「本編10話まで閲覧ありがとう。俺はこれから出る新キャラの零だ。以後よろしく頼む。さて、次話はアナザーストーリーとなる。本編とはあまり関係がない話だからスルーしても構わん。見たかったら見るがいい。以上…」

日向「読者の皆さん、こんちゃーっす！香恋だよ」

零「…なんかあるのか」

日向「本編の予告忘れてるっ！だから、この話のヒロインの私が予告したげよーって駆り出されたの！」

零「…お前と烈火の仲は進まんと思うがな」

日向「はいそこっ！瑠璃ちゃんの登場で焦ってるんだから、そーいう悲しい事言っなっ！」

零「早く話を済ませろ。尺、そんなにないぞ」

日向「きくっ！後で覚えてなさいよっ！！」

日向「さて、第2幕の予告だよ 第2幕は瑠奈君たち御一行が地下

に行くことになりまして、さっき喋ってた零君と出会って、組織の幹部と対峙するよ！」

零「じゃあ、次回も閲覧頼むぜ」

日向「気になる人はサブストーリーへGO！」

アナザーストーリー1話：「観光デート!!」

〓 烈火家〓

瑠奈「…俺が？」

瑠璃「はい」

重山「…はあ、瑠璃様も頑固ですね…」

瑠璃「いーの！飛鳥にも時には休む時もある必要だし、私はこの街を見て回りたいし…」

重山「でしたら私も」

瑠璃「だーかーらっ！地上の話は地上の人しか分からないでしょ！」
瑠奈「…」

公園での組織との争いから一週間。まさかの言い争い。事の発端は瑠璃が「この街を自分の目で見て回りたいから、案内してくれませんか？」と俺に頼んできた事だ。重山的には心配だからついていくと言っただが、瑠璃は重山を休ませたいらしい。…とにかく、俺の休みをあまり削らないで欲しいものだ

瑠璃「どうしても、駄目…？」

瑠璃が甘えた目で重山を見つめる。重山はとうとう観念し

重山「…分かりました。今日1日は少し、休ませさせていただきます」
…」

瑠璃「はい じゃあ飛鳥、お土産も買ってくるから、待っててね」といい、俺の手を引っ張りそとに出た。…あの時一瞬だが重山が殺意の目でこつちを見た気がしたんだが…気のせいだよな。

〓 暁学園〓

瑠璃「ここが、学校、ですか…」

瑠奈「何もおもしろいものは無いと思うがな？」

今度は瑠璃が「学校が見たい！」と言い出した。拒否する理由もないから連れてきたが、何に興味があるんだ？

瑠璃「さ、早く入りましょう？」

といい、また俺の手を握り前に進み始めた。…正直、昔から女には縁がなかったから、自分自身も舞い上がった…と思う。

〓 暁学園、教室 〓

瑠璃「へえ…ここで皆さんが…」

瑠璃が所狭しと教室を観察して回る。地下では余程珍しい光景らしい

瑠璃「あ、教科書だあ…」瑠璃「お花を育ててるんですね」

瑠璃「ここで沢山の人が勉強するんですね」

瑠奈「あ、ああ…」

瑠璃「あゝあ…私もこんな空間で沢山の人とお話したいなあ…」

瑠奈「…」

瑠璃は確か、姫と呼ばれていた身。やはり自由が利かないのか

瑠璃「…瑠奈さん？」

瑠奈「ん？あ、ああ、何だ？」

瑠璃「私も、学校には通えないんですかね？」

瑠奈「はああつっ!？」

あまりにも唐突過ぎた。…と言うより、地下には帰らないのか？

瑠奈「でもお前、地下は…」

瑠璃「んゝ…確かにそうですね…」

そして瑠璃は考えて

瑠璃「だったら、地下にも、ガッコウ、を作ればいいんですね」

瑠奈「はああつっ!？」

またも急だ。

瑠璃「そうすれば地下でも沢山の友達の話が出来ますよね」

瑠奈「ま、まあ、確かにそうだが…」

???「実に興味深い話ですね…？」

知らぬ間に教壇に一人、人が居た

瑠璃「ですよね？」

???「クス…その夢、叶うといいですね」

瑠奈「おいイツキ先生、今一話分かってないのに口出しすんなよ」

「???」あら、夢の話の後押しするのは、教師の勤めよ?烈火さん?」

この女は宝命寺 逸姫(ほうめいじいつき。以下宝命寺)先生。俺のクラスを担当だ。周りからは魔性の女って評価で統一されてる。

瑠奈「まあ、そりゃあそうだがよ…」

宝命寺「ところで貴女?」

瑠璃「はい?」

宝命寺「貴女、全く違う国から来たんでしょ?」

瑠璃「はい、そうですけど…」

宝命寺「だったら学校には来れるわよ、一年間だけならね?」

瑠璃「本当ですか、先生」

瑠璃が先生に飛び付く。この光景が何故か微笑ましい。…そういえば、最近瑠璃はあまり笑ってなかったっけ

瑠奈「ち、ちよいまちイツキ先生。どういう事だよ!」

宝命寺「簡単よ。留学扱いにすればいいの」

瑠奈「その手が…」

宝命寺「じゃ、貴女、手続きしちゃうから、ちよつと来てね?」

瑠璃「はい 瑠奈さんも行きましょ?」

瑠奈「え!?俺も!?!」

そしてその件も何かと大変だった。先生に事情説明しても中々伝わらないし、逆にあれだこれだと先生には言われるし…。隣でニコニコしている瑠璃に、初めて悪意を感じたよ。結局は時々つれてきたら良いって話でまとまった。そして帰路…

瑠璃「今日はありがとうございました」

瑠奈「…どういたしまして…」

瑠璃「…お疲れですか?」

瑠奈(そりゃ疲れもするわ)

瑠璃「瑠奈さんのお陰で色々見れましたよ」

瑠奈「…ああ」

瑠璃「…飛鳥から聞いたんですけど、頑張ってる人にはごほうびを

上げるのが礼儀って話を聞いたんですよ…」

瑠璃が顔を赤くして話しかけてくる

瑠奈「だからなんだよ」

瑠璃「い、いや…だ、だから…」

瑠奈「??」

瑠璃「ご、ご褒美上げようかなって…」

瑠奈「褒美…いいいいよ、そんなのはさ」

そっぴい瑠璃の頭をくしゃくしゃと撫でる瑠奈

瑠奈「確かに疲れはしたが、まあ、俺も楽しかったよ」

瑠璃「…ほんと?」

瑠奈「ああ、ほんとだ」

その言葉にさらに顔が赤くなる瑠璃。そして

瑠璃「…瑠奈さんっ!」

いきなり瑠璃が抱きついてきた。さらに

瑠奈「お、おい! な、ななな、何だっつんだよ! ?」

瑠璃「えいつ!」

そっぴい、瑠奈の頬にキスをした…瑠奈「~~~~!!!!」

瑠璃「ご、ご褒美…ですよ?」

瑠奈「…」

瑠璃「…」

二人揃って顔が真っ赤になる

瑠奈「…い、いいいいから、か、帰るぞ!」

瑠璃「…はい」

そっぴい、瑠璃は瑠奈の手を握って、並んで帰っていった

宝命寺「クス…烈火君も、大人の階段を昇って行くのですね…頑張
ってね、烈火君」

観光デート、完

瑠奈「ちいつす。瑠奈だ。このように10話ごとに小話を挟んでい

くぞ
」

瑠璃「時には笑い話、時には怖い話、時には…きゃーっ」

瑠奈「…まあ、とにかく、次回以降のアナザーストーリーも気が向いたら見てくれ」

瑠璃「では、続いては第2幕11話です！頑張って行きましょー」

2幕11話：未知の扉

「暁学園」

宝命寺「…そうなの…」

瑠奈「ですから、休学という事で…」

宝命寺「仕方ないわね…、手続きを行つときますね？」

瑠奈「はい、頼みます」

地下行きを決めた瑠奈は一応建前として担任に休学の旨を伝えた。

理由は、留学で

宝命寺「行つてくるからには、ちゃんと収穫になるものを見つけな

さいね？」

瑠奈「はい」

そして教室に戻ると

男「おい瑠奈！休学するんだって!？」

女「なんで!？なんで居なくなるの!？」

瑠奈「…」

クラスの奴等に囲まれ、質問責めにあつた。本音は勿論言わない

瑠奈「…まあ、そんな訳だ。一年もしたら帰ってくるぞ」

男「お土産、待ってるぜ!」

瑠奈「遊びに行く訳じゃないんだがな…」

そして帰路…

日向「るーな!」

瑠奈「んがつ!？」

後頭部をいきなり殴られた。

瑠奈「いつつ…何しやがる!」

日向「なんで急に留学になったの?前までそんな話してなかったのに…」

瑠奈「…まあ、家庭の事情だ」

日向「瑠璃ちゃん、関係あるんでしょ?」

日向は瑠奈がヤバイ所に行くのを薄々気付いているようだ。

瑠奈「…」

日向「ねえ」

瑠奈「…何だよ」

日向「ほらっ！」

日向は小指を構えた

瑠奈「…？」

日向「指切りしよ！ちゃんと帰ってこなきゃ、許さないんだから！」

瑠奈「…ああ、帰ってくるさ」

そして指切りをし、二人は別れ、家に着いた

「烈火家」

瑠奈「…ただいま」

瑠璃「おかえりなさい 瑠奈さん」

重山「…やることは済んだか？」

瑠奈「ああ…済んだ」

重山「では行くぞ。我らが大地…地下世界へ」

瑠奈「…おう」

そして三人はある場所へと向かっていった…

12話：開ケ！

「旧暁トンネル」

瑠奈達三人は街外れの使われなくなったトンネルに向かった。重山がいつにはここに地下に続く扉があるらしい

瑠奈「…なあ、ほんとにここにあるのかあ…？」

重山「無論だ」

瑠奈「ほんとかねえ…」

歩いて歩いても道ばかり、そろそろ瑠奈と瑠璃が疲れてきた頃である

重山「これだ」

瑠奈「これ…？」

重山が見た先には扉と、1つの銅像が立っていた

瑠奈「…こんな所に銅像なんてあったかな…」

瑠璃「あ、斗真さん！お久しぶりです」

瑠璃がいきなり銅像に話しかけた

瑠奈「…瑠璃、頭、ぶつけたか？」

???「まったく…不思議なのはお前だよ」

瑠奈「!？」

銅像がいきなり喋り始めたかと思うと、その銅像はたちまち光り、中から人が現れた

瑠奈「…なっ…!？」

???「俺の名は斗真。名字は大門。地下の番人、といったところかな」

瑠奈「…はあ…」

大門 斗真（おおかどとうま。以下大門）は、地下へ続く門の番人らしい。

大門「しかし…瑠璃様、やはり戻ってきたんすね」

瑠璃「はい。やはり、地下は見捨てられません」

大門「それでこそ一国の姫っすね！」

重山「…」

大門「隊長も相変わらずムスツとしてるんすね〜？」

重山「余計なお世話だ。」

大門「じゃ、しばらく振りに封印を解きましようかね」

そういうと大門は扉に手を当て、呪文を唱えた。すると扉は開き、中には街が見えた

瑠奈「…！」

大門「まあ、びっくりするわな。それも当然だから、気にすんなよ」

重山「よし…行くぞ！」

そして三人は扉の中へ消えて行った…

大門「…隊長、姫様、そして地上の戦士…土屋さんの教えの通りだな」

大門「…地下、頼みましたよ」

???「…」

大門「さっきからコソコソと何してるんだ？出てきたらいい」

???「…」

物陰から出てきたのは…

日向「…貴方が、番人？」

大門「…はて、貴女は招いてない気がするんだがね…」

13話…地下世界

地下世界、第1階層

ついにやってきた、地下世界。瑠璃達が居た、地下世界である。そこに烈火 瑠奈という地上人が足を踏み入れることとなった

瑠奈「…」

重山「どうだ、驚きだろう」

瑠奈「草原だと…」

瑠奈の目線の先には広大な草原が広がっていた

瑠奈「…太陽!?!」

瑠奈が上に目を向けると、太陽らしき物体があった

重山「あれは人工太陽。あれが光を発しているから植物も育つ」

瑠奈「…それにこの温度…」

トンネルの中は暑かったが、ここは外と何ら変わらない温度だった

重山「空調施設があちこちあるからな」

瑠奈「…」

驚くほどに文明が発達していることに驚く瑠奈

重山「じゃ、行くとしようか」

瑠奈「い、行くなってどこへ!?!」

重山「前に見えるだろう。あの街に向かう」

瑠奈「…」

目線の先には大都市らしきものがあつた

重山「地下世界第1階層…ネイチャーガーデン、へようこそ」

瑠奈「…」

そして一行は街へ進んで行った…

ネイチャーガーデン

瑠奈「…!?!」

街にたどり着いても驚きが瑠奈を襲う。地上の世界と何も変わらな
い文明なのだ

街人「そ、そこに居られますは…」

街人「姫様!？」

街の人が瑠璃に気付き、周りを取り囲んだ

瑠璃「皆…」

街人「姫様! もう戻ってこないかと…」

街人「ほんとに心配していたんですよ!？」

瑠璃「ごめんね、ごめんね…」

街人「重山さんも一緒だったのか!」

重山「私は守護騎士。当然だろう」

街人「この二人が戻ってきたならもうここは安心だ!」

大衆「やったー!」

瑠璃「…ふふっ」

重山「支配地域が広がっているか…」

街人「ところで…あんだ誰だ」

街の人々は一斉に瑠奈に視線を向ける

瑠奈「俺は地上から来た」

街人「な、なんだって!?!」

地上の言葉を聞いた瞬間、街の人は瑠奈から離れた

瑠奈「な、なんだって言うんだよ…」

街人「お前達のせいでごっちは苦しんでんだよ!」

瑠奈にはいまいち理解出来ない

瑠奈「…地下の奴は喧嘩を売るのが挨拶かよ」

街人「黙れ! 姫様が消えた原因も地上の奴が拉致をしたって話なん

だよ!」

瑠奈「俺は知らん」

瑠璃「皆さん!」

瑠璃が間に入って、その場を黙らせた

瑠璃「…瑠奈さんは能力を持っています」

街人「!!！」

瑠璃「それと、私は瑠奈さんに命を救われました」

街人「…」

瑠璃「彼はいい人…だから、信じてください。私たちと一緒に、ここを、地下を救いますから」

その時だったオオオン…

瑠奈 & amp ; 重山 & amp ; 瑠璃「!？」

街人「き、来たあああ!!！」

なにかの唸り声を聞いた途端に街の人はパニックになった

重山「何が起こってる!!！」

街人「く、来る…」

重山「なにがだ!!！」

街人「クリスタルクラークンだよ!!！」

瑠奈「はあ!？」

そして建物を壊して現れたのは全身光る巨大イカだった

瑠奈「イカか…」

重山「なぜこいつがこんな所にいる!!！」

重山はまだ村人と話をしている

街人「何故か知らないが、最近定期的に街に来てはなにかを壊して

行くん…迷惑な奴だよ!!！」

すると瑠奈は刀を構える

瑠奈「へっ…」

瑠璃「何をする気です!？」

瑠奈「ちようどいいや…俺がこいつぶっ倒して、認めさせてやるよ

!!！」

そして瑠奈がそのイカに突っ込んだ直後だった

オオオンっ

急にその怪物が苦しみだしたかと思うと上から氷の塊が凄まじい勢いで撃ち込まれた

瑠奈「!誰だっ!!！」

「……？」お前に名を名乗る必要があるのか」

瑠奈「……！」

瑠奈の前に現れた銃を持つ黒髪の男の正体とは……

14話…凍てつき銃撃手

「ネイチャーガーデン」

瑠奈「…はあ？」

「???」「ふん…」

瑠奈「…俺は烈火瑠奈。…名を名乗れよ」

瑠奈が刀を構える。相手の男も銃を構えた

瑠奈「…」

「???」「俺の名は冬児。名字は零だ」

瑠奈「…零…」

零「お前か、地上から来た奴は」

瑠奈「!?組織の奴か!」

零「いや。ただ、それに厄介になったことはある。なあ、重山隊長」

重山「…まさか」

零「そう。一時的に組織に入った」

重山「半年経たぬ内に辞めた男が、お前か」

零「あそこじゃ満足に狙撃が出来ない。俺は自由を望んでてね」

瑠奈「…じゃあ何故俺らに銃を向ける」

零「簡単さ。お前のような奴に姫の護衛は勤まらない。消えてもらう
為だ」

そう言うのと零の周りに冷気が集まった

瑠奈「…温度が…」

零「ろくに力も制御出来ないくせに治安をめちゃくちゃにするな」

そついい銃の引き金を引いた。弾は瑠奈には当たらなかった

瑠奈「…!!!」

零「すぐに帰れ。邪魔だ」

瑠奈「うるせえよ」

すると瑠奈の周りに炎が集まっていった

瑠璃「！？瑠奈さん、いつ力の制御が…」

重山「さすが大悟の息子。血が流れてるな」

瑠奈「てめえに指図される筋合いはねえ！」

そついい刀を構え突進していった

零「炎…か」

突つ込む瑠奈に銃弾を放つ零。それをかわし、瑠奈は高く飛び上がった

瑠奈「ブツ飛びやがれえっ！！」

零「…」

そして刀から炎を放ち、零を飲み込んだ

瑠奈「へっ…どうだ！」

地面に立ち、重山達のところに向かおうとした時だった

重山「！！まだだ！」

瑠奈「は…？」

時すでに遅しだった。煙の中から銃弾が出てきて、瑠奈の右腕を撃ち抜いた

瑠奈「つがつ…！！」

瑠璃「！？？瑠奈さんっ！？」

瑠奈「…な、なんだよ、これ…！」

瑠奈の撃ち抜かれた右腕は凍りついていた。そして煙の中からは無傷の零が出てくる

零「読んでいたよ」

瑠奈「何しやがった！」

零「”NB COO1”。僕の銃が君の腕を能力で撃ち抜いたのさ」

瑠奈「力だと！？」

零「そう…僕の力は、氷…組織でのランクもA+さ」

重山「！！」

瑠奈「氷…だと…！？」

15話：成長

瑠奈「てんめえ…」

零「…」

瑠奈「この程度なら炎で溶かしてやるよ！」

右腕を凍らされた瑠奈はその氷を炎で溶かそうとするが…

瑠奈「…??」

零「そんな簡単には行かないさ」

いくら力を使っても溶けなかった

重山「…能力は零の方が上か」

瑠璃「…！」

重山「瑠璃様、行つてはなりません」

瑠璃「でも…」

重山「私たちが行つても、瑠奈の為にはなりません。…信じるのです」

瑠奈「…くそっ」

元々瑠奈は右利きで、刀が持つことが出来なくなっていた。さらに氷の影響で右腕が痛む

零「さあ、ここからが本番さ」

そしてまた銃を構える

瑠奈「…！」

零「”アイスレイン”」

沢山の氷塊を発射し、瑠奈を攻撃する

瑠奈「ぐううっ…」

その氷塊が瑠奈を撃ち抜く

瑠璃「…っ」

重山「…これまでか」

零「地上の男もこの程度か…」

だが…

瑠奈「…くくつ…」

零「…?」

瑠奈「はあっはっはあ!」

零「…何がおかしい」

瑠奈「この程度、どうって事ねえなあ?」

瑠奈はいきなり強がりを出した。零はまだ氷塊を撃ち続けている

零「…その状態で減らず口を」

瑠奈「本当に減らず口かは今分かるさ!」

瑠奈は左の手に炎を宿した

零「…!そこまでの制御が何になる…」

瑠奈「炎掌波”!!」

瑠奈の手から放たれた炎は壁となり、零の氷塊を溶かして行った

零「…ほお、やるな」

瑠奈「もういつぱあつっ!」炎掌波”!!」

さらに炎を零に放つ

零「…馬鹿のひとつ覚えか」

零はまた氷の壁で炎を抑えた

零「無駄な事…」

だが氷の壁を消した時、瑠奈の姿は既に無かった

零「…消え…」

瑠奈「おおおっ!!」

上から瑠奈が右腕を降り下ろした。零はとっさに銃で受けるも、瑠

奈の氷は割れてしまった

瑠奈「へへっ…ちょっと粗っばかったが、これが一番早かったんだ」

零「…細胞が死んでいないだと!確かに凍らせたはず…」

瑠奈「簡単さ、右腕に炎の力を送り込みながらぶつけたのさ。だから

若干の傷があった」

零「…!!」

瑠奈「さあ、今度はこっちの番だぜ!」

そして刀を構える

零「く、回避が間に合わない…！」

瑠奈「烈火流抜刀術・焰ノ風”！！”

刀を振りきると、激しい炎が零を飲み込んだ

零「ぐあああつ…！」

そして零は吹き飛ばされた。決着はついたようだ

重山「見事だな」

瑠璃「よかった…」

瑠奈「重山！瑠璃！勝ったぜえーっ！」

拳を空に突き上げ、喜ぶ瑠奈であった…

16話…下へ

「?????」

「?????」…ほお…」

用兵「只今姫君一行はネイチャーガーデンを抜け、第2階層に向かうようです」

「?????」くくく…辞めた奴とはいえ、あの、鋭き氷、を退けたか…
…炎、もやるな」

用兵「どのような処置を…」

「?????」土屋と雷を遣わせ。…炎、と重山は丁重に葬り去るのだ。
そしてなんとしてもあの小娘を連れ帰れ」

用兵「御意」

「?????」…さあ、この包囲網の中、どのようにこちらまで来てくれるかな…」

「移動エレベーター」

瑠奈「…へえ」

そのころ瑠奈達は下の階層へ向かうための昇降装置に着いた

重山「下へ降り、組織に向かうには二つの手段がある。1つは前こ
つちに来たような扉が各階層にあるのでそれを使い直接行く」

瑠奈「後1つは」

重山「この昇降装置を使い、1つ1つ下っていくか、だ」

瑠奈「このエレベーターは組織までは行かねえのか？」

重山「連結されているのは階層ごとだからな」

瑠奈「つたくめんどくせー…」

瑠璃「頑張るしかないですよ？ 今までの瑠奈さんなら大丈夫です
」

瑠奈「ん…まあな」

重山「…」

怖い目付きで瑠奈を見る

瑠奈「…」

重山「とにかく、第2階層へ向かうか…」

そして装置に入る

瑠奈「なあ、ところで」

重山「なんだ」

瑠奈「俺つてもしかして地下では厄介者の部類か？」

重山「ああ、もう多分目をつけられてると思う」

瑠奈「まあ、まさか2階層の入り口で待ち伏せなんて…」

重山「されてるだろうな。ただまあ、こちらの方が手薄だろうが」

瑠奈「直で行くよりは…」

「第2階層、グロリアスアイランド」

用兵「…へへ、もうすぐだな」

用兵「…炎、と、剛腕の守護神、の抹殺…」

用兵「そうすれば、報酬はたんまり、階級も特級に昇格だ…」

用兵「やってやるぞ…」

「移動エレベーター内」

エレベーター内では次の動きを話あっていた

瑠奈「…じゃあどうすんだよ」

重山「とにかく私が突っ込んで前線を崩す、その後瑠奈は瑠璃様を護衛しながら直進、そして町の手前で瑠璃様を護衛しながら、残りの戦力を掃討する」

瑠奈「ようは力押し、か」

重山「ただ、相手に上級ランクの奴等がいなければいいがな…」

瑠奈「例え格上でも、今の俺らには守るべき人がいる。負けられねえよ」

重山「当然だ」

瑠璃「…お願いしますね」

瑠奈、重山「了解！」

そして一行は2階層に着いた…

17話…怒れる土と正義の拳

「第2階層…グロリアスアイランド」

瑠奈「…!!なんだよ、これ…」

重山「…尋常じゃないな」

瑠璃「ひどい…」

敵の奇襲を覚悟し、第2階層に着いた瑠奈達だったが、敵は既に倒れていた。その場の風景はまさに殺伐としている

瑠奈「…なら」

重山「こつちが当たりか」

瑠奈「引きたくは無かったがな…出てこいや!」

瑠奈が叫ぶと、二人の男女が現れた

重山「…へえ」

瑠奈「…お前か」

土屋「そうだ坊主。よく覚えてたな」

???「何?あいつらと知り合いな訳?」

土屋「ああ、俺に一太刀浴びせた奴だ」

???「へえ…たのしそうじゃん!」

そしてその少女は瑠奈を指差し

???「あたしの名は雷 麗宣。炎、勝負だ!」

瑠奈「…はあ?」

この少女は雷 麗宣(らいらいせん。以下雷)。名前の通り雷使いなのだろう

瑠奈「…いいいぜ、倒さなきゃならないんならな」

雷「ノリいいじゃん!じゃ…ついておいで!」

そして走っていった

瑠奈「待ちやがれ!」

瑠奈も追いかけて行く。その場には瑠璃、重山、土屋が残った
土屋「…少しは成長したか」

重山「当たり前だ」

土屋「なら…ふんっ！」

土屋は岩を作り、瑠璃に投げつけた

瑠璃「！！」

重山「甘いつ！！」

その岩を重山は拳で粉碎した

土屋「…ふん、以前とは違う、か」

重山「たあああっ！！」

そして斧と拳で打ち合う

土屋「お前が瑠璃姫を連れていかなければこんなことにはならなかった！」

重山「私は瑠璃様を按じて逃がした。瑠璃様を分かってないのは貴様らだ！」

土屋「ぬかせ！その姫さえまともに守れぬくせに！」

重山「あの場で殺されるよかましだろぅがぁあ！」

土屋「…ガイアクラッシュ…！！」

重山「…絶壁崩落撃…！」

二人の秘技がぶつかり合った。地上に降りたときに、膝をついたのは土屋だった

土屋「うっ…」

血を吐く土屋

重山「私の正義は…負けはせん！」

土屋「そうかな？」

すると土屋は起き上がり

土屋「…アーススライム…」

すると重山の足元の大地が崩れ、重山の足を固めた

重山「なっ…」

土屋「…蟻地獄…」

そして吸い込まれていく重山

瑠璃「飛鳥！！」

重山「ちっ…抜けれないっ…」

土屋「だろうなあ…ワシの必殺技はかわせない！…ロックブラスト
…！…」

すると足元から沢山の岩が飛び出し、重山にぶつかってくる

重山「うくっ…う…」

瑠璃「飛鳥あっ！」

重山「瑠璃さ…ま…の為…」

すると重山は手を地面に打ち込み…

18話…それぞれの正義を胸に

「グロリアスアイランド」

重山「うん…」

重山は地面に手を突っ込み…

土屋「何を足掻こうと…」

重山「私の…正義は…碎けない…！」

重山の手が輝き…

重山「…崩落壊…！」

能力を放ち、地面から抜け出した

土屋「なんだと!？」

重山「チエエエストオオ!!」

重山の拳が土屋を吹き飛ばした

土屋「うがあああつ！」

重山「…話せ、何故瑠璃様を狙う」

土屋「…」

土屋は流血で意識を失いかけていたが…残りの力で

土屋「…牙獣…の復活」

重山「!!地下の…古書にあったあの神獣をか」

土屋「…地上人、天上人の抹殺が目的…だからな」

瑠璃「…私…」

重山「瑠璃様。私は貴女を…そのような力の為に動いていたきた

くありません」

瑠璃「…うん…」

重山「なにより、瑠奈のように良いやつもいるようですね…」

瑠璃「うん！」

土屋「姫…あの地上人に未来を託すと言うのか…」

瑠璃「私は…あの人が、きつとやってくれる…そんな気がします」

土屋「…とにかく…失礼させていただきます」

重山「…」

土屋「次は…敵では会いたくないな」

そついい残し、岩を自分に落とし消えた

重山「…烈火の様子が気になります」

瑠璃「はい、後を追いましょう！」

「グロリアスアイランド：中腹部」

瑠奈「炎撃波…！！」

雷「雷神烈破…！！」

そのころ瑠奈と雷は激しく戦っていた

瑠奈「ちくしょう…なんだってんだよ！」

雷「ふふふ…まだまだド素人だね」

瑠奈「うるせえっ…！！」

雷「電光石火…！！」

雷の激しい攻撃を瑠奈は必死に応戦する

瑠奈「…ド畜生…！！」

瑠奈は雷に刀を振り下ろすが…

雷「バーカ」

雷はその刀を弾き雷球を瑠奈にぶつけた

瑠奈「うっ…」

雷「鉄はよく電撃を通すからねえ…」

瑠奈「ちいっ！」

さらに来る電撃を交わす瑠奈

瑠奈「刀がダメなら…拳で語るっ！」

格闘戦に切り替えた瑠奈だが…

雷「素人には接近戦は無理だよ」

そして雷は後ろに回り込み

瑠奈「！しまっ…」

雷「雷神烈光破」

瑠奈の背中に手を当て、電撃を浴びせた

瑠奈「うづうづー!!」

雷「あら？倒れないの？」

瑠奈「…うるせえ…!!」

また拳を振るうが、雷には当たらない

雷「こつちだよーっ」

瑠奈「戦いを楽しんでんじゃねえよ!」

雷「え〜…だつて、私の役目は人殺しだよ?」

瑠奈はその言葉を聞いて愕然とした

瑠奈「な…んだと?」

19話…焼き尽くせ、闇の組織

「グロリアスアイランド…中腹部」

瑠奈「な…んだと?」

雷「殺したのはのしーんだよね 誰も私を警戒しないし、いざ私が本性を出したら泣いて、逃げ惑う様と来たら…」

瑠奈「…黙れよ…」

雷「はあ?」

瑠奈「黙れつつつてんだよ!」

すると瑠奈から炎が立ち上った。その炎からは禍々しい力が感じられた

雷「…いつ!」

瑠奈「人の命をなんだと思ってやがる…残された人の気持ちをなんだと思つてやがる!」

雷「…さ、さあ…知らないよ」

瑠奈「ふざけやがって…お前らの様な奴等は全員ぶっ飛ばしてやる!」

そして一瞬の内に雷の懐に飛び込み…

雷「…あ…」

瑠奈「まずはてめえに…分からせてやる!」

雷「う…」

瑠奈「もし生きてたら組織の奴等に伝えな…俺は絶対に貴様らを…

燃やすつてなあ!」

そして拳に力を込め、それを一気に放った

瑠奈「フレア・インパクト…!!」

雷「うあああぁっ!」

雷は遙か遠くへ吹き飛ばされていった

瑠奈「…くう…」

瑠璃「瑠奈さん!」

重山「烈火…！？なんだこれは」

その場に瑠璃と重山が来た。この場は既に焼け野原で、重山が怯えている

瑠奈「…」

瑠璃「瑠奈さん、大丈夫？」

瑠奈「ああ…」

重山「…」

すると、急にその階層中に声が聞こえた

「…」
…地下世界の諸君

瑠奈「!?!」

「?!?!」私はこの世界の王…」

20話：崩壊&次章予告（風野、天鳳院編）

「グロリアスアイランド：中腹部」

「???」「我はこの世界の王…斬馬である」

斬馬（ざんま。以下斬馬）がこの世界の王の名だ

瑠奈「…王…」

瑠璃「…ああ…」

瑠璃が膝から崩れ落ちる

重山「なんで…急に回線を開く…!」

斬馬「今回諸君に回線を開いたのは他でもない…地上の虫と地下の裏切り者の事だ」

瑠奈「…!」

斬馬「その二人が今、第2階層にいと聞いている」

重山「しまった…罠か!」

瑠奈「どういうことだよ!」

重山「簡単さ…あの二人さ」

烈火「!!そうか…罠か!」

斬馬「その二人はこの世界の姫をさらって、ただいまも逃走中だ」

烈火「勝手なことを…言いやがって!」

斬馬「ここで上層部での話し合いの結果…第2階層の爆破を決定した」

烈火「なっ…!!?」

重山「あの方は…瑠璃様までも殺めるつもりか!」

斬馬「姫が死ぬのも致し方ない…地下の民を救うにはこれしかないのだ。では…さらばだ」

そして声は途切れた。すると瑠奈は急に力が溢れだし…

瑠奈「ふざけんな…この階層の民はどうなるんだよ!それに瑠璃は殺させねえ…俺の大事な人を殺させるわけには行かねえんだよ!」

瑠璃「…！」

瑠奈「瑠璃…お前は絶対に俺が守る」

重山「烈火。私を忘れてないか？私は守護騎士。瑠璃様の護衛が勤めだ」

瑠璃「瑠奈さん…飛鳥…」

瑠奈「へっ…！分かってるよ！」

そして、爆破音がなると、地面が崩壊していった！

瑠奈「飛鳥！絶対に瑠璃を…」

重山「ああ！」

すると…大量の砂の山が瑠奈達に雪崩れ込んできた

瑠奈「うああああつ！」

瑠璃「きゃああああつ！」

重山「くああああつ！」

瑠奈達は砂に飲まれ、地面のそこに吸い込まれていった…

風野「いよっ！読者の皆、元気か！？俺は風野真人（かぜのまさと。以下風野）だ。じゃ、次幕の説明だ！」

天鳳院「…よろしく…私は天鳳院琉季（てんほういんるき。以下天鳳院）…風野君…簡潔に…」

風野「ああ！第三幕は今回の爆破によって三人はバラバラになってしまふ。その中重山と烈火の視点で組織にいるであろう瑠璃を取り戻しに向かう話だ！」

天鳳院「…お…」

風野「第3幕からは地上に居るはずの泉野、日向、宝冥寺や、前烈火に負けた零、土屋、雷、そして今回から登場の俺、天鳳院やさらに何人かが新登場だぜ！」

天鳳院「…あの子も…？」

風野「あの子？ああ…灼沢の事か？あいつの話はいずれ分かるさ」

天鳳院「…次のアナザーストーリーはクリスマス編…光さんが烈火

君へのサプライズを計画する話…」

風野「つーこった！じゃあ、次幕も閲覧頼むな！」

天鳳院「…じゃーねー…」

第2幕end

アナザーストーリー2話：「瑠璃のクリスマス大作戦」

「日向家」

日向「へえ〜：瑠璃ちゃんはクリスマスを知らないんだ〜？」

瑠璃「はい〜：よければ教えてもらえませんか？」

泉野「〜：サンタが来るの」

日向「弥枝：まだそれを言ってるの？」

泉野「サンタはいる。オーストラリアとかに」

日向「ここは日本ですよ〜？」

瑠璃「〜：サンタ？」

日向家でガールズトークをしている日向、泉野、瑠璃。話はサンタの方に向かっていった

日向「サンタはね〜、赤い服と帽子を被った人が、いろんな人たちの家に忍び込んで…」

瑠璃「泥棒!？」

日向「いやいや〜。その人の寝てる間にプレゼントを置いていくんだ」

瑠璃「ふ〜ん」

日向「瑠璃ちゃん〜：もしかして、瑠奈になんかしよつとしてる？」

瑠璃「う…」

顔を赤らめる瑠璃。どうやら凶星のようだ

日向「へえ〜：だったらこれ貸したげる」

するとダンスからサンタの衣装を持ち出し、瑠璃に渡した

瑠璃「はい…？」

日向「それを着て、クリスマスの日に瑠奈の寝てる隣に行つて…」

泉野「〜：あんた、光さんに何させるつもり？」

日向「ま、まあ、それは冗談として…瑠奈君にそのカッコでプレゼントを渡したらいいよ」

瑠璃「…」

日向「だったら…今着てみよ〜」

瑠璃「え、ええっ!？」

そして瑠璃はサンタコスに着替えた。身体のラインがしっかりしている

瑠璃「…に、似合わなくない…?」

日向「いーねいーねー なんかどじつ子的な感じが」

泉野「…可愛いよ」

瑠璃「…むう…」

恥ずかしくて俯く瑠璃。それをいじる日向。そこに…

重山「瑠璃様?そろそろ帰り…」

瑠璃「あ…」

日向「飛鳥ちゃん、どう?可愛くない?」

重山「…ま、まあ…」

瑠璃「ち、違うよ飛鳥!?!別にこんな趣味は…」

重山「…似合ってますよ、瑠璃様」

瑠璃「…うう…」

日向「じゃ、弥枝?瑠璃ちゃんとプレゼント探しにいつてあげて?」

泉野「なんであたしが…」

日向「飛鳥ちゃんは嫉妬しちゃうし、私じゃ瑠奈に感づかれちゃうからさあ?」

泉野「…まあ、いいけど」

瑠璃「分かった…頑張りますう…」

そして泉野と瑠璃は町へ向かった…

重山「また私は戦力外…」

日向「私もだから気にしないの!いつかはナイトが来てくれるし!」

重山「…出番、ないなあ…」

〓市街地〓

泉野「…ん〜」

瑠璃「…む〜」

いろんな店に回るが、中々決まらない

泉野「…そもそも烈火君はあまりプレゼントって好きじゃないからなあ…」瑠璃「え…」

そこに…

宝冥寺「あら…光さんに泉野さん、どうしたのかしら」

アクセサリー店から宝冥寺と男が出てきた

男「…生徒？」

宝冥寺「そうよ？」

泉野「…先生もここにプレゼントを…？」

宝冥寺「そうよ…？ここには男の子も気に入る様なデザインもあるしね…じゃあね…」

瑠璃「…」

泉野「…あれ、よくない？」

泉野が指を指した先に、赤い石がはまったペンダントがあった

瑠璃「綺麗…」

泉野「あれにしよっか…」

瑠璃「うん！」

そしてそれを買った…

泉野「私が手伝えるのもここまでだから…」

瑠璃「分かった…頑張るね！」

そして二人は別れた…

〓 烈火家 〓

瑠璃「…」

瑠璃「よし…寝たなあ…」

瑠璃はプレゼントを持ち、瑠奈の枕元まで来た。そしてプレゼントを置こうとすると…

瑠奈「…ん…瑠璃…？」

瑠璃「ひゃああ！？」

瑠奈が目を覚ましてしまった。瑠璃のサンタコスに目を丸くしてる

瑠奈「る、瑠璃…その格好…」

瑠璃「あ、あああの、その、これは、ね？あのね？…」

瑠奈「…もしかして、プレゼントか、それ？」

瑠璃の手に持つてる箱に気付いた…

瑠璃「あ、ああ…」

瑠奈「…それ、俺にくれるのか…？」

瑠璃「う…うん…」

瑠奈はその箱を瑠璃から受けとり、箱を開けると赤い石がはまったペンダントが出てきた

瑠奈「…」

瑠璃「う…うう…」

恥ずかしさで俯く瑠璃に瑠奈はそっと頭を撫でる…

瑠奈「ありがとな」

瑠璃「…うん…」

そして瑠璃が瑠奈を抱き締める

瑠璃「今日…一緒に居てもいい…？」

瑠奈「…ああ…」

サント的な事は出来なかったが、結果的には幸せだった瑠璃であった…

＝アナザーストーリー2話、完＝

瑠奈「とりあえず2話は終了だな？」

零「だったら次は本編3幕だな？」

風野「よっしゃ、やっと出番だな！」

瑠奈「読者には言つとくが、3幕では少しグロくなるかもしれない…」

零「苦手だったらやめとけ…」

風野「それでは！第3幕へ…」

瑠奈&mp;零&mp;風野「GO！FIGHT！」

3幕21話…謎の少女、天鳳院

〓最下層・スラムグランド〓

「……」

「……」派手に……やってくれたね、斬馬の奴……」

「……」うん……」

「……」とにかく、この砂を退かさないと、復興なんてまた夢になりますよ」

「……」そうだな……」

「……」なら、まずここに出てる手の主を助けますか、天鳳院様」
天鳳院「分かった……」

この場を女二人が掘っていくと……

「……」

天鳳院「……男」

「……」犠牲者……みたいですね。でも息はあります」

天鳳院「……風野と夢村を連れてきて、双葉」

双葉「承りました」

双葉と呼ばれる女の子は去っていった……

天鳳院「……義の刃は折れない。この男なら」

〓スラムグランド市街地〓

「……」う……」

天鳳院「目、覚めたか」

瑠奈「ここ……は……」

男は瑠奈だった

瑠奈「おい、お前」

天鳳院「……」

瑠奈「瑠璃はどこだ！？重山は！？おい！あれから何が起こった！」

天鳳院「フエザーブレイド」

錯乱し言い寄る瑠奈の喉元に羽の剣を突きつけた

天鳳院「貴方が不利」

瑠奈「っ！」

天鳳院「でも私は貴方殺したくない。…手短に経緯を話す」

そして2階層が崩壊した話を聞いた。見つかったのは自分一人であることを

瑠奈「守れなかった、のか…」

天鳳院「あまり自分を責めない。」

瑠奈「何故お前にそんな事が言える」

天鳳院「私の名は天鳳院琉希（てんほういんるき。以下天鳳院）。
貴方は」

瑠奈「烈火 瑠奈。」

天鳳院「“炎”の息子が」

炎とは地下で烈火大悟が呼ばれていた名前である

瑠奈「ああ」

天鳳院「なら烈火も炎の能力を使えるのか」

瑠奈「そうだ。だからどうした」

天鳳院「貴方にはまだまだ素質ある。だからこれに共に出る」

そして天鳳院は一枚のポスターを瑠奈に見せた

瑠奈「スラム闘技大会”これがどうかしたか」

天鳳院「光を探しているなら、最下層を出る必要がある。私たちも最下層から出たい。…利害一致」

瑠奈「だが、お前のような奴が戦えるのか？」

天鳳院「おもしろい。なら交えてみるか」

瑠奈「やってやるさ」

22話：同盟、結成

「スラムグランド」

瑠奈「…へえ、武器、ねえのか」

天鳳院「…」

最下層闘技大会に向け、天鳳院の力を見ることとなった瑠奈。そして、瑠奈は刀を抜くと

天鳳院「私は…これ」

と、天鳳院はポケットから薬を取りだし、それを飲んだ

瑠奈「…！」

だが、時間がたっても何も天鳳院に変化は見られない

天鳳院「…こないの？」

瑠奈「ナメやがって…！喰らえ！」焰ノ風」

瑠奈は刀を構え、振り抜き炎を天鳳院に飛ばす。すると天鳳院は笑みをこぼし

天鳳院「単調」

一瞬の動きで炎をかわした

瑠奈「…ちっ！まぐれで！」

次に瑠奈は天鳳院に接近し

瑠奈「烈火流奥義！」崩壊花火・牡丹”！」

刀を振り抜くが、またも天鳳院にかわされる

天鳳院「クスツ…」

瑠奈「…っ！」

その後も瑠奈は力を天鳳院にぶつけようとするが、全く当たらない

瑠奈「…ぜえ、ぜえ…。何で当たらない…」

天鳳院「…半獣、と言ったら分かりやすい」

瑠奈「半獣…？」

すると天鳳院は一瞬のうちに瑠奈の前から姿を消し、後ろに回り込んだ

瑠奈「！？」

天鳳院「…薬で一時的に力を得て、獣の力を解放。それだけ…」

そして瑠奈を突き飛ばす

瑠奈「がっ…！」

天鳳院「…今の貴方じゃ、傷はつけられない…」

瑠奈「…んなもん、やってみなきゃ分からねえだろ」

そついい、瑠奈は目を閉じ、刀を構えた

瑠奈「俺は…瑠璃を助けなきゃいけない。てめえごときに後れを取つてられないんだよ！…当たれ！烈火流抜刀術！”業焰刃”！」

瑠奈の振り抜かれた刀から発した炎は一直線に天鳳院へ向かったが…

天鳳院「…馬鹿な人」

両手を前にかざしたと思えば、その炎を受けきってしまった

瑠奈「…！！」

天鳳院「貴方では私に勝てない。…分かった？」

そついい、またも一瞬のうちに瑠奈の懐に飛び込み、爪で瑠奈の喉を引き裂きにかかる。瑠奈は反応が間に合わない

天鳳院「サヨナラ」

瑠奈「…！」

風野「はい、そこまで！」

後ろで声が聞こえたと思うと、天鳳院は腕をしまい、少し距離を取った。後ろには男が一人、女が一人いた

天鳳院「…後少して狩れた」

風野「あれ？そもそもこいつの話で呼んだのはお前だろ？死なれたらダメじゃねえか？」

双葉「確かに一理ありますね、天鳳院。この男を死なす理由は無いです。何より、特をしません」

天鳳院「…確かに」

瑠奈「… あんたらは…」

風野「ま、簡単に言えば”脱獄囚”かねえ？」

瑠奈「… は？」 双葉「私たち三人は組織に捕まってた”犯罪者扱い”の集まりです」

瑠奈「… 扱いつて…」

風野「言つてしまえば”能力者狩り”の犠牲者、かな？」

瑠奈「能力者狩り…」

風野「ただそれを大っぴらには出来ない、だから俺らを犯罪者に仕立てあげればいいわけだ」

瑠奈「…」

風野「天さんから聞いてるだろ？ 最下層闘技大会。俺はそれで勝つて上に昇り、組織に復讐。それが目的さ。お前：烈火も、組織でやらなきゃいけない事があるなら、これで利害は完全一致だ。どうだ？ 俺らとチームで出ないか？」

瑠奈「… いいだろう。だが、この紙には5人1チームとある。もう一人は…」

風野「… 出てこいよ！」

すると物陰から見たことがない女の子が出てきた

瑠奈「…？」

「…？」

その女の子はジッと瑠奈を見つめている

風野「こいつの名前は灼沢 紗菜（しゃくさわしやな。以下灼沢）。これで五人だ。俺の名は風野真人。そしてこの女は双葉 陽子（ふたばようこ。以下双葉）。そして天鳳院琉希。だ」

瑠奈「…」

そしてこの五人でスラムの闘技大会に出ることになった。その夜：

瑠奈「… 力の差があった。だが、それ以上に力が抑えられてた気がする。… なんにせよ、まだまだ弱いのか…」

灼沢「…」

瑠奈「で、何でまた付いてきてんだ？…さすがに気付いてるぞ」

灼沢「…」

瑠奈「なんとか言ったらどうだ？黙っちゃ何も分かりやしねえ…」

灼沢「…お父さんの名前は大悟だよね…」

瑠奈「そうだが…」

灼沢「…やっぱり、貴方が…」

瑠奈「貴方が？」

灼沢「あたしの…お兄ちゃんだ！」

瑠奈「…はああああ！？」

23話…瑠奈と灼沢は怪奇な関係？

「スラムグランド」

瑠奈「俺が、お前の兄貴だあ？」

灼沢「うん。知らないの？」

瑠奈「ああ、全くな」

灼沢「へえ…ちよつと隣座るね？」

灼沢は瑠奈の隣に座った

灼沢「確かにお兄ちゃんと、直接的な血の繋がりはないんだ…」

瑠奈「はあ…」

灼沢「でも私は大悟の血を受け継いでるの。だから…」

そついい目を閉じると、髪の毛の色が鮮やかな赤に変色した

瑠奈「…てことは、炎が…」

灼沢「そうだね…でもお兄ちゃんと決定的に違うのは浮かび上がる文字かな…」

瑠奈「文字…」

灼沢の手の甲に浮かび上がっていたのは”火”の文字だった

瑠奈「”炎”じゃない…」

灼沢「話に聞いたら、お父さんは”炎”だったみたいだから…半人前の証、かな」

瑠奈「その割には今回、出るんだな」

灼沢「お兄ちゃんがその瑠璃さんって人を助けるためなら、私はそれをを行うお兄ちゃんを助けたいから…」瑠奈「…期待してるぜ」

灼沢「うんっ！」

そして最下層闘技大会当日…

「スラムグランド、最下層闘技大会会場」

瑠奈「へえ…ずいぶんな人ばかりだな」

風野「ま、スラムの治安は最悪だから、欲望も渦巻くわな！」

会場にすごい数の人がいた

瑠奈「で？予選ルールは三人先勝で1カウント…」

双葉「3カウント取った時点で予選突破。予選突破のチームは合計8チームさ」

天鳳院「皆集まって…登録をやるよ」

瑠奈「登録に全員必要か？」

天鳳院「…主将は烈火君、でいいね。」

瑠奈「俺!?!」

風野「いいねー！頼むぜ瑠奈！」

灼沢「私も賛成！お兄ちゃんは強いし！」

双葉「天鳳院がそういうなら…」

瑠奈「…分かったよ」

そういう事で、受け付けには

主将 烈火瑠奈

副将 風野真人

天鳳院琉希

双葉陽子

灼沢紗菜

という紙を出した…瑠奈「瑠璃…待つてるよ…」

天鳳院「では…」スラムレジスタンス”行くよ」

瑠奈& amp; 風野& amp; 灼沢& amp; 双葉& amp; 天鳳院「おおおっ!!」

一方その頃重山も、最下層闘技大会の会場にいた

重山「…すまないな、皆」

日向「いやいや！瑠璃ちゃんのために頑張らなきゃ！」

泉野「…頑張るね…」

宝冥寺「皆、無理はしちゃダメよ？」

零「…仕方ない。やるしかないか」

重山「…瑠奈もこっちに流れ着いてるか…これで分かるはずだ。な

んとしても、予選を勝ち上がる！」

そして重山は受け付けに

主将 重山飛鳥

副将 零冬児

宝冥寺逸希

日向香恋

泉野弥枝

という紙を出した

重山「では……」シャインングナイツ”出陣だあっ！」

重山& amp・零& amp・宝冥寺& amp・日向& amp・泉野

「おーっ！」

そして最下層闘技大会が始まった……

「……」

「……」沢山の希望、沢山の力。彼らは道を切り開けるかな……」

24話：闘技大会予選

「最下層闘技大会会場」

瑠奈「へえ…中も中々広いなあ…」

瑠奈たちは会場内に来た。既に予選は始まっていた

受付「はあ〜い 貴殿方の対戦相手はこちら」

受付に言われた相手がやって来た

???「あらあん…あなた方が相手？」

瑠奈「…!？」

女が一人と、見るからに筋肉で出来ている五人の男がやって来た

天鳳院「…気持ち悪い」

???「私の名は御酒 香（みきかおり。以下御酒）貴殿方にこのマッスルズを勝てるのかしら？」

風野「そりゃやってみればいい！」

御酒「じゃ、001!行つて」

001「おおおっ！」

相手が舞台に上がる

瑠奈「天鳳院、こつちはどうするんだ？」

天鳳院「私が片付けるよ」といい、天鳳院が上がった

受付「では一回戦…始め！」

001「はははあ…てめえの様な女に用はねえが…恨むなよ！」

と、天鳳院に拳を振り抜いた

天鳳院「…見た目だけじゃなくて、脳みそも筋肉質」

すると天鳳院はその拳をいなし、高く飛び上がった

001「へへえ…的だなあ！」

そして拳を構えたが、急にその拳が引き裂かれた

001「おおおあああつ!？」

天鳳院「クスクス…弱い」

受付「勝者、天鳳院！」

天鳳院が降りてくる
天鳳院「…弱すぎ」
風野「じゃ、次は…俺だ！」
瑠奈「任せた！」
御酒「…次、003！」
003「次は男か…楽しみそうだな」
受付「二回戦…始め！」
そして二回戦が始まったと同時に拳で打ち合った
003「中々いい拳だなあ…」
風野「…」
すると風野は少し間合いを取り、急に目を閉じた
風野「来いよ…」
003「〜!!」
そして003が拳を何発も打ち込むが、一発も当たらない
003「はあ…はあ…」
風野「どうした？」
003「ぐ…そう…」
風野「んじゃ、一発で決めようか？」
そして風野は力を解放した。風野の回りには沢山の風が集まる
003「…な、なんだ！」
風野「…自由奔放なる風よ！我が意思に集い敵を討て！」
そして一気に接近し
風野「”由風衝烈破”！！」
風野が手を払うと、風が力となり、003を吹き飛ばした
003「のおおっつ！」
風野「いえ〜いっ！」
受付「勝者…風野！」
そして2勝、残り1勝となった
瑠奈「…決めるか」
天鳳院「…頼むね」

御酒「きいっ！もう、私が出るわ！ぶっ飛ばしてやるんだから！」
そして三回戦は瑠奈対御酒となった…
受付「では、三回戦…始めっ！」

キャラ紹介の扉

9話〜24話までの新キャラ紹介

大門 斗真 おおかどとつま

属性：？

性別：男

年齢：20歳

宝冥寺 逸希 ほうめいじいつき

属性：？

性別：女

年齢：24歳

零 冬児 れいとつじ

属性：氷

性別：男

年齢：18歳

紅 蓮喜 くれないれんき

属性：火

性別：男

年齢：30歳

斬馬 ざんば

属性：？

性別：男

年齢：28歳

雷 麗宣 らいれいせん

属性：雷

性別：女

年齢：15歳

天鳳院 琉希 てんほういんるき

属性：獣

性別：女

年齢：15歳

風野 真人

かぜのまこと

属性：風

性別：男

年齢：19歳

灼沢 紗菜

しゃくさわしやな

属性：火

性別：女

年齢：16歳

双葉 陽子

ふたばようこ

属性：木

性別：女

年齢：17歳

御酒 香

みきかおり

属性：？

性別：女

年齢：21歳

(注、物語上と紹介上で漢字の誤変換などがあると思いますが、キ
ヤラの名はこれが正確です)

25話：憤怒の炎

「闘技大会会場」

御酒「私の相手はボウヤかしら？」

瑠奈「俺の名は烈火だ。ボウヤじゃねえぜ？オバサン」

御酒「可愛くないボウヤね…私たちがマツスルズを可愛がってくれたお礼をしなきゃね？」

そついい、御酒はポケットから液体の入った瓶を取りだし、それを飲み干した

瑠奈「…」

御酒「じゃ、行くわよっ！」

そついい、御酒はその瓶を投げつけた。だが瑠奈は食らうはずも無くその瓶を叩き割る

瑠奈「戦いを馬鹿にするな！」

そして接近し、御酒を殴り飛ばした

御酒「…！」

瑠奈「…終わりかな」

御酒「効いてないわよ…？」

瑠奈「！」

御酒は平然と起き上がった

瑠奈「へえ…なら！」

瑠奈は刀を抜き、御酒を斬った。だが…

瑠奈「次は…」

御酒「こつちよっ？」

御酒は何故か後ろにいた

瑠奈「…??？」

御酒「あら、驚いてるのかしら？」

瑠奈は気付いた。知らない内に無数の御酒がいたのだ。その御酒に瑠奈は囲まれていた

天鳳院「…よく分からない術」

双葉「忍の類とも違うようですが…」

灼沢「…お兄ちゃん…」

御酒「どうボウヤ？これだけ居たら、本物は見つかるかしら？」

瑠奈「…くそっ」

御酒「じゃあ次はアタシの番よ…”幻弾砲”」

沢山の御酒は一斉にバズー力を構え、瑠奈に放った

瑠奈「!!!」

その弾は全弾瑠奈に命中し、大爆発を起こした

天鳳院「!!!」

風野「瑠奈!!!」

煙の中からは傷だらけの瑠奈が出てきた。立っではいるが、かなりのダメージを負っているようだ

瑠奈「…げほっ!」

御酒「あらあら強がっちゃって…それじゃナイトごっこはお止めなさい?」

瑠奈「…?」

御酒「私は知ってるのよ?貴方が姫を拉致したって…」

瑠奈「…俺は…拉致なんか」

御酒「正直言つて、地上の世界の一人に組織を潰すなんて無理。ましてやこの様じゃ姫は守れないわよ」

瑠奈「!!!」

御酒「1つ教えてあげる。貴方達が失敗したお陰で姫は無事、組織に帰ってきたようよ?」

瑠奈「なっ…!?!?」

瑠奈は最下層に落ちてから初めて知った瑠璃の情報が、瑠奈にとって最悪のものとなった。瑠璃は既に組織に捕まっていたのだ

瑠奈「…」

御酒「ボウヤが死んでくれたら姫にはまた平穏な生活が来る…」

瑠奈「何が平穏だ!!!知った口を聞くな!!!」

瑠奈からもの凄い炎が巻き上がる。それはとても憎悪の念が感じられた

天鳳院「!!まずい…」

灼沢「うっ…」

風野「…来るか!」

双葉「…憤怒の炎」…子も備えているのか!？」

舞台上では御酒がたじろいでいる

御酒「う、嘘でしょ?このボウヤが…こんな…」

瑠奈「…瑠璃が望んでんのは、平和、そして普通の暮らした。上の奴等に頭ごなしに押さえつけられて、平穏な筈があるかよ」

御酒「ぼ、ボウヤ…落ち着きなさいよ…悪かったわよ!だから…」

瑠奈「黙れよ。もう顔も見たくない」

瑠奈は既に力に支配されていた。瞳が真っ赤に染まっている。そして…

瑠奈「…業火栓」

舞台そのものを炎で包み込んだ。そこからは中で何が起こってるか分からない

御酒「…この技…紅様の…」

瑠奈「どう死にたい?」

知らぬ間に瑠奈は御酒の前に立っていた。既に刀が構えられている
瑠奈「口が聞けないように首から落とすか、それともこの炎の中窒息してくたばるか…まあ、どっちも死ぬがな」

御酒「い、イヤ…死にたくない!お願い、助けて!」

瑠奈「だから黙れって言ってるだろ」

そっさい、御酒の首を掴み、持ち上げた

御酒「く、くるし…!」

瑠奈「この様に苦しみながら果てるか?瑠璃の苦しみと比べたら天地の違いがあるがな…」

御酒「ちくしょう!」

するとバズーカを構え、瑠奈に放ち、一時は離れたが…煙の中から

出た瑠奈は無傷だった

瑠奈「これで攻撃か？…つまらないな」

するとまた瑠奈が御酒に近づくと、御酒は逃げようにも業火栓の影響で逃げられない

御酒「嫌…来ないで…」

瑠奈「…永久のサヨナラだ。」

そして刀を振り下ろそうとしたその時だった

灼沢「駄目えええっ！」

その刀を業火栓を突き抜けて現れた灼沢が止めた。灼沢も力を解放している

瑠奈「…！！」

灼沢「もうこの人は戦意を喪失している…殺しても、何も価値はない！」

瑠奈「知った口を。こいつは瑠璃を人として見なかった」

灼沢「かと言って殺せば瑠璃さんは喜ぶの！？お兄ちゃんが人殺しになれば、喜ぶの！？」

瑠奈「…！！」

その言葉に心が動いたのか、瑠奈は業火栓を解いた

御酒「ひ、ひいいいっ！」

御酒達は恐怖からその場から逃げていった

受付「し、勝者、烈火！よって1カウント差し上げます！」

瑠奈「…ふう…」

瑠奈はため息を1つすると、力が解け、その場に倒れた。瑠奈の周りに仲間が集まり、会場の外の宿泊施設まで連れていった

その後スラムレジスタンスは瑠奈を欠きながらも3カウントを獲得し、予選を突破するのだった…

26話…あいつが望むもの。俺が望むもの。

「スラムグランド・宿泊施設」

瑠奈「ん…うう…」

瑠奈はあの後メンバーに宿泊施設に運ばれていた

瑠奈「そういえば…俺…」

あの時の記憶が鮮明にのみがえる。憎しみから出た力によって人を殺そうとしていたことを

瑠奈「（…他の奴等は、今どこに…？）」

そして起き上がろうとするが、身体のおちこちが痛み、動けなかった
瑠奈「いいっ…!?!？」

すると、部屋に見知らぬ女が入ってきた

「???」「あら、目、覚めたの？」

瑠奈「…誰だ？」

「???」「そう怖い顔しないでよ、あたしたち、仲間でしょ？」

瑠奈「（あたしたち？でもあの場には居なかったぞ？）」

「???」「天ちゃんから紹介されてないよね？今、名を名乗っとくけどあたしは夢村 未来（ゆめむらみく。以下夢村）。私は補欠だけど、以後よろしくね？」

瑠奈「補欠？」

夢村「一応決勝には一人補欠を雇えるようになってるのよ。だからあたしが入るの。文句ある？」

瑠奈「いや、別に無いが…」

夢村「ならよし！」

瑠奈「…」

夢村「な、なによ…」

瑠奈「いや、地上に居た友人に似てるんだ、お前」

夢村「へえ…」

この夢村という子は日向に似ていたのだ、外見も、性格も

夢村「御酒の戦い、見させてもらっただわ」

瑠奈「…」

夢村「力の制御もまだまだ、戦い方も隙だらけ…。貴方はまだ未知数の殺人兵器つてどこかしら」

瑠奈「…俺は兵器じゃない」

夢村「なら聞くけど、貴方は自分の力を恐れてるでしょ？」

瑠奈は自分の力が怖かった。いきなり炎を操れるようになり、憎しみであれだけの力が出せるのだから。ただ、それを口にしたことは無い

瑠奈「…分かるのか」

夢村「あたしの力は”読心術”だから、心の中は読めるわよ？」

よく見れば、夢村の手の甲には”夢”の字、そしてピアスが光っていた

瑠奈「…その力は中々タチが悪いな」

夢村「よく言われるわ で、どうなの？」

瑠奈「…怖い」

夢村「…貴方が望むものが見えないの」

瑠奈「は？」

夢村「力を持つ人は必ず何か望むものがあつて、その為に力を使うんだけど、貴方からはそれが読み取れないのよ」

瑠奈「俺は…瑠璃が望むものを叶えてやりたい」

夢村「それ、貴方自身の事じゃないでしょ」

瑠奈「…！」

その通りだった。確かに瑠璃の望むものを叶えてやりたいとは思っただ、自身の事ではなかった

瑠奈「…俺は…」

夢村「それが分かるまでは苦労すると思うけど、それが青春よ？」

瑠奈「…あんた、幾つだよ…」

夢村「18よ」

瑠奈「…ずいぶん年寄りのな発言だな」

夢村「余計なお世話よ」

〓 闘技大会会場 〓

風野「勝つには勝ったが…」

灼沢「後味悪いね…」

風野「未熟じゃなく、あいつの能力の強さに問題があるんだよな…」

天鳳院「…問題はそこだけじゃないみたい」

風野「？」

天鳳院が見ていた先には重山達が居た

風野「あの集団がどうかしたか？」

天鳳院「…あたしの昔からのライバルがいてね」

双葉「ライバル？」

天鳳院「多分、あの長い黒髪の女の人は手馴れだし…」

灼沢「決勝トーナメントではあたりたくないですね」

天鳳院「そうね…」

27話：最凶の大乱闘、開幕

「闘技大会会場」

天鳳院「…はあ…」

灼沢「まさか…あの組と」

天鳳院「そのまさか…」

風野「マジか…」

天鳳院が決勝の対戦の抽選会に行き、重山達の組と当たる事になった

夢村「おまたつせー」

双葉「来たか…烈火は」

夢村「あたしの力で寝てもらったよ」

風野「あいつが居ないのはちょっとつらいが、やるしかねえな」

天鳳院「…うん…」

そして、決勝の舞台上がった…

受付「では、ルールを再確認しますね？予選と同様3勝勝ち抜けです！武器等指定は一切なし！目一杯暴れちゃってくださいね！」

重山「…貴殿方が相手ですか」

天鳳院「…」

宝冥寺「あら〜天ちゃんじゃない？元気してた〜？」

天鳳院「…うざい」

日向「およく、意外と女性ばかりのチームなんだね？」

灼沢「貴女方もね？」

泉野「…お手柔らかにお願いします…」

夢村「うん 手加減はしないよ」

零「…障害にならない。通過点になってもらう」

風野「余裕ぶっこいて、汚しても知らねえぜ？」

そして一人一人顔合わせが終了して、灼沢と日向がステージに昇った

灼沢「…絶対に勝つんだ」

日向「あたし、勝っちゃうよ？」

受付「では一回戦！はじ…！」

そう始まった瞬間…

兵「そこまでだ」

天鳳院 & amp ; 重山「！！」

入り口から沢山の兵が入り込んできた

受付「な、ななな、なんですか？」

兵「悪く思っな。スラムの治安悪化を懸念した斬馬様がスラムの民の皆殺しを発表した」

風野「！！」

受付「え…！」

兵「まずは…お前だ！」

そついい受付に発砲しようとしたとき、炎が飛んできて銃を弾いた兵「！何者だ！」

瑠奈「ん？分からないのか？あんたらのお尋ね者さ！」

重山「！！烈火！」

日向「瑠奈！生きてたんだ！」

泉野「…！」

零「ふっ…さすが死に損ないめ」

宝冥寺「やっぱり休学の理由はこれね？」

瑠奈「皆！元気…って先生！？」

宝冥寺「後できつちり説明してもらっわよ？」

瑠奈「…はいはい！」

兵「…斬馬様の為に、こいつらを殺す！」

兵「皆！かれ！」

そして兵がなだれ込んできた

重山「烈火！そつちは任せる！なんとか合流するぞ！」

瑠奈「おう！」

天鳳院「一時休戦…か」

重山「ああ！とにかく、民間人に手をかけるなら、容赦はいらない！いくぞ！」

皆「おおっ！」

そして会場内で大乱闘が始まった日向「シャインビーむ」！！

泉野「スプラッシュ」

零「アイシクル・ブラスト」

日向、泉野、零が組んで、敵をなぎ倒す

日向「おもしろいことおもいついた 弥枝？もう一発」

泉野「？」スプラッシュ」

日向「次、冬児君！あれを凍らせて！」

零「…」アイスブラスト」

日向の指示通りに氷柱を作るとそれに手を当て

兵「な、なんだ！」

日向「氷つて、結構いろんな方向に光を反射するの」プリズムビ

ームフラッシュャー」！！

光を放つと、それが多方向に飛んでいき、兵を打ち込んだ

兵「ぐあああっ！」

日向「いえーいっ！」

〓闘技大会会場、入り口付近〓

天鳳院「はっ！」

宝冥寺「死霊殴打」

天鳳院「まさか貴女とねえ…」

宝冥寺「ぶつくさ言わないの」

天鳳院「…ふう…」

〓闘技大会会場、会場席〓

風野「うざつてええ！」一ノ拳、拳昇風！」

重山「崩落撃」！！

風野「あんた、いい拳持ってたな！」

重山「あんたこそ…！」

風野「じゃあ、俺のとおつておき…」

重山「私の奥義…」

風野& amp; 重山「見せてやる！」

そして兵の群に突っ込み

風野「由風衝烈破”！！”

重山「剛力圧壊撃”！！”

「闘技大会会場ステージ」

兵「たあああつ！」

夢村「いや、お願いだから近寄らないでよ…」

灼沢「炎撃波”！！”

夢村に近づいた敵を灼沢が炎で払った

灼沢「夢村さん…少しは力を見せてくださいよ！」

夢村「ん…！」

灼沢「え、そこで渋るの！？」

夢村「じゃあ…これで」

夢村はいきなり爆弾を取りだし、兵に投げつけ、それを爆破させた

兵「ぐあああああつ！」

夢村「うふふつ」

灼沢「…」

「闘技大会会場外」

兵「こいつだ！殺せえつ！」

瑠奈「…来いよ」

兵は瑠奈に大群で突っ込むが、炎で弾き飛ばされた

兵「くつ…こいつ…！」

瑠奈「悪いな…こつちは機嫌が悪いんだよ…ブツ飛べええつ…！」

こつした瑠奈の活躍があり、兵は全兵撤退した…

「闘技大会会場」

重山「これでよし」

夢村「民間人も全員助かったよ」

日向「ふう〜、疲れた〜」

瑠奈「こつちも片付いた…ぜ…」

瑠奈が血だらけで帰ってきた

灼沢「お兄ちゃん!? その怪我…」

日向「お兄ちゃん!?!」

瑠奈「ああ…傷が開いて、な」

宝冥寺「それだけでそんな傷に?」

風野「無理しすぎだぜ、お前」

瑠奈「勝ったからいいだろ!」

皆「はははははっ!」

28話：斬馬、現る

「スラムグランド」

瑠奈「…ふう、イツキ先生ありがとです。お陰で傷も治りました！」

宝冥寺「あら、私以外にもいっぱい助けくれた人もいるでしょう？でも瑠奈君も周りを助けたんだから遠慮しないの」

瑠奈「は、はあ…」

日向「怪我、治って良かったね」

瑠奈「おう！」

重山「皆、揃ってるな…じゃ…皆！集まってくれ！」

あの場に居た11人が集まる

重山「最下層から脱出出来るエレベーターが見つかった。これから皆はどうする？」

零「俺はお前達とは別行動を取る。出れるならお前達といる必要はない」

天鳳院「私と風野、灼沢、夢村、双葉は一緒に目指す場所があるから、別れる」

重山「烈火は…私たちとか？」

瑠奈「そうだな…組織、行かなきゃならないしな」

日向「あたしと弥枝、先生も…」

瑠奈「駄目だ。一回地上へ戻れ」

日向「なん…」

言い出そうとした日向を宝冥寺が止める

宝冥寺「日向さん？これから烈火君は、やらなきゃいけない事がある…その邪魔になりたいの？」

日向「そ、それは…」

宝冥寺「じゃ、烈火君？この二人は私が地上に連れて帰るから、心配しないで？」

瑠奈「頼みます、先生」

重山「じゃ、皆が先にエレベーターを使ってくれ。皆：武運を！」
そして瑠奈と重山は皆と別れた：

「スラムグラウンド、階層エレベーター」

瑠奈「前は瑠璃も居たんだがな…」

重山「私たちが不甲斐ないばかりに…」

瑠奈「今度は絶対に瑠璃を助けるぞ」

重山「ああ…」

二人は拳を軽くぶつけ、エレベーターに近づいたその時…

瑠奈「…！！！」

重山「あ…！！！」

二人に刀で貫かれた様な威圧感が襲った

瑠奈「…！！！」

重山「来る…」

瑠奈「何がだ…！」

「？？？」おや守護兵長。こんな所で散歩かい？」

重山「…斬馬…！！！」

瑠奈「…！！…こいつが…」

瑠奈達の後ろに斬馬が居た

斬馬「はじめまして…烈火 瑠奈君」

瑠奈「…！！！」

凄まじい威圧感に瑠奈は圧倒されていた

斬馬「君たちの護衛のお陰で、瑠璃は無事に帰ってきたよ」

瑠奈「！瑠璃は…無事なのか！？」

斬馬「勿論。簡単に死なれたら困る」

瑠奈「…」

斬馬「だが…お前達が居ると瑠璃の命が危ない。…ここで死んでもらおう」

そういい、斬馬が剣を抜く

瑠奈「…」

それを見た瑠奈も剣を抜く

重山「！！駄目だ瑠奈！！今は相手にするな！！」

斬馬「さすが大悟の息子…血の気が盛んだな」瑠奈「…なんだと」

斬馬「その刀で何人の人を殺した？」

瑠奈「…！！」

斬馬「瑠璃から授かった力は人殺しの道具か」

瑠奈「…違う！俺の持つ力は、瑠璃を守る力だ！」

そういうと瑠奈は力を解放した

斬馬「…ほう…」

瑠奈「約束したんだ。瑠璃を絶対助けるって。お前が通信を使った時、瑠璃は怯えてた。だから…お前は瑠璃には必要ない！」

そして刀を構え…

瑠奈「瑠璃を怯えさせる奴は、俺が倒す！！それが、俺の力だ！！」

斬馬に向かって突っ込み、炎をぶつけた

斬馬「！！」

瑠奈「…やったか！」

重山「瑠奈！下がれ！」

重山が瑠奈を止めようとする

瑠奈「なんでだよ！」

重山「今のお前…いや、私も太刀打ち出来ない相手だ！だから…今は」

斬馬「ククク…ダメだな」

瑠奈「！」

炎の中から無傷の斬馬が出てきた

斬馬「今の俺には、お前はカトンボにもなれない」

瑠奈「…っざけんなあっ！！」

重山「やめろっ！」

重山の制止を振りきり、斬馬に斬りかかる瑠奈。だつたが…

瑠奈「瑠璃の為に…討つ！」

斬馬「はっ！」

斬馬と瑠奈が斬りあつた。その場に静かな時間が流れる

瑠奈「…」

斬馬「…”斬”」

そついで斬馬が刀を柄に納めた瞬間、瑠奈の刀が折れ、瑠奈は肩からバツサリ斬られ、血が吹き出した

瑠奈「…！！」

瑠奈はその場に崩れ落ちる

斬馬「…よもや、こんな簡単に崩れるとは…重山、見込み違ひだつたようだな」

重山「…！！」

そしてその場を立ち去ろうとする斬馬。その足に瑠奈がしがみつくと斬馬「…」

瑠奈「待ち…ゲホッ…やがれ」

斬馬「やれやれ…死に損ないが…」

瑠奈「まだ…うご…ガハッ…ける…ぞ」

そついで、這いつくばりながらまた刀を抜く瑠奈。それに対し斬馬は

斬馬「…武士だな。父も、息子も。」

そついで、刀で顔の左目辺りをを斬りつけた。さらに瑠奈からは血が吹き出す

瑠奈「…！！！！」

斬馬「その出血量じゃ、助からないな。じゃあな、勇敢な戦士君」

瑠奈「…！！！！」

そして斬馬は消えていった…。血だらけの瑠奈に走っていく重山

重山「瑠奈！！瑠奈！！！！」

瑠奈「ざ…げほっ！まあ、ない…なあ…」

重山「口を開くな！傷に触る…」

そついい、包帯で懸命に止血をしようとするが、傷が深く血が止まらない

瑠奈「ハア…ハア…死ぬ…のか…ゲホッ」

重山「まだだ、まだ瑠璃様を助けてない！死ぬな！」

瑠奈「…俺の…刀…斬られ…たのか…」

重山「あれがあいつの能力なんだ！」瑠奈「ガハッ！」

瑠奈の吐血も止まらない。重山も血を浴びて真っ赤になっている

重山「くそっ…瑠璃様がお前を待ってる！お前は死なせない！」

そついつた時だった

灼沢「お兄ちゃんっ！！」

日向「飛鳥さんっ！！」

泉野「…これは、ひどい」

日向、泉野、灼沢がやってきた。この四人はまだエレベーター乗っていなかったようだ

灼沢「お兄ちゃん！！しっかりして！！今助けるから！死んじゃ駄目だよ！」

そついい、皆で出来る応急処置を施した。

瑠奈「ハア…ハア…」

灼沢「血が止まらない…」

日向「誰か…瑠奈を助けて…」

すると…一人の女性が現れた

???「私の家に連れてきなさい。手当てを」

重山「貴女、誰だ？」

???「気にしている場合じゃないでしょう？とにかく、こっちへ」

そしてその女性の言う通りに瑠奈を運んでいった…

29話…絶望、希望

「?????」

「?????」これでよし…」

重山「すごい…」

あらわれた女の指示通りに瑠奈を連れていき、その女が泉野と共に治療をし表面の傷は消した

「???」「貴女、ありがとね?ちょうど水使用で助かったわ」

泉野「…はい」

重山「貴女…誰だ」

「???」「私の名は天導 有紀(てんどうゆき。以下天導)。スラムの支配者、という所かしら」

重山「支配者…」

天導「そう。大会の主催者は私。これで納得?」

重山「…ああ」

天導「…でもあの斬馬に喧嘩を売るなんて、この子も凄いのね」

灼沢「すごい…?」

天導「本来なら常人はあの威圧感で死ぬらしいのよ」

灼沢「…!」

天導「それなのにあの子は一瞬でも斬りあった…さすがよ」

日向「でも…これ…」

日向は斬れた瑠奈の刀を持ってきた

天導「さすが地下の統治者ね。やる事が違うわ」

重山「これが、斬馬の”断”の能力…」

天導「…貴女達には先に言っとくわね」

重山「…なんだ」

天導の話に皆が耳を傾ける天導「…この子。能力の元までも斬られたみたいなの」

日向「…それって…」

天導「簡単に言っ飛ばしてしまえば、この子はもう力が使えない、って事」
重山「斬馬は…形の無い物までも斬れるというのか…」

灼沢「しかもこの怪我じゃ…」

天導「察しの通り、瑠奈の右肩の骨がばっさり斬られてて、これはさすがに治せない。だから、もう刀も握れない」

灼沢「そんな…」

天導「後は左目の傷だね。これは神経も斬れてるから、失明は免れないね」

泉野「…瑠奈が可哀想」

重山「…天導、なんとかならないのか？」

天導「…手は尽くした。もう、どうしようもないの…」

灼沢「…お兄ちゃん…」

そして三日後…

〓天導家〓

瑠奈「う…」

瑠奈が目覚めると、もう既に皆は寝ていた。起き上がると右腕に感覚が無く、左目が全く見えなかった

瑠奈「そうか…俺、死ななかつたのか。」

そして一人、外へ向かう

〓スラムグランド〓

瑠奈「…」

瑠奈は何度念じても炎は出なかった。その事が瑠奈へ、敗北、を体感させることになった

瑠奈「…ざまあ、ないな」

その場に寝そべり、天井を見上げる

瑠奈「守りたい人すら守れないで、何がナイトだ。…俺は、大馬鹿者だ…」

日向「瑠奈…？」

すると日向がやってきた。目が覚めてしまったらしい

瑠奈「香恋か…」

日向「…やっぱり、動かない？見えない？出せない？」

瑠奈「ああ…綺麗さっぱり、だな」

日向「…」

瑠奈「俺、こんなにはつきりと負けを意識したのは初めてだ」

すると日向は泣きながら瑠奈に抱きつく

瑠奈「ど、どうした？」

日向「…なんて声をかけたらいいか分からないけど…腕は時間が経てば治るって」

瑠奈「ああ」

日向「目も…今だけだって」

瑠奈「…ああ」

日向「…もう、終わりにしようよ」

瑠奈「…？」

日向「あたし…もう瑠奈が傷つくの、見たくないの…」

瑠奈「…」

日向「あたしは瑠奈が好き。だから…一緒に…」

瑠奈「ごめん」

日向「…」

瑠奈「待ってくれてる奴が、居るんだ。俺は、そいつを置いて帰れない」

日向「…フラれちゃった、か」

そついい日向は立ち上がり

日向「だったら弱音なんか吐かないで、シャキッとしゃがれこんちくしょー！」

そついい、瑠奈の背中を思いきり叩いた

瑠奈「いでえっ…！」

日向「待っててくれる人がいるなら、その人の為になんか出来るか、考えなきゃ…」

瑠奈「…そうだな」

日向「可愛いあたしをフツたんだから、それくらいポジティブになりなさい！」

瑠奈「ありがとな…香恋」

日向「じゃ、先に戻ってるね」

そして日向が天導家に戻ると…

泉野「…駄目？」

日向「…うん」

日向は泉野に泣きつく

日向「あたし、駄目かな。フラれた男の子を助けちゃった」

泉野「…香恋らしいよ」

日向「…うわああああん…つらいよお…弥枝…つらいよお…」

泉野「…よし、よし…。香恋はよく頑張った。偉い、偉い…グスッ」

そして泉野も泣き出してしまった

日向「弥枝…なんで…？」

泉野「…香恋は私の親友だから。親友が悲しいと私も悲しいよ…」

日向「…うわああああん…」

「スラムグランド」

瑠奈「…そうだな、香恋。俺は、ここで立ち止まるわけには行かない…そう、瑠璃を助けるまでは…」

瑠奈「瑠璃、待ってる、もう少しで行くからな」

そう言った瞬間だった。瑠奈が急に光に包まれ、光が消えた

瑠奈「…！な、なんだ…？」

不思議な事が起こった。一瞬にして右腕が動くようになり、目が見えるようになったのだ

瑠奈「…瑠璃も、待ってるって事か…よし…」

そして翌日…

30話…託されし力、今ここに再び渡されん&次幕予告（日向、灼沢編）

「天導家」

重山「お前…傷はどうした!？」

瑠奈「見ての通りだよ!すっかり治ってるぜ!」

天導「…」

瑠奈は全員を居間に集めた

瑠奈「でもよ、俺は力を失っちまった」

灼沢「…」

瑠奈「だけど、俺が来るのを待ってる奴が居るんだ」

泉野「…それは…」

日向「しっ…」

瑠奈「だから…皆、足手まといかも知れないけど、俺に力を貸してくれないか?」

天導「最下層からの脱出は誘導するが、私には責務があるからここは離れないわよ」

瑠奈「それだけでも十分だ。…泉野も、香恋も、危険かも知れないが、頼めるか?」

泉野と日向は顔を見合わせた後、笑って

泉野&日向「うん」

と瑠奈に返した

重山「…だったら、お前にこれを、預けるか」

そっつい、重山は瑠奈に1つの指輪を渡した。中には赤い宝石が埋まっている

瑠奈「…これ…」

重山「瑠璃様が私に託してくださっていた品だ。だが今はお前が持つべきだろう」

その時、その宝石が赤く光輝き、その光がまた瑠奈を包む

瑠奈「な、なんだ!？」

灼沢「…!!まさか!」

そして光が消えると…瑠奈の鉢巻きには(炎)の文字が現れていた

重山「お前、力が使えないんじゃない？」

天導「その宝石…」

すると天導は部屋から一冊の本を取りだし、何かを見ている

灼沢「たぶんあれは…」

天導「源の石」なんでしょうね」

瑠奈「なんだそりゃ?」

天導「私たちが持つ力は元々あるものじゃなくて、何かを媒介に伝わった説が有力なの。それが今回石だったって訳」

重山「…何故、こんなものを私に…」

天導「多分光さんはこうなるのを気付いてたんでしょう」

瑠奈「気付いてた?」

天導「でもあなたの事だから絶対に諦めない、だから自分の出来ることを守護兵長の重山に託した、という事だと思うわ」

重山「…」

灼沢「これなら…」

泉野「いけるね」

瑠奈「…瑠璃…!」

瑠奈はその指輪を左の薬指にはめて

瑠奈「よし…皆!組織のある所まで突っ走って、瑠璃をたすけるぞ!」

重山「まだ無理だな」

おーっ!という空気の中重山が急に話始めた

瑠奈「なんでだよ!」

重山「考えてもみる、瑠奈、お前は斬馬に一発で敗れたんだぞ?」

瑠奈「…だからなんだよ!黙ってても何も始まらないからとにかく行動しようとしてんだよ!」

重山「だったら…ついてこい、皆もだ」

瑠奈「？」

そして重山達の向かった先には洞窟があった。重山達は天導と別れ、中をさらに進んでいく

瑠奈「…まさか、このパターンは…」

重山「そのまさかだ」

重山が立ち止まり、目線の先には地上で見た門と地上にあった銅像があった

灼沢「…まさかって？」

日向「あ！大門だあ！」

すると銅像が行きなり人間に変わり喋り出す

大門「呼び捨てにするな小娘！」

日向「あたし小娘じゃないもん」

大門「ぐぬぬ…」

瑠奈「で、どういう事だ？」

重山「この門は”試練”が待ち受けてるとされる門だ」

大門「俺、門と門ならどこまでも移動できるんだが、昨日天導さんに呼び出されてよ」

瑠奈「天導が？」

重山「門は二つ、二手に別れて門の先の敵を倒し、何かを掴んでくるぞ」

瑠奈「メンバーは？」

重山「左には瑠奈、灼沢。右は私と泉野、日向」

瑠奈「わぁーったよ」

そして全員扉の前にたち

重山「じゃあ皆…健闘を祈る！」

そして扉の奥へすすんでいった…

日向「3幕閲覧お疲れさまーっ」

灼沢「今回は私たちが次幕予告するよ！」

日向「第4幕は自分の能力を底上げするために試練の扉に入るんだけど、その中で起きる出来事の話だよ！」

灼沢「そして次はとうとう組織との戦争が始まるよ…どうなったか
うのかな…」

日向「きつとなんとかなるよ」

灼沢「アナザーストーリー3話は重山さんと光さんの出会いの話に
なります！これは重山さんの視点になります！」

日向「じゃ、そういうことで次話へ…」

灼沢 & amp; 日向「GO」

アナザーストーリー3話：「私の出会い」

「第4階層（地名は本編で紹介）」

男「くるあつ！」

重山「ちいつ！」

「… いったい、どれだけ人を殺せば私は救われる。ほんとは人を殺したくなんかない。でも、殺さなければ生きてはいけない
そして重山はまた男の心臓を打ち抜く

男「げほあつ…」

大量の血を撒き散らしながら倒れる男。その血を大量に浴びる重山
重山「… こいつも… 全然持つてない…」

重山は男から財布を奪う。だが中にはあまり金は入ってなかった

重山「… くつ…」

その場に倒れる重山。連戦によりかなり疲弊していたのだ

重山「身体… 動か… ない」

斬馬「… なんの騒ぎだ…」

そこに斬馬が現れる

重山「… これまで… か」

意識が朦朧とする。もう、ダメか…

斬馬「… 城に連れて帰るぞ」

兵「はあ…？」

斬馬「丁重にもてなせ」

「組織、斬馬の部屋」

重山「… う…」

斬馬「気が付いたか」

重山「… ！」

何故、私は生きてる。この男に殺されたのでは無かったのか…
飛び起き構える重山に対し、斬馬はクスと笑い

斬馬「ここは俺の城だ。別にお前を取って食おうとする奴はここには居ない…安心しろ」

重山「…誰だ」

斬馬「俺は斬馬。この地下世界の統治者」

重山「その統治者が私に何のようだ」

斬馬「…中々おもしろい女だ。私の配下になれ」

重山「…軍には興味がない」

斬馬「何、別に前線で戦って欲しい訳じゃない。お前には少し違う任務をやって欲しい。もちろんお前の生活も保証してやる。…どうだ」

重山「…その違う任務とは」

斬馬「こつちだ、ついてこい」

そして重山は斬馬についていき、ある部屋に連れてこられた

「光の部屋」

斬馬「お前たち、もうここの警備は必要ない」

兵「はっ」

斬馬「鍵を寄越せ」

斬馬は兵から鍵を受け取り、その鍵を重山に渡す

重山「…」

斬馬「…この中に居る人の護衛」…後は自分で確かめろ」

そして斬馬はその場から去った

重山「…」

そして重山は鍵を開け、中に入る。その中にいたのは一人の少女だった

光「…」

重山「…貴女は…」

光「…光、瑠璃」

重山「…私は重山、飛鳥」

すると後ろから男が現れた

土屋「お主が新入りか」

重山「…」

土屋「ワシは土屋尽太郎。特命部隊所属だ」

光「…」

光は重山の後ろに隠れ、土屋を見る

土屋「まだ慣れないか…姫の護衛はやはり女じゃないと無理なのか…」

重山「姫！？この女の子が！？」土屋「そうだ。この国の跡取りだ」

重山「…そんな、こんな小さい子にそんな重荷を…！」

土屋「…なるほど、常識は備えてるようだな。ならお主に姫を任せても大丈夫そうだな…」

そして土屋は去っていった

重山「…」

瑠璃はまだ重山にしがみついている

重山「えつと…お姫様？もうあの人は居なくなりましたよ？」

瑠璃「…」

つかんでいた手を急に離し、目を合わせようとしない光。このような関係が数日続いたある日

重山「お姫様。今日は何をされますか？」

瑠璃「…何もやることなんか、無い」

またそつぽを向き、何かをする瑠璃。近づいて話しかけようとすると瑠璃「来ないで」

と拒絶する瑠璃。その時…爆発音と共に建物が揺れた

瑠璃「きゃあああつ！」

重山「…何が…！」

斬馬「重山！」

部屋に斬馬が来る

重山「何があつたんだ！」

斬馬「多分反乱分子だろう、我らが鎮庄に向かうから、この子の護衛を頼むぞ」

そして斬馬も去ると、窓ガラスが割れ、敵が四人、入ってきた

男「ほお…あの女が聖なる巫女…」

男「あいつを殺せば私達の目標が果たされる」
すると重山が瑠璃の前に立ちふさがる

男「女！邪魔だ…！」

そして男が拳を振るうが、重山には当たらなかった。その拳を掴み
男「お…！？」

重山「私に挑むのは100年早いっ！」

そっぴい一人を殴り飛ばす。さらに構え

重山「残り10秒で四人共殺すが、お前等、何か心残りはないか？」

男「バカにしゃがつて…！」

そして男がまとめてきたが

重山「…命を粗末にするな…！」

手の甲に、無、の字が浮かび上がり

重山「ぶつとべええええ！」

放たれた拳は気を放ち、四人を全て吹き飛ばした

瑠璃「…ありがと…！」

瑠璃が後ろから抱きついてきた。重山にとっては初めて人の為に力
を使ったことを実感した

それから瑠璃は重山になつき、重山も瑠璃を大切に扱うようになった。そしてある日

瑠璃「…違う世界を見てみたい」

重山「…！」

瑠璃「私も一人の人間…自由が欲しい…！」

重山「…分かりました。私が責任持って違う世界をお見せしましよ
う」

そして重山と瑠璃は地下から逃げるように出てきたのである…

「ネイチャーガーデン市街地」

瑠璃「はあっ…はあ…！」

重山「瑠璃様、お身体は…！」

民「ひ、姫様！？何故こんなところに！？」

兵「いたぞ！逃がすな！」

重山「ちいつ…こつなつたら瑠璃様だけでも…」
と拳を構えると、民が大勢でて壁を作った

重山「お前達何をしている！死にたいのか！」

民「…重山さん…姫様も一人の民ですよね？」

重山「？ああ…」

民「だつたら姫様には自由も必要だ！」

民「姫を苦しめるならワシらが許さん！」

民「だから…今はお姫様を頼みます。いつかきつと、私達は助かるんですよね？」

重山「…」

民「ワシら一同、姫の帰りを待っています！だから…希望を持ち帰ってきてください」

と言ったその時、銃声が響き民が倒れた

兵「邪魔するなら…死あるのみ」

瑠璃「…！！飛鳥、私のワガママはいいから、帰ろう？帰れば話は終わる…」

重山「…民を撃つ国に、安息の地なんかありません。…瑠璃様、後少しの辛抱です。逃げ延びましょう」

瑠璃「飛鳥っ！？」

そして重山は瑠璃の手を引っ張り、地上の門へ走って行った…。門に着く直前に聞こえた言葉は

民「姫様の為につ…！」

という悲痛な声と、乾いた銃声、そして悲鳴だった

大門「…早く逃げてください」

重山「…ああああああっ！」

瑠璃「…！！」

「アナザーストーリー」3話、完

4幕31話：意志の力、極めるために

「試練の門、封印の間」

瑠奈「…部屋…か」

灼沢「気味悪い…」

瑠奈と灼沢が潜った扉の先は1つの大きな部屋であった

瑠奈「…なんか、感覚が変だな」

灼沢「はい、脱力感と言うか…」

その時だった。天井を突き破り、龍が現れた

龍「…」

瑠奈「…この部屋…」

すると風貌が変わり、広大な平原へすがたを変えた

瑠奈「…！」

龍「…しばらく振りの来訪者か」

灼沢「し、しゃべった!？」

龍「…さっそくだが、試練を始める」

瑠奈「その試練ってなんだよ」

すると龍は瑠奈と灼沢の側にブレスレットを投げた。

龍「それをつけ我に戦い、勝て」

瑠奈「…それだけか」

龍「…余裕かいつまで持つか」

灼沢「なめてもらっちゃ困るよね！」

そしてブレスレットをつけ灼沢は刀を抜き、瑠奈は拳を構えた

龍「…お主にはこれもだ」

龍が投げたものは剣だった。それを持ち

瑠奈「…余裕だな」

そして戦いが始まった

灼沢「”烈火尖”！」

だが、問題はここにあった。力が出ないのだ

灼沢「あ、あれ??」

龍「禁示鉾”主らの能力を制限させてもらった」

灼沢「せ、制限!??」

瑠奈「だったら制限を越えればいいんだろ!」

そして力を解放しようとするが、出来なかった

瑠奈「…ふんっ!」

すると瑠奈は龍に斬りかかった

灼沢「ち、ちよっ…!??」

瑠奈「だったら接近戦だ!」

とは言うものの、サイズ差があり、こちらの攻撃が届かなかった。

さらに龍は口から炎を吐いてきて、瑠奈達を撤退させた瑠奈「どわ

あああっ!??」

灼沢「こ、この火力…!」

龍は容赦なく炎を吐いてくる。瑠奈と灼沢は禁示鉾により能力が使えず、ひたすら逃げ回る。そして建物の中に避難する

瑠奈「…ヤバイ…あれはやばい…!」

灼沢「…こうなったらこの鉾石を…!」

瑠奈「無茶言うな!鉾石は刀じゃ斬れない…!」

灼沢「ならどうするの!??」

瑠奈「こうする!見てろ!」

そして瑠奈は龍に向かって行った…

龍「…?一人とな」

瑠奈「一か八か…やってやる!こいよ!」

そして龍は炎を吐いてきた。それを…瑠奈は腕につけた禁示鉾を当て付けた。するとその禁示鉾が炎をはじいた!

龍「…知恵を使ったか」

瑠奈「そうさ、そして…要領を越えた石は碎け散る!」

瑠奈の言葉通り石は炎に耐えきれなくなり碎け散ると、瑠奈は能力を一気に使い空に飛び上がった

瑠奈「瑠璃の想いが…今の俺を強くする！食らえええ！」

そして炎を浴びせた

龍「ぐおあああつ！」

そして龍は倒れた…

瑠奈「へっ…！まだ、俺は負けるわけには行かないんだ！」

そして建物からは灼沢が出てきた

灼沢「…やっぱり強いよ、お兄ちゃん」

瑠奈「…想いは、力だからな」

灼沢「だったたら…私と…勝負しようよ」

瑠奈「…な…？」

灼沢「この禁示鉾は龍が倒れたから砕けちゃったから、私も力が解放できる…やるう、お兄…いや、烈火 瑠奈！」

瑠奈「仕方ねえ…だったらやってやるよ！来い！」

そして刀を構え…

32話：正義の炎対爆炎姫

「試練の門」

灼沢「たあああっ！」

瑠奈「…っ！」

灼沢が刀を抜き、瑠奈に襲いかかる。瑠奈はとにかく防戦をしている。

灼沢「私だつて…！」

瑠奈「何だよ！」

灼沢「…言わせるなあっ！」

灼沢は力を解放し、火で瑠奈を飲み込もうとする。瑠奈は必死でかわす

瑠奈「うわっと!？」

灼沢「私だつて瑠璃さんに負けないくらいお兄ちゃんを…！」

瑠奈「!？」

すると瑠奈がその場の段差につまずき、転んでしまった

瑠奈「しまっ…！」

灼沢「飲み込め！」フレアモンスター”！」

灼沢が放った火は大きな獣となり、瑠奈を飲み込んだ

灼沢「そして弾けよ！」

するとその獣が光を放ち、大爆発を起こした。辺りは煙に包まれる

灼沢「…私だつてお兄ちゃんが大事…瑠璃さんには負けない…！」

瑠奈「ふう…少しまずかったな？」

灼沢「!!!？」

煙の中から出てきたのは力を解放した無傷の瑠奈だった。灼沢は狼狽する

灼沢「な…んで…??？」

瑠奈「簡単さ、俺の炎がお前の火を上回っただけだ」

灼沢「…うわああああ！」

すると灼沢は悲鳴を上げ、渾身の力で瑠奈をもう一度火に包んだ。
が瑠奈はその火を振り払った

瑠奈「無駄だつて」

灼沢「まだあつ！」

灼沢は刀を抜き、瑠奈に斬りかかる。その刀を瑠奈は何回も弾く

灼沢「くそおおっ！」

瑠奈「だったら…力の差を見せてやるよ！」

すると灼沢の刀をいなし、態勢が崩れた灼沢に炎を纏った拳をつき出した。灼沢は防げず、顔面を思いきり殴られ吹き飛ばされた…

33話…拳は誰の為に

「 試練の門 」

灼沢「かはあつ…」

瑠奈「…俺の勝ち、だな」

吹き飛んだ灼沢の元に瑠奈が手を差し出す

灼沢「…やっぱり強いや」

灼沢はその手を握り起き上がる

瑠奈「いや、紗菜も中々だぜ？」

灼沢「やっぱり瑠璃さんが好きなんだね？」

瑠奈「…さあな」

すると二人の前に門と大門が現れた

大門「 試練に合格したようっすね 」

瑠奈「まあな」

大門「ではこれを…」

大門は瑠奈に剣を渡した

瑠奈「…これは…」

その剣は柄の真ん中に丸い穴が空いた剣だった

瑠奈「随分軽いんだな」

大門「天導さんからの贈り物っす」

瑠奈「へえ…」

大門「灼沢さんにはこれっす」

灼沢には刀が手渡された

灼沢「これも天導の…」

大門「そうっす。じゃ、残り三人に会いに行きましょっか」

瑠奈「…」

瑠奈はその剣を振り回し、感触を確かめる

瑠奈「…瑠璃…」

「スラムグラウンド」

門を抜け、現実世界に帰ってくると重山、日向、泉野が既に戻ってきていた

重山「…瑠奈…その剣…」

瑠奈「俺もこの剣で、瑠璃を救いに行く」

重山「…ああ」

そして五人は大門に別れを告げ、組織へ続く門の前に来た

重山「皆、ここから先は棘の道だ。油断したら確実に殺される。だから、覚悟をして欲しい」

瑠奈「…当然」

日向「頑張るよ！」

泉野「…うん」

灼沢「やるよ…！」

重山「では…行くぞ！」

そして門を開き、組織へ続く道へ走り出した…

「組織内」

斬刃「瑠璃姫、こちらへ…」

瑠璃「…」

紅「とうとう動きだすんだね。魔神が…」

斬刃「さあ…姫よ、お前の力で、地下に平和をもたらすために…」

瑠璃「…（瑠奈さん…来ちゃ、駄目…）」

34話：突入

Ⅱ 第4階層・クラシックファイールドⅡ

瑠奈「へえ…ここが…」

重山「ああ、第4階層にして組織がある場所」

瑠奈「…ここに瑠璃が…」

重山「まあ、近いだけあって」

灼沢「敵が沢山、ですね」

烈火、重山、灼沢、泉野、日向の五人は組織がある階層に辿り着いた。既に全員が包囲されていることに気が付く

日向「ん…雑魚ばかり？」

泉野「…うん…」

瑠奈「じゃあ、今そんなに暴れるわけには行かないから…」

重山「正面突破！」

すると全員前に向かって走り出した。後ろからは隠れていた兵が動き出す

兵「逃げたぞ！追え！」

すると上方から氷塊が落ちてきて一部の兵を吹き飛ばした

瑠奈「…！！零か！」

零「ご名答。全く遅いぜ」

建物の上には零が居た

兵「”冷酷の氷”が何故ここに…それに何故炎を援護する!？」

零「…気まぐれさ。おい、烈火」

瑠奈「…なんだよ」

零「姫君…任せた」

兵「ええい！今あいつを相手にしてる場合じゃない！炎を追え！」
だが進みだす兵にまた氷塊が落ちてくる

零「…少し遊んでいけよ」兵「くっ…」

「クラシックフィールド中腹部」

瑠奈「…大分進んだな」

重山「…前に見えたな」

すると瑠奈達の前に組織の建物が見えた。警備が嚴重な為とにかく近くの茂みに隠れる

灼沢「ど、どうすんの？」

日向「そんなの…」

泉野「…決まってる」

すると日向と泉野はいきなり茂みから飛び出し

兵「な、なんだお前たちは!?!」

泉野「…正義の」

日向「ヒロインだよ〜っ!行くよ〜!」

泉野& amp; 日向「プリズムスプラッシャー」!

泉野が水柱を発生させ、日向がそれにむけ光線を当てると、それが他方に反射し目潰しとなった。そして兵の目正常に戻ったとき…

兵「て、敵…」

灼沢「そうだね〜、敵だね!」

瑠奈「…炎”が来たぜ」

既に二人は力を解放し

灼沢& amp; 瑠奈「フレア・カーニバル」!

周りに大爆発を起こした

重山「今だ!!突入!」

そして五人は組織内に突入した

「組織内、総司令室」

斬刃「何事だ!」

兵「も、申し上げます!」炎”の一団が内部に突破して来たとの事!

斬刃「ほお…来たか!よし…」

紅「どうするつもりで」

斬刃「総力戦だ。この姫の力も借りて…な
土屋」…」

斬刃「炎の力も創世の姫には屈するさ…」

紅「重山らは私たちで…」

斬刃「私が烈火を葬るとするか…」

斬刃「さあ、絶望を味わえ！平伏せ！ふははははは！」

35話：雌雄を決するとき

〓組織内〓

瑠奈「どけえええつ！」

兵「ぐあああつ！」

瑠奈達の一団は組織内を一気にかけていく

瑠奈「ちつ…雑魚ばかりが…」

土屋「待たれよ」

すると進路に土屋と雷が現れた

瑠奈「悪い、今はやりあつてる時間はねえ！」

土屋「援護する」

重山「…は！？」

すると斧を振り回し兵を吹き飛ばす土屋

雷「雷神裂破」！

日向「な、なんで貴方達が…」

土屋「とにかく行け。…生きて会えたら、次は仲間だ」

瑠奈「…恩にきる！」

そして瑠奈達はさらに上っていった

兵「老！何故…」

土屋「気まぐれだ」

そして瑠奈達がある程度上って行くと、重山、日向、泉野、灼沢が立ち止まった

瑠奈「…！？」

重山「瑠奈…瑠璃様を頼む」

瑠奈「な、何言ってるんだよ！」

日向「敵が邪魔になりそうだから、私たちが食い止めるから！」

泉野「…頑張れ」

灼沢「信じてるよ、お兄ちゃん。後で追い付くから！」

瑠奈「……！！……分かった、後ろは預ける」

重山「瑠璃様は最上階だ。頼むぞ瑠奈！！瑠璃様と絶対生きて帰ってこい！」

瑠奈「おお！！」

そして瑠奈は一気にかけて上がった

瑠奈「瑠璃……お前を中々助けられなくて、ずっと迷惑かけてばかりだった。だけどそれも終わりだ。今度こそ瑠璃を助けてやる……！」
そして最上階の扉を開いた

瑠奈「瑠璃っ！！」

その部屋には丸い球体と、斬刃が居た

斬刃「ようこそ組織へ」

瑠奈「……瑠璃はどこだ」

斬刃「まあそう焦るなよ。よく見渡せよ。瑠璃は居るぞ」

瑠奈「……？」

瑠奈は辺りを見渡すが、瑠璃は見当たらない

斬刃「この中に居るのは誰だ？」

すると斬刃は球体を指差した。すると球体の中に一人の女の子が居た。その女の子を見た瞬間、瑠奈は血相を変えた

瑠奈「てめえ……瑠璃に何したんだよっ！！」

球体の中には目を閉じた瑠璃が居た

斬刃「姫には地下の覇者として目覚めてもらうために儀式を行って居たのだよ」

ただ、球体の中に居る瑠璃の表情はあからさまに苦しそうだった

瑠奈「瑠璃を離しやがれ！！」

斬刃「そうは行かない。姫には次期当主を担っていたただくのだ。だから邪魔はさせない」

斬刃は刀を抜く

斬刃「だから炎よ。君にはここで退場願う」

対し瑠奈も剣を抜く

瑠奈「ふざけやがって…瑠璃は一人の女の子だ！そんな子に重荷を背負わすなよ…！」

36話…決闘

〓 組織内総司令室 〓

瑠奈「…」

斬馬「…」

瑠奈と斬馬はそれぞれ剣と刃を構え、相手の出方を伺っていた

斬馬「来ないのか？」

瑠奈「こちらら学習済みでね…押しして駄目だから、引いてみるだけさ」

斬馬「…おもしろい！」

すると斬馬の方から仕掛けていった。斬馬が瑠奈に刀を振り下ろすが、瑠奈はその刃を剣で受け止めた

斬馬「…ほお」

瑠奈「！！…受け止めれる！」

そしてその後も斬馬斬りかかるが、瑠奈はその刀を受け止め続けた。すると斬馬は急に刀を鞘に納めた。そして目を閉じ、構える

斬馬「…」

瑠奈「！その構え…」

瑠奈にはその構えに見覚えがあった。…瑠奈の父、大悟のものだったのだ

瑠奈「ま、まさか…な」

斬馬「…気付いたか、瑠奈」

瑠奈「…親父いっつ！」

急に力を解放する瑠奈。表情には憤怒がにじみ出ていた
大悟「随分怖い顔をしてるな。何がお前をそうさせる」

瑠奈「うるせえよ親父。母さんや俺をほったらかして居なくなっ
たと思えば、地下の統治者だと？笑わせんなよ」

大悟「だがこれが真実だ。悪いな」

瑠奈「てめえになんで瑠璃が必要なんだよ。答えやがれ！」

すると瑠奈は大悟に斬りかかる。大悟はそれに応戦する形で刀を振るい、打ち合いが始まった

大悟「瑠璃は地下を護る兵器のコア。その為に必要だ。この娘と力かな」

瑠奈「さつきも言っただけ。一人の女の子に重荷背負わすなつて。瑠璃は兵器じゃねえ」

大悟「私から見れば尊い犠牲になるとは思っ。だが沢山の民の命が奪われるよりマシだ」

瑠奈「俺ら地上の民が何をしたってんだ！」

大悟「上の奴等が地上を汚せば地下は大打撃を受ける。それに地下の民を追い払ったのはお前達だ。それが不憫だとは思わないのか、瑠奈よ」

瑠奈「うるせえ！だからつつつて力で押さえつければ済むのかよ！人はそんなに甘くはねえ！」

大悟「…話していても無駄だな。瑠奈。やはりお前には死んでもらわなきゃ駄目らしい」

すると大悟も力を解き放った。甲には（炎）の文字

大悟「…悪く思っな！」

すると大悟は急に姿を消した

瑠奈「…!!」

次の瞬間だった。大悟は瑠奈の前に急に姿を現し、刀を振りぬいた
大悟「死にさせ」

瑠奈「まだだ！」

すると瑠奈は手から炎を噴射し、一気に後ろに下がりこれを回避した
大悟「ふん…やるな」

瑠奈「だあああ！」

そして一気に飛び上がり、今度は瑠奈が斬りかかる。大悟はその瑠奈に対し炎で包み込む

大悟「…まだだな」

瑠奈「らあああ！」

その炎の中から瑠奈が出てきて、大悟に斬りかかるが大悟はそれをかわす

瑠奈「！」

大悟「悪いな」

そして隙ができた瑠奈の右肩に刀を振り斬った。瑠奈は肩から大量の血が吹き出したが…

瑠奈「…甘いんだよおっ！」

瑠奈は左の拳を大悟の腹に突き刺した。そして力を左腕に集中し…

大悟「がっ…」

瑠奈「”炎獄殺”！！」

力を最大限に解放し、大悟を壁へ吹き飛ばした。大悟は壁に突っ込んだあげく、大量の血を撒き散らした

大悟「ごはあっ…」

その元に瑠奈が近づくと

瑠奈「…最期だ」

大悟「…ふはははははっ！まだまだ！頼むぞ…瑠璃よ。いや…ミハエルよ」

すると大悟は手に持つボタンを押し、息を引き取った。だが、光の球の中に異変が起きた

瑠璃「いやあああっ！！」

瑠奈「！！瑠璃っ！！」

瑠奈が近づこうとするが、衝撃波が発生し、瑠奈を吹き飛ばした

瑠奈「ぐっっっ！」

瑠璃「ううううっ…ああああっ！」

瑠奈「瑠璃いっ！！」

すると光の球の中から現れたのは…

???「…」

瑠奈「！？」

一人の少女がいた。その女は瑠璃に似ていた

「……我が名ハミハエル」

瑠奈「……瑠璃をどこやった……」

瑠奈は負傷した肩をかばいながら刀を持った

ミハエル「我が糧トナツタ」

瑠奈「……!!」

ミハエル「人間……消工去レ」

するとミハエルは手を広げ、手のひらを瑠奈に向けた

瑠奈「瑠璃！目え覚ませ！瑠璃っ!!」

ミハエル「我ハ瑠璃デハナイ……消えろ」

そしてミハエルから光線が放たれ、瑠奈を飲み込んだ……

37話：義をもって事を成せ

〓 組織中腹 〓

重山「があああつ！」

日向「…ふう…」

大体片付いた頃に上から爆発音が聞こえた
灼沢「！！」

重山「…瑠璃様…瑠奈…！」

泉野「…私たちも、向かおう…」

〓 組織内総司令部 〓

ミハエル「…」

ミハエルが放った光線は烈火を飲み込んだ。そして放たれた後には
…傷だらけの瑠奈が出てきた

瑠奈「…がっ…」

膝を折る瑠奈

ミハエル「我ノ攻撃ヲ耐エルカ…見事…」

瑠奈「…瑠璃…そんなに…人をいたぶって楽しいかよ…」

ミハエル「我ハ瑠璃デハナイ」

瑠奈「…目え覚ませよ…」

そして剣を捨て、ミハエルに近づく

ミハエル「？何ヲ…近ヅクデナイ！」

ミハエルは光で刀を作り出し、構える。お構い無しに瑠奈は近づく

瑠奈「今…目エ覚まさせてやるよ…瑠璃…」

ミハエル「ソ、それ以上…ち…近ヅクナ！」

するとミハエルが苦しみ出した。まだ瑠璃の意識が残っている様だ

瑠奈「瑠璃！！目を…覚ませえっ！」

ミハエル「ウアアアッ！」

そして瑠奈はミハエルに抱きついた。その瞬間ミハエルの持つ刀が刺さり、大量の血が吹き出した。そして瑠璃の意識が戻った…

瑠奈「…へ…へへっ…瑠璃…」

瑠璃「る…瑠奈、さん…？瑠奈さん…」

瑠奈の腹を貫いた刀を引き抜き、大粒の涙を流している。瑠奈は身体力が抜け、瑠璃にもたれ掛かる

瑠奈「…おか…えり…」

瑠璃「瑠奈さん…ただいま…ただいま…」

瑠奈「…無茶…しちまった…な…」

瑠璃「…あたし…瑠奈さんに酷いことを…」

その場に重山達も到着した

重山「…！！！」

灼沢「お、兄ちゃん…？」

日向「ダメ、今は二人にしてあげなきゃ」

泉野「…重山さんも」

重山「…」

灼沢「い…いや…」

四人はその場を離れ、また二人になった

瑠奈「あ…いつらも…無事みたい…だな…」

瑠璃「もう…いいから…喋らなくて…」

瑠奈「また…詰め…甘かったか…」

瑠璃「十分だよ、むしろ嬉しいよ…」

瑠奈「…だったら…泣くなよ…」

そして瑠奈は朦朧とする意識の中、瑠璃の涙を拭う

瑠奈「もう…自由だ…」

瑠璃「だから瑠奈さんも一緒に地上に…」

瑠奈「そうだなあ…ガハっ！なんとか…してえなあ…」

瑠璃「今…治すから！」

そして瑠璃が力を解放をしようとするが、力が発揮できない

瑠奈「くくっ…無理だよ…お前も力を使い果たしてるんだ…」

瑠璃「いやっ…嫌ああっ…瑠奈さん…死んじやだあっ…」
すると突然地震が起こり始めた

瑠奈「…！…早く、逃げる…」

瑠璃「嫌…瑠奈さんを失いたくない…！！」

瑠奈「我が儘を…言うなっ…」

瑠璃「我が儘なんかじゃないっ…！！」

そっつい、瑠奈に熱いキスをした

瑠奈「…！！！」

瑠璃「いや…嫌なの…瑠奈さんを…失いたくない…離れたくない…」

瑠奈さん…好き…」

瑠奈「…俺もだ…瑠璃…」

そして揺れが激しくなり、建物が崩れ始める。その場に再び重山達
が現れる

重山「瑠璃様、もう持ちません！」

灼沢「お兄ちゃん！！しっかりして！！」

瑠奈「重山…灼沢…瑠璃を、頼む…」

瑠璃「！？瑠奈さん！？」

そこで瑠奈は余力を振り絞り、瑠璃を弾き飛ばした

瑠璃「うっ…！！」

重山「瑠奈！！お前…」

瑠奈「早く行けよ…お前の目的は瑠璃の護衛、だろ」

重山「…」

瑠奈「灼沢…俺の事、兄貴って慕ってくれて良かったぜ」

灼沢「お兄ちゃん！諦めちゃダメ！一緒に帰るの！皆で帰るの！」

瑠奈「泉野…日向…イツキ先生や皆によろしくな」

日向「瑠奈…！！」

泉野「分かった…」

そしてまず泉野と日向が脱出した

灼沢「…約束して！！死んじや…許さないんだから！」

瑠奈「…はは…」

灼沢も離れて行った

瑠璃「嫌、嫌ああっ！！離して、飛鳥ああっ！離してええっ！」

重山「駄目です瑠璃様！！」

瑠奈「重山…瑠璃を頼む…」

重山「…分かった」

瑠璃「嫌ああっ！！」

そして重山は瑠璃を引っ張って脱出して行く。その場に瑠奈だけが残った。瓦礫が落ちて来て、もう崩壊寸前の建物の中で物思いに更ける

瑠奈「は、はは…」

瑠奈「ザマあ、ねえな…せっかく、瑠璃に、好かれたのに…」

瑠奈「…ガハっ！！…刺されたの…効いたなあ…」

そして薄れゆく意識の中で、壁際に背をつけ座り込む

瑠奈「…皆…ありがとな……瑠璃…大好き…だぜ…」

そして大量の瓦礫と共に組織が崩れていった…

38話…組織崩壊。その後

「暁学園」

宝命寺「んじゃあ、今日の出欠を取ります。浅井君、泉野さん…」
何気ない学校。だが、瑠奈の席は空席となっていた

宝命寺「瑠奈君は今日から休学して事になったから、来年からは違う学年になっちゃうけど、皆も頑張って行きましょう」

日向「…弥枝、これで良かったのかな？」

泉野「…あの状態じゃ、瑠奈を救出するのは不可能だったと思う…仕方ないよ」

日向「…」

宝命寺「それでは今日は新しい友達を紹介します。…入って教室のドアが開くと、制服姿の瑠璃が出てきた

瑠璃「光 瑠璃です。皆さんよろしくお願いします」

教室内がざわめく

学生「かわいこちゃんが来たねえ」

学生「彼氏いるのかな？付き合いて〜」

日向「…皆、馬鹿ばっか」

泉野「それが平和なのかも」

そして放課後

瑠璃「日向さん、泉野さん。一緒に帰りましょう？」

日向「うん、いーよー」

泉野「うん」

そして三人でつく帰路

日向「それにしても瑠璃ちゃん、飛鳥ちゃんは？」

瑠璃「飛鳥は今、地下の復興の礎として地下に残り、今頑張ってます」

泉野「組織、壊れたからね」

瑠璃「今は零さん、土屋さん、雷さんと一緒って聞きましたけど…」
日向「瑠璃ちゃんが残らなくても良かったの？」

瑠璃「私が居るとまた戦乱が起こるかもしれない。私には平穏な暮らしをして欲しいって飛鳥に言われて…」

泉野「瑠璃の家にいる、と」

瑠璃「瑠璃さんのお母さんに親切にしてもらってるから、今、生活出来てるんでありがたいですよ」

日向「よかったらまたウチに来なよ ご飯ご馳走したげるからさ」

瑠璃「はい 是非！」

泉野「…じゃ、私たちこつちだから」

日向「バイバイ瑠璃ちゃん！」

瑠璃「また明日…」

そして一人になり、あの公園のベンチに座る

瑠璃「生きてるのが死んでるかも分からない。でも生きてるなら、せめてもう一回、瑠璃さんに会いたい…」

そういつた瞬間だった

???「…なんか死んだ風な言い回しだな」

瑠璃「!？」

不意に後ろから声がしたので振り替えて見ると、バンダナをした、あの男が立っていた

瑠璃「…瑠奈…さん…？」

瑠璃は大粒の涙を流し、瑠奈に抱きつく

瑠璃「うあああんっ…瑠奈さぁん…」

瑠奈「はははっ…ただいま、瑠璃」

瑠璃「…おかえりっ」

瑠奈「さあ、泣くな！俺は死んだんじゃないからねだからよ！」

瑠璃「…うんっ！」

そして二人手を繋ぎ、家への帰路についた…

＝ F i n ＝

39話：次節、次幕予告（瑠奈、光編）

瑠奈「読破ご苦労さん！」

瑠璃「いや〜：最後の最後にどんでん返したったねえ」

瑠奈「はは、死なないでよかったぜ！」

瑠璃「じゃ、次節、次幕予告だよ！」

瑠奈「とりあえず舞台は地上、天空が今度の舞台になる。俺と瑠璃が主役なのは変わらずかな」

瑠璃「今回は（神民戦争）という名の物語だよ！飛鳥がないから少し不安だけど…」

瑠奈「安心しろ！俺がいる！」

瑠璃「そうだね！」

瑠奈「じゃ、次回からは行くぜ…」 CHAOS 2nd sea
son 『行くぜええっ！！』

『CHAOS 2nd season』第4幕40話：第2の始まり

地下で起きた反乱は烈火 瑠奈とその一団により終結を見た、その一年後…

「暁大学」

宝命寺「…であるからして、ここの文章の捉え方は」

瑠奈「…はあ」

瑠奈はこの一年間で大学へ進学することとなった。だが、瑠奈はその時の旅の記憶が頭から離れず、暇を持って余しながら毎日を過ごしていた

宝命寺「では今日はここまで。皆さん、お疲れさま」

瑠奈「…はあ、つたく、平和なのはいいが、なんか性に合わねえっ
て言うか…」

瑠璃「そうですね？平和は良いことですよ？」

瑠奈「まあ、な」

瑠奈と瑠璃、日向、泉野は同じ暁大学への進学が決まり、4月を迎え、新学期に望んでいるのだ

「烈火家」

そしてこの日の夜、また何も代わり映えの無い1日が過ぎようとしたとき、手紙が届いたのだ

瑠奈「…あ？こんな時間に手紙…？」

差出人の所には（天導）とあった

瑠奈「天導…、あいつが俺に何の用だ」

文面にはこうあった

烈火君

前回の戦いにご苦労様。今は大体身体も大丈夫かしら？こちら（地下）はもう復興は完了したわよ。

ところで、貴方は最近力が使いにくくないかしら？こちらの方では顕著に現れてて、生活に支障をきたしてるんだけど、そちらの状況が知りたいの。今、地下への入り口がある門まで来てくれるかしら
瑠奈「…今つて、手紙はすぐに送れるものじゃないことぐらい分かってるだろ…、まあいい、行くか…」

そして瑠璃の寝室に向かい

瑠奈「瑠璃、起きてつか？」

瑠璃「…すう…すう…」

瑠奈「…ま、無理に起こす必要はない、か」

瑠璃「…むにゃ…」

そして瑠奈は一人、門の所まで向かう…

「地下への門、門前」

天導「あら、ちゃんと読んでくれたのね、嬉しいわ」

瑠奈「まあ、なんかいい予感やしねえしな」

大門「あながち間違っちゃいないっすね」

門前には大門と天導のふたりしか居なかった

瑠奈「で、なんだよ？話つて」

天導「実は…最近ポルターガイストが地下で出没するらしくて」

瑠奈「はあ!？」

大門「それがまあ、黒い霧に包まれると、その黒い霧が自分自身になるらしいっす」

瑠奈「…なんだそりゃ」

天導「幸い死者は居ないけど、野放しには出来ない問題でね」

瑠奈「?どういう事だ？」

天導「簡単に言えば、世界が黒い霧に包まれれば、自分は必ずふたり居ることになるのだけど、そうなると社会は大混乱になるわね
それと…黒い霧の幻影は相手の身体になった後、襲ってくるケースもあるみたいでね…」

瑠奈「要は俺にその発生源を絶て、と？」

天導「重山さんをお願いしてみたのだけれど、今彼女は忙しいみた

いだから…」

瑠奈「…俺も暇では無いんだがな…」

そついい瑠奈は門前に進む

瑠奈「どの階層に向かえばいいんだよ」

天導「発生件数もつとも多いスラムグランドに向かってもらおうかしら」

瑠奈「…またあそこか。あそこはどうにも好かんのだがな…大門、頼む」

大門「あら瑠奈さん、一人で向かう気っすか？」

瑠奈「？天導がくるんじゃないのか？」

天導「残念、私はこれから新組織に出向かないとならなくてね…」

瑠奈「…なら俺一人か？」

大門「いや、居るみたいっすよ？…隠れてないで出てきたらどうっすか、姫様？」

瑠璃「あ！」

陰に瑠璃が隠れていたようだが、大門は気付いていたようだ

瑠奈「…まさか…」

瑠璃「…駄目…ですか？」

天導「あら、可愛い娘のお誘いを断るのかしら？」

天導と瑠璃の圧力に負けた瑠奈はため息を1つ吐くと

瑠奈「仕方ねえな…危険だと思ったらすぐに逃げるよ？」

瑠璃「はい！ありがとうございます」

天導「なら光さんにはこれを渡しておきますね？」

すると天導は持っていた鞆から腕輪を取りだし、瑠璃の右腕につけた。その腕輪には真ん中に白い宝石が埋め込まれていた

瑠璃「わあ…キレイ…」

瑠奈「なんだよ、これ…」

天導「イイモノ、よ」

瑠奈「イイモノ、ねえ…」

41話…二人での旅は初ですね

「最下層・スラムグラウンド」

瑠璃「〜」

瑠奈「…なあ、なんでそんなに楽しそうなんだよ」

瑠璃「え？だって…旅ですよ？　これからまた新しい景色を見れるんですよ〜」

瑠奈「そんなに楽しいもんじゃないと思うんだがな…」

瑠璃「あ、瑠奈さん？あの木…」

瑠璃が指を指した先には、梨がなる木があった

瑠奈「…梨、か」

瑠璃「あそこで休憩しませんか？」

瑠奈「ああ、そうするか…」

そしてふたりは梨の木の下で座り込む。瑠奈は木から梨を二つ取り、一つを瑠璃に渡す

瑠奈「…」

瑠璃「おいしいですね？」

瑠奈「ああ」

瑠璃「??嬉しそうですね？」

瑠奈「梨が好きなんだよ」

瑠璃「へえ…」

そして梨を二人とも食べ終わり、また歩き出した

瑠奈「確かにお前とふたりは初めてだな」

瑠璃「はい　私としてはとっても嬉しいです」

瑠奈「…まあ、俺も、かな」

そして天導の言っていた場所に辿り着いた…

「地下闘技大会会場」

瑠奈「…こりゃ、酷いな…」

瑠璃「…何、これ…」

ふたりが見た景色は、黒い霧に包まれ廃墟と化した会場だった

瑠奈「…随分と暴れてるな、こりゃあ」

瑠璃「何が…どうなったらこんなことに…」

???「…へえ…炎じゃねえかよ…」

瑠奈「！」

ドームの中から男が出てきた。その男はあの日公園で瑠奈と対峙した男だった

瑠璃「貴方は…紅…蓮貴」

紅「おお…姫様。覚えていて下さいましたか…そうですよ、紅ですよ」

瑠奈「組織がぶつ潰れた今、俺らに用は無いだろ。消えな」

紅「姫には用はねえが、てめえにはあるぜ…烈火」

瑠奈「今さら仇討ちか？やめとけよそんな無駄なことはよ」

紅「仇討ち？違うな…俺は純粹に炎使いは一人でいいと考えてる…」

瑠奈「だから消したいのか、俺を」

紅「そうだ…あの公園で不覚を取ったあの日から…ずっとこの日を待っていた…」

すると紅から黒い霧が出始めた

瑠璃「…！何なんです！？あれは！」

瑠奈「天導の言っていた霧…ポルターガイスト…そして能力の使用制限、か…」

瑠奈は紅の手の甲を見たが、文字は見当たらなかった

瑠奈「…いっちょよ、殺って確かめるか。瑠璃…下がれ」

瑠璃「は、はい！」

紅「…いいぞ、来いよ…！」

瑠奈「…！」

そして瑠奈と紅の武器、刀と爪がぶつかった

紅「炎撃爪」!

瑠璃「はっ!」

紅の攻撃を瑠璃は巧みに避ける

紅「避けてばかりいないで来いよおっ!」

瑠璃「!」

そして紅の爪の一撃を受け止め

瑠璃「だあっ!」

紅の心臓に刀を突き刺した

紅「!!」

すると紅は黒い霧に包まれ、跡形も無く消えた。瑠璃が駆け寄って
くる

瑠璃「!」

瑠璃「やはり幻影か」

瑠璃「てことは…」

瑠璃「影に殺られてなければ紅も生きてるだろうな」

瑠璃「でも、逆を取れば他の皆さんの幻影も…」

瑠璃「ま、あるだろうな。そんな時は覚悟、しなきゃな」

瑠璃「…」

そしてその場を立ち去ろうとしたとき…会場内から爆発音が聞こえた

瑠璃「!」

瑠璃「誰がいる!」

瑠璃「…行ってみるか」

瑠璃「はいっ!」

そして会場内に行くところ…

瑠璃「!」

瑠璃「零!」

会場内では黒い霧に包まれた獣と零が戦っていた。戦況はかなり苦
戦してるようだった

瑠璃「零!助太刀するぞ!」

零「……！！烈火か」

瑠奈「なんだよこいつら……」零「分かん。が、俺らの仲間ではないな」

瑠璃「皆さん！下がって！」

瑠奈と零がしゃべっているのと瑠璃が急に光に包まれた。するとその光が黒い霧を浄化し、獣は引いていった

瑠奈「……！？瑠璃！お前、何を……」

瑠璃「わ、分からないですけど、急に指輪が……」

するとその指輪の石の中に（聖）と言う文字が浮かび上がっていた

零「！？姫、覚醒したのか」

瑠奈「……！！天導……まさか瑠璃がこうなると分かっている……」

瑠璃「……これ……まさか”地下の聖母”の姿……」

瑠璃の身体の光が弱まり全身が見えると、胸元が開いた純白ドレスに身を包み、まるで天使の羽根を背中にまとっていたのだ

瑠奈「……！！瑠璃……だよな……」

零「……なんと輝かしい……」

瑠璃「……これが私の……力……」

そしてまた光に包まれると、瑠璃は元の姿に戻ったのだ。ふたりがその場に戻る

瑠璃「……なんだったんでしょ……」

瑠奈「……天導……何をたくらんでやる……」

零「……失礼する」

そう言い残し、零も足早に場から去った

瑠奈「ま……今考えても仕方ないか」

すると瑠璃が急に瑠奈に身体を預けてきた。瑠奈は座り、瑠璃を抱き抱える

瑠奈「瑠璃、どうした？」

瑠璃「ちよつと……疲れました……」

瑠奈「能力の過剰消費か……つても、こんな所に休む場所は……」

すると、先程の獣達が群れで戻ってきた。瑠奈は剣を構える

瑠奈「ちいつ…こんな時に…」

だが獣たちは瑠奈達を誘導するかのようなしぐさを取り、歩き出した

瑠奈「…？なんだ？」

そして瑠奈は瑠璃をおんぶする

瑠奈「…少し辛抱してくれよ、瑠璃…！」

そして瑠奈はその獣達の後ろを追った…

42話：遊源卿の町、イオシス

「最下層、遊源卿の町イオシス」

瑠奈「…なんだこれ」

獣達の後を追うとそこに1つの町があった。花火が上がり民が皆お祭り騒ぎをしている

男「おおい男！可愛い娘連れてどうしたあ！？」

瑠奈「どつかに宿、ねえか？」

男「よつしゃ！！皆！！このいい男と可愛い娘を丁重に宿屋に召せ！！」

民衆「おおおっ！！」

瑠奈「な、なんだなんだっ！？」

すると民衆に巻き込まれ、宿に引っ張られていった

瑠奈「…なんだこの町は…民衆が常にお祭り騒ぎ…賑やかな町だな…」

瑠璃をとりあえずベッドに寝かせ、瑠奈は考えにふけていた

瑠奈「天導の思惑もわかんねえし…これからどうすっかな…」

夢村「あら、貴方達…」

瑠奈「！？夢村！？」

部屋に誰かが入ってきたので見てみると、夢村であった

夢村「あら、お邪魔だったかしら？」

瑠奈「いや、別に」

夢村「ここは私の町なのよ。私、ここの長なの」

瑠奈「…はあ」

夢村「民の皆も賑やかでいいでしょう？」

瑠奈「そうだな…うるさいくらいだ」

夢村「…で」

夢村が瑠奈の隣に座る

夢村「貴方達、ここに何しに来たの？」

瑠奈「…まあ…」

そしてここまでの一部始終を夢村に伝えた

夢村「…ふ〜ん…黒い霧ねえ…」

瑠奈「なんか心当たり無いか」

夢村「ん、無い。ここの皆は基本そついうのには無関心だから」

瑠奈「…あつそ…」

瑠璃「…ううん…」

そつ話をしてると、瑠璃が目覚めた

瑠璃「…あれ…その人は…」

瑠奈「地下闘技大会の時に世話になった夢村」

夢村「夢村未来よ。よろしくね？」

瑠奈「あ、はい。こちらこそ…」

そして瑠璃は外の騒がしさに気付く

瑠璃「随分外が賑やかですねえ…」

夢村「私たちの町のテーマは遊源卿。その言葉の通り遊びを大事に

してるからねえ」

瑠璃「へえ…」

その場にまた一人男が入ってくる

男「夢村様。ちょっと…」

夢村「ああ、分かったわ。…じゃ、お二人さん。この町楽しんでっ

てね？」

そして夢村はいなくなった

瑠璃「…なんか、明るい人でしたね」

瑠奈「どうにも腹黒そうで好きにはなれんがな」

瑠璃「へえ…」

そして瑠璃はまた外を眺めた後

瑠璃「この後…どうします？」

瑠奈「さあな…とにかくどうにかして天尊に会いたいんだが…」

瑠璃「黒い霧はもうこの階層には無いんですかね…」
するとまた男が入ってきた

男「よおいしい男と可愛い嬢ちゃん!!」

瑠奈「またお前か…」

瑠璃「か、可愛くなんかないですよ…!!」

男「あなた方に客人が居るが、呼んでもいいか!？」

瑠奈「客人?…分かった、呼んでくれ」

男「分かった!おい、入れ!」

そして入ってきたのは…

43話：襲撃

「遊源卿の町イオシス、宿」

灼沢「…お久しぶり、お兄ちゃん」

瑠奈「灼沢か…」

瑠璃「あ、噂の妹さん…」

呼ばれて来たのは灼沢だった

灼沢「この人が瑠璃さんかあ…可愛い人だねえ」

瑠璃「か、可愛くなんか無いですよ…」

瑠奈「どうかしたのか？俺らがここにいるのが分かって来て来たって事は、何かあるんだろ？」

灼沢「実は…ちよつと気になる件があつて…第一階層のネイチャー

ガーデンの郊外の古い建物で黒い霧の発生情報が…」

瑠奈「！！」

瑠璃「！！」

瑠奈「おい…その建物の名は？」

灼沢「ロストキングダム」昔あった山賊のアジトなんだけど…今は使われてないはずなんだ」

瑠奈「…そうか…」

瑠璃「瑠奈さん、これは…」

瑠奈「ああ、行くぜ」

灼沢「じゃあ町の出口に大門さんがいるから、行こう！」

そっつい瑠奈の手を引っ張って一目散に出ていく

瑠奈「ち、ちよいまて待て！」

瑠璃「…むう…」

瑠璃は少し拗ねながら後を追った

「イオシス出口」

大門「灼沢さん…ちと乱暴に使わないで下さいっすよ」

灼沢「いいじゃない。援軍を呼んだんだからさ」

大門「貴方も忙しいっすね！」

瑠奈「まあ、仕方ねえよ。じゃ、頼むわ」

大門「じゃ、行って来いっす！」

門を呼び出し、その門の中に入っていた…

大門「…天導さん…アンタ…なにを企んでるんすか」

Ⅱ 第1階層ネイチャーガーデン、山賊のアジト・ロストキングダムⅡ

三人は門を抜け、灼沢の言っていたアジトの前に来た。既に黒い霧で覆われていた

灼沢「…随分濃くなってる」

瑠奈「へえ、てことは、だ」

瑠璃「ここに発生源があるのかな…」

瑠奈「だろうな…」

賊「あらら…鼠が来たらしいぜい…」

灼沢「！」

三人が隠れていた近くに賊が来ていた。すると灼沢と瑠奈が剣を持ち

灼沢「バレたら仕方がないね…」

瑠奈「ああ…そうだなあ。若干のストレス解消と」

灼沢「行きますか！」

瑠奈「行くぜえっ！」

敵中に躍り出ていった。瑠璃も後ろから追おうとすると、また指輪から”聖”の文字が浮かび上がる

瑠璃「…私も…足手まといにはなりたくない！」

瑠奈と灼沢が戦っている中、瑠璃も”聖母”の姿に変わり、寄ってくる敵を払っていった。そして約10分で大方の敵を片付けた

瑠奈「…なんだよ、もう終わりかよ」

灼沢「ふゝ…中々しんどかったよ、私は。随分平気な顔をしてるね、

お兄ちゃん」

瑠奈「それを言うなら瑠璃だって中々の体力だぜ？あれだけ能力を放出してるのに顔色ひとつ変えねえ」

瑠璃「あ、あの…なんて言うか…無我夢中で、疲れを感じなかったんですよ」

灼沢「…取り合えず、中入りますか」

瑠奈「そうだな」

そして中にはいって行く三人。中にはまだ賊が居たようで執拗に襲いかかってくるが、瑠奈が一人一人を確実に仕留めていった。瑠奈は還り血で真っ赤になっていた

瑠奈「…」

そして最深部へ辿り着くと、そこには黒い石がはめ込まれた指輪があった

瑠奈「なんだ、これ…」

瑠璃「指輪…」

灼沢「山賊が奪った宝かな…」

そして瑠奈がその指輪を手にした時、黒い霧が部屋を包んだかと思えば、その黒い霧が一人の人を作り出した

瑠奈「！！？」

瑠璃「…え…」

灼沢「う、嘘…でしょ…」

その人は瑠奈にそっくりであったのだ。違いがあるとすれば、手の甲には”闇”の文字が浮かんでいたのだ

???「初めまして…地上の勇者…」

瑠奈「て、てめえ…何者だ!」

???「あれ…ご存知無い?お前とは一回会ってると思ったんだけど…」

瑠奈は記憶を思い返すと、御酒戦の時の憤怒の記憶が思い立った

瑠奈「ま、まさか…」

???「そう、俺はお前、お前は俺…」

そついい影は刀を取り、瑠奈に斬りかかる。瑠奈はとつさに剣で受ける。灼沢達が加勢しようとするが、黒い霧が邪魔をして近づけない
瑠璃「瑠奈さん!!!」

瑠奈「ワリイ瑠璃!灼沢!ここを先に脱出してくれ!」

瑠璃「でも!!!」

瑠奈「こいつは俺だ!俺自身がケリをつける!」

灼沢「!分かった!」

そして瑠璃と灼沢が建物を後にすると、瑠奈は男から距離を取り、
剣を構える

???「へえ!随分と正義感が強いんだ!」

瑠奈「うるせえよ!俺はふたり要らねえ!消えな!」

???「そんなに邪険に扱わないでくれよ!そして俺の名は!閻本

澪(やみもとれい。以下閻本)。世界を統べる者、と言おうか!」

瑠奈「!!!ほざくなあつ!」

そして刀と剣が打ち合う。だが、太刀筋が同じな為全く斬れない。
そして

閻本「悪いね、俺の勝ちだ!」次の瞬間、閻本の刀が瑠奈の剣を弾き、
刀が瑠奈を貫いた

瑠奈「!!!」

閻本「!フハハハハ!」

44話：最大の敵は己（おのれ）

「ロストキングダム」

闇本「ハハハハハ…討ち取ったりイ！」

瑠奈「…」

闇本は瑠奈の剣を弾き、刀で瑠奈を串刺しにした。だが

闇本「…ん？」

だが闇本は異変にすぐに気付く。瑠奈から血が全く出ないのだ

闇本「…まさか!？」

そして刀を引き抜いた瞬間、刺していた瑠奈は消え去り、その後ろから瑠奈が突進してきた

瑠奈「遅いつ！」

闇本「まだあつ！」

瑠奈の拳は闇本に命中したが、闇本が降り下ろした刀も瑠奈の左腕を斬った

瑠奈「くうっ…!!」

闇本「うあつ！」

そして互いに距離を取る間にまた瑠奈は剣を拾い上げる

瑠奈「さすが俺、中々やるじゃねえか」

闇本「悪いが、俺はお前じゃない。オリジナルは俺だ」

瑠奈「へっ…だったらこれでケリを着けてやるよ！」

そして瑠奈は斬りかかり、また斬り合いになった

闇本「はは…実にいい！自分でも無いければ他人でも無い奴と戦えるとはな！」

瑠奈「正直薄気味悪いぜ、その趣味はよ！」

闇本「趣味じゃないさ。ただ俺は人の心の闇を映しているにすぎんだ」

瑠奈「それが悪い趣味だって言ってるんだぜ」

闇本「減らず口を…！」

すると闇本が降り下ろした刀により、瑠奈の剣が耐えきれなくなり折れた

瑠奈「！！」

闇本「チエツクメイトだ」

そして闇本は一気に攻勢をかけるが、瑠奈は折れた剣で精一杯受けきる

闇本「…よくぞ受けきれたな」

瑠奈「…まあ、自分が相手ならある程度癖は分かるからな」

闇本「だが…もうやってられない。ここで死んでもらう」

すると闇本は刀に黒い霧を集めたした

瑠奈「…だったら…！」

すると瑠奈も力を完全に解放し、剣に炎をまとわせる

闇本「…決してやるよ、この戦いの勝敗を…！」

瑠奈「勝つのは俺だ。勝つてこの騒動を終わらせてやる！」

不敵な笑みを浮かべ、闇本が手招きをする

闇本「…来い！」

そして瑠奈が飛び上がり、渾身の力で剣を振る

瑠奈「崩壊花火・極」！！

闇本「惨死剣」！！

そして剣と刀がふれあった瞬間、大爆発がおき、アジトは欠片ものこさず吹き飛んだ…

「ネイチャーガーデン」

町まで逃げた瑠璃と灼沢は爆発音が鳴り響いたのに気付き、アジトの方へ戻るとそこは既に焼け野原だった

瑠璃「え…？」

灼沢「…何、これ…」

アジトがあった場所には何も無く、残っていたのは大きな穴だけだ

つたのだ

瑠璃「…瑠奈…さんは…？」

灼沢「…あれ…」

灼沢が指を指した先には瑠奈の剣が刺さっていた。その剣の元に歩き、その剣に触れた途端に瑠璃は膝から崩れ、泣き始めた

瑠璃「まさか…まさかですよね？」

灼沢「アジト自体を跡形も無く吹き飛ばす爆風だったから…もう…」

瑠璃「こんな終わり方…誰が信じるって言っんですか…私は…信じられませんっ…！！」

そっぴい、剣を抱き号泣してしまった

灼沢「…霧が、晴れた…」

そしてその後、地下を覆っていた霧が消滅したとふたりは知らされたのだっ…

45話…再会

「第4階層・クラシックフィールド」

瑠奈が姿を消して一週間、瑠璃は灼沢と共に重山が治める新組織へ向かっていた…

「新組織」

重山「る、瑠璃様！？何故お戻りに…」

瑠璃「…うつ…飛鳥あ…」

瑠璃はいきなり泣き出してしまった。重山は困惑している

重山「…！まさか…灼沢、烈火は何処に…」

灼沢「…分からないよ」

重山「…！」

瑠璃「…飛鳥あ…私…どうしたらいいの…？」

重山「…瑠璃、様…」

そして灼沢は重山にこれまでの一部始終を話した

重山「…霧…」

灼沢「この階層には出てなかったの？」

重山「ああ、そんなものの発見報告は無かったが…」

灼沢「…そっか…」

重山「それにもう一人の烈火、か」

瑠璃「…」

重山「…その穴は地層を貫通して無かったか？」

灼沢「してなかったと思うけど…」

重山「…瑠璃様、私にはどうも解せないのですが…」

瑠璃「…？」

瑠璃が目を真っ赤にしながら重山を見つめる

重山「何故刀はうまい具合にそこに刺さっていたのですか？」

瑠璃「…分からない…」

重山「話を聞く限りでは烈火とその男との戦闘中は剣を用いていたのでしょう？なら、その場に刺さる際には建物は消える訳が無いと思います。逆に捉えるのならば…建物が跡形も無く消え去ったのなら、剣も消えると思うのですが…」

瑠璃「！！」

灼沢「でも瑠璃は今居ない、これが現実でしょ？」

重山「確かにそうだ。だが灼沢、瑠璃様。あくまで私の仮説だが、烈火は多分、時空の狭間に飲み込まれたのかと思う」

灼沢「また突拍子もない話を…」

重山「能力を完全解放し、フルパワーでぶつかり合う。そして爆発音と共にアジトと烈火の消滅…。無きにしもあらずだと思いがな」

瑠璃「でも…だとしても瑠奈さんは戻っては来れない…」

重山「さて、それはどうでしょうか…。能力により引きずり込まれたのであれば、それは能力によりまた開くと思われませんか？第一、あいつは中々死にませんよ」

灼沢「結局、その仮説が正しいなら私達は探すだけ無駄なのかな？」

重山「…まあ、そうなるな」

瑠璃「…瑠奈さん…」

重山「さあ、瑠璃様、灼沢。さぞかし疲れてるでしょう？今日はこちらでおやすみ下さい…」

そして夜…

瑠璃「なんだろ…眠れない…」

昔から居た自分の部屋で瑠璃は寝付けずに居た

瑠璃「…確かに…飛鳥の話していることも分からなくは無いけど…」

そして剣を手にとり、さらに考え込む

瑠璃「…生きてるなら早く会いたい…」

すると瑠璃の部屋に誰が入ってきた

宝冥寺「こんばんわ、光さん。お久しぶりね」

瑠璃「…逸姫先生…？」

瑠璃の前に宝冥寺が現れた理由とは…

46話…孤独なる戦い、闇への誘い

「?????」

瑠奈「…っ」

その頃瑠奈は、重山の予想通り死んでは居なかった。あらゆる物が白黒になった世界に居た

瑠奈「…何で俺はこんなところに…あの時は闇本と…」

そして前に延びる道を歩いていく

瑠奈「…剣もこちら辺には見当たらないか…それに、瑠璃達も何処に…」

瑠奈は道なりに進み、白黒ではあるが町に着いた。瑠奈はその宿屋で考え始めた

「色が消えた町・ホログラス」

瑠奈「…まずはここは何処だ…それにまともに人が居ねえ。宿屋の主人は生きてる気がしねえ。不気味極まりねえな」

そして窓から外を見る。風景はやはり白黒である

瑠奈「…俺は死んだからこんな所にいるのか? いや…足はあるしな…」

そして次の日の朝、瑠奈はこの町を出た。すると郊外に大きな穴があった。その穴に近づこうとした瞬間だった

瑠奈「!」

闇本「やあ烈火…会いたかったよ…!」

その穴が黒く光り、中から闇本が出てきた

瑠奈「てめえ…」

闇本「まああの程度なら死なないと思ったけど…殺しがいるよ!」

そして闇の波動を瑠奈に飛ばした! 瑠奈はそれをかわす

瑠奈「うわっ!」

闇本「さあ…ここなら邪魔は入らない…存分に殺し合おうじゃないか!!」

瑠奈「(邪魔…?あの時はたしかふたりだけの筈だが…)」

闇本「さあ始めようか!? 暗黒舞踏会、開幕だ!!」

その闇本の声を合図に、大量の獣が現れた。全部が瑠奈に襲いかかる
瑠奈「…ワリイな闇本。生憎俺は死ぬわけにはいかねえ…真っ正面から向かって来いやあ!!」

すると瑠奈は地下闘技大会の時に”憤怒の炎”の能力が覚醒した。その炎は一瞬にして獣を灰と還した

瑠奈「…」

闇本「さすがは烈火…殺しがいるな」

瑠奈「言ってたんだろ…俺は死なねえ…死ぬのは貴様だ、闇本凄」

闇本「はっは、言ってくれるねえ…その遠吠え、覚えておくよ!」

そして炎対闇の能力の応酬が始まった

瑠奈「てめえ、さつきは邪魔があるって言ったな。何が邪魔だったってんだ」

闇本「…俺の目的は聖母の抹殺。そして世界を闇に帰す」

瑠奈「…瑠璃だな」

闇本「世の中平穏なんか似合わねえ、あるのは混沌だけさ。だが瑠璃は常にお前に守られていた」

瑠奈「理解したぜ。そのためにまず俺を消して、瑠璃をその後消すつもりだったか」

闇本「そうだ…だから貴様にもここで死んでもらうぜ、烈火あ!!」

そして手に大量の闇を溜める。瑠奈もそれに答え炎を手にまとわせる

闇本「ふ…撃っては来ないのか」

瑠奈「受けきれぬ、自信があるからな。…無駄口叩かずに来いよ」

闇本「ほざくなあ!!”業魔炎撃弾”!!」

そして闇本が放った弾を炎をまとった瑠奈が受け止める

瑠奈「くうううっ…!!」

少しずつ瑠奈の足が地面に埋まる

闇本「そつだ、良いことを教えてやるよ。今、聖母の元に暗殺者を仕向けた」

瑠奈「!!!」

闇本「例えお前がここで勝つてもあいつの命は既に無いだろうなあ
：ハハハハッ」

瑠奈「：黙れよ」

闇本「：何？」

すると瑠奈の炎が急に禍々しいものに代わり、闇本の炎を押し返し始めた

瑠奈「殺させねえし、死なねえ。：ほざくな」

そして闇本の技を完全にかき消してしまった

闇本「：さすがは”憤怒の炎”だな」

瑠奈「その名で呼ぶな」

闇本「烈火大悟の息子もやはり災厄になるな…」

瑠奈「俺の炎は瑠璃を守るためにある」

闇本「だつたらその炎で何人の人を殺した!? その血塗られた手で何人殺した!? お前の罪は消して消えない…お前は、俺と同じだあ
っ！アハハハハハッ！」

瑠奈「黙れ黙れ黙れええっ！」

急に瑠奈の力が暴走し、闇本を炎に飲み込んだ

闇本「ハハハハハッ！俺は死なねえぜえ…お前が戦う限りにはなあ
っ：ハハハハハハッ！」

瑠奈「”ビツクバン”!!!」

そしてその炎を大爆発させ、闇本は消え去った。辺り一面が灰になった大地に、瑠奈は一人になった。だが瑠奈は力が押さえられず、辺りを火の海に変えていった

瑠奈「うああああああつ!!!」

〓 新組織、瑠璃の部屋〓

宝冥寺「こんばんわ、光さん」

瑠璃「…逸姫先生？なんでここに…」

宝冥寺「フフ…どうしてかしらね？」

そしてガラス越しに夜空を見上げながら

宝冥寺「烈火君の居場所…知りたいんでしょ？」

瑠璃「！…知ってるんですか？」

宝冥寺「…時の狭間”だと思っわよ…？あたしの能力は”探知”に
長けるから、多分間違いないかしら」

瑠璃「それは…どこにあるんですか？」

宝冥寺「さあ？」

また宝冥寺はほほえんで返す

瑠璃「…それじゃダメじゃないですか…」

宝冥寺「暁学園に扉があると思っわよ」

ポツリと宝冥寺が呟く。その言葉に瑠璃は目を丸くする

瑠璃「…なんであんな場所に？」

宝冥寺「最近あそこに急に死霊が集まってきたの。だから…かしら」
瑠璃「…」

宝冥寺「それと…最近暁町は火災が頻発してるの。原因不明のね。
もしかしたら…ってね」

瑠璃「瑠奈さんはそんなことはしません！」

宝冥寺「もしかしたら、よ。ともかく、早く向かったら良いわね。
よくない予感がするの…」

そして瑠璃にある鍵を手渡す

瑠璃「…これは…？」

宝冥寺「ついてきて」

そして宝冥寺についてある装置の前に来た

瑠璃「…？」

宝冥寺「じゃ、そこに差し込んで」

言われる通りに瑠璃は鍵を差し込む。すると瑠璃の身体が光に包ま
れる

瑠璃「！！！？」

宝冥寺「行つてらつしやい」

そして瑠璃は消えた。その場に重山と灼沢が来る

重山「宝冥寺!!お前何を!」

灼沢「瑠璃さんをどこに隠したつ!」

宝冥寺「…うふ…騎士には姫様が助けてあげなきゃ、ね…?」

重山「でも瑠璃様一人じゃ危険だろ!」

宝冥寺「あら、ちゃんとしっかり手は打ってるわよ?だから、ご心配なく それより…」

灼沢「…天導さん、だね?」

天導「…あら」

光に包まれ、今度は天導が現れた

重山「何故ここにいる」

天導「貴女に…重山さん…手紙よ」

そして手紙を渡すと天導は姿を消した

重山「…誰からだ」

手紙の差出人は(木山田)とあつた

灼沢「だれです?木山田って人は…」

重山「…分からない…」

そして手紙の内容を見た瞬間、重山はその手紙を握りつぶした

灼沢「!?!」

重山「…!!!!」

そこにはこう書かれていた

烈火と光、双方を殺す

47話…雪の使者、愛の巫女

〓 暁学園 〓

瑠璃「ん…」

目を覚ますと、瑠璃は保健室のベッドの中に居た。服は何故かセーラーになっていた

瑠璃「…私…いつたい…」

泉野「…気付いた…？」

そこに泉野が入ってきた

瑠璃「…泉野…？」

泉野「校庭で貴女が倒れてたからここに運んできたの」

風野「つたく、いつになったら目が覚め…って、目え覚めたのか、

瑠璃！」

瑠璃「風野…さん」

風野「あ、ああ…」

そして風野と泉野は瑠璃の今日までの経緯を聞いた

風野「…あながち嘘じゃないと思うな、先生の話は」

瑠璃「…やはり、変化が」

風野「ああ、最近少し気温が上昇しててね」

泉野「それと、最近の不審火も気がかりです」

瑠璃「このどこかに…。それにしても…風野さん、何故ここに？」

風野「それこそ先生の依頼さ。」騎士を救う姫様の援護をお願いね

” っ て ね 〓

瑠璃「へえ…」

その時だった。外で大爆発が起き、周りが慌ただしくなる

風野「おいお前！何があった！」

生徒「も、燃えてる人が、グラウンドにいつ…！」

生徒は皆逃げていく

風野「…まさか…な」

瑠璃「…瑠璃さん…！」

瑠璃は一目散にグラウンドに向かった

瑠奈「アアアアアアッ！」

瑠璃がグラウンドで見た風景は、瑠奈が周りを燃やす絵だった

瑠璃「瑠璃さんっ！！！」

瑠璃が近づこうとするが、炎が行く手を遮り、近づけない

瑠璃「うっ…！」

泉野「嫌な炎…まるで瑠奈じゃない…！」

瑠奈の髪、目は真っ赤だったが、何故か瑠奈は言葉を話せなかった

風野「ちくしょう…瑠奈！」すると瑠奈は風野と泉野を炎に包み、

瑠璃に道を作った

瑠璃「…瑠奈、さん？」

すると瑠璃の指輪の石が光り、瑠璃を包む。そこへ瑠奈が炎の龍を産み出し、瑠璃へ向け放った

瑠奈「ウウウアアアッ！」

風野「しまった！直撃する！」

泉野「瑠璃さんっ！」

だがその龍を聖母の姿になった瑠璃は片手で振り払い、瑠奈に突進した

瑠奈「オオオオオッ！」

瑠奈が拳を振るい、その拳をいなす瑠璃。だが

瑠奈「アアアアアアッ！」

瑠奈は横から龍を産み出し、瑠璃へぶつけた。瑠璃は地面に叩きつけられる

瑠璃「あっ…！！！」

瑠奈「アアアアアッ！」

もう一度瑠奈は龍を産み出し、トドメをさそうとしたが、ここで異変が起きた。急に龍が消え、瑠奈が頭を抱えて苦しみだしたのだ

瑠奈「アアアアッ！」

そして能力の暴走は過激になり、辺り一面が火の海に変わっていく
瑠璃「瑠奈さんやめて！これ以上やったら街が灰になる！」

瑠奈「ガアアアアッ！」

瑠奈は見境を無くしたかのように炎を発射してくる。瑠璃達はそれが影響で近づけない。だが…その事態が変わる出来事が起こった
「???」雪の停刻”

いきなり吹雪になり、瑠奈を氷付けにしたのだった。周りで起きてた火災も全て鎮火した。学校の屋上から一人、こちらに飛び降りてきたのがそれを行った張本人だ

瑠璃「…あ、貴方は…」

「???」雪鹽 司（ゆきじつかさ。以下雪鹽）。水と氷の半分ずつの力を持つ」

瑠璃「ゆ、雪鹽さん…この後はどうする…」

雪鹽「決まっている、この氷像を破壊するだけ」

そついいトンファーを構えたが、間に瑠璃が割って入る

瑠璃「この人は私の大事な人…簡単に殺されたら困ります」

雪鹽「だが放っておいたら氷は融け、また活動する。そつすればこの街が終わる。沢山の人が死ぬ」

さらに風野と泉野も割って入る

風野「確かに危険かも知れねえが、俺はこいつの良いところも知ってる…簡単じゃねえんだよ」

泉野「…彼は必死に自分自身と戦ってる。そんな彼の努力を無駄には出来ない」

雪鹽「くだらん友情、無意味。どけ」

瑠璃「嫌です。瑠奈さんを殺すと言うのなら、まず私を殺してください」

そついい、瑠奈の剣を構える

雪鹽「無意味な争い、笑止」

瑠璃「無意味なんかじゃない…私と瑠奈さんは繋がってるから」

その言葉が鍵かのように急に指輪が強く光りだした。文字が（愛）に変わっていた。剣を高く持ち上げ…

雪璽「…ふむ。」

瑠璃「レイズ・ソウル”！」

剣先から放たれた光は瑠奈に当てられた。すると瑠奈の力の暴走が収まったかのように髪の毛や目が黒にもどった

雪璽「見事なり。さすが姫君」

その光は各地にも飛び、焼けた草木は息を吹き替えし、崩れた家も元に戻っていった。そしてその光が消えたと同時に雪璽も力を解き氷を融かし、瑠奈と瑠璃は共に倒れた

風野「瑠奈！」

泉野「…瑠璃さん！」

雪璽「…さらば」

そして雪璽は姿を消した

瑠奈& a m p・瑠璃「…」

48話：瑠奈のサプライズ

「烈火家」

瑠璃「…う…」

烈火母（烈火 瑞鬼…れっかみずみ。以下瑞鬼）「あらおはよう？
瑠璃ちゃん」

瑠璃「…ん…ここは…？」

瑞鬼「あら、忘れたのかしら？瑠奈の母よ？」

瑠璃「あ…お邪魔…してます」

瑞鬼「もう…半日も寝たら元気になれたかしら？」

あの事件から既に1日が経過していたようだ

瑠璃「…瑠奈さんは？」

瑞鬼「あら、瑠璃ちゃんが知ってると思っただけど…」

瑠璃「え？それって…」

瑞鬼「それがねえ…運ばれたのは瑠璃ちゃんだけなのよ。弥枝ちゃん

んは”瑠奈は居なかった”らしいの」

瑠璃「で、でも…」

だが周りを見渡しても剣が見当たらなかった

瑠璃「あ、あれ？」

瑞鬼「ん…どこ行ったのかしらねえ…」

瑠璃「…」

そして一週間後…

「暁学園」

瑠璃「…分かりませんか…」

瑠璃は職員室にいる宝冥寺に瑠奈の居場所を聞いたが、宝冥寺も分からないと答えた

宝冥寺「私の能力にも引つ掛からないのよ…」

瑠璃「瑠奈さんは能力の酷使と怪我で危ない状態の筈なのに…」

宝冥寺「風野君も今は居ないし、泉野さんは日向さんはあまり外には出したくないし…」

瑠璃「？何か訳でも？」

宝冥寺「重山さん宛に手紙が来たんだけど、それに光さんと烈火君を殺すって書いてあったの」

瑠璃「！！」

宝冥寺「まあ…出来ないとは思っけど…」

瑠璃「…ん…」

そして帰路…

瑠璃「…？」

日向「ん？どつたの、瑠璃？」

瑠璃「なんか…ついて来てる…」

その瞬間、前に男が一人現れた。その姿は忍者である

…？…？…覚悟」

そしてナイフを取りだし、瑠璃に突っ込んできた。瑠璃達はいきなりの事で動けなかった

瑠璃「…っ！」

その忍者のナイフが突っ込んだその時、横からきた男が瑠璃を弾き飛ばし、身体にナイフを刺されたのだ

瑠璃「…っ！？」

…？…？…何奴…」

瑠奈「…ゲフツ！わ、ワリいな…瑠璃を殺したいならまず、俺を殺せよ…！」

その男は瑠奈だった。腹をさされ、血を流しているがそこから動くとはしなかった

…？…？…”突鷲刺”」

そして地面から出てきた鷲に身体を貫かれた瑠奈。だが、それでも動かない

瑠奈「…っ！」

瑠璃「やめて瑠奈さん！逃げてえっ！」

日向「…瑠奈っ！」

瑠奈「…へ、へへっ…。馬鹿野郎…が。俺が…守らなきゃ、だれが…守る…」

「…？？」

さらに鳶は瑠奈を貫く

瑠璃「嫌ああああっ！」

瑠奈「…てめえ…俺は…動かねえ、ぜ…。俺は…俺は…！」

泉野「…まさか…」

瑠奈「瑠璃の…ナイトなんだあああっ…！」

そして瑠奈は炎に包まれ、忍者を引き離し、鳶を全部焼ききった

瑠奈「…こいよ。俺は一步も動かねえ」

「…？？」

そして忍者はその場を立ち去った。瑠奈の炎は消え、その場に倒れ

そうになるのを三人で抱える。瑠奈は血まみれだった

瑠璃「なんでこんな無茶を…初めから力を使えば…」

瑠奈「…少しは…かっこ…つけたくて、な…」

瑠璃「十分瑠奈さんは格好いいよ？」

日向「…泉野、私達は…」

泉野「うん。…瑠璃、後は…」

そして二人が去る

瑠奈「大丈夫…致死的な怪我はねえよ…」

瑠璃「でも…」

瑞鬼「…瑠奈」

そこに瑞鬼がやって来た。そして瑠奈の頬を一発叩いた

瑠奈「…！」

瑠璃「お、お母さん…！？」

瑞鬼「瑠奈、貴方は好きな娘を泣かせるの？意味も無く、命を捨てるんじゃないの」

瑠奈「…はは…うるせえよ」

瑞鬼「で、見つけてきたのね？」

瑠奈「…ああ…」

瑠璃「…何の話…？」

瑠奈「…ほら」

瑠璃へ手渡した物は、ブレスレットだった

瑠璃「…これは…え…？」

瑠奈「…気付いてつか？今日は…」

すると、空から沢山の雪が降ってきた

瑠璃「…」

瑠奈「俺…と瑠璃の会った…日…だ…」

瑠璃「…！！」

瑠奈「俺とお前の関係は…あの出会いから始まったんだ…」

瑠璃「で、でも、この腕輪とは…」

瑠奈「馬鹿野郎…察せよ…」

そして瑠奈はそのブレスレットに炎を灯した。すると…

瑠璃「……………！！」

そのブレスレットから光が放たれ、辺り一面がまばゆい光が輝いた

瑠璃「…綺麗…」

瑠奈「…俺の力が…瑠璃の…道を、照らす…様だ。これからも…よろしくな」

瑠璃「…ううう…」

瑠璃「…ううう…」

瑞鬼「泣いたらいいわよ、瑠璃ちゃん」

瑠璃は感動で涙を溜めていた。瑠奈からの初めてのプレゼントだったのだ

たのだ

瑠璃「…急に居なくなったら、許さないから…」

瑠奈「…はは…こりゃ、気を抜けない、な…」

瑞鬼「よし、じゃあ、皆帰りましょ？今日は瑠奈と瑠璃ちゃんがど

っちも好きなオムライスよ」

49話：襲来

「烈火家」

瑠奈「！！アイテテテ！！」

瑞鬼「あら、男の子なのに情けないのねえ」

瑠璃「いやいや、絞めすぎですって！！」

瑠奈「…たく、母さんはそういうの出来ないだろって…いでで！」

瑞鬼「あら、それは私に失礼じゃない？」

瑠璃「あわわわ…」

瑠奈達はあの後家で瑠奈の傷の手当てをすることとなった

瑞鬼「とりあえず、こんなところかしら？」

瑠奈「…まあ、いいか」

瑠璃「あはは…」

瑞鬼「じゃ、ご飯支度するから、少し待っててね」

そついい瑞鬼は台所に向かった

瑠奈「…母さん、あんなキヤラだったかな」

瑠璃「多分筆者がキヤラ設定を面倒くさがったんじゃない…」

瑠奈「筆者？キヤラ設定？」

瑠璃「あ、こ、こつちの話ですよ？アハハハ…」

瑠奈「…変な奴」

瑠璃「でも、傷が浅くて良かったです…」

瑠奈「確かに、あいつは確実に俺を殺る気だったからな」

瑠璃「…」

瑠奈「ん、どうした瑠璃？」

瑠璃「風の流れ…変じゃないですか？」

瑠奈「風…？」

そとを見ると、ちよつと風が強くなっていたようだ

瑠奈「天気、悪くなるかもだな」

瑠璃「なんか、違う…気がしますよ？」

瑠奈「？どついつ…」

瑞鬼「瑠奈？瑠璃ちゃん？ご飯よ〜？」

瑠奈「ああ！」

瑠璃「…気にしないで、ご飯食べましようか？」

「クラシックフィールド、新組織」

重山「…そうか、分かった」

風野「じゃ、俺は持ち場に戻るわっ！」

重山「…ふう…」

宝冥寺「とりあえずは落着ね」

重山「さあね…烈火の”憤怒の炎”の件も気になるし…」

その時、大きな地震が地下に起きた

重山「…！」

土屋「重山殿…！」

総長室に土屋、雷、零が入ってきた

土屋「この地震は…！！！」

重山「…ちい、きたか…！天上軍！」

雷「て、天上軍？」

零「…」

重山「全軍に伝える！地上へ進軍して、天上軍から地下を守る…！」

土屋「承った！」

重山「行くぞ！」

「烈火家」

その時地上でも大地震が起きた

瑠奈「な、なんだあ…！」

慌てて外に出ると、空には大きい球体の物が浮かんでいた

瑠奈「な、なんだよあれ…！」

瑠璃「…」

すると瑠璃は急に力を解放させた

瑠璃「…来ます。天上軍が…！」

その時、急に沢山の飛行生物が降りてきて町を破壊し始めた

瑠奈「…！…！」

瑞鬼「瑠奈。行ってきなさい」

瑠奈「でも母さんはどうすんだよ！」

瑞鬼「あら、忘れたの瑠奈？」

そういうとおもむろにバットを取りだし、飛んできた生物を殴り付けた

瑞鬼「これでも昔はヤンキーよ、私 自分の身くらい守れるわよ。

だから、瑠璃ちゃんが行ってらっしゃい！家でご飯つくって待ってるから！」

瑠奈「…分かったよ。瑠璃！行くぞ！」

瑠璃「は、はい…！」

そして瑠奈と瑠璃はそのばを後にした。すると瑞鬼の髪の色が紅く変化した

瑞鬼「大悟さん…私、頑張つてあの娘達の帰る場所作っておくから

…」

…？…？…？…！！

天導「うふふふ…」

風野「どうかしたのか、天導さんよ」

天導「だって、戦争よ？楽しみで仕方なくて…」

風野「…たく、趣味悪いぜ」

紅「へへ…瑠奈…ブツ殺す…！」

天導「さあ…ゲームの始まりよ！皆！思う存分楽しみなさい！」

50話：開戦、神民戦争&次幕予告（夢村、天導編）

「暁学園正門」

宝冥寺「さあ、皆早く中へ避難してください！」

緊急避難先として暁学園を使うことになったが、宝冥寺一人で守っていた

宝冥寺「…さすがにきついかしらね」

敵が大群で突っ込んできたが、急に炎に包まれ、消えた。その場に

瑠奈と瑠璃がきたのだ

瑠奈「イツキ先生！帰ってきたんだな！」

瑠璃「まさか、いままで一人で…？」

宝冥寺「…やっときたのね？遅いわよ…」

瑠奈「とにかく、先生は中の安全を確保してくれよ！」

瑠璃「ここは私たちが…」

瑠奈「いや瑠璃、お前もだ」

瑠璃「…え？」

啞然とした顔で瑠奈を見つめる

瑠奈「当たり前だ。瑠璃は治癒士。中には怪我人だらけだ。そいつらを助けてやれ」

瑠璃「でも、瑠奈さん一人じゃ…！」

瑠奈「一人じゃねえよ」

すると三人が扉から現れた

重山「よく気付いたな、烈火」

土屋「地上が潰されたら、地下もいずれば…それは避けねばならぬのでな」

灼沢「はあ…やっぱりゆつくりは出来ないんだね」

瑠奈「…こんだけ居れば文句ねえな、瑠璃？」

瑠璃「…瑠奈さん。勝手に居なくならないでね…」

瑠奈「ああ！」

そして宝冥寺、瑠璃は中へ向かった。そして未確認生物が沢山向かってくるなか、皆が能力を解放する

瑠奈「…絶対に落とさせない、皆を、守る！」

重山「地下の民の為に、我らも奮起するぞ！行くぞ、灼沢、土屋！
灼沢 & amp ; 土屋「はい！」

瑠奈「いくぜええ！」

「????」

雷「天導さん、今戻りました」

天導「あらおかえり。今、地上は…」

雷「揃いました」

天導「ふふふ…、だそうよ、闇本君？」

闇本「…烈火もそこか」

天導「そうね」

闇本「…この傷の恨み、晴らして、次こそ俺が烈火になる…」

紅「ワリイな闇本さんよオ！烈火は俺が殺す！」

雷「…皆、私の力で制裁してあげるよ…土屋…！」

風野「…」

天導「あら、どうしたの風野君？今なら辞めてもいいのよ？」

風野「やめた所で俺も殺されるだろ。辞めねえよ」

天導「うふふ…じゃあ、皆さん。しっかりお願いね？…時空振動弾、
発射」

そして天導がボタンを押した瞬間、球状の物体からミサイルが射出された

「暁学園」

瑠奈「てりやあああつ！」

重山「はあつ！瑠奈！あらかたカタはついたぞ！」

土屋「重山殿！球体からミサイルだ！着弾するぞ！」

泉野「皆さん！」

瑠奈「泉野！どうした！」

中から泉野が血相を変えて出てきた

泉野「あのミサイルは時空振動弾：世界が吹き飛ばされます！はぐれたら私たちは個々撃破：相手の狙いはそこです！」

瑠奈「！！皆、集まれ！！！」

そしている人間を全員呼び集めた

瑠奈「全員離れんな！」

そしてミサイルが着弾し、辺りが光に包まれた

瑠奈「！！！」

そしてその場に人影はなくなった……

「????？」

天導「……ミサイル着弾よ。皆、地上の勇士を各個撃破して」

天導「復讐が始まる……のね……うふふふ……」

天導「あら閲覧ありがとう。神民戦争：始まったわね」

夢村「貴女敵じゃない……！なんで予告なんかに」

天導「さあ……なんでかしらね？なにかあるんじゃないかしら？」

夢村「……まあいいわ。次幕は神民戦争よ。ばらばらになった烈火君達は果たしてどうなるのかしら？」

天導「そしてアナザーストーリーは……（ガールズトーク）よ！」

夢村「初めてヒロインが全員勢揃いなんだね！」

天導「じゃあ、次幕で会いましょう？会えなかったら、消しちゃうから……うふふ」

アナザーストーリー4話：「CHAOSのガールズトーク!？」

日向「やつほー」

泉野「…遅刻」

灼沢「やつぱり遅刻なんだ」

日向「いやいやごめん じゃ、向かおう?」

「喫茶メルヘン」

日向「皆やつほー!」

夢村「あら、やっときたのね?」

今日は地下と地上、天上（次話以降意味分かるよ）の女性陣がトクを繰り広げるらしい…メンバーは

地上編

日向 香恋

泉野 弥枝

宝冥寺 逸喜

双葉 陽子

烈火 瑞鬼

地下編

光 瑠璃

重山 飛鳥

灼沢 紗菜

夢村 未来

天宝库 琉季

天上編

天導 有紀（以下天導有）

雷 麗宣

日向「意外と人数いるよね、女の子…」

雷「男の子はこんな感じ!」

雷はノートを取りだし、名前を書いていく…

地上編

烈火 瑠奈

雪璽 葵

地下編

零 冬児

土屋 尽太郎

紅 蓮喜

烈火 大悟（斬馬）

木山田 啓斗

天上編

闇本 伶

風野 真人

天導 誘貴（てんどうゆうき。以下天導誘）

宝冥寺「意外と少ないのね…」

夢村「でさでさ、皆誰が好きなの？」

その言葉に皆の顔が赤くなる。そして話あった結果、名前の下に自

分の名を書いてみよう、という事になった

重山「…読者のにこの設定は気になるのか？」

日向「たぶん気になるよきつと！」

瑞鬼「お母さんも皆の好きな人気になるわあ」

天宝院「…じゃ、せーの…」

そして書いていくと…

地上編

烈火 瑠奈…瑠璃、日向、灼沢

雪璽 葵…宝冥寺、天宝院

地下編

零 冬児…泉野、夢村

土屋 尽太郎…雷

紅 蓮喜

烈火 大悟（斬馬）…瑞鬼

木山田 啓斗…双葉

天上編

闇本 伶

風野 真人…重山、

天導 誘貴…天導有

瑞鬼「あら…瑠奈、人気なのねえ」

瑠璃「…紗菜ちゃんまで…」

灼沢「べ、別にいいじゃん！！す、好きだつてさ！？」

雷「それにしても、闇本と紅…悪者二人は人気ないんだね」

天宝院「…仕方ないよ」

日向「でさでさ！？読者のにはやっぱりあれ！美貌ランク、気にな
るでしょ！？」

瑠璃「美貌…ランク？」

宝冥寺「要するに色気、ね？」

雷「…私、幼児体型だから自信ない…」

双葉「重山さん、結構スタイルいいですね」

重山「別に、そんなことはないと思うが…」

天導有「夢村さんもグラマラスよね〜」

夢村「読者には分からないわよ…」

日向「とりあえず並べてみる？」

そして並べてみた（筆者の嗜好です。絵が描けたら表現出来たので
すが…）

色気順

夢村 宝冥寺 重山 瑞鬼 瑠璃 天導有 日向 双葉 灼沢 泉

野 雷 天宝院

重山「またすごい表を作ったな…」

日向「えっへん！見るとこ見てるのよ！」

天宝院「…」

夢村「まあ、あまりアテにはなりませんよね、だって筆者は絵を描

いてないんですから……」

双葉「ま、そうだな」

泉野「……それで……」

そして1日、いろんな話で盛り上がった……

〓 烈火家 〓

瑠奈「ハックションッ！！……誰か俺のうわさ、しなかつたか……？」

〓 アナザーストーリー4話、完 〓

51話…散らばったピース

「クラシックフィールド、新組織」

土屋「…うう…ここ…は…」

泉野「目、覚めましたか」

時空振動弾が着弾した瞬間、地上は光に包まれ、人が消えた…。その後土屋と泉野は新組織で目を覚ました

土屋「…これはどういう…」

泉野「いろんな場所に皆さんが吹き飛ばされたのでしょ」

土屋「ではこうしてはおれん！すぐに…」

泉野「…いや、それは無理ですよ」

そう言った矢先に、軍人が慌ててはいつて来た

男「つ、土屋殿！！目を覚まされましたかっ！」

土屋「どうした！何があつたのだ」

男「む…謀反です！相手は…雷です！」

土屋「！？」

泉野「…片付けましょ」

「スラムグランド、大門家」

大門「…目え覚まして下さい」

零「…っ…」

大門「気付かれた様っすね、零さん」

零「…スラム…」

双葉「そっらしいの」

零「双葉…か」

双葉「後は灼沢よ。それより、起きれる？」

零「…？ああ」

双葉「今大量の敵が地下へ侵略してきてる。今は灼沢がなんとかしてるけど、加勢が必要。いいか？」
零「…言われずとも」

「ネイチャーガーデン」

瑞鬼「もう…私達が飛ばされたの、激戦区じゃないかしら？」

宝冥寺「でも若い人達が頑張ってる…私たちも頑張らなければなりませんよ、お母さん？」

瑞鬼「正直瑠奈が死ぬとは微塵も思っていないんだけど…少しは助けようかしら？」

宝冥寺「私も教師として、生徒の道をしっかりつくってあげるとしますよ」

「第6階層、オラクル」

重山「…ここか…おい日向！いつまでも寝てる場合じゃない!!」

日向「…イテテテ…ありゃ!? 本当に飛ばされちゃったの!?!」

重山「あまり騒ぐな。詳しい場所が分からない以上、焦りは禁物…」

風野「悪い、ここで会ったのが運の尽きだ」

重山「…風野…?」

「天上の都、ジレルティ」

瑠奈「…痛っ…ここは…」

瑠璃「…」

瑠奈「おい瑠璃!大丈夫か!」

瑠璃「…瑠奈、さん…?」

瑠奈と瑠璃の二人はあの球体の中に居た

瑠奈「…他の奴等も飛ばされたか…」

瑠璃「じゃあ私たち、孤立したのですね…」

瑠奈「さあな…もしかしたら皆この施設の中に居るかもしれんが…」

すると一人の男が扉から現れた

???「やあ…”憤怒の炎”と”慈愛なる聖母”」

瑠奈「てめえ…誰だよ」

瑠奈は剣を抜き、切っ先を男に向けた

???「おや失礼。私の名は天導 誘貴。お見知りおきを」

瑠奈「天導…てめえはあいつと兄妹か」

天導誘「その通り。だが、私は妹の考えには賛同出来ない…」

瑠奈「どういう事だ」

天導誘「生温いのさ、彼女がやっていることは。…奥の部屋で待つ
てるよ」

そう言い残し、天導誘は消えた。そして入り口には沢山の機械兵士
が集まった

瑠璃「…天導さんは、何がしたいのでしょうか…」

瑠奈「へっ。分からなくなたっていいさ。俺はぶつとばすだけだ。…

瑠璃、下がってる」

そして瑠奈は力を解放し、炎で敵を次々飲み込んでいく

瑠奈「待ってる天導…お前の思惑…絶対に潰してやるよ!」

52話…悲しき宿命

「オラクル」

重山「風野…？」

地下6階層に重山と日向が居たのだが、その行く手に今まで仲間だった風野が立ちふさがった

風野「…ワリイな、俺は、お前達を止めなきゃならねえ」

重山「…それは、どういう…」

日向「どいて」

その場に日向が割って入った

日向「風野君が天上軍についた意味は理解してる。私も分類上は天上軍…でもその義務に従う必要があるの？」

風野「…知った口を聞くか、裏切り者。俺は義を通す。それが天上軍の掟」

日向「だったら私を倒してよ。私は裏切り者…でも今は立派な能力者なの」

風野「…言われずとも！」

そして風野は風に乗る、一気に日向の間合いを詰め日向を殴り飛ばした

日向「うあっ…！」

重山「…！日向！」

日向「待って！…手を出さないで」

重山「だが！今の日向じゃ…」

日向「出来なくてもやるの！…落とす前なの」

重山「…」

日向「飛鳥ちゃん！早く瑠奈達の所へ、私もちゃんと追いかけるから！」

重山「…分かった」

そして重山がその場を去る

風野「…巻き込みたく無かったか」

日向「喧嘩は1対1で十分でしょ？…さあ」

そして日向は槍を取りだし、風野に突進して行った

日向「たああああっ！」

風野「甘い…甘いっつ！」

日向の槍を風野が受け止め、風の力で日向を吹き飛ばした。日向は地面に叩きつけられる

日向「くうっつ！」

風野「…何故地上の民に与するんだ」

日向「…溜奈達は…私の…！」

そして槍の先に力を集中し…、風野に放った

日向「…シャイニングボールテックス」！！」

その光の矢は風野に向かっていくが、風野は力を使いその矢の軌道を変えた。だが目の前には日向の姿は無い

風野「…！」

風野が上を見上げると、太陽の様に光を放つバレーボール程の珠を持つ日向が飛び込んできた

日向「私は…太陽があるとき強くなれる！」

今の地下は”昼”だった。それにより太陽の光が日向に味方をするのだった

風野「…いいだろう！この拳に懸けて…お前を、太陽の守護者を砕く！」風魔・絶風拳”！！」

日向「…シャイニング・フェニックス”っつ！！」

日向の珠と風野の拳にまとう風がぶつかり合う

日向「はああああっ！！」

風野「…！！」

そして日向が風野の横を突き抜け、その場に静寂の時が訪れる。膝から崩れ落ちたのは、日向の方だった。大量の血を吐いている

日向「ああっ…あ…」

風野「…」

だが、風野の様子もおかしかった。風野が拳を開くと、大量の傷が右腕に現れたのだ

風野「…一瞬で右腕を使えなくするか。さすがだな、日向」

日向「うう…」

風野「…悪かったな。大事な人の為、か」

そして風野は日向を抱き抱え、地上への道を歩き出す

日向「…?」

風野「お前には負けたよ。…借り、返してやる。だから、休んでくれよ」

日向「…ありが、と…」

「スラムグランド」

灼沢「…もうっ！これじゃキリがな…」

零「邪魔だ」

最下層では灼沢、零、双葉が大量の獣を相手に戦っていた

双葉「大丈夫、灼沢さん？」

灼沢「これくらい平気！それに、零君も目が覚めたんだね」

零「…ふん」

灼沢「相変わらず愛想が無い…」

紅「何で、気を抜いてるんだア？」

あらかた獣を片付け、地上へ向かおうとした時、上から火の玉が落ちてきた。三人はしっぴかりかわす

零「…下衆が」

紅「下衆とは連れないなア、冬兎イ！昔からのよしみで仲良くしようぜエ？」

零「断る」

そして零は銃を取る

紅「ああ？」

零「灼沢、双葉。先に上行ってくれ」

灼沢「!?!三人で一気に殲滅した方が早い…!」

零「こんなところで戦力を割きたくない。早く行け」

双葉「…ここは零さんに任せましょう」

灼沢「う、うん…早く追いついてよ!」

そして灼沢と双葉が上に上るエレベーターに乗り込み、上に昇る

紅「させるかア!?!」

そこに紅が突つ込むが、零が氷の壁を産み出し、進めなくした

紅「…俺を怒らせたようだなア?」

零「さあな。とつと来い。一分でケリをつけてやる」

そして紅はその挑発に乗り、爪で零に襲いかかる

紅「ひゃあつはあッ!食らええ!」

零「(50…49…48)」

紅の爪を華麗にかわす零。それに激昂した紅がさらに攻撃の手を激しくする

紅「ざけんなア!攻撃してこいイ!」

零「(30…29…28)」

そして…

零「(3…2…1…0)」

紅「終わりだアあア!」

零「…ふっ」

そして紅が零の心臓目掛け爪を振り抜いたが、手前で止まってしまった

紅「!?!?」

零「…やはり半人前だ、お前は。…」

そして銃口を上に向け、発射した瞬間だった

零「”ボディブレイク”」

紅「!?!」

その言葉の瞬間、大量の氷柱が紅の身体から貫くように現れた

紅「…!!な、なぜ…!」

零「…身体の中の水分の流れを読み、自在に凍らせられる、とした

らどうなる?」

紅「!!!…そんな…力を使えば…自分だって…」
紅の言った通り、零も吐血した。力の代償らしい
零「…これくらい…なんともないさ。…じゃあな」
紅「…がはっ!」

そして紅が吐血し、倒れた。もう息は無かった

零「…任務、完了」

53話…古豪？

「ネイチャーガーデン」

第1階層では大激戦区となっていた。沢山の地上の民と、宝命寺と烈火 瑞希が居た。その場の沢山の獣を前に善戦していた

瑞鬼「はあ…どいつもこいつも手応えがない…」

宝冥寺「…瑞鬼さん、性格変わってますね」

瑞鬼「私も炎の異端者。それくらい当然さ」

宝冥寺「でも…そろそろ厳しいのでは無くて？」

確かに善戦はしていたが、無尽蔵に湧き出る敵に形成が変わりつつあった

宝冥寺「どうする…？」

瑞鬼「構わん、全部焼き払う！」

すると瑞鬼は力を地面に注ぎ始めた

宝冥寺「…？」

瑞鬼「裁きの炎竜よ！敵を吹き払え！」 召喚、炎竜”！」

すると地面から大量の炎竜が現れた。その炎竜が敵を食らう

瑞鬼「ハハハハツ！食らえっ！」

宝冥寺「なら、私も…”死喰霊”」

宝冥寺は口元で呪文を唱えると、背中から大量の霊が現れ、獣を吹き飛ばした

宝冥寺「ウフフ…私たち…」

瑞鬼「負ける気がしないな…！」

「クラシックフィールド」

土屋「…！！雷がだと!？」

男「はい…相手は能力者なので歯が立ちません!どうか…」

泉野「私たちが片付けます。場所を」

そして組織を出ると、門前に雷が佇んでいた

雷「…泉野さん、土屋…」

土屋「…お主…」

雷の爪は血塗れになっていった

泉野「貴女、何がしたいの。組織を潰す気？」

雷「私は…土屋を、殺す。それが、天上軍への手向け」

そっぴい、爪に雷をまとわせ突っ込んでくる

雷「…襲雷爪」！」

その爪は土屋の右脇腹をかすめた

土屋「…！！」

雷「次は…外さない」

土屋「…いいだろう、受けてたつ。泉野殿、組織を頼む」

泉野「…分かりました」

そしてその場に土屋と雷が残った土屋はハンマーを取る

土屋「来い！大地の守護者、土屋尽太郎…一步も退かぬ！」

雷「らあああつ！」

そして一瞬の内に雷は土屋の懐に飛び込む

土屋「…！！」

雷「…雷撃掌」！」

そして雷撃を土屋に浴びせる！だが土屋は一步も動こうとしない

土屋「ぬ…っ！」

雷「続けて”雷震崩落激”！」

雷を土屋に打ち付けた。土屋は足を地面につけ、堪える

雷「たああああつ！」

そして雷は連撃を叩きこむが、土屋は依然として倒れない

雷「…はあ、はあ…」

土屋「…この…程度が…お前の実力か」

そして土屋はハンマーを構える

雷「…私は…私は…」

土屋「生半可な意思で、人を殺められると思うなあ…！！」

そして雷の頭上にハンマーを降り下ろした！

土屋「フルガイインパクト」！！」

そして沢山の岩と共に雷を吹き飛ばした

雷「あああああつ！」

建物に突っ込み、雷は気絶した

雷「……」

土屋「何が悲しくて、反乱を……」

泉野「土屋さん」

そこに泉野がやって来た

土屋「……どうした？」

泉野「とりあえず雷さんを組織へ。そして地上の球体で爆発が観測されてます。多分……」

土屋「烈火殿か」

泉野「とりあえず私たちも雷さんが目を覚ましたら地上へ向かいましょう」

「天上の都、ジレルティ」

瑠奈「とあああつ！」

球体の中では瑠奈と瑠璃が敵を倒しながら奥へ進んでいた

瑠奈「瑠璃、大丈夫か？」

瑠璃「は、はい！」

瑠奈「へっ……とりあえずこれでゴール、みたいだぜ？」

そして二人の目の前には大きな門が立ちふさがった

瑠奈「……さて、どうするかね……」

瑠璃「……まさか……。瑠奈さん、少し下がってください！」

すると瑠璃が力を解放し門の前に立った。すると門が光りだし、開いたのだった

瑠奈「！る、瑠璃？何をした！？」

瑠璃「……行きましよう、瑠奈さん。天導さんが呼んでいます」

瑠奈「……」

二人は門を通過して奥へ進むと…

54話：光と天導の因縁の過去、譲れぬ器

「ジレルティ」

瑠璃の力の解放により開いた門を進んだ先には、吹き抜けの空間に
沢山の機械と、天導有紀が居た

天導有「ようこそ、天上の都、ジレルティへ。私たちの歓迎会、楽しんでいただけましたかしら？」

瑠奈「へっ、何が都だ、何が歓迎会だ！こっちは頭にきてんだ…楽しんでられるか！」

天導有に向かつて突進しようとする瑠奈を抑え、瑠璃が天導有に語りかける。だが、その瑠璃の様子は少し変わっていた

瑠璃「お久しぶりね、有紀。もう何年振りかしら」

天導有「やはり貴女も一緒だったのね、瑠璃。同じ”光”の名を持つ者」

すると天導有は力を解放すると、甲には”光”の文字、そして瑠璃と同じ白い羽根が左翼だけ生えていた

瑠奈「瑠璃と…同じ羽根…」

瑠璃「瑠奈さん、今まで隠してましたが、私と有紀、誘責は兄妹なんです」

瑠奈「！！」

天導有「私と兄さんは元は王族。そして兄さんは王位を継ぐ筈だった」

瑠奈「継ぐ、筈…？」

天導有「だが、兄さんは王位を継承どころか、一族を追放になったの、何故だか分かる？…貴方の父、烈火大悟が、地下の統治者になったからよ」

瑠奈「！！」

瑠璃「地上から来た大悟は地下を統治し初めてすぐ私達を被検体にしました。地下の生物兵器として」

天導有「私たちは元々地下の象徴、聖の能力を持つ王族。だからその力を掌握し、操れば逆らう人は居なくなると…。そこで、私たちの両親を殺した。そして側近だった自分が統治し、王族の私達を使い、権力を握ろうとしたの。でも、彼は瑠璃を選び、私達を殺そうとした」

瑠奈「…何故だ」

天導有「私は羽根が片方にしかなく、兄さんは羽根が黒かったからよ。彼はこう言ったわ。”これが王族？気持ち悪い。こやつらは認めん。出来損ないは殺せ”ってね」

瑠奈「…!!」

天導有「私は納得できなかった。何で瑠璃より力が強い兄さんが国を追われなきゃいけないのか。そして何で瑠璃だけが選ばれたのか」

瑠璃「…嫉妬ですか」

天導有「私たちは仕方なく国を出て、最下層に身を隠したわ。そして誓ったの”私たちの楽園を作る。彼のような人が裁かれる世界を。」

そして瑠璃の様な出来損ないばかりが重宝されない世界を”ってね」

瑠奈「…てことは、今回の戦は…」

天導有「貴方に正義は無いのよ。烈火」

瑠奈「…!!」

瑠奈は茫然と立ち尽くしてしまった。今回の件は自分の肉親が引き起こしたもので、自分にもその血が流れていると気付いたからだ

瑠奈「…てことは…」

天導有「そうだ、地下の民は、烈火をけして許さない。それは瑠璃も同じだ」

瑠奈「…!!」

瑠璃「違う、私はそんな」

天導有「なら何故お前は火の元で苦しんだ？兵器にされる事は苦痛だった筈だ」

瑠璃「そ、それは…」

天導有「両親を殺したのも烈火大悟だ。それでも何一つ憎しみを抱いていないと言えるのか」

瑠璃「…」

瑠奈「…道理でだ。分かったぜ」

瑠奈はおもむろに顔を上げ、剣を抜く

瑠奈「俺が初めて地下に来たときも周りの人は冷たかった。それに重山も俺を信用しきらなかった。瑠璃も一度は俺を貫いた」

天導有「そうだ。だから地上も地下も、体たらくな瑠璃の代わりに私が粛清する」

瑠奈「だったら俺に、瑠璃達と共に生きる権利はねえ…もつと先に気付くべきだったな…」

そういい、瑠奈は剣を捨ててしまった。…殺される覚悟を決めたようだ

瑠璃「！！駄目！それは駄目！私は…私は貴方を憎んでない！」
だが瑠璃は瑠奈の側にかけてよろうとしたとき、球体の物に捕まり身動きがとれなくなった

瑠璃「！！有紀、出して！ここから出して！」

天導有「出来損ないはそこで黙って見ててよ。後でしっかり殺してあげるから。」

そして天導は光の剣を産み出し、瑠奈に斬りかかった。だが瑠奈は戦いに集中出来ず防御をせず、その刃は瑠奈の胸元を突き刺し、貫通した

瑠璃「！！」

天導有「大悟の討伐、ご苦労だったね。…でも、貴方も死んでくれなきゃ、意味無いの」

瑠奈「…う…」

そしてその剣を抜くと大量の血を流し、瑠奈は床に崩れ落ちた

瑠奈「…今までの…戦い…なんだった…んだよ…」

瑠璃「…嫌あああああつ！！」

55話：命、最期まで燃やす。灰になるまで

「ジレルテイ、空中庭園」

瑠璃「嫌あああああつ！！」

庭園に血塗れで倒れた瑠奈。球体に捕まり動けない瑠璃。戦いは決したかに見えた

天導有「瑠璃。これが私たちの憎き仇敵、烈火よ。気分いいでしょ？」

瑠璃「…ふざけないで！！」

すると瑠璃は力を完全に出し、球体から脱出し、天導有に突進したが、天導有は力で瑠璃を撥ね飛ばす

瑠璃「ああつ！！」

天導有「調子に乗らないでよ、屑の分際で！」

そして瑠璃を殴りつける天導有

天導有「何？貴女は地上の風に打たれて地下の心を失ったのかしら？だったら貴女もここで死んでもらうわ」

そしてまた光の剣を産み出した。瑠璃は倒れて動けない

瑠璃「…！」

天導有「安心して？地下はちゃんと統治してあげるから…死ねえ！」

そして瑠璃へ向けて振り下ろした瞬間だった。瑠璃への剣は刺さる前に止まり、生々しい音と共に天導有の胸からは剣が貫ぬかれた。

瑠奈が起き上がり、天導有を刺したのだった

天導有「…な、に…？生きて…」

瑠奈「…ワリい、な…往生際が悪い、のは…親譲りでよ…」

そして剣を引き抜くと同時に大量の血が瑠璃、瑠奈にかかる

天導有「バカ…な…私、が…」

瑠奈「…あくまで、親父…がやった事だ。…俺に、罪をなすり…つけんじゃねえよ」

瑠璃「…有紀…」

倒れる天導有を瑠璃が抱き抱える。二人共力を解いた。すると画面に天導誘貴が写し出された

天導誘「有紀…分かったか？」

天導有「兄…さん」

天導誘「彼はもう本人じゃない。もつと他に方法があった筈だ」

瑠奈「お前…肉体が、無いのか」

天導誘「私はもう死んだ身さ。今はこのジレルティのメインコンピュータだ」

天導有「…私たちの…理想郷…作れなくて…ごめん…」

涙ぐみながら話す有紀。それに誘貴は微笑みながら

天導誘「ありがとな、有紀。ゆっくり休んでくれ。俺もすぐにそっちに行くから」

天導有「分かった…」

そして静かに息を引き取った…。それと同時に都の崩壊が始まった
瑠璃「！！な、何が始まったんですか!？」

天導誘「有紀亡き今、この施設は不要。だから壊すだけさ」

瑠璃「でも、私たちは…」

天導誘「心配には及ばない。この門を潜ってくれ。そうすれば地上に帰れる筈だ」

そして目の前に門が現れた。瑠璃は崖近くにいる瑠奈の元に向かい、手を差し出す

瑠璃「…私は、貴方を憎んでませんよ、瑠奈さん?…帰りましょ?」

瑠奈「…瑠璃…ありが…」

そして手を握ろうとした瞬間だった

闇本「光、討ち取ったりいい!!」

瑠奈「!!」

瑠璃「!？」

影から現れた闇本が瑠璃に向かって刀を振った。瑠奈がそれに気が付き瑠璃を突き飛ばし、その刀に切り裂かれた

瑠奈「…かつ…は…」

そして瑠奈はふらつきながら崖に近づき、地上へ向けて落ちていった
瑠璃「…あ…あ…！る、瑠奈…さん…！」

闇本「はははははっ！光を殺せなかったが、瑠奈を殺った！ひやは
はははは！」

瑠璃「…！！！」

瑠璃は大粒の涙を流しながら闇本を睨む。闇本はそれに気付き刃を
瑠璃に向ける

闇本「心配すんな…次はお前だ！」

瑠璃「…誰が貴方なんかに殺されるもんですか…！」

そして手を天にかざし

瑠璃「断罪肅清槍”！！！」

天から光の槍が降りてきて、闇本を串刺しにし、一撃で浄化した

闇本「！！ぐあああああっ！馬鹿なあ…っ！一撃でなんかあああ
っ！」

瑠璃「消えてください…目障りです！」

闇本「あああああっ！」

そして闇本も跡形も無く消えた。その場には瑠璃のみが残った

天導誘「瑠璃。早く脱出を…もう持たない」

瑠璃「…また…迷惑を…」

天導誘「早く！」

その言葉に頷き、瑠璃は門から脱出した

天導誘「…有紀め、最期に最悪な駒をしこんでたか…すまないこと
をしたな、瑠璃。…さらばだ、現世よ」

そしてジレルティは遙か上空で爆破し、消え去ったのだった

56話：傷つき天使を迎える人達

〓 暁公園 〓

瑠璃が門を抜けた先は公園だった。その公園には重山、土屋、雷、風野、日向、泉野、宝冥寺、瑞鬼、灼沢、双葉、零が集まっていた。皆はボロボロに傷を負っていた

瑠璃「…皆…」

重山「瑠璃様…よくぞご無事で…」

瑠璃「…無事なんかじゃないですよ…瑠奈さんが…」

零「闇本にやられた、か」

瑠璃「！！なんで…分かるんですか？」

零「俺は冷気を操る。だから温度が上がれば分かるのさ。だが、今それが感じられなくてね」

瑠璃「…瑠奈さんは…死んだんでしょうか…」

宝冥寺「私の力に引つ掛からないのを見ると、死んではいないと思うけれど…」

灼沢「とにかく、明日お兄ちゃんを探そう。深手を負ってるなら命が危ない…」

瑞鬼「なら今日は家に泊まって行きなさい？ご馳走用意するわよ？」
そして風野以外の全員は家に向かった…だが、風野は何かを考え始めた

風野「球体は真上にあつた。そしてそこから烈火は落ちた…。ならもう見つかつてる筈。それに天寶院が居ないのも気になる…まさか…共に行動？いや…それはないか…」

「…？」

風野「！誰だっ！」

風野が目を移すと、屋根の上に布を被った人が立っていた

「…？」

そしてその人はそのまま立ち去る

風野「…？殺気も感じられなかった…なんだったんだ…」

そして風野も家に向かった…。そして次の日、瑠奈を捜索するため、瑠璃、風野、重山は旅に出ることになった

重山「…土屋、雷、留守の間、組織を頼む」

土屋「承った！」

瑞鬼「私と紗菜ちゃん、宝冥寺先生はここに残るわね？」

零「…俺と双葉は別行動を取らせてもらおう。瑠奈がどうなるうと構わん」

瑠璃「では皆さん…行ってきます！」

そして三人の旅が始まった…

???「…ひ、かり、る、り…俺、あいつ、知って、る？…分らない。思い…出せない」

そして物語は最終盤に突入することになる…。

「天上の都、ジレルティ跡」

???「…天導、闇本、斬馬がやられたか…。後は俺のみ、か」

???「死創様。世界への侵略の時です。」

死創「皆よく聞きたまえ！私の名は死創 幻（しそうげん。以下死創）！我が安住の地を手に入れる時だ！さあ…我が子らよ、民を食らい潰せ！そして、我らの栄光を掴みとるのだ！」

兵「うおおおっ！」

兵「創成軍万歳！」

死創「では雪璽君、天宝院君、バックアップデータの闇本君の復元を頼む」

雪璽「承知」

天宝院「…うん」

死創「操 愛君は光を沈めよ」

操「はい。操 愛（あやつりあい。以下操）、任務を達成して見せます」

死創「そして烈火を捕えよ。多分奴は生きておる、奴が光に接触すれば、必ず障害になるからな」
操「分かりました」
死創「頼んだぞ…」

57話：次章、次幕予告

瑠璃「講読ありがとう 神民戦争編、どうだったかな？」

重山「まあ、瑠奈は居なくなっただが、また不穏な動きが出てきたよ
うだ」

風野「消えた烈火、天寺院、新たなキャラクター。ちょっとキャラ
が多くなりすぎてる気がするが…」

瑠璃「にぎやかなのはいいことですよ、風野さん」

重山「まずは私たち瑠奈搜索編が1つ目の話になります！」

宝冥寺「私と灼沢さん、日向さん、泉野さん、そして新キャラ一名
は地上防衛線編となります」

日向「新しい人は誰かなあ？楽しみだなあ」

泉野「もう名前覚えるの面倒だね…」

零「俺と双葉、夢村は地下激闘編となる。面倒くさい…が、やるか」

瑠璃「じゃあ CHAOS第三章 THE LAST CHAOS
が始まるよーっ!!」

????「…俺は…誰…だ」

「暁学園」

重山「…ここにも沢山の破片がある…」

瑠璃「でも…ここにも人の気配はしませんね」

風野「中々見つからないだろうなあ…生きてるかどうかも分からねえつてのに」

瑠璃「瑠奈さんは生きてます！！私は…私は、瑠奈さんと約束したんですから！」

風野「わ、悪かったよ…」

重山、瑠璃、風野の三人は瑠奈を探す手がかりを掴む為、ジレルテイ崩壊により休校になつてる暁学園の屋上に来ていた

重山「瑠璃様、その約束とは…」

瑠璃「もう、私を置いては行かないって」

風野「置いていかないかあ…だったらそう遠くには行ってないんじやねえかなあ…」

重山「正直、瑠奈自身の能力が使えるかが分からないんじや、能力の探知は出来まい」

瑠璃「やっぱり、何か手掛かりを見つけないきゃ…」

「???」「目標発見…！」

すると屋上の扉からナイフを持った兵士が二人襲いかかってきた！

その兵士を重山、風野が抑える

重山「…！」

風野「何なんだよいきなり！」

重山、風野が兵士のナイフを交わし、吹き飛ばす

「???」「邪魔だ…失せる！」

すると今度は銃で撃つてきた。重山は瑠璃をかばい、風野が二人に
正対する

???「2対1だけ、後は女二人だ。お前を倒せば楽だぜ」

風野「悪い、お前らの出番はここで終わりだ」

風野は力を解放し、風を纏う

???「こいつが”反逆の風”か」

風野「反逆、ねえ…裏切ったつもりはさらさらないんだがなあ…」

???「死ねええ！」

そして二人同時に突っ込んできた。その時風野は広げた手を前に掲げ

風野「一撃。それだけで沈めてやっから感謝しな！」 舌の拳、竜巻

”！”

すると風野の手から竜巻が生まれ、まず一人を吹き飛ばした

???「ぐあああつ！」

???「まだまだああつ！」

その攻撃をかわした兵が、風野にナイフで切りつける。だが風野は風を読み攻撃を避ける

???「くつ…何故当たらん！」

風野「それは簡単さ。ナイフの軌道に風が生まれるから、それを読み攻撃をかわす。…行くぜ重山！」

兵が上を見ると、すでに重山は上空から拳を構え降りてきていた
???「…！」

重山「潰れるおおつ！！」

そして地面に着く直前に拳を振り抜く

重山「”ハートブレイク”！！」

その一撃で敵は屋上から叩き落とされてしまった

重山「…ふう」

風野「やあお見事、重山先輩！」

重山「茶化すな」

風野「な、なんでえ、皆お堅いでやんの…」

瑠璃「??…これ…」

すると瓦礫の山から瑠璃は赤く光る石を見つけた

瑠璃「…灼熱のルビー」

重山「？灼熱…ですか」

瑠璃「私が飛鳥にあげた物じゃないけど、何でだろ…名前が分かるの」

重山「…ミハエルの記憶…ですかね」

風野「…！！」

風野が何かに気付いたので、そちらに目を移すと別の建物の屋上に布を被ったひとが居たのだった

風野「てめえ…何者だ！！」

???「…俺…は…誰…？」

重山「？自分自身が分からないのか？」

???「分からない…誰…」

そしてまたその場を立ち去ってしまった

重山「待てっ！」

重山は追おうとするが、風野に止められた

重山「何故止める！」

風野「今はあいつは障害にはならない、何故なら記憶がないからな」

重山「だが記憶が無いからこそ、新たな敵になるかも知れないじゃないか！」

風野「それは…そうだが…」

瑠璃「私も重山さんの意見に賛成です。あの人…何か気になります」

風野「なんか言って言ったって、手掛かりはないんだろ？」

瑠璃「ま、まあ…」

風野「でもま、当ては無いよりはマシか」

重山「よし、決まったな」

瑠璃「あの布の人を追いましょう！」

そして三人の旅が始まった…

「日向家」

日向「瑠璃ちゃん達言っちゃったね……」

泉野「まあ、仕方ないよ。烈火が居ないなら瑠璃ちゃんも浮き足立つだろうし……」

灼沢「私もついて行きたかったなあ……」

灼沢、日向、泉野の三人は日向家でトランプをしていた

日向「よし、3揃った、あつがり〜!」

灼沢「あゝ、何それ、ずるい!」

泉野「…ずるくない。早く引いて」

灼沢「むきーっ、これであがつ…れない!？」

泉野「はい、揃った上がり」

灼沢「…負けたあああ!」

そこに宝冥寺が部屋に入ってきた

宝冥寺「あら皆、揃ってたのね〜?」

日向「先生!? 勝手に入ってきた!？」

宝冥寺「あら、これもインターホンは押したのよ?」

泉野「…聞いてませんよ」

宝冥寺「あ、そうそう、なんか町に向かって所属不明の軍隊がここに攻め上がってるそうよ?」

灼沢「!! 所属不明…斬馬の残党…?」

日向「もしかしたら天上軍の生き残り!？」

宝冥寺「どっちも外れね…話によるとその集団は(創成軍)と名乗ってる見たいよ?」

灼沢「創成軍…!」

日向「今どこにいるの、そいつら!」

宝冥寺「暁学園に侵攻中よ。そこを拠点にしたいみたい。初めは瑠

璃ちゃん達がいたみたいで撃退したんだけど、第2波として来たい。今はこの町の皆がバリケードになってるみたいだけど…」

泉野「…行く?」

日向「もちろん!」

灼沢「この町が押さえられたら、お兄ちゃんが帰ってきた時申し訳ないしね!」

宝冥寺「ふふ…その意気よ」

そして四人は暁学園へ向かう

〓 暁学園、校門前〓

創成軍「我らが作る新たな秩序の為、いざ進めえっ!」

地上軍「皆!ここが正念場だ!俺らの町は俺らが守るぞおっ!」

日向「うわ…激戦…」

日向達が現場に着くとそこは地上軍と創成軍との大乱戦になっていた。戦況は地上軍が数で劣り不利だった

泉野「…地上軍に」

灼沢「加勢するよ!」

そして三人が飛び込もうとしたとき。上空からたくさん火の玉が落ちてきて創成軍に襲いかかった

創成軍「うわあああっ!」

創成軍「ひ、退けええ!」

そして創成軍が引き上げていく

地上軍「打ち払ったぞおお!」

日向「紗菜ちゃん、今何を…?」

灼沢「い、いや、私は何もしてない!」

宝冥寺「あそこにいるのは誰かしら?」

宝冥寺が指差した先には布を被った一人佇んでいた

灼沢「…あのひとがやったんだ」

そして暁学園から一人現れ、その布を被った人と戦い始めた。その人は…死んだ筈の天導有紀だった

灼沢「！！天導！？」

天導有「はあああつ！」

?????」

そして天導有は布の人に光の弾を発射するが、急に姿を消したため
当たらなかつた。天導有は灼沢達に気付き、こつちに歩いてくる

灼沢「貴女、死んだ筈じゃ……？」

天導有「そうね、天導有紀と言う人は確かに死んだわ」

日向「？どゆこと？」

宝冥寺「…誘貴の命を託されたのね」

天導有「まあそんな所ね」

泉野「…じゃあ、貴女は何者？」

天導有「そうね…私は聖澤 聖（せいざわひじり。以下聖澤）。反
創成軍よ」

灼沢「…聖澤……」

〓 地上防衛線編序幕、終 〓

「遊源卿の町、イオシス」

夢村「あら、零君じゃない！貴方から訪ねてくるなんて珍しいわね
〜！」

零「…今回は双葉もいる」

双葉「ご無沙汰してます、夢村さん」

夢村「あら、地下闘技大会以来ねえ」

零と双葉は夢村が管理するイオシスに足を運んでいた

零「…町は依然として活気に満ちてるな」

夢村「当然よ なんとたって遊びが日常だもの！」

双葉「…ほんとお変わりないんですね」

夢村「…で、用事は何？貴方のような男が好き好んで来る場所じゃない…何か理由がある筈よ」

零「…天鳳院の所在が分からない」

夢村「あら、何でいなくなったのかしらね？」

双葉「その様子だとこちらにも顔は見せてないようですね」

夢村「来てないわよ。あの子もこんな町にわざわざ足を運んだりは
しないわよ」

零「…今、行方不明は烈火と天鳳院…俺の推論なら、天鳳院は今、
俺達の敵だと思う」

夢村「と、言うこと？」

零「…あいつも名に”天”を持つ人。能力者の中での言い伝えで”
天”は創成の能力を持つ。天鳳院はそれを今行おうとして…」

そう話している最中、街から叫び声が聞こえてきた。男が慌てて部
屋に入ってくる

男「ゆ、ゆ…夢村さん！」

夢村「なあに？何かあった？」

男「サ…サイノックスです！こちらに向けて突進をかけてる様で…

俺らじゃどうしようもありません！」

夢村「そんなこと言われても…ねえ、零君？」

いかにも行ってきた的な態度で話しかける夢村

零「…分かった、俺が行く」

男「行つてくれるか！ありがたい！」

双葉「私も行く。夢村…話の続きは」

夢村「ハイハイ分かつてるわよ 私はここに残るから、思う存分暴

れてらっしゃい！」

零「…しばらく振りの獲物だ。銃が唸る…」

双葉「速攻片付けて、話の続きをしましょう…」

〓 地下激闘編序幕、終 〓

61話：それぞれの道を進むにあたり（改訂版）

聖澤「皆さん、こんにちわ、聖澤です。それではこれから始まる三つのお話の概要と主な登場人物を紹介しますね。」

その1：瑠奈搜索編

地上軍対創成軍

天上軍との決戦の最中、闇本に敗れ地上へと転落し行方が分からなくなった瑠奈。周りは死んだと諦めているが、諦められない瑠璃は瑠奈を探すため風野と重山を連れ、旅に出ることとなった。そこで見た新たな敵、急に現れた布を被った人物の目的、そして瑠奈は生存しているのだろうか…

地上軍

光 瑠璃

風野 真人

重山 飛鳥

布を被った人物

創成軍

死創 幻

闇本 怜

操

雪璽 司

その2：地上防衛線編

地上軍対創成軍

瑠奈を探すため旅だった瑠璃達、そして自由気ままに地下に降りた零達を見送った日向達。だがその後宝冥寺の口から未確認の軍の襲撃の報を受ける。瑠奈達の帰る場所を失うまいと日向達はまた武器を取る…

地上軍

日向 香恋

泉野 弥枝

灼沢 紗菜

宝冥寺 逸希

聖澤 聖

布を被った人物

創成軍

死創 幻

天鳳院 流姫

その3…地下激闘編

新組織同盟対天上、地下軍残党

瑠奈達を残し、厄介事から逃れるため地下に移動した零達。だがそこにも厄介事が残っていた。夢村の居るイオシスに謎の敵が攻めていると報があり、零は仕方なく銃を取る

新組織同盟

零 冬児

双葉 陽子

夢村 未来

土屋 尽太郎

雷 麗宣

天上、地下軍残党

操

斬馬？

天導 誘貴？

聖澤「以上よ ちよっとお話が長くなるけど、まあ気長に見て頂戴？では、まずは（地下激闘編）から見てね バクイ」

瑠璃「…私の出番があ…」

「イオシス」

零達が訪れていた街にサイノックスと言う魔物が現れ、夢村に振り回され戦う事となった零と双葉。だがあまりのサイズ差で苦戦は必死かと思われた

零「…連携で、潰す」

双葉「御意！」 忍法、蔦締め”！！」

まずはサイノックスの足を蔦を絡め、動けなくした。サイノックスはそれから逃れるため、抵抗している。その懐に零が飛び込む

零「サイズ差があつた所で、弱点が隠れてなきや意味がない…」 フリーズバレット”」

零はサイノックスの弱点とされる口の中に弾を撃ち込む。サイノックスは弱点を突かれもがいていた

零「…やはり火力不足か。覚悟はしていたが…」

双葉「私も加勢できれば…」

双葉は蔦を出している間は動けないようで、加勢出来なかった。だがそこに夢村が現れる

夢村「零君？弱点は口の中…でしたよね？」

零「ああ、口の中だが…」

夢村「なら話は早いかもね…」

すると夢村は全身に装着した爆弾を見せた。まるで人間爆弾である零「？自爆する気か」

夢村「まさか？…零君、氷柱を作って私を打ち上げて」

零「…分かった。」 アイスボール”」

そして夢村の足元から氷柱が現れ、夢村を打ち上げる。そしてサイノックスの顔に乗っかり…

夢村「私の土地、踏み荒らしてくれたお礼よ？存分に味わってねえ
」
サイノックスの口の中に次々爆弾を放り込み、地上に降りてきた。
そしてその爆弾が爆発するとサイノックスの顔が血飛沫と共に吹き
飛び、身体が倒れたのだった

夢村「ん〜っ、快感！」

零「……」

双葉「零さん、この人はこういう性格なんです。お許しを」

零「別に、気にしちやいない」

夢村「よし…おい野郎共！」

夢村の号令と共に、沢山の男衆が夢村の周りに集まった

零「…何をするつもりだ」

夢村「今日はいいつの肉で宴会をするよ！余すところ無く肉を剥いで、
腕を振るいな！」

男衆「オオオオッ」

そして男衆がサイノックスに群がり、肉を剥いでいく

夢村「ねえ、君たち？」

零「なんだ」

夢村「今日は私の部屋で泊まりなよ。私も上の状況知りたいしさ」

零「……」

双葉「ここはご厚意に肖るべきかと…私たちには行く宛も無いわけ
ですし…」

零「…世話になる」

夢村「よし決まり じゃあ、行くわよ！」

地下激闘編 63話：屍にならぬ者達？

「イオシス」

サイノックスとの戦いから2日、当てもない零達だが、騒がしい環境に耐えられなくなり、街を出ることとなった

零「…」

双葉「それでは夢村…」

夢村「もうちょっとゆっくりしてたら良かったのに…」

双葉「私たちも一応遊びで渡り歩いてるわけではない故…お許しく
ださい」

零「行くぞ」

そして零達は街を離れた

「最下層、連絡エレベーター前」

零「…さて、これからどうするか、か」

双葉「当てが無いのでは、どうしようもないのでは…」

零「…新組織に顔を出すか。あそこには土屋、雷が居たはずだ。退
屈は凌げるだろう」

双葉「た、退屈凌ぎ…。まあ、その意見には賛成だ」

零「では、そこに向かうとするか」

そして新組織に向かっていた…

「クラシックフィールド、連絡エレベーター前」

零「…やっと着いたか」

双葉「れ、零さん…まさか寝ずに行くとは…」

零「街を転々とするのが面倒だったただけだ。それにしても…」

双葉「血生臭い…これは何事だ？」

連絡エレベーターを降り、新組織がある階層に着いた零と双葉。だがそこは今までの静寂な環境は1つも残っていないかった。血が辺りに飛び散って赤く染まった大地。首が無い死体。それに群がる蛆。まるで廃墟だった

零「…随分キレイに首が落とされてるな」

双葉「…もしや今、新組織は危機では？」

零「さあな。俺は行きたくない」

双葉「零さん！あなたは味方を見捨てるのですか！」

零「味方も何も、あの時だけだ」

双葉「…人でなし」

そっぴい双葉だけが急ぎ組織に向かった

零「…なんだよ、くそっ…」

〓新組織、門前〓

新組織は既に戦闘が行われていた。片方は新組織軍、そしてもう片方は所属不明である。先陣には土屋が居て、味方を鼓舞している。土屋「新組織の兵であること、そして瑠璃姫の配下たる事を誇りに守れええい！」

双葉「…これはマズイ…すぐに救援を…」

だが双葉が相手の軍勢の最後方を見た瞬間、表情が無くなり、青ざめ動けなくなつた

双葉「…死んだ、はずでは…？」

双葉が見たのは、死んだ筈の斬馬、そして天導誘貴であつた

斬馬「地下に再び力で治める安寧をもたらす為、進めええっ！」

天導（天導有紀は聖澤になったため、天導誘貴は以下天導）「天上軍の再起の為…まずはここを抑えるよ。皆、奮起してね」

その二人の奮戦により、新組織軍は徐々に劣勢に立たされていった

双葉「…直ぐに救援を…」

双葉は急いで新組織に向かう…

土屋「ぐうう…我らの軍勢をもつてしても、敵わんか…」

新組織兵「も、申し上げます…我らの残存兵力は残り50パーセントを切りました。これ以上は持ちません！」

土屋「耐える！そちらに雷も行つていよう！なんとか協力して防ぐのだあつ！」

新組織兵「はつ！隊長、愛の巫女の加護があらんことを！」

そして兵は去る。土屋は大分傷つき、身体からは血が滲んでいた

土屋「…もはや、これまでか…」

零「諦めるのか、土屋」

すると後ろから放たれた銃弾が敵を貫いた。零が来たのだ

土屋「れ、零殿…！」

零「双葉は雷の援護に向かっている。…お前が死ねば兵は戦意を失い、皆殺しに遭う。死ぬなよ」

土屋「…当たり前じゃ！」

斬馬「…いやあ、久し振りだなあ、土屋…」

すると斬馬が二人の前に現れた

土屋「…！ざ、斬馬殿！」

斬馬「土屋…君も俺の配下だったんだ。今からでもいい、俺の元に帰ってこい。そしたらお前と雷の命は保証してやる」

土屋「…他の連中は」

斬馬「当たり前だ…死んでもらうよ」

零「…下衆が」

土屋「断る」

斬馬「…何？」

すると三人が武器を取る

土屋「私の命は既に瑠璃姫の元に預けた…だから、お主には遣えん」

零「悪いが、ここで死ぬ予定はない」

斬馬「…上等だ。お前らは俺の足元にも及ばないことを…教えてやるよあつ！」

そして斬馬は刀を手に零に飛び込む…

地下激闘編 64話：根比べ

「新組織、門前」

斬馬の刀が零に振り下ろされた。だがその零は氷の鏡で作られた幻で目の前に零が現れる

斬馬「：！」

零「”アイスブラスト”」

そして斬馬の胸元に弾を撃ち込む。斬馬はその衝撃で吹き飛ばされた
斬馬「うがつ！？」

零「：弱いな」

土屋「でも零殿、紙一重でしたぞ！」

零「ああ、あいつが本物なら殺られてた」

土屋「：：？」

零「なあ：？天導の皮を被った偽物」

すると天導は光に包まれ、現れたのは操だった

操「さすが、変装も役立たず、かな」

零「：見ない顔だな」

操「そりゃそうだよ、だって私：創成軍だもん」

土屋「創成軍：聞いたことが無いぞ」

操「ま、今戦ってるのは私が天導に変装して動かしたゴロツキだけ
どね」

そして操が指を鳴らすと、斬馬の姿が消えた。斬馬は操の力で生まれた幻影だったのだ

零「：また変わった力の持ち主で」

すると操は急に手を上にかざす。すると、零と土屋の頭上から輪が落ちてきて、二人の頭にはまった

零「？」

土屋「なんじゃ、この輪は？」

操「フフ…ちょっとしたプレゼントだよ？さあ…私を倒さなきゃ、この戦いは終わらないよ？」

零「言われなくても」

零が銃口を向け、発射しようとした瞬間だった。操が口元で

操「殺戮祭り」

そう呟いた瞬間、零に何かの力が働き、銃口が一瞬の内に土屋に向けられ、弾が放たれた。土屋は岩の壁を作り、それを阻む

土屋「れ、零殿！？敵はワシではないぞ！」

零「…ちつ、分かってるさ」

そしてまた銃口を向けるが、放つ瞬間にまた不思議な力が働き、土屋に銃弾が放たれる。土屋は必死にガードを固める

土屋「零殿！お主、まさかワシまで…」

零「…何故そつちに撃てない…？」

操「ウフフ…次は貴方ね、土屋さん？でも貴方じゃ私には傷はつけられなくてよ」

その言葉に逆上した土屋はハンマーを手に取り、操に突進する

土屋「ナメるなあ！」大地の咆哮”！」

だがまた操が口元で呟くと土屋は急に零の所に飛ばされ、頭上からハンマーを振り下ろす

零「…！！？」

零は間一髪よけるが、二人揃って驚きが隠せなかった。相手に向け
てる筈の攻撃が、何故か味方に放たれる…

零「…くっ」

土屋「零殿！？大丈夫か！」

零「この輪が邪魔くさいな」

そついい零は頭にはまった輪を取ろうとするが何故かはせなかった。そして土屋は頭を壁にぶつけ壊そうとしたが、それでも壊れなかった

操「アハハ、無駄無駄あ！貴方達じゃこのカラクリ分からないよ！」

零「…！」

土屋「消耗するのを待たれているのか…！」

操「そう！私は貴方達が私に対して力を使って、消耗するのを待っているの！たとえ私を倒せたとしても、私に時間をかけすぎたせいで組織が制圧される…私って天才！」

だがその”天才”と言う言葉を聞いた瞬間零は笑みを浮かべた

零「…天才、ね」

操「あら、勝算が無いから頭がおかしくなっちゃった？」

土屋「零殿…？」

零「だったらこうするまでだ！」

すると零は力を解放し、土屋に向け怒濤の攻撃を開始した

土屋「んわぁあっ！？な、何をする、零殿!？」

零「土屋：お前には悪いが倒れてもらう！」

その言葉が気に触ったのか、土屋もハンマーを取り、力を解放し地を割り、その時生まれた岩が零に次々飛んでいく

零「…！」

土屋「ワシは死ぬわけにはイカン！くたばるのはお主にせい！零殿！」

操「アハハハ！なんか仲間割れを始めちゃったよ〜」

だがその時、零の銃弾が操の顔の横をかすめた

操「…！！貴様っ…！」

零「天才はこの世には存在しない…そう言う馬鹿には必ず弱点があると知ってるんでな」

土屋「お主は集中せぬと力が使えぬ。要するに集中力が欠けた時は攻撃が通る」

操「…っ！だからなんだってのよ！私が力を使う限り、貴方達は争わなきゃならない…私に危害は加えられない！」

零「だったら根比べだ…俺らがくたばるのが先か、お前がへばるのが先か、な」

地下激闘編 65話：謎の少女、舞い降りる

「新組織、門前」

零「”アイススプレッド”」

土屋「”大地の怒声”！！」

新組織門前では未だに零、土屋、操の根比べが続いていた
操「…なんで、なんであんたらは笑ってられるのよ！！」

零「…さすがだな、土屋」

土屋「お主もな…零殿！」

零と土屋はむしろ楽しむような攻防を繰り広げていた

操「…もういい！私の力であんたらを殺す！」

すると操は零達の頭上の輪を消し、銃を取った

零「！！」

土屋「承知！！」

その時土屋がとっさに零の背後に回り、肩に手を置いた。そして零が銃を構える。その銃に力が集中し…

操「…！！」

零「これが俺たちの」

土屋「力じゃあ！！」

零&土屋「”アイスロツクブラスト・デイバイダー”！！」
放射状に放たれた力は操を飲み込んだ。操が倒れている場所に零が
もう一度銃口を向ける

操「…負けたよ…殺しな…」

零「言われずとも」

だが引き金を引いたその時、謎の少女が間に入り、銃弾がかき消された。操はその間に逃げる

零「…まてっ！」

????「ねーねー…おにーちゃん」

零「!?!?くそ…なんだよ!」

その少女に呼び止められてるうちに姿が見えなくなった

土屋「この娘、もしか創成軍の将…」

零「なら殺すか」

零は銃口を向けるも

???「おにーちゃん、それなあに?」

少女は銃に興味深々で、零と土屋は戦意が削がれた

土屋「…なあ、娘」

???「なあに…おじちゃん?」

土屋「お前の名はなんと言っ?」

???「あたしの名前は明源 愛(めいげん あい。以下明源)っ

て言っの。おじちゃんとおにいちゃんは?」

土屋「おじちゃんは土屋と申す」

零「俺は零…零冬児」

明源「土屋おじちゃんと零おにーちゃんだね!」

零「お前は…」

その時明源は零に抱きつき

明源「布を被ったおにーちゃん知らない?」

零「わっ…ばか!?!」

明源「知らない?」

土屋「はっはっは…愉快だな、零よ!」

零「なっ…!」

明源「おにーちゃん…」

零「…とにかく、施設に入れてくれ、ここじゃ話にならない」

土屋「分かった」

新組織門前での戦いは零達の救援があり、新組織軍が勝利を納めた。だが明源と言う少女、創成軍…謎はまだまだ山積みであった

地下激闘編 66話：不思議な面子

「新組織、食堂」

明源「うわゝ…おいしそゝ」

夢村「今日は腕にヨリをかけたから、皆一杯食べてね」

雷「うわーいつ！ご飯ご飯」

創成軍との戦いを終えた戦士達が食堂にて昼食となった。そこには

雷、双葉、零、土屋、明源、そして何故か調理士として夢村が居た

零「…お前、なんでここに」

夢村「あら、貴方達の後ろについて行つてたの、気付かなかつた？」

零「…知らねえよ」

明源「夢村おねーちゃん、ご飯スツゴクおいしーよ！」

夢村「あらあら、ありがとね」

双葉「しかし…零、この子は誰だ？」

零「急に戦場に現れた子だ。行き場もないみたいだし…」

話している零の頭をなで始める土屋

土屋「零殿にもなついとるからのお！がっはっはっは！」

零「…やかましい」

明源「零おにーちゃん、一緒に食べよー！」

後ろから明源が来て、零に抱きつく

雷「ひゅーっ モテてるじゃん」

双葉「微笑ましい…」

零「…言ってる」

そして他愛の無い時間が過ぎ、話は今日の戦いの話になった

土屋「…創成軍、か」

零「正直地下の連中の情報だけじゃ少なすぎるな」

双葉「行方不明の烈火と天鳳院、最下層に現れたサイノックス、操
と言う少女、そして布を被った男を探す明源…謎が多いな」

雷「地上でも創成軍の襲撃を受けてるのかな…？」

夢村「ま、あの人は柔じゃないから、簡単には死なないと思うけれど…」

明源「??？あの人達ってだーれ？」

明源は零の太ももに乗っかかりながら、飴を舐めてる。完全に零になつたようだ

零「…」

土屋「取り合えずまずはこの子をどうするか、だな」

夢村「愛ちゃん？」

明源「なあに？」

夢村「愛ちゃんは、その布を被った男を探してるのよね？」

明源「そーだよ、愛は、布を被ったおにーちゃんを探してるの!」

夢村「そのお兄ちゃんって、どんな人なの？」

夢村が子供の視点で明源と話す。随分慣れているようだ

明源「おにーちゃんは強くてー」

夢村「うんうん」

明源「おにーちゃんはおっきくてー」

双葉「ほお…」

明源「何も覚えてないって言ってたよ!」

雷「何も覚えてない?どーいう事だろう…」

夢村「後は何か無いの?」

明源「ん…無いと思う!」

零は新しい飴を明源に手渡す

夢村「愛ちゃんにはお父さん、お母さんはいないの?」

明源「ん…いるよ?いるけど、最近居なくなっちゃった!」

土屋「最近居なくなつた?明源殿は何処の生まれなのだ?」

明源「お空の国からだよ?」

土屋& amp; 雷「何いいつ!?!」

その言葉に土屋と雷が反応する。お空の国=天上国と判断したのだ
夢村「雷、貴女はこの子の事は知らなかったの?」

雷「確かに天上は狭かったけど、こんな小さな子は居なかったと思
う……」
双葉「とにかく、これからどうする？この子は行き場が無い……誰か
が引き取らざるを得ない」

零「だが、さつき現れた操って女、創成軍と名乗っていた。となる
と狙いが何かある筈だ。こんな小さな子を連れていく訳には行かな
い」

雷「私と土屋が地下に残らなきゃダメだから、そうしたいんだけど
……」

雷が言葉を濁す。その原因は雷が目で訴えていた

夢村「……ああ、なるほど」

すると夢村は明源に提案をする

夢村「愛ちゃん？」

明源「なに？夢村おねーちゃん」

夢村「愛ちゃんは、零お兄ちゃんが大好きなのよね？」

明源「うん、大好きだよっ！！」

夢村「零お兄ちゃんがどうしてもやらなきゃいけない事があって、
遠いところに行かなきゃいけなくなったら、付いてくる？」

明源「うん！」

零「……??」

夢村「じゃあ話が早いじゃない……零君、きみが愛ちゃんを守りな
がら、私たちと一緒にあの操って女を追いましょ？」

確かに筋は通った提案ではあったが、零は納得出来ないようだった
零「！バカ！お前が勝手に決めるところじゃねえし、第一あの女を
追うことだって認めちゃ……」

夢村「あら、なら追わないの？残念ねえ……愛ちゃん？」

明源「零おねーちゃん、愛の事嫌い？」

明源が目を涙で滲ませながら零を見つめる。これにさすがに観念し
たのか、零はその用件を飲むことにした。

そして三日後。新組織に土屋、雷を残し、夢村、双葉、零、明源の
四人は再び旅へ出るのだった…

地下激闘編 67話：氷の翼

「ネイチャーガーデン・階層エレベーター前」

明源「おにーちゃんおにーちゃん！早くこつちこつち！」

零「…分かったから、少し待ってるっ」

操と言う女と布を被った男の搜索の為また旅に出ることになった零、
双葉、夢村、明源の一行は、夢村の直感と明源の好奇心により第1
階層で情報収集を行うことになった

明源「おにーちゃん、この花なあに？」

零「…知らん」

明源「へえ、おにーちゃんでも知らないんだから、誰も分からないよ
いよねー！」

零「…なんでそうなる」

双葉「…本当に微笑ましいですね」

夢村「まるで本当の兄妹みたいね 零君はツンデレだし、いい感じ

の雰囲気ね」

零「…それは、慰めてるつもりか？」

夢村「いいえ？ほほえましく思ってるのよ」

零「…くそっ」

そしてこの様な雑談をしながら、この階層の町へ向かう…

「地下の始まり、グラフィアスト」

零「…そうか」

双葉「そつちはどうなの？零さん」

零「こつちもその様な人物は見掛けてないそうだし」

零達はこの町で布を被った人、操と言う女の手がかりを得ようとしたが、この町にはそれらしき人物が来た事は無く、この町を離れよ

うとしていた

夢村「やはり手がかり無しじゃ簡単には見つからないわよね…」
零「当然と言えば当然だな」

双葉「でも変ですよ、こちらを通らなきゃ、地上へは出られない。
とすると下にいる可能性しか残されませんが…」

零「さあ。俺らには分からない技術でも持つてるんじゃないのか」
夢村「まあ、相手の情報が無いんだから…」

そっぴいかけた時、何か飛んできて、後ろの建物が吹き飛んだ
双葉「！！」

民「さ、さ、サイノックスだああ！！」

零「…まだ生きていやがったのか」

双葉「迎撃します！このまま野放しには…」

夢村「あたしはパス」

すると夢村が急に郊外に歩き出した

零「…？」

明源「夢村おねーちゃん、どこいくの？」

夢村「ちよつと用事があってね…すぐ済ませてくるから、いい子に

しててね？」

明源「うん！」

双葉「夢村…！」

夢村「じゃ、そういう訳だから、よろしく」

そっぴいその場を立ち去ってしまった

双葉「この場を置いて逃げるか…！」

零「さてな。それより…」

サイノックスはもうすぐそこまで来ていた。こちらに気付いている
ようだ

双葉「やるしかなさそうですね！」

零「…仕方ない」

だがその時、銃を取ろうとした零の手を明源が握った。明源の手の
甲には”醒”の字が浮かんでいた

零「！”醒”…」

明源？「…凍てつき銃撃主よ。お主に力を貸す…覚醒せよ！」

そういうと明源は光に包まれ、零を包み込んだ

零「！！！」

双葉「零さん！？」

そして光の中から現れたのは、氷の翼を身に纏った零だった。瞳の色も、髪の色も蒼くなっている

零「…これは…」

双葉「零さん！やれるのか？」

零「…ああ」

地下激闘編 68話：DANCING！

「ネイチャーガーデン」

夢村「私の目をごまかせると思って？…操さん」

夢村は零達を残し、町の郊外へ足を運んだ。すると目の前の時空が歪み、操が現れた

操「あら、ばれてたのか？中々見る目あるね」

夢村「あら、わざわざ私に気付かせるような動きをしてたように見えるわよ」

操「私にはそんな器用な真似は出来ないよ…で、殺される覚悟は？」

すると操は銃を取る。その動きを見て夢村も懐から短剣を持ち出した

夢村「…私と殺りあう気？中々いい度胸じゃない」

すると夢村は力を解放する。手の甲には”酷”の字だった

操「??酷？」

夢村「…来なよ」

手招きする夢に誘われ、操は銃を放つ。だがその銃弾は夢村の前で止まった

夢村「…クスクス」

操「…何の力？」

夢村「さあ？貴方にはどうしようもないと思うわよ？」

操「…言ってくれるね!!」

そして沢山銃弾を撃つが、全部夢村の前で止まる。そして夢村が：

夢村「…墮」

ウインクした瞬間、止まっていた銃弾は全て方向を逆に進み、操に当たった

操「!!!?きやあぁっ!!」

夢村「ウフフ…悪いわね…年期が違うのよ…?」

操「…ふざけんなくそババア!」

操は剣を持ち出し斬りかかる

夢村「残念ね…気付かないのかしら…私の力に…」

すると夢村は溜め息を1つはく。そして操の剣が夢村に突き刺さる

操「これで…あんたも終わりっ…!」

だが夢村は顔色1つ変えなかった。それに操が青ざめる

操「…っ!?!?」

夢村「さ・よ・う・な・ら」

すると夢村は操の胸元に手を当てる。そしてその手が光を帯び…

操「…そんな…」

夢村「DANCING NIGHT BLAST」!

その光が操を吹き飛ばした。操は地面に叩きつけられ吐血している

操「…げほっ…ごほっ!」

夢村「ウフフ…」

そこに夢村が近づき、操の首を掴み締め上げる

操「…あ…ああ…!」

夢村「フフフ…」

だがそこに何者かによる弓矢が放たれ、夢村の肩に刺さり、操を手

放した。その間に操は時空の中に消えた

夢村「…くっ…誰!？」

そこに現れたのは…瑠璃によく似た人物だった。

???「…貴女は…違う」

夢村「…うっ…」

その矢に毒が塗ってあったらしく、夢村の視界が歪んでいく

夢村「…ちっ…目の前が…歪んで…」

???「…休みなさい…」

そして夢村は倒れた

夢村「…く…くそ…、零、君達…気をつけ…」

そして夢村は気を失ってしまった

「……？」
「……思い出せない……もう片方の私……早く……」
そしてその場からその女は消えた……

地下激闘編最終話・69話：共同戦線へ向け

「グラフィアスト」

「オオオオンッ！！」

零「…ちっ」

双葉「うわわわっ！？」

グラフィアストではサイノックスと零、双葉が交戦中だったが、最下層での戦いと違い相手が強くなっていて、劣勢に立たされていた

双葉「うわああっ！！」

零「ぐうっ！！」

瓦礫が零、双葉に容赦無く襲いかかる。二人は少しずつ傷付き始めている

双葉「零さん！その翼はなんの為にあるんですか！」

双葉の言うことはもっともだった。明源が零の力を解放させたとはいえ、零自身がその力を使えてなかった為無意味になっていたのだ

零「…まずいか…」

双葉「…忍法・焰鎖」！！

ただ二人共諦めてはいないようで、サイノックスに力をぶつけていた。だが相手には効かず、振り抜かれた腕によって吹き飛ばされた

双葉「うあああっ！！」

零「！双葉っ！」

「ガオオオオン！」

零「…っ！！明源、頼む！頼むから…力を貸せよ！」

すると零の手の甲に”明”の字が浮かび上がり、零に明源が語りかけた

明源「どうした、氷の銃士」

零「どうしたって…どう使えばいいんだよ、この力はよ」

明源「それはお主にしか分からぬであろう？」

零「馬鹿にしてんのか？俺の力は確かに氷だが、お前が憑依してから、力を感じない」

明源「…ふむ…そうか…ならもう一人の”私”にやってもらうか」
すると明源は目を閉じる。そして次に目を開けると、いつも通りの明源になっていた

明源「ほえ？零おにーちゃん？」

零「ああ。だから、なんとかしてこの現状を打破したい兄ちゃんに、力を貸せ」

明源「力を貸す？…どーやって？」

そう話してる最中に、サイノックスは零に向けて突進してくる

零「…ちっ、どうしようもないか」

そして銃を構えてサイノックスに相對したか、その時だった

明源「おにーちゃん、こう唱えて。”明の巫女の加護の元、貴殿に放たん”」

零「??」明の巫女の加護の元、貴殿に放たん”…」

明源「撃つて!!」

そして零が引き金を引くと、銃から絶大な威力の光線が放たれ、サイノックスを微塵に砕いたのだ

零「…!!」

零が放った力はサイノックスを消しただけではなく、周りにあった廃墟も跡形もなく消し飛ばした

零「…これは…」

明源「うにゃ…疲れた」

明源は力を抑え、二人は分離した。すると零の翼も消えた

零「…双葉、無事か？」

瓦礫の山から双葉も出てくる

双葉「…いてて…」

零「その様子だと、無事みたいだな？」

双葉「…それにしても、凄い力だな」

双葉も零が放った力の後に残った残骸を見て、驚きを隠せないでいた

零「…こいつ…」

明源「おにーちゃん、愛、お腹空いたあ！」

零「その前に、夢村を追うぞ。飯を作ってくれるのはあいつだからな」

明源「わかったあ！夢村おねーちゃんを探す〜！！」

零「…まるで様子が違ったが…こいつ、何者だ…」

そして夢村が行った道を進んでいくと…

「ネイチャーガーデン郊外」

明源「あれ、おねーちゃん？」

明源が指を指した先には、肩に矢が刺さったままの夢村がいた

零「！！夢村っ！」

双葉「夢村!？」

急いで三人が駆け寄る

夢村「…う…」

矢に刺さっていた毒は殺人能力がなかったようで、夢村も気付いたようだ

零「大丈夫か」

夢村「いたた…不覚だったね…」

双葉「不覚？ここで何があったの？」

夢村「…それは、今分かるよ」

すると目の前の時空が歪み、その歪みからまた瑠璃に似た白いドレスを着た女が現れた

夢村「…何しに戻ってきたのかしら？」

「…その娘」

明源「ほえ？」

その女は明源に語り始めた

「…貴女は”明”の持ち主か」

明源「めい？名前は愛だよ？」

「？？？」だが、まだ力は眠ったままの様だな…それに一人では…

明源「愛、一人じゃないもん！おにーちゃんとかも一緒だもん！」

「？？？」

女は零、双葉、夢村を見る

「？？？」こやつらはあくまで媒体の力だ。世界を救うには明、闇、聖、愛の四つが必要だ」

零「…世界を救う？」

「？？？」それまでになんとかなるか…貴殿方を見極めさせてもらおう
するとその女は上にてをかざす。すると夢村の周りが光に包まれ、
傷が癒えたのだった

夢村「一回殺されかけて、今癒されて…」

「？？？」では、再び見えよう…」

そしてその女は姿を消した

双葉「…傷は？」

夢村「むしろ快調」

零「…あの女…」

明源「おにーちゃん！ん！！」

そこに明源が零に飛び付き、駄々をこねる

明源「愛、お腹空いたのーっ！！」

零「あ、ああ、そうだったな。…悪い、夢村」

夢村「分かったわ、じゃあ一回グラファストで宿をとりましょうか
」

明源「うわーいっ ご飯っ」

そして四人はグラファストの宿に向かう。すると…

「グラファスト、宿屋」

零「…呼ばれてる？」

宿主「はい、ここへのやです。では…」

双葉「…誰だろうね？」

明源「おにーちゃん、早く中入る」

そして中に入ると…

土屋「お、来たな？」

雷「よーこそー」

そこではパーティーの準備が出来ていた

零「な、なんだよこれ…」

明源「うにゃー ごちそーだーっ!!」

双葉「事情を話してもらえますか？」

土屋「事情も何も、お前達が一番良く知っていよう？」

夢村「…ははあ そういうこと」

零「…？」

そして六人でご飯を食べる事になった。この食事はサイノックスを討伐してくれた、ということでのお礼だったのだ。そして食事が終わり…

土屋「…でだ、零殿。我らと共に地上へ上がらぬか？」

零「上へか？」

夢村「貴殿方の目的は操の捕縛かしら？」

土屋「それもあるが…」

雷「地下の統治を大門さんがやってくれることになったんだ」

双葉「あの人、やっと顔を出したか？」

土屋「もともと大門殿は地上へ身を置いていたらしいのだが、現在地上では創成軍との戦争が始まったようだな、戦力の増加を求めているそうだ」

夢村「そこで私たちを呼び寄せて、形勢を傾けようって寸法ね？」

土屋「さすが、察しが早いおう！」

零「…」

明源「？どつたの、おにーちゃん？」

零は戸惑っていた。確かに宿命的に地上に戻らねば、と頭では思っ
て居るのだが、戦いに関わりたくないのが本心だったからだ

夢村「…ふふくん？」

その零を見た夢村が笑い出す

零「…何が可笑しい」

夢村「別にいい？　じゃ、とにかく土屋さん？私と双葉、零君、愛ちゃん、と四人、地上へ向かうわよ」

土屋「おお！ありがたい！」

零「なっ！？」

またも夢村が勝手に決めてしまったのだ

零「まだ誰も行くとは…」

双葉「私も参ります」

明源「愛もちじょーって世界もつかいちゃんと見てみたい！」

夢村「…反対なの？」

零「…うう…」

夢村「じゃ、決まりね」

そしてこの後、零、双葉、夢村、土屋、雷、明源は地上へ向けて出発することになった…

|| 地下激闘編　f i n ||

零「…読者、ここまでの読破お疲れ」

明源「ちかげきとーへん、どーだった？おもしろかったあ？」

零「…平仮名ばっかだな。まあいいが」

明源「じゃあおにーちゃん、次幕予告お願いね」

零「次幕は（地上防衛線編）となる。メインは地上軍対創成軍だ。

灼沢達の前に現れた聖澤 聖という女。聖澤は布を被った男を探すというが、真意は何なのか。そして地上の戦力が手薄なのを知っている死創は、地上への攻勢をかける。果たして灼沢達は地上を守り通せるのか…」

明源「まーねー、私たちも合流するから、多分大丈夫だよ」

零「まあ…読者よ、大変だと思っが、まあ頑張れ」

明源「じゃあちじょーの皆、頑張ってねー」

灼沢「じゃあ皆！次話から始まる新話の話をこっご期待！」

日向「瑠奈達が居ない分、私たちが頑張るからね！！」

宝冥寺「フフフ…期待しててね」

聖澤「私も忘れたら…おしおきよ？」

泉野「…じゃ」

キャラ詳細紹介の扉？

どうも、作者です

よく考えると、キャラの詳細が語られてないことに気付いたので、紹介していきます

地上チーム

烈火^{れつか} 瑠奈^{るな}

現在19歳 179cm、70kg

肩書き…憤怒の炎

属性…炎、闇

能力者ランク…S

武器…刀

代表技…崩壊花火、業火栓、天地人

日向^{ひなたかれん} 香恋

現在19歳 165cm、??kg

肩書き…明朗の日光

属性…日

能力者ランク…D

武器…槍

代表技…ヒロインバズーカ、シャインびーむ、シャイニングフェニックス

泉野^{いずみのやえ} 弥枝

現在19歳 163cm、??kg

肩書き…知識の水師

属性…水、召

能力者ランク：C

武器：杖

代表技：バブルバブ、セルシウス、ウォーターウェーブ

宝冥寺 ほみやうじ 逸季 いづせき

現在24歳 166cm、??kg

肩書き：微笑みの死霊使い

属性：死霊

能力者ランク：A

武器：本、素手、死霊

代表技：死霊殴打、自縛千墮、封印十字弾

キャラ詳細紹介の扉？

キャラ詳細紹介

地下チーム

光 ひかりるり
瑠璃

現在18歳 157cm、??kg

肩書き：愛の巫女

属性：光、創

能力者ランク：S

武器：無し

代表技：断罪肅清槍、貴方を破壊します、希望を力に

重山 しげやま
飛鳥 あすか

現在20歳 172cm、52kg

肩書き：剛力の守護者

属性：無

能力者ランク：A

武器：手袋

代表技：崩落撃、剛力圧壊撃、鉄震撃

土屋 つちや
尽太郎 じんたろう

現在56歳 185cm、95kg

肩書き：怒れる大地

属性：土

能力者ランク：B

武器：斧

代表技：ガイアインパクト、怒れる一撃、漢チャージ

零 れい
冬児 ふゆご 現在19歳 173cm、65kg

肩書き：冷徹の氷

属性…氷

能力者ランク…B

武器…銃

代表技…アイスブラスト、アイススプレッド、ネイチャーブラスト
ディバイダー

キャラ詳細紹介の扉？

キャラ紹介

地下チーム？

雷 らい麗宣 らいてん

現在16歳 149cm、??kg

肩書き：快活の雷

属性：雷、獣

能力者ランク：C

代表技：雷震烈破、雷・斬、雷神迫激

夢村 ゆめむらみく 未来

現在20歳 165cm、39kg

肩書き：妖艶の魔女

属性：酷

能力者ランク：A

代表技：墮、墜、縛

双葉 ふたば 陽子 ようこ

現在20歳 159cm、??kg

肩書き：自然の忍

属性：木

能力者ランク：B

代表技：ウツディカッター、アースフォール、紅葉狩り

灼沢 しやくたく 紗菜 さな

現在17歳 157cm、??kg

肩書き：爆炎姫

属性：火

能力者ランク：C

代表技：烈火尖、守護爆炎陣、灼沢流ビツクバン

属性：土

性別：男

年齢：55歳

キャラ設定は本編中に随時紹介します。

キャラ詳細紹介の扉？

キャラ詳細紹介続き

天上チーム

風野 真人 かぜのまこと

現在19歳 173cm、75kg

肩書き：自由なる風貴公子

属性：風

能力者ランク：A

武器：拳、木刀

代表技：杏の風・竜巻、由風掌烈破、亜風間操作

天鳳院 琉希 てんほうついんるき

現在？？歳 149cm、35kg

肩書き：裁きの女神

属性：天、獣

能力者ランク：??

武器：獣化により変化

代表技：獣化

聖澤 聖 せいざわひつじ 以前は天導 有紀

現在19歳 158cm、??kg

肩書き：悲運の巫女

属性：聖

能力者ランク：A

武器：無し

代表技：シャイン・ザ・ライティング、光刃陣、光大砲

(敵の詳細はストーリーを進めた後紹介します)

地上防衛線編7 1話：生まれ変わった聖澤の目的

(今の話から地上防衛線編となります)

「暁学園、正門」

聖澤「…私の名は、聖澤 聖よ」

灼沢「…聖澤」

地上軍と創成軍が争い、その場を沈静化させた布を被った人の出現（地下激闘編では男であることが分かっているが、地上のメンバーはそれを知らないのも男とは呼ばない）。そしてその人の命を狙ったのがかつて天上との戦いで命を落とした天導であつたが、天導は既に名前を変えていた

聖澤「死んでたんだから、驚くのも無理ないわよねえ…」

日向「生き返つたつて事だよね…」

聖澤「まあ、そういう事になるわね。とにかく、今私に貴女方に対する敵意は無いわ。…物騒なものは閉まってくださる？」

天導改め聖澤は元は天上軍の為、灼沢達は敵意むき出しに武器を構えていたのだった

宝冥寺「あら失礼 てつきり私の生徒に手を出すのかと…」

聖澤「貴女のような人が相手を見極められないとは思えないけど？」

宝冥寺「…それもそうね」

灼沢「で、何の用事？…聖澤さん」

聖澤「そうね…ここで話すのも何だから、中に入らない？」

日向「そ、それも罫とかじゃ…」

泉野「いや、それはない」

その会話に泉野が割って入る

日向「弥枝！何でそんなことが言えるのさ！」

泉野「…簡単な事だよ。私たちを罫をはめるような回りくどい事を

するくらいなら、今ここで私たちを殺す筈。…力に差があるからね」
灼沢「…っ」
聖澤「そちらの娘さんは話が早いわね？…体育館に来てくれる？」
そして全員で体育館に向かう…

〓 暁学園、体育館 〓

聖澤「…さて、皆さんでまったりとしながら話をするんだけど…」
灼沢& amp・日向「…」

体育館に大きめのテーブルがあり、そこにお菓子と飲み物が置かれたが、灼沢と日向はまだ警戒しているようだ

宝冥寺「あら、二人共ダイエットかしら？太ってないのに、勿体無いから食べちゃっわよ？」

そこに宝冥寺がまずそこにあるお菓子を1つ口に放り込む

日向「せ、先生！？大丈夫なの！？」

聖澤「随分疑われてるのね…私悲しいわあ」

日向「当たり前でしょ！だって貴女は天…」

宝冥寺「聖澤さん、とっても甘くておいしいお菓子ですねえ」

聖澤「そう？用意した甲斐があったわね」

灼沢「？用意…？」

聖澤「…さすがは烈火の義妹、気付いたようね」

灼沢の言葉に反応し、聖澤は話を始めた

聖澤「天上での戦いで私は死んだ筈だった。そこで起きたことから話していこうかしらね…」

地上防衛線編72話…奇襲

「暁学園、体育館」

夢村「…私は確かにあの戦いで烈火に胸を貫かれて、絶命した筈だった。でも、ジレルティが崩壊する直前に兄さんが…」

「回想・天上の都、ジレルティ」

有紀「…ごめん…にい…さ…」

誘貴「俺に対して謝るより、有紀にして欲しいことがある」

有紀「…?」

誘貴「生きて欲しい。生きて、この世の中を良くして欲しい。…光や、烈火を見て、あいつらの生きる世界まで壊されるのは正直心苦しい。確かに人間は愚かだが、あいつらならきつと…」

有紀「受け入れてくれ…る?」

誘貴「ああ。だから生きる」

有紀「生きるって言ったって…私は…」

誘貴「俺の力を、お前に移す。俺は死ぬが、これですつと有紀と一緒だ」

有紀「…でも…私は…烈火を…」

誘貴「俺の力とお前の力…合わさればあいつも生かせる筈だ。…光も居るしな」

有紀「…」

誘貴「烈火は生きてる。間違いない」

有紀「!?!?…」

誘貴「烈火の力は炎だけじゃ無い…この意味分かるか?」

有紀「…え…」

誘貴「…もう持たない。後は…頼む」
そして映像が切れ、有紀が光に包まれ、傷が全て癒えた
有紀「…まさか、烈火は…」

〓 暁学園、体育館 〓

灼沢「…お兄ちゃんは、生きてる…」

聖澤「そうだね。兄さんがそういつてたからね」

日向「でも瑠奈は何処に…？」

聖澤「それは…推論だけど、聞く？」

宝冥寺「手がかりが無い以上、聞くしかないと思うわね。…話してくれるかしら？」

聖澤「…それには、明源と言う少女が鍵を握るの」

灼沢「明源…」

聖澤「その少女は烈火の能力を引き出す鍵なの。その子と明源は一緒にいる筈なんだけど…」

灼沢「何故そんなことが言える？」

聖澤「明源は鍵って言ったでしょ？ 鍵は扉を開けるためにあるんだから」

灼沢「…ふ〜ん」

聖澤「だからまずは明源を探すのを手伝ってくれるかしら？」

その時…体育館の壁が壊れ、壁の向こうから現れたのは、先程聖澤と戦っていた布を被った人だった

???「…」

灼沢「さっきの…！」

聖澤「あら？私の虜になって舞い戻ってきたの？私と踊りたいのかしら？」

すると聖澤と布の人が戦い始めた。両者素手での戦いとなる
???「…！」

聖澤「そんな布なんて被っちゃって…暑苦しいから脱いだら？」

聖澤は布に手をかけようとしますが、相手はいやがり、聖澤と距離を取った

「????」

聖澤「いきなり殴りかかってくるからつい反応しちゃったわ、ついでね」

日向「嘘だ…絶対…」

宝冥寺「あら…聖澤さん？後ろ」

聖澤「？」

聖澤が振り向くと、相手が力を放っていた。その力はとてもドス黒いオーラをまとっていた

日向「ひっ…」

灼沢「こ、この…威圧感…」

あまりの威圧感に空気が震えるが、聖澤と宝冥寺は動じて無かった
「????」

聖澤「…凄い力ね…」

宝冥寺「確かに…でも…今の貴女なら問題ないのではなくて？」

聖澤「そうね…じゃ、私の力、披露しようかしら」

聖澤が力を解き放つ。眩い光に包まれ、瑠璃と同じ翼が映えた。手の甲には”聖”の文字が浮かぶ

聖澤「さあ行くわよ、貴方」

そして光で産み出した剣を右手に持ち、相手に突っ込む。相手も禍々しい力で作り出した黒い鎌を持ち、聖澤に突進する。だが、まもなく…

聖澤「”光刃陣”」

聖澤が相手の横を通りすぎると、相手が光の壁に包まれ、光の線が相手を貫いた。相手の布が血で滲み、その場に倒れる

灼沢「…一瞬…」

日向「すっ…」

聖澤「さて、お顔を拝見しようかしら？」

そついい布に手をかけたその時だった。黒い十字架が上から現れ、

聖澤の胸元に突き刺さった

聖澤「…！ガハツ…！」

布の人はやられてはいなかった様で、その場に立ち上がり、その場を立ち去った。聖澤に刺さった十字架はその人が立ち去った瞬間消え、聖澤は血を吐きながら倒れた…

聖澤「…中々…やる…」

地上防衛線編 7 3話：第2波

「暁学園、体育館」

灼沢「！！聖澤さんっ！」

聖澤が敵の凶刃に倒れ、皆が聖澤の周りにかけよるが…

聖澤「…」ヒールフェザー」

聖澤が力を使うと沢山の羽根が舞い上がり、聖澤の傷が塞がっていった

日向「ほへー…すごいね！」

聖澤「私としたことが…不覚でしたね」

灼沢「倒したと思ってたのに、平然と立ち上がった…相手も只者じゃないね」

聖澤「私の力、光さんの力と相反する力、闇…私にはそう感じられた」

宝冥寺「闇の能力者で心当たりのある人が一人、私たちの中に居るわね…？」

日向「闇本 伶って奴？でもあいつは確か瑠璃ちゃんに…」

聖澤「そう、闇本は瑠璃の一撃で消滅した筈なの」

灼沢「聖澤さんと同じで復活したって線は…？」

聖澤「薄いわね。光さんの一撃は強力で、尚且つ相手の弱点だったから…」

灼沢「となると別人…？」

宝冥寺「まあ、今そんな事考えても仕方がないのではないかしら？」

聖澤「と、言うこと？」

宝冥寺「当人は立ち去った。そして聖澤さんに食らわせた一撃も絶命を狙う一撃じゃなかった…私にはそう見えたの」

灼沢「でも私たちを襲った、これは紛れもない事実じゃないですか

「？」

宝冥寺「でも地上軍と創成軍との争いの際には創成軍を攻撃した…これは説明がつかしら？」

日向「でもそれなら私たちを攻撃した意図も分からないよ？」

宝冥寺「聖澤さん？貴女、何か知っているのではなくて？」

聖澤「…私は知らないわ。兄さんなら何か知ってる口ぶりだったけど…ね」

宝冥寺「それに、第一私たちを狙う意味は今のところ無いと思うわよ？だってまだ何も行動を起こしてないんだもの」

聖澤「…確かにそうですね」

宝冥寺「とりあえず今日は帰りましょう？また明日、ここで会うと言うことでよろしいかしら？」

灼沢「うん、分かった！」

そして翌日、灼沢達四人が再び暁学園に集まった

〓 暁学園、体育館 〓

日向「皆、おっはよー！！」

聖澤「相変わらず日向さんは元気ね？」

日向「むっ、なんか含んだ言い方だね！なんかあったの？」

聖澤「…あら、外の状況見て気付かなかった？」

日向「外？」

灼沢「実は…今日、創成軍の宣戦布告があつて…」

日向「宣戦布告??」

宝冥寺「…巫女を出せ」つてのが要望らしいのだけれど…」

聖澤「巫女といえば多分光さんの事。だけど今この場に光さんは居ない。となると…」

灼沢「多分村を焼いても探しに来る」

日向「！それは止めなきゃ！」

聖澤「だけど多勢に無勢。正直私たちだけじゃ勝ち目がないわ」

日向「だつたら地下の人たちに…！」

宝冥寺「地下でも襲撃があつたみたいで、あちらも自分の所でいっぱいみたいよ？」

日向「…だつたらどうするのか」

聖澤「なんとか重山さん、風野さんが帰ってきてくれれば…」

灼沢「でも今あの人達の行方は分からない」

日向「じゃあ黙ってやられたらいいの!？」

聖澤「まあ落ち着きなさいよ、手が無い訳じゃない…居るんでしょ？」

するとステージ袖から恥ずかしそうに女の子が出てきた

???「…あ、あの…その…」

聖澤「貴女も私たちと同じ能力者、大丈夫よ？」

???「…み、皆さん…同じ…？」

灼沢「聖澤さん?彼女は…」

聖澤「紹介するわね?彼女は…」

???「有音…渚…(ありねなぎさ。以下有音)19歳…」

聖澤「あら?ちゃんと話せるじゃない」

有音「う…うん」

灼沢& amp; 日向「有音…？」

地上防衛線編74話…5対！？唄え、激熱の歌パワー！！

〓 暁学園、体育館 〓

有音「ど、どうぞ…よろしく…」

灼沢「よろしくなのは良いけど…」

日向「貴女、武器は？」

有音「…こ、これ…です」

すると持っていた鞆の中からギターを取り出した

灼沢「こ…これは…」

日向「ギター…？これで殴るの？」

聖澤「いや…違うわよ？説明するより、実際に見てもらった方が早いわね…」

すると一旦席をはずした宝冥寺が戻ってきた

宝冥寺「あら皆、揃ったようね？」

灼沢「宝冥寺さん、何か…？」

宝冥寺「来ますよ、相手方が。その数は計り知れないですけどね」

聖澤「…いよいよね」

宝冥寺「相手はやはり愛の巫女の誘拐が目的みたい。その為に町を破壊するみたい」

そして皆が武器を取る

日向「そんなことさせない。絶対に…！」

有音「…が、頑張る…」

聖澤「じゃあ、出ようかしら。私たちの…未来のために」

〓 暁学園、正門 〓

外に出ると、既に町は炎が上がっていた。各地から怒声が聞こえる
聖澤「やっぱり不利ね。数が違いすぎる」

日向「でも私たちが諦めたらいいよ終わりじゃない？」

灼沢「そう。お兄ちゃんとかの帰る場所が懸かってる」

宝冥寺「若い子の未来を守るのが、年長者の勤めだからね」

有音「じ、じゃあ…聖…やっていい？」

聖澤「うん、いいわよ…有音…貴女の力、見せて！」

そして他の四人が見守る中、有音がギターを手に取った。そしてそのギターを右腕に装着した。すると…片手のみでギターを鳴らし始めた

有音「インパクト・ハート」！

そして歌い始めるのだった。すると…

有音「…私の中に…燃えたぎる炎」

灼沢「…え…？」

目の前から敵の波が押し寄せていたのだが、相手が苦しみだしたのだ兵「おおああつ！」

さらに灼沢達は急に力が溢れだした

灼沢「…これは…力がみなぎる…！」

聖澤「歌パワー…能力に似てるけど、違うもの。それが彼女の力」

有音「…私の心よ、貴女に…響けー！！」

そして弦を思いきり弾いた瞬間空気が波打ち衝撃波となって敵集団を吹き飛ばしていった

有音「…こ、これが…私の…力です」

聖澤「私たちもやるわ。今有音の歌パワーで能力が強化されてるか…劣勢を覆すことも」

灼沢「不可能じゃない！」

日向「いっくぞー！！」

そして灼沢と日向が敵に突っ込む。そして二人が別方向に飛び上がり…

日向「シャイニング・フェニックス」！！貫けえーっ！！

灼沢「お兄ちゃん…使っよ！！烈火流奥義！！崩壊花火・噴水」！！

力を使い、敵を凧ぎ払う。そして聖澤と宝冥寺も

聖澤「あら、死に急ぐのかしら？…だったらそこまでのレールを手配してあげる！”聖・三途道”！”

宝冥寺「来たれ閻魔！貴方の裁きで、冥府へ還せ！！”封印十字弾”！！”

次々となぎ倒して行く。そして粗方片がついたころ…

宝冥寺「ふう、これで大体終わりねえ？」

聖澤「被害を最小限に食い止められたみたいね」

日向「あーっ、疲れたあ！」

地面に日向が寝転がった時だった

灼沢「！日向！上！」

日向「？」

すると日向の視界に何か落ちてくるものが見えると、上空から獣人が落ちてきた。日向は爪で襲いかかって来た敵をはねのける

日向「もー…危ないでしょ！」

???「…ふっ」

そしてその獣人が顔をあげたとき、有音以外の皆の表情が凍りついた。襲いかかって来たのは…

聖澤「…貴女なのね、天鳳院」

灼沢「天…さん…」

天鳳院「名答。その通りだよ、紗菜」

灼沢「…貴女…なんでここに」

日向「助太刀??」

天鳳院「…愛の巫女を出しなさい」

聖澤「やはりね。貴女…創成軍に居たんだ」

灼沢「!?嘘だ！天さん、嘘だよね!？」

天鳳院「紗菜、貴女なら分かってくれる。愛の巫女を出して」

灼沢「…!!」

地上防衛線編 7 5 話：反逆の獣

「暁学園、正門前」

灼沢「天さん…本気ですか」

天鳳院「ああ、本気だ。お前達を殺す」

創成軍を大体片付けた灼沢達だったが、その前に天鳳院が立ちふさがった。天鳳院が薬をのみ、半獣化した

天鳳院「私は…もうこの世界が嫌だ。私をはね除けた世界…そんな世界は」

灼沢「…皆さん、ここは私に、任せて」

聖澤「そうね。…頼んだわよ、爆炎姫さん」

聖澤、宝冥寺、有音、日向は別地区の敵の掃討へ向かった。その場には灼沢と天鳳院が残る

天鳳院「貴女も異端児、分かるでしょ？この苦しみが…！だからこの世界を掌握するの。そうすれば、私たちを軽蔑しない世界が…」

灼沢「私、もう夢は見ないって決めたんだ」

灼沢はその言葉を吐き捨てる様にいい、刀を取った

天鳳院「夢なんかじゃない、これは運命なの」

灼沢「私も、初めは天さんと同じだった。でもお兄ちゃんや瑠璃さん達と出会って分かった。人はそれぞれだけど、皆が皆敵じゃないって。…貴女は殻に閉じ籠って逃げてるだけじゃない」

天鳳院「黙れっ！」

獣化した天鳳院の爪が灼沢に襲いかかる。その爪を刀で受け止め、鏝迫り合いになる

灼沢「…っ！！」

天鳳院「知った口を聞いて…貴女も所詮は人ね。私と同じなんかじゃなかった！」

灼沢「それは天さん、貴女が変わらなかつたからだよ！努力無しで

何も変わりはしないの！」

天鳳院「周りに頼れなかったの！！誰も傍に居てくれなかった！そんな状況でどうしろっていうの！」

灼沢「貴女は傍に来ようとしなかった！皆は手を差しのべてたの！気付いてなかったのは貴女でしょ！」

天鳳院「いいの！…もう後戻りは出来ない。だったら、世界を創り変える。もう、争いが無い世界に…」

灼沢「…天さん、意地で向かってきても無駄だよ。道理が通ってない人には私、屈しないから！」

そーいい、天鳳院を弾く。天鳳院はその衝撃を利用し飛び込んでくる天鳳院「はあっ！」

天鳳院が振り抜いた手は灼沢の顔をかすめる。灼沢の頬に血が流れる灼沢「散炎華」！

その天鳳院に向かい灼沢は火をまとった剣で突きを繰り出す。その剣を天鳳院はかわし、灼沢の懐に飛び込み

灼沢「！」
天鳳院「はっ！」

灼沢の顎に回し蹴りが入る。灼沢は顎に攻撃が入り、よろめいてしまふ。そこに天鳳院はさらに攻撃を加える

灼沢「うあっ…！」
天鳳院「一気に決める！ちいっ！」

そして天鳳院の拳が灼沢の頬に当たり、振り抜かれた衝撃で灼沢は地面に叩きつけられた

灼沢「…っっ！」
天鳳院「紗菜は私には勝てない…死ぬ！」

そして爪で喉元を貫こうとしたが、灼沢が刀で弾き難を逃れた。体勢を建て直した灼沢が天鳳院と距離を取る

灼沢「…！！」
天鳳院「ほう…私とやりあうか…」

灼沢「…勝てない…」

天鳳院「だが次は…決める！」

そして天鳳院が突っ込んできた。だがそこに灼沢も飛び込み…

天鳳院「！」

灼沢「カウンター・ファイア」！」

天鳳院「うああああっ！」

灼沢の懐で力を解放し、天鳳院を吹き飛ばした

天鳳院「ぐうっ！」

だが天鳳院は体勢を崩しながらも足を地面につけ耐えた。だが天鳳院も血を流していた

天鳳院「まさか…カウンターを…」

灼沢「私もいつまでも弱くはないから…」

天鳳院「だが、気付いてなかったな…終わり」

すると急に沢山の糸が出てきて、灼沢を切り裂いた

灼沢「ああああっ！」

天鳳院「私の勝ちだな」

灼沢は倒れ、天鳳院はその場を立ち去ろうとした。だが灼沢を振り絞った力で天鳳院の足を掴んだ

天鳳院「…！！！」

地上防衛線編7話…火が二つあれば、炎に

「暁学園、正門前」

灼沢「…う…」

天鳳院「っ…離せえっ！」

灼沢「…」

灼沢はもうろうとする意識の中、天鳳院の足を掴み、離さなかった。その手を振り払おうと相手は抵抗する

天鳳院「…ちっ！」

灼沢「…私…は…」

天鳳院「どけえっ！」

天鳳院は灼沢の手を蹴り飛ばした。だが、そのはねのけられた手でさらに掴む

灼沢「…私…」

天鳳院「どけよおおっ！」

灼沢「嫌だ」

天鳳院「…どけってえ！」

灼沢「嫌だああああっ！」

すると急に灼沢の力が解放された。髪の毛が真っ赤に染まり、手の甲に”炎”の文字が浮かび上がる。そして刀身が巨大に変化していた

灼沢「…！！」

天鳳院「この鬨気…烈火の…！」

あまりの威圧感に天鳳院がたじろぐ。そして灼沢は飛び上がり、刀を構える

灼沢「烈火流剣術…”紅蓮飛翔斬”！！」

炎をまとい、天鳳院を刀で切り払った

天鳳院「あああっ…！！」

天鳳院は吹き飛ばされる。その反動で灼沢も地面に打ち付けられる

灼沢「あうっ…！」

天鳳院「…！」

だがここで天鳳院に異変が起きた。力が使えなくなったのだ

天鳳院「…まさか…！」

天鳳院が手の甲を見ると、獣の文字が消えていたのだ。今の一撃で薬の効果が無くなってしまったようだ

天鳳院「…腕を上げたな、紗菜…！」

灼沢「…く、う…！」

天鳳院「火が二つあらば炎…今、紗菜には烈火の血と、灼沢の血の二つが流れてる、その強さに気付いたように…！」

灼沢「まだ…終わってない…！」

そして灼沢は再び構える。身の丈以上の刀はしなる

灼沢「…私は、今ここで…貴女を倒します！覚悟し…ろ…！」

だが飛び込もうとした瞬間視界が歪み、灼沢は倒れた

灼沢「…貴女…倒…！」

天鳳院「…だが、まだまだ半人前…力不足ね。…でもここでは見逃してあげる。…しっかり生きてね…！」

そっぴい残し、天鳳院はその場を去った。仕留めきれなかった事、そして仲間の裏切りで涙を流す灼沢の元に戦いを終え聖澤、有音、

日向、宝冥寺が帰ってきた

灼沢「…なんで、止めを刺さないんだよ…！」

聖澤「傷に障るからしゃべらないの…！」

灼沢「なんで…悔しい…！」

日向「…！」

有音「友情は時として凶器にもなるんですね…！」

宝冥寺「…！」

そこに宝冥寺は泣いている灼沢の胸ぐらを掴み、無理矢理立ち上がらせた

聖澤「…！」

日向「ち、ちよっ…！」

宝冥寺「敵に情けをかけないで。…殺らなきゃ殺られる。今の世界はそんなものなの。迷わないで、それでも烈火君の妹さんなの？」

灼沢「…っ！」

宝冥寺「烈火君は心を失った光さんを助けた事があるの。天鳳院もきつと救えるわ」

灼沢「…うん」

宝冥寺「今はただ前を向いて、迷わないで」

灼沢「…分かった！」

灼沢はその手を振り払い、自分の足でしっかり立った

灼沢「これから皆どうする？」

日向「創成軍はまた攻めてくる、そんな気がするし」

聖澤「私がここに居れば、あの人も現れる」

宝冥寺「天鳳院も私たちを狙ってるでしょうし」

有音「わ、私はライヴで皆さんを元気に出来たら良いなあって…」

灼沢「じゃあ今日は一回解散してまた明日、暁学園に集合、て事にしようか！」

地上防衛線編77話…酷似者

「暁公園」

灼沢「…ん…」

聖澤「どうしたのかしら、灼沢さん？」

その夜中に灼沢、聖澤、有音の三人が公園に集まっていた。灼沢が天鳳院との戦いの話の一部始終の話をしていた

灼沢「私の刀…何か秘密あるのかなあ」

聖澤「分からないわ、だけれど貴女にはやはり烈火と同じ血が流れてるのね」

灼沢「同じ、血…か」

聖澤「それにしても天鳳院が謀反なんてね…」

灼沢「私だつて今でも信じられないよ…天さんが…」

有音「私は敵意は感じられませんでしたね…」

灼沢「?どういう…」

有音「なんとなくですけどお…敵意ってこついう事を言っんじゃないですかねえ…」

すると有音がギターを備え、振り向き様に衝撃波を放った。すると物陰からあの布をかぶった人が現れた。その人は聖澤に突進するが、灼沢が間に入り刀で押さえ込む

???「…」

灼沢「貴方の目的はなんだ！」

そして刀で振り払った際、その布が斬れ、振り払われた。そして隠れていた顔が現れると、灼沢と聖澤は顔を丸くした。中に居たのは…

灼沢「！お兄ちゃん!？」

聖澤「…烈火だったのか」

中に居たのは瑠奈だった。だが瑠奈の目に輝きは無かった

瑠奈「…お前達…誰…」

灼沢「お兄ちゃん！私、灼沢だよ！」

聖澤「…はあああああっ！」

灼沢が瑠奈に語りかけてる時、聖澤が突っ込み鎌で斬りかかった

灼沢「！！聖澤さん！やめて！」

瑠奈「！敵…！」

聖澤「例えこいつが烈火だとしても、今まで襲われてるの…だった
らやりかえすまで！」

聖澤が鎌を振るうが、瑠奈はそれを巧みに交わし、その場から姿を
消した

聖澤「…逃がしたか…」

灼沢「…なんでこんな…」

有音「あれは敵意…歌が届かない心…」

聖澤「この情報は早く光さん達に伝えなきゃね？」

灼沢「う、うん…」

聖澤「私たちは私たちが成すべき事をしなきゃ…迷っちゃダメよ、

灼沢さん？」

灼沢「当たり前だよ、1つの希望が開けたんだ…これからがんばる
よ！」

有音「…黒い心、悲しい歌…あの波動は何？」

地上防衛線編78話…桜散る街

「暁学園、体育館」

灼沢「冗談じゃない！何で私たちがお兄ちゃんと敵対しなきゃ行けないの！」

聖澤「仕方ないじゃない。彼…烈火は私たちに刃を向けた、それが動かぬ証拠。命を易々と渡すほど私の命は軽くないの」

灼沢「だからってお兄ちゃんに刃は向けられない！だって今まで皆と一緒に戦ってきた仲間だし、瑠璃さん達にとってもそうだし！」
宝冥寺「はいはい、言い争いはよして？今そんな事してる場合かしら？」

灼沢「私はお兄ちゃんに刃は向けられない」

聖澤「私あの日は討ち取るべきだと思っわ」

日向「だーかーらー…今喧嘩してる場合じゃないって！」

灼沢と聖澤が先日の瑠奈の件についての口論が起きていた。日向と宝冥寺が止めようとするが、一向に収まる気配がない

灼沢「分からないなら力づくでも黙らせてやる…！」

聖澤「あら仲間割れでも始めるの？それが一番駄目だって事も分かるらなくなつたかしら？」

灼沢「…馬鹿にして…！」

有音「…ねえ、皆さん」

有音の声に、皆の視線が有音に行く

有音「私の推論ですが…その烈火と言う方と…先日現れた男の方は別人かと…」

聖澤「別人？それではあの時襲いかかってきた男は瑠奈じゃない、と」

灼沢「でもお兄ちゃんそっくりだったのに」

有音「私の感じた所では、あの方から悲しいオーラを感じました。」

ですが、貴女方の話を聞く限りだとそのオーラとは一致しない……」日向「……たしかにそうだけど、だからって……」

有音「えっと……私の推論では、記憶喪失、もしくは瓜二つの人物のどちらかの線しかないと思いますね」

宝冥寺「でも瓜二つと言えば闇本って人物が居たわね。その人とは違うようだったから……」

灼沢「記憶……喪失？」

聖澤「あり得ない路線ではないと思うけど……疑問が1つ。何故私を襲うか……ね」

有音「それは私にも……分からないよ」

灼沢「……聖澤さん、貴女確か瑠璃さんと……」

聖澤「ええ、姉妹だけど」

灼沢「おにい……いや、烈火には多分瑠璃さんの断片的な記憶がある。それが聖澤さんと重なってるんじゃない……」

宝冥寺「あり得るわね……」

そこに零、双葉、明源、夢村、雷の五人が来た

零「こっちは順調か」

灼沢「あんた……自由が好きだったんじゃないの？」

零「……仕方なく、だ」

明源「聖澤おねーちゃんだーっ！」

明源が聖澤に抱きつく

聖澤「あら？男の人は？」

明源「いないよ？」

聖澤「……やはり彼は……烈火じゃない……？」

双葉「私たちは地下を創成軍から守り、こちらの増援に参った。こちらの戦況は……」

灼沢「劣勢だね。重山さんと風野さんがいないのが少し堪えてるか……」

夢村「あらあら、だったら私たちで盛り返しましょうか？」

そのように皆が再開を分かち合っていたその時だった。外でとてつ

もない規模の大爆発が起こったのだった

灼沢「…!!」

聖澤「まさか…!!」

双葉「行きますか…!!」

そして皆が暁学園から外に出た瞬間、彼ら彼女らの眼下の世界は惨状と化していた。桜が舞う季節のはずが、舞うのは火の粉。普段は人通りであふれている道は死体で溢れかえっていた

灼沢「…な、何が…」

明源「…始まる…始まる」

有音「鮮血の公演が…」

聖澤「貴女方…!!」

明源と有音の身体が光に包まれ、それぞれ零と灼沢を包み込んだ。

そして零には氷の翼が、そして灼沢には炎で造られた双剣が宿された

灼沢「…!!こ、これ…!!」

有音「貴女に任せます…」

零「…またか、明源」

明源「零おにーちゃん、災厄が来る…」

すると目の前の空間が裂け、中から現れたのは…

???「…フハハハハ…甦ったりいいいい!!」

双葉「!お前は…」

雷「闇本…!!?」

地上防衛線編79話：諦めない

「暁町、市街地」

双葉「お、お前は…!!」

闇本「ハツハア！甦ったりいい！」

灼沢「…闇本…怜…！」

灼沢達の前の次元が歪み、中から現れたのは闇本だった。闇本は死んでいたはずと捉えていた灼沢達は呆気に取られていたが、聖澤と明源、有音は落ち着いていた

聖澤「あら、中々しぶとい人のようね？誰かさんにそっくりだわ…」
闇本「そっくりなのはあいつ…オリジナルは俺さ！」

明源「零おにーちゃん！あいつが…」

有音「灼沢さん、あの方が…」

明源& amp; 灼沢「災厄の招待…！」

灼沢「…でも災厄にしては敵として不十分な気が…」

零「全くだ。あいつは烈火にも、光にもやられてる。そんな奴に俺らが負けるはずがない」

闇本「ヒヒヒツ…余裕口を叩くのもそれくらいにしときなあ！あの時の俺とは格が違うんだよお！」

すると闇本が闇の力で産み出した刀を抜いた。禍々しい気を放ちながら刀にそって力が流れている

聖澤「…あなたなんか私で十分。他の人の力なんて借りる必要が無いわ」

そこに聖澤が鎌を構える。それを双葉が押さえ込む

双葉「待たれ！相手の戦力が分からない以上、深追いは…！」

聖澤「深追いなんてしないわ…軽くまた地獄え帰ってもらっただけよ！」

そして聖澤は闇本に突っ込む。その姿を見て、闇本が笑い出す

聖澤「…！」

闇本「ヒヤハハハア！こりゃいいや！丁度良い…てめえの身体で教えてやるよ、俺の強さをつ！」

すると闇本が聖澤の攻撃に対立するように飛び込んだ、どうやら技の打ち合いになるようだ

聖澤「なめるんじゃないよっ…！」

闇本「おとなしくしてろ、下級種がああ！」

聖澤「聖・三日月斬り」！」

闇本「破滅を呼ぶイビルブレイド」！」

そして二人が交錯する。数秒の沈黙の後吐血したのは聖澤だった

聖澤「！ぐはあっ…！」

闇本「弱いな…それで俺に齒向かう気か！？屑が…！」

灼沢「せ、聖澤さんっ！」

零「…明源、この災厄に対抗するにはどうしたらいい？」

明源「愛の巫女と闇炎の貴公子ならあいつを倒せると思うっ…」

灼沢「…それじゃ、私たちじゃ…」

有音「勝てないよ…！」

零「だからと言って引き下がるか？」

そっぴい零は闇本に銃を構える

闇本「ああ！？俺とやる気かあ…？」

零「やる気になるのも仕方ないだろ。…柄じゃないがな。とにかく、俺に諦める理由はない」

灼沢「貴方なんかにも負けるくらいなら死ぬよ。それくらいの覚悟があるから」

双葉「…忍は死を恐れぬ」

雷「私も負けない…！！」

闇本「はっはっはあ！！丁度いい…烈火、光無き今の地上軍など烏合の衆…全員潰してやる…来いよっ…！！」

地上防衛線編最終話、80話：女神降臨

「暁町、市街地」

闇本「はっはははあ！逃げ惑ええ！」

灼沢「うわああっ！」

暁町に降り立った災厄は瑠奈が倒したはずの闇本だった。その闇本の熾烈な攻撃に灼沢達はなす術も無かった

灼沢「烈火尖」！

日向「シャイニングフォース」！

闇本「甘いわっ！！」

灼沢と日向の一撃を闇のオーラを産み出し弾く。日向がその影響でバランスを崩した隙にすかさず背後に回り能力を放ち、日向を吹き飛ばす

日向「ぎゃうっ！！」

灼沢「日向さんっ！？」

有音「灼沢さん、後ろ！」

灼沢「！？」

灼沢が後ろを向いた時には時既に遅く、闇本が拳を構えていた

灼沢「……！！」

闇本「うらあっ！」

振り抜いた拳は灼沢の顔面を捉え、灼沢はそのまま建物に突っ込んでいった

零「……！！」

零はそこに銃弾を撃つが、闇本はそれをかわし、徐々に接近してくる
明源「零おにーちゃん！！闇雲に撃っちゃ……」

零「くっ……少し黙ってる！」

さらに銃弾を撃ち込もうとするが、銃は弾切れになってしまった。
その隙を闇本は見逃さず零の懐に飛び込み

零「！しまった…」

闇本「”デッドボール”！！」

地中から現れた柱によって零は弾き飛ばされてしまった

零「…！」

明源「おにーちゃん…無茶だよ！」

零が起き上がる間にも闇本は宝冥寺と双葉にも襲いかかる

双葉「”破”っ！」

闇本「甘いわあっ！」

双葉の短剣をかわし、双葉を吹き飛ばす。次の標的は宝冥寺だ

闇本「てめえも一撃だあっ！」

だが闇本の剣は宝冥寺の霊により受け止められた

闇本「…！！」

宝冥寺「私を…甘く見ないでいただけるかしら？」

闇本「ちっ…さすが宝冥寺、か」

宝冥寺「私の何を知ってるかは知りませんが、調子に乗らないで下さるかしら？」

そしてその剣を叩き折った。闇本は後ずさりする中、宝冥寺の目は澱み、闇本に歩み寄る

灼沢「ほ、宝冥寺さん…！」

零「…あの力…！」

宝冥寺の放つ霊は周囲を破壊していった

闇本「…ちっ…！」

宝冥寺「生徒を傷つけたお礼…させてもらっわよ」

だがその戦いに早くも横槍が入る。その場にぬのを被った瑠奈、黒いドレスを見に纏う瑠璃に似た人物、そして瑠奈搜索を一時中断した瑠璃達が終結したのだ。その場には瑠璃達が中心の地上軍、そして闇本がいる創成軍、さらに目的が分からない黒い女、記憶がない瑠奈と沢山の勢力があつまってしまった

瑠奈「…！？」

瑠璃「る、瑠奈さん！？」

灼沢「こんなに集まったら、戦いどころじゃ…」

???「居る…貴女、愛の巫女…」

黒い女が瑠璃に接近し、瑠璃の手を握る。瑠璃も不思議と抵抗をしなかった

重山「！！何を…！」

瑠璃「飛鳥！…いい」

重山「…！」

???「…新たな創成を…」

瑠璃「…新たな…創成？」

有音「灼沢さん、あれは、止めなきゃ」

灼沢「と、止めると言われても…」

今この空間の時間が止められているのか、瑠璃以外は身体を動かせなかった。黒い女は微笑みながら、瑠璃に黒い石を手渡した

瑠璃「…？」

???「その石は”カオス”…時を終わらせる力を持つ」

すると黒い女は急に消え去り、黒いオーラは瑠璃を包み込んだ。すると…

重山「る、瑠璃様っ！」

風野「まずい…この力の集まり方はまずいぜ！」

有音「空間が…吹き飛ぶ」

その言葉を発した瞬間、大爆発が暁町を包み、光が消えるとその空間には人影が無くなっていた…

有音「ち、地上防衛線編読破おめでと…」

夢村「とうとう光さんが幻の秘宝を手にして、なんか悪そうになっ
たわね…」

有音「それに烈火さん、闇本さんなど、キャラが集結しちゃってる
よ」

夢村「こうなったら徹底抗戦、しっかりあがいてやるわよ？」

有音「わ、私的には平和的に…」

夢村「有音ちゃん？さすがにそれは無理よ。だって貴女も灼沢さん
に力を貸しちゃってるじゃない…」

有音「そ、それは…そうだけど…」

夢村「はいはい、読者も居るんだからそんなに塞ぎ込まないの！さ
てさて、次幕は”瑠奈搜索編”よ。この戦いは思わぬ形で集結し、
瑠璃さん達はまた姿を消した瑠奈を探しに出るの。そこで現れたの
は…と、ここまでにしておこうかしら？」

有音「うゝ、続きが気になる…」

夢村「なら次からの話もちゃんと見てね？」

有音「読者のみ、皆、約束だよ？ちゃんと見てね？」

夢村「じゃ、瑠奈搜索編の始まり始まり」

重山「読者の皆、重山だ。活動報告にも載せたが次話から泉野、土
屋の二人が再登場する。話に食い違いが生じるかも知れんが、まあ、
暖かく迎えてくれ」

瑠奈搜索編 82話：やり直し

「暁学園、保健室」

「……頼むわね」

泉野「……はい、後はお任せください」

瑠璃「……ん……」

泉野「あ、……気付きました、瑠璃さん？」

瑠璃「……ここは……？」

泉野「暁学園の保健室です」

瑠璃「……え!？」

あわてて教室を飛び出す瑠璃。校庭に出て見るが、昨日起こった戦鬨の面影が全く無かったのだ。それ以上に神民戦争での爪跡すら消えてしまっているのだった

瑠璃「……??？」

泉野「……どうかしたの、瑠璃さん？」

瑠璃「瑠奈さんは……？」

泉野「瑠奈君……?……さあ……」

泉野は瑠奈の事を知らないようだ

瑠璃「……飛鳥は？」

泉野「……瑠璃さん、どうかしたの?飛鳥さんは地下の復興をしてる最中だよ?」

瑠璃「……嘘……」

狼狽した瑠璃は慌てて学園を後にし、瑠奈の家に行った

「烈火家」

瑠璃「お、お母さんっ!」

瑠璃は慌てて家の中に入る。だが中には誰にも居なかった

瑠璃「……なんで居ないんだろ……お母さん?」

だが奥のドアを開いた瞬間、瑠璃の顔から血の気が引いた。瑠奈の母、瑞鬼が何者かに殺されていたのだ。胸元にはナイフ、多分即死だろう

瑠璃「…っ！！瑞鬼さんっ…！」

その場に崩れ泣き出す瑠璃

瑠璃「…瑠奈さん…お母さんが…」

灼沢「…瑠璃さん」

瑠璃が振り向くと、後ろには灼沢が居た

瑠璃「…灼沢さん…」

灼沢「あの日に何があつたか分かる？」

灼沢が深刻そうに瑠璃に話しかける

瑠璃「…分からない…」

灼沢「あの時瑠璃さんが貰った石”カオス”…その光に瑠璃さんは包まれたの」

瑠璃「そこまではなんとなく覚えてる…」

灼沢「その後何か力が一瞬の間働いて、私が目を覚ました時にはもうこんな状態だった。多分瑞鬼さんが殺されたのはそれより前になると思う」

瑠璃「…うん」

灼沢「問題なのは皆の姿が見当たらないこと。いま地上に居るのが分かってるのは私、瑠璃さん、泉野さん、それと…天鳳院なんだ」

瑠璃「でも泉野さんは瑠奈さんの居場所は分からないって…」

灼沢「それに天鳳院は創成軍だった筈なんだ」

瑠璃「だった？」

灼沢「ちよつと前に天鳳院に襲われてね。でもいまの天さんに敵意は無い」

瑠璃「…創成軍が居なくなったの？」

灼沢「その可能性は無いかな？瑠奈君が死んだとは考えられないから、多分何かにしてる関与してると思う」

瑠璃「…ん…」

灼沢「とにかく、いまの状況じゃ攻められたら一貫の終わりね。ま
ず戦力の再編をしなきゃ…」

瑠璃「その為に皆を探すの？私…嫌な予感が…」

灼沢「私も気は進まないけど、やるしかないと思う…」

瑠璃「…わかったよ、私一人で行く」

灼沢「！？瑠璃さん、いくらなんでも一人はまずいよ！」

瑠璃「私が行かなきゃダメなの！…分かって」

灼沢「…だったら、私の条…」

その時、そとが急に騒がしくなった。場所は暁公園のようだ

灼沢「なんだろ…」

瑠璃「…瑠奈、さん？」

瑠璃は何かを悟ったように暁学園に急ぐ。灼沢もその後を追った

〓 暁公園 〓

暁公園には沢山の人ばかりが出来ていた。瑠璃はその人だかりの内
の一人を捕まえ話を聞く

瑠璃「あ、あのっ！」

男「…なんだあんたら」

瑠璃「いまここで何があつたんですか？」

男「なんでもここで人が倒れてるそうだが、何だかこっちの誘導に
抵抗するらしいんだよ。傷だらけで大量出血も確認してるから、そ
んなに長くは持たないと思うから急ぎたいんだがな…」

灼沢「ね、ねえ光さん？何が…」

瑠璃「ちよつとどいて下さい！」

そう言い瑠璃は人混みを掻き分け、その集まりの中心に辿り着いた。
そして騒ぎの中心に居たのは…

瑠璃「…！」

???「…」

以前にあつた布を被っていた人だった。だが瑠璃には見覚えがあり、
無理矢理布を剥がすと、瑠奈だった

瑠璃「！！瑠奈さん！」

瑠奈「…！」

瑠奈は瑠璃を見ると急におとなしくなった。だが言葉を話さず、瞳も曇っていた

灼沢「！おにいちゃん！」

瑠璃「瑠奈さん！私です！瑠璃です！」

瑠奈「…？」

だがこちらの呼び掛けに瑠奈に反応は無い。どうやら記憶がないようだ。そしてやはり傷が響くのか、瑠奈はそのまま倒れた

瑠璃「…！誰か！この人を家に運ぶのを手伝って下さい！！！」

瑠奈搜索編 83話…記憶

「烈火家」

瑠奈「…」

瑠璃「…よいしょっ、と…」

氷水につけたタオルを瑠奈の頭に乗せてるタオルと取り替える瑠璃。公園での騒ぎの後、瑠璃と灼沢は瑠奈をここまで運びだし、手当てを行っていた

灼沢「…まだ起きない？」

瑠璃「うん、多分今日、明日じゃ起きないんじゃないかな…能力の消費も尋常じゃないし…」

灼沢「能力の消費って、瑠璃さんは見たら分かるの？」

瑠璃「その”さん”付けはいらないよ？なんかくすぐったいし…。で、私の力は能力の中でも最上ランクに位置するから、ある程度の能力者ならその能力の上限をオーラで感じ取れるの。瑠奈さんの今そのオーラは微弱だから大分危険だと思う」

灼沢「…能力が枯渴したらその能力者は死ぬ、だったよね」

瑠璃「いくら記憶が無いからってこれだけ浪費するのは何か理由があったのかな…」

そうこうしていると、瑠奈が気付いたようだ

瑠奈「…」

瑠璃「あ、気付いた？身体、大丈夫？」

瑠奈「…」

瑠奈は無言ながら首を縦に振った

灼沢「ほんとに記憶が無いのか…つらいね…」

瑠璃「いいんですよ、時間を置いたらきつと思ひ出せますよ」
そして瑠璃と灼沢は部屋を出た

瑠奈「…懐かしい、香り…」

「暁学園」

瑠璃「…やっぱり居ないね」

灼沢「だね…」

瑠璃と灼沢はあの件の後居なくなつた仲間を探しに行ったが、誰も見つからなかつたようだ

瑠璃「よし…とにかく一回家に帰りますか？」

そついい門を出ようとすると…

灼沢「待って」

瑠璃「??」

灼沢「…殺気だ。誰か居る！」

灼沢が言い放つと、影から人が現れた

夢村「私よ、私！」

瑠璃「夢村さん！」

灼沢「…」

夢村「お見事よ灼沢さん。よく気配を感じれたわね」

灼沢「…本物？」

夢村「失礼ね…本物よ」

瑠璃「あの後何処に居たんですか？」

夢村「私はあの後目が覚めたらイオシスに居たの。周りの人は”ただ寝てただけ”って言うんだけどそんな訳ないしなあって思ったんだけど、地上も綺麗だしね…」

灼沢「…夢村さんも分らないのか…」

瑠璃「…ん…瑠奈さんが記憶を失つてるのと何か関係があるのかな？」

この発言で夢村の表情が驚きに変わった

夢村「烈火君が戻ってきたの？」

瑠璃「あ、はい。今は記憶は無いですけど…」

夢村「…もしかして…いや、それは無いか…」

灼沢「どうかしたんですか？」

夢村「瑠璃さん、貴女確か”カオス”って石を貰わなかつた？」

瑠璃「あ、これですか？」

瑠璃は黒い石を夢村に見せる

夢村「…まだ確証は得られないかな…」

瑠璃「??」

夢村「瑠璃さん、紗菜さん、時間あるかしら？」

瑠璃「あ、はい！」

灼沢「私も大丈夫！」

夢村「ちよつと行きたい場所があるの。ついてきて？」

瑠奈搜索編 8 4 話：能力が産み出した産物

「暁町の隣町、春間町美術館」

夢村「ここが目的地よ」

瑠璃「びじゅつかん…??」

灼沢「絵とか彫刻とかを飾る所だよ」

瑠璃「なら組織内にも彫刻とかあったから、組織も昔は美術館だったのかな??」

瑠璃が輝いた目で灼沢に問いかける

灼沢「いや、それは違うよ。あそこにある彫刻と今ここにある彫刻の重要度がまるで違うの」

瑠璃「へえ…」

夢村「瑠璃さん?この物は触っちゃダメよ?」

瑠璃「えっ!?!」

瑠璃は周りの物に興味津々で近くの彫刻にさわろうとしていたが、夢村に制止された

夢村「この物は鑑賞用だから、触っちゃダメってルールなのよ?」

瑠璃「ご、ごめんなさい…」

夢村「ただ…これだけは別」

そういうと夢村はある絵の近くまで行き、その絵をはずした。その絵の裏にはボタンがあった。それを夢村が押すと隣の壁が崩れ道が出来たのだった

灼沢「…へえ、随分と古典的な隠し通路だね。でもこの先に一体何があるって言うのさ?」

夢村「瑠璃さん、これを読んでみて貰えるかしら?」

そっぴい夢村はポケットから一枚の古ぼけた紙を取りだし、瑠璃に渡した

瑠璃「え〜っと、”大いなる災厄が世界を覆いし時、心優しき愛の

巫女と正義を貫かんとする騎士の手に輝きの剣を用い、これを沈める。この剣はここに保管せり、大いなる災いがおきし時、用いよ」
灼沢「…昔にも大いなる災いがあつて、その災いを瑠璃さんの先祖が止めて、その時に使つた剣がここにあるつて事？」

瑠璃「私はそんな事聞いたこともないですよ？」

夢村「ここで気になるのは”正義を貫かんとする騎士”なの。この紙にはヒントが無いから、どのような人がそんなことをしたのか検討もつかなくてね、とりあえずここにある剣を持ち出して適合者を探そうかなつて思つてるの」

灼沢「適合者か…だつたら刀を使える私とか瑠璃さん以外にも人が必要だつたんじゃないの？」

夢村「それは考え過ぎ。根本的にその剣が存在するかも分からないんだから」

瑠璃「じゃあ、中に入つていきますか??」

夢村「ええ、そうしましょう」

そして三人は中に入つていった…

「春間町美術館、通路フロア」

瑠璃「…このペアつて、不思議ですよね？」

灼沢「そ、そうかな？アハハハ…」

夢村「灼沢さん、顔がひきつってますよ。もしかして怖いんですか？」

灼沢「ぜぜ、全然！暗いとこなんか怖いなんて言つたこと無いし！」

瑠璃「…それは言つちやつてるじゃないですか…」

三人は先ほど現れた道をひたすら前に進んでいた。時に右に、時に左に、今自分達が何処に居るか分からなくなるような道だった。それに臆すること無く進む瑠璃と夢村に対し、灼沢は暗いところが苦手なのか怯えていた

灼沢「…ねえ、こんなとこに本当にその剣はあるの…?」

夢村「さあ？それは奥に行つてみなきゃ分からないわねえ？」

瑠璃「なんか探検みたいで楽しいですよ」
灼沢「…別に楽しくないよう…」

「春間町美術館、最奥空間」

灼沢「…行き止まり？」

瑠璃「その様ですね？」

灼沢たちは迷路みたいな道をひたすら進み、行き止まりの空間にぶち当たった。目の前の壁には何かをはめる様な台座があった

夢村「…また有りがちな仕掛けよね？」

灼沢「有りがちだけど、その有りがちな仕掛けを解くための物が…」

夢村「瑠璃さん、貴女の持つ石が鍵よ」

瑠璃「この”カオス”が？」

夢村「それをあの台座にはめ込んで？」

言われた通りに瑠璃は台座に石をはめ込む。すると壁一面に何かの文字が浮かび上がった

瑠璃「…！」

灼沢「何、この字…今の時代にこんな文字なんて…」

夢村「それを読めるのは王族…だから瑠璃さん、聖さん、天さんあたりかしら？」

瑠璃「…」

すると瑠璃は目を瞑り、壁に手を当てる。すると壁が光だし、瑠璃は書かれた文書を読みといていく

瑠璃「…災いは、人が居れば必ず起こり得る。我らの時代も起きた。だがそこにはそれに立ち向かわんとす人たちが居た。その物達を”暁の従者”とし、民は救いを求めた。そしてその従者は愛の巫女と共に災厄を封印した。だが、完全に根元を絶つには至らず、後世に災厄が再び見えることとなる。その時の為、我らが使った宝具をここに納めん。けして悪用するべからず。そして子孫たちに、幸あれ」

瑠奈搜索編 85話：絆

「春間町美術館、最深部」

瑠璃「じゃあ、夢村さん。これをはめればいいんですね？」

夢村「構わないわよ？」

灼沢「…」

最深部の台座に”カオス”という黒い石を嵌め込む瑠璃。すると

その台座が沈み、壁の一部が開くと柄の部分しかない刀があった

瑠璃「…？刃が無い…刀…？」

灼沢「また不思議な物が奉られてるんだね」

夢村「…本当にこれで世界を守れるのかしら？」

その柄を夢村が持つ。だが何も起こらなかった

夢村「…素質が無いのかしら、私」

瑠璃「そ、素質とか必要なんですかね？」

灼沢「ん…なんなんだろ…」

その後灼沢と瑠璃もその柄を手取るが、やはり何も起こらなかった。果たしてこの柄は何なのだろうか…。すると夢村が何かの気配に気付き、その気配の方向に向けて声をかけた

夢村「天さん？なんでそんな所に？出てきたら？」

天鳳院「…ばれてた？」

来た道から天鳳院が現れた。どうやら夢村達の後をつけてきてたらしい

天鳳院「…その刀、瑠奈なら使えるかも」

灼沢「え？お兄ちゃんか？」

瑠璃「瑠奈さんの家系に前の大戦で活躍した英雄は居ないはずかと…」

夢村「…ふうん」

夢村は何かを確信したかのようにため息を一つ吐く

夢村「天さん、多分私と貴女の憶測が今合致してるわね？」

天鳳院「…気が合う。多分間違いない」

夢村「…だとすると厄介なのは今烈火君の記憶が無いと言うことかしらね…記憶が無いんじゃ、この柄のみの刀の力を最大限に発揮することは到底無理でしょうし…」

灼沢「ち、ちよつと待ってよ。どういう事さ？お兄ちゃんの記憶とこの刀の力と何か関係が？」

瑠璃「…炎の力がこの刀の力になるとは思えません。多分他に理由があるんですよね？」

夢村「ええもちろん、その通りよ。でも今は貴女達には話せないわ。まだ確証が無いし、烈火君の記憶喪失もあるし、ね」

天鳳院「…無理は禁物」

灼沢「…引つ掛かる物の言い方ね」

瑠璃「分かりました、詳しい話は今は聞かないです」

夢村「あら瑠璃さん、貴女が一番知りたい無いようかなあと思ったのだけれど…」

瑠璃「いずれ分かる話なら今日の前に問題があるを解決すべきかなあって思ってた…」

夢村「成長したわね、瑠璃さん。その心構えが崩れないことを祈るわね」

そっくり残し、皆はその場を後にした

〓 暁町、市街地 〓

民「て、敵襲〜！皆逃げろ〜！」

兵「殺せ！どこかに炎がいる筈だ！」

暁町を創成軍が包囲し、虐殺を行っていた。そこに瑠奈が現れる

瑠奈「…」

民「る、瑠奈！お前は出るな！命を狙われてるぞ！」

兵「来たな炎！その命もらいうける！」

そして兵隊が瑠奈に突っ込む。だが兵の前から瑠奈はこつぜん姿

を消した

兵「!?!」

瑠奈「!」

すると上空から瑠奈の奇襲があり、兵は次々と切り捨てられていく。瑠奈は返り血を浴び、来ていた白いYシャツは真っ赤に染まっていた

兵「ぐはあっ!」

瑠奈「...」

- 俺は、誰だ。何故戦う。何を守りたい -

瑠奈搜索編 86話：血の大地

〓 暁町、市街地 〓

瑠奈「……」

兵「ば、馬鹿な…我が部隊が炎一人相手に一時間も持たず全滅だと…!?」

瑠奈「!!」

あれから一時間、瑠奈は相手、創成軍の先発隊を全滅させ、当たりを血の大地へと変えた。だがそこに新たな刺客が現れた

兵「な、こ、これは…」

兵「先発隊が全滅…たった一人にか！」

瑠奈「…！」

援軍としてやって来た刺客に容赦なく刀を振るい、次々殺していく、まるで悪鬼の化身である

瑠奈「…!!」

兵「ぐあああつ！」

無数の死体、転がる生首、血塗れの瑠奈。そこにはもう、人がすむ余地等無かった…

〓 春間町 〓

夢村「…まずいわねっ…！」

灼沢「な、何がまずいって…!?」

天鳳院「…血の臭い」

瑠璃、夢村、灼沢、天鳳院の四人はあの武器を持ち出した後、夢村が何かを察知して急いで暁町へ向かっていた…

瑠璃「血の…臭い？」

天鳳院「暁町で…なにか、起こってる」

灼沢「何かって何さ!? 私にはさっぱり…!?」

夢村が止まったので前を見ると、武装した兵士が道を塞いでいた。手の甲には”創”の文字が浮かんでいる

夢村「灼沢さん。多分今この現状を見れば納得するでしょう?」

灼沢「…狙いは、私たち?」

瑠璃「私たちと…多分、最優先として瑠奈さんが狙われてます」

灼沢「!」

灼沢達は春間町へ行く前に瑠奈を暁町に残していたと言うことを相手に察知されてしまったのだ。そうして立ち止まっている間に瑠璃達は沢山の創成軍の兵士に包囲されてしまった

夢村「正直な話、この数相手じゃあ、私達四人は全滅必至ね」

天鳳院「…でも、諦める気もない」

灼沢「当然!今ここで諦めたら後悔しか残らない、私、そんなのは嫌だ!」

瑠璃「…」

だが、三人の士気が上がるにも関わらず瑠璃は涙を流し、その場に座り込んでしまった。三人があっけに取られる

灼沢「る、瑠璃さん!?何が…」

瑠璃「夢村さん、天鳳院さん。気付いてたんだね…」

そういうと、夢村、天鳳院の表情も曇っていった

灼沢「ち、ちよつと!どうということさ!」

瑠璃「…瑠璃さんの真の能力、それは…」

?????」剛、魔壊撃”!!!」

その言葉を遮るように創成軍の後ろの集団から衝撃波が発生し、敵兵を吹き飛ばしていった

?????」…瑠璃様、それ以上の言葉は瑠奈を止めてからにしましょう」

瑠璃「…飛鳥…?」

夢村「へえ…さすが守護兵長。パーティーの時間は厳守だねえ？」
現れたのはあの戦いの後姿を眩ましていた重山だった。重山の左目
は何かの傷があり見えないようになっていたが、重山は感覚のみで
相手を薙ぎ倒した

瑠璃「…」

重山「町には瑠奈が居る…ここで手をこまねいている場合では無い
ですよ、瑠璃様」

瑠璃「…うん！皆、私にちからを貸して！…ここを、突破します！」

夢村「あら、隊長風ね…悪くないわね、乗ってあげるわ！」

灼沢「私も…お兄ちゃんが居るなら、ここは通してもらおうよ！」

天鳳院「…邪魔」

瑠奈搜索編 87話：再結成、愛の巫女に集まる雄志達

「暁町郊外」

重山「チエストオオツ！」

重山が合流した地上軍に創成軍の大群は物の数にならなかった。創成軍は次第に撤退していった

重山「…ふう」

灼沢「重山さん、助かりました！」

夢村「ふふ、すっかりしてるわよね…」

重山「…茶化さないでもらいたい。私は騎士だ」

夢村「あら、気に触る発言だったかしら…？」

天鳳院「…今、話してる暇、無いと思う。烈火が暴走してるなら止めなきゃ…」

天鳳院は気付いていた。暁町に入った瞬間から血の臭いで充満していることに

灼沢「暴走…」

瑠璃「ねえ…、皆、町に突入する前に話があるの」

灼沢「…話？」

瑠璃が深刻な顔で皆を引き留める

天鳳院「…」

夢村「…気付いたのね、瑠奈の、力に」

灼沢「お兄ちゃんの、力…」

重山「…」

瑠璃「彼の力は…私とは相反する力、闇…です」

灼沢「！？な、何を言ってるのさ瑠璃さん。お兄ちゃんの力は炎、それは手の甲に文字が浮かんでるじゃない！」

瑠璃「ですが…分かりにくいんですけど、闇を見抜く現象が最近起きてるの…」

重山 & amp ; 天鳳院 & amp ; 夢村 「…」

重山、天鳳院、夢村の三人は話を黙って聞いている。この三人は気付いていたのだ

瑠璃「彼の…最近の力の解放時の目の色、見ましたか？」

灼沢「…目の…色…」

瑠璃「瑠奈さんの瞳は能力解放を行うとオッドアイになるんです。

これは能力の重複の証…」

灼沢「でも闇の力を使ってはいないじゃないですか！」

瑠璃「…私の力は、光。彼…瑠奈さんの力は闇。その力が干渉しあうとどうなると思いますか？」

灼沢「…互いを、苦しめる…」

夢村「光さんはいつ、烈火君に闇の力があるか？」

瑠璃「瑠奈さんの化身として現れた闇本さんの存在です。本来瑠奈さんにその力が無ければ現れないんじゃないかなって…」

灼沢「…そんな…」

瑠璃「…彼を止められるのは私しか居ない…そして、この柄しかな い剣…つかえるのは瑠奈さんだと思っんです」

天鳳院「さすが地下の巫女様…大局が見えてる」

灼沢「…どのみち、お兄ちゃんを助けなきゃ、お兄ちゃんはお兄ちゃ なんだから…」

瑠璃「…皆、ごめんね。私の我が儘を…聞いてもらうから！」

天鳳院「…いいよ」

夢村「貴女の手腕、見せてもらうわよ？やるからにはハッピーエン ドに終わらせなきゃね？」

重山「私の命…常に貴女と共に」

瑠璃「行きます！やることは二つです！1つ目は暁町を解放します！ 2つ目は…瑠奈さんを、救出します！」

そして地上軍の連合軍は暁町に踏み込んでいった

「 暁町、市街地 」

瑠璃「…!!」

夢村「思った以上に刺激的な絵ね…容赦が無いわ」

天鳳院「…地獄絵図…」

市街地にたどり着くとそこには頭や腕などが無い死体が転がり、大地は真つ赤に染まっていた

重山「少し地上に出なかつただけでこの様とは…一体何があったと言っ…?」

瑠璃「今の瑠璃さんには記憶が無いんです。ならあり得る話かなあ
と…」

夢村「…これじゃ烈火君の状態はものすごいっらいでしょうね」

瑠璃「…早く助けなきゃ…待っててね…瑠璃さん!」

〓 暁町 〓

瑠奈「…何か、来た。…懐かしい、暖かい、何かが…。迎撃…」

瑠奈搜索編 88話：続・再結成、愛の巫女に集まる雄志達

「暁町」

瑠璃「…血生臭い…」

重山「瑠璃様、顔色が悪いですよ？無理をしておられるのでは…」

夢村「ダメよ重山さん、今光さんは決意を持って、戦いの場に来ているんですから、心配するだけ無駄よ」

重山「だが瑠璃様に倒れられては…」

瑠璃「飛鳥？私は大丈夫、絶対にやり遂げて見せるから…」

日向「瑠璃ちゃん、よく言った！さすがは瑠奈が好きになった女だねえ〜！」

夢村「…貴殿方もしづといのね？」

瑠璃「日向さん！？それに皆…」

そこにさらに集まる人影があった。日向、風野、雷、土屋だった。とうとう神民戦争の時の戦力が揃いつつあった

風野「正直敵の数はいくら居るか分からねえんだ、こっちの戦力も沢山居て損はねえだろ、姫？」

土屋「我らも烈火殿には助けられておる…その借りを返す時じゃな」

瑠璃「皆…ここは戦場だから、私の我が儘を聞くのは難しいの…いいの？」

日向「何を今さら！」

風野「不可能はねえよ」

雷「行けるよ」

土屋「当然じゃ！」

「…麗しいな、これが友情、か」

その士気が上がる最中、さらに昔の戦友、零と宝冥寺、有音、明源が来ていた

瑠璃「零さん！それに逸姫先生に有音さん、明源さんまで…、私…」

今、幸せです。沢山の仲間と一緒にまた心を1つに戦えるなんて……」
零「……正直、お前のわがままに付き合うつもりはない。……が、烈火に死なれるのは困る。あいつを仕留めるのは俺だ」

明源「またまた零おにーちゃんつたら！寂しいだけなくせにいつ！」
零「……やかましい」

有音「わ、私も、一回烈火さんとはお話がしてみたいですし……私の歌がち、ちからになるなら……」

宝冥寺「あらあら、皆さんお揃いだったのねえ……先生も嬉しいわよ、光さん」

????「私らも忘れるでないぞ、光殿」

そしてそして、後ろから双葉、泉野もやってきた

双葉「拙者も戦う。仲間の危機は見過ごせぬ……」

泉野「……瑠璃さんは友達だから、助けるのは当たり前」

瑠璃「皆……ありがとう……」

天鳳院「……また……集まる……絆の……力」

今この場には瑠璃、夢村、重山、天鳳院、灼沢、土屋、雷、風野、宝冥寺、零、明源、有音、泉野、双葉、日向と仲間が揃ったのだった

瑠璃「……これだけの仲間が居れば天上軍にも負けませんし、瑠奈さんを助けることだってきつと出来るでしょう……！」

夢村「……さすがね、光さん。知らず知らずの内にまた仲間を呼び寄せるなんて……」

天鳳院「……長い戦いの、始まり……」

灼沢「みたいだね……、瑠璃さん！来るよ！」

すると前方から大量の創成軍兵士が突撃してきた

兵「相手は地下の姫が大將だ！そいつを優先的に殺せ！」

その軍にめがけて手をかざし、瑠璃は号令をかける

瑠璃「……私は、……いや、皆、ここで死ぬことは許しません！……地下の王女、光瑠璃の名の元、今ここに”無限隊”の結成を宣言します！……皆さん、誰一人欠けず、この場を突破して見せよっっ！」

戦場に瑠璃の声が響く。それに呼応するかの様に

皆「おうっ！」無限隊”、攻撃開始っ！”
相手に飛び込んでいった…

「暁町、町外地区」

瑠奈「…何か…始まった…片方は…敵…もう片方は…敵…？…分からない、俺は…なんだ…」

死創「それは知る必要は無い、烈火」

瑠奈「…！」

いきなりの一撃を瑠奈はかわす。相手は創成軍大将、死創だったが今の瑠奈には記憶がないために覚えてなかった

瑠奈「…敵…迎撃…」

死創「ほう、記憶無くとも動き衰えず…実に見事だ、烈火よ。だが…それだからこそ殺し甲斐があるっ！」

そしてすぐさま後ろに回り込み、瑠奈を殴り付けた。瑠奈は反応が出来ず地面を転がり回るがなんとか立ち上がる。額からは流血していた

瑠奈「…！」

死創「さあ、力を使いたまえ烈火よ。お主を完膚無きまでに叩きのめすことが我らの完全勝利の近道だからなあ…！」

瑠奈「…！」崩壊花火”！」

瑠奈は飛び上がり、刀に炎をまとわせ死創にぶつけた。だが…煙の中から無傷の死創が現れ、次元の狭間から槍を取りだし烈火を斬り払った。瑠奈は腹部を斬られ血を流しながらうづくまる

瑠奈「…！！！！！」

死創「そうだ！もっと抗え！もっと苦しめ！足掻け！フハハハハ！」

瑠奈搜索編最終話、89話…反撃、開始

「暁町」

瑠奈「…!!」

死創「フハハハハ！もがけ、苦しめ！」

暁町では瑠奈と死創の戦いが続いていたが、圧倒的な力の差が物をいつているようだ

瑠奈「…くっ…」

死創「歴戦の勇者も大したことは無いなあ…」

瑠奈「…ゆう、しゃ…?」

死創「…はっ、記憶が無いんじゃないか？ズアアッ！」

瑠奈「…!!」

死創の攻撃を必死に耐える瑠奈。身体からは血が滲み出ている、とても痛々しい状態になっていた

瑠奈「…!!」

死創「…食いがいがない奴は、すぐに殺す。”閻爆破”！」

瑠奈「…!!」

死創が産み出した閻の衝撃波に瑠奈は飲み込まれた…

「暁町郊外」

瑠璃「皆さん！私たちの力を相手に見せつけてくださいっ!!…突撃いっ！」

重山「ドッセエエ！」

瑠璃達”無限隊”は大勢の創成軍を相手に猛攻をしていた

風野「へっ…久しぶりだなあ、この感じはよお！」

灼沢「…ひとつの目的に向かって、皆が心を1つにして戦うって…やっぱり楽しいね！」

天鳳院「…楽しいかどうかはともかく、良いこと」

零「だが、これじゃあじり貧だな。二手に分けるか」

重山「そう言うが、どう分ける？」

その言葉に零は一瞬難しい顔をするが

零「烈火の元に向かうのは烈火と親交が深い方がいいだろうな。だ

から光、重山。二人で行ってきたらいい」

瑠璃「え？二人…だけでいいんですか？」

零「…無駄な気を遣わせるな」

重山「参りましょう、瑠璃様。よく分かりませんが…烈火を助けられるのは瑠璃様以外に他ならないと私も思います。私はその為の最低限の護衛です」

瑠璃「…わかりました。皆さん、くれぐれも死なないで、皆笑顔でまた会いましょう！」

皆「おうっ！」

そして瑠璃、重山は暁町の市街に向かう…

「暁町市街地」

瑠奈「…」

瑠奈は闇の衝撃波に飲み込まれてはいたが、なんとか攻撃を凌ぎきった。それを悠然と見る死創、戦いは終盤へと入ってきている

死創「ふん…この町にネズミが入ったか。お前の仲間も中々の猛者揃いだな」

瑠奈「…？」

死創「だが、笑わせるな。お前を今助けに来て何になる？戦力にもなり得ないお前を、な」

瑠奈「…」

死創「安心しろ。そいつらが合流する前に仕留めてやる。それが俺なりの慈悲だ」

そして死創は闇の力を具現化し剣を産み出し、その剣で瑠奈に斬り

かかった。瑠奈も自分の剣で応戦する

死創「本当に素晴らしいマシンだよ、貴様はあ！記憶を失えど、戦いの血はたぎり、戦乱を巻き起こす…お前ほど恐怖の存在は居ないっ！」

瑠奈「！！」

そしてとうとう瑠奈の剣が弾かれ、喉元に剣の切っ先が突きつけられる

瑠奈「！！」

死創「死ね…！」

???「瑠奈さああああんっ！」

死創「！？」

大きな叫び声の方に死創と瑠奈は目を向けると、遠くに瑠璃と重山が居た

重山「烈火！お前の力はそれまでか！」

瑠璃「はあ…はあ、瑠奈、さんっ！私はっ…貴方を信じますっ！思い出してくださいっ！私たちとの、思い出をっ！有音さんっ！」

有音「は、はいっ！行きますよお！」

すると急に有音が現れ、ギターを構え、瑠璃はマイクを持つ。そして…

瑠璃 & amp; 有音「ソウルビート・ギャラクシー」！！」

音が衝撃波に、そしてその衝撃波が瑠璃のマイクに集まり、見えないう波動が瑠奈と死創に直撃。双方を吹き飛ばす。土煙があがる中…

重山「瑠璃様、さすがに無茶では…」

瑠璃「心を動かすには、言葉…、これしか無いと思ったんです。きつと…動きます！」

そして煙の中から死創が現れる。死創は怒りに満ちた顔で瑠璃達に近づく

死創「…ネズミが…やってくれるじゃねえか…！ぶっ殺される覚悟は出来てんだろっなあ…！」

だが瑠璃は逃げず、そこに佇む。それに重山達も同行する

重山「瑠璃様…！」

瑠璃「…信じるんです…信じるんです…！」

有音「…はい…！」

そして死創の剣が振りかぶられる

瑠璃「瑠奈さん…！私…信じてます！」

死創「死ねえええ！」

そして剣が振り下ろされる。だがその剣は瑠璃を斬ることが出来なかつた

死創「…な…！？」

瑠璃「…信じてましたよ…瑠奈さん！」

「…？」「…さすがだな、瑠璃。よく信じてくれた！」

死創の前には瑠奈が剣を受け止め、鏝迫り合いになっていたのだ

死創「…！！」

重山「…ふっ、さすがにやってくれるな、烈火あ…！」

有音「噂通りの人間ですね」

瑠璃「…瑠奈さん、おかえりなさい！」

瑠奈「へっ…ただいまは…こいつをぶっ飛ばしてからだ！」

そして死創を弾く。すると瑠奈と瑠璃の周りが光を包む

重山「！？…何だ？」

死創「…この、力は…！」

瑠璃「…瑠奈さん…私の力…貴方に預けます…！」

瑠奈「…分かつたぜ」

そして瑠璃から刃の無い剣を手渡される瑠奈。その剣を天に掲げ…

瑠奈「リカスタマイズ・シャイン変転詩・聖”…！」

そして瑠奈と瑠璃が完全に光に包まれ、瑠奈一人が現れた。だが、あまりの容姿の変貌に周りの人間が驚くことになる…

死創「…貴様…なんだその力はああ…！」

重山「…瑠璃、様…！貴女にはこんな…力が…」

有音「…が、頑張つてね瑠璃さん…。貴女の想いが、力に変わりま

すからね…」

90話：次幕予告（土屋、風野編）

土屋「ダツシヤアア！」

風野「なんだなんだ！？いきなり変な声を出すなジジイ！」

土屋「ジジイとは失礼だな、小わっぱ！」

風野「うるせえっ！なんならやるかコラあっ！」

土屋「やるのは構わんが、ワシは読者に次幕予告をせねばならぬ。それが終わるまで待て」

風野「お、おい！俺にも今回その役が回ってきてんだ。俺にもやらせる！」

土屋「分かった、じゃあお主に任せる」

風野「オーケー！じゃ、次幕の話だな！次幕から全員の共通の話になる！（これを本編って言うのか？）記憶を取り戻した烈火を中心に創成軍にとうとう反撃を開始するぜ！」

土屋「だが相手の軍も並ではない。これからの戦いは長くなる」

風野「果たして烈火達は創成軍から暁町を解放することが出来るか！？これからの焦点はそこだな」

土屋「そして長らく書いてなかったアナザーストーリー、次話から数話入れる予定になっておる。内容は”暁学園学校祭”、”地下新組織主催野球大会”、”瑠奈を狙う乙女達！”の三本立てにする予定だ」

風野「興味が泣ければ本編があがるまで首を長くして待つてくれ！じゃあ、次幕へ…ブツ飛べえ！」

〓 予告 〓

瑠奈「…」

重山「…れ、烈火…！そ、その姿…」

死剣「…貴様…聖なる力の…騎士…」

瑠奈「…」

有音「覚醒するんですね…二人で1つ…」希望”の力…ここに…！」

重山「お、お前、何を…」

有音「さあ…烈火さん。剣が宿った剣…エクスカリバーで敵を凧ぎ
払って下さい！」

重山「！！エクスカリバーだと！？」

死剣「…いよいよ本気だな…聖者」

瑠奈「はあああああつ！行くぜ！これが…俺の、俺たちのおお
つ！」

瑠奈 & amp・瑠璃「勝利の剣^{ウイニングフレイド}」 おおっ！！！」

アナザーストーリー5話 「暁学園学校祭」

「暁学園」

学生「いらつしやい、いらつしやい！」

瑠璃「あ、飛鳥〜 こつちこつちい」

重山「は、はいはい瑠璃様！今向かいますっ！」

皆さん、始めまして 私は光瑠璃って言います。今日は暁大学で学校祭って言う行事があるみたいで瑠奈さんから招待状が来たので地下の皆で来てます（零さん、夢村さんの行方が分からないので二人は居ないんですけど…）

風野「つたく…いつまで堅苦しくしてるつもりだ？」

重山「何を言うか！瑠璃様は今でも地下の姫君だぞ！？」

風野「だが今の地下の統治者はお前、違うか？」

重山「そ、それはそうだが…」

瑠璃「も〜！早く行きましょ？」

風野さんと飛鳥は神民戦争の後スツゴい仲良くなりました。…なんか少し悔しいです。私も瑠奈さんともっと仲良くなりたいなあ…

「暁学園、2 A」

まず私たちが訪れたのは一年生…灼沢さんの居る教室です。本編には無いですが、実は灼沢さんは今暁学園に転校生として入学して、今は一年生の首席見たいです。…頭いいんだなあ…。瑠奈さんって、頭いい人好きなのかなあ…

灼沢「あ、瑠璃さん。それに皆さんも！」

重山「灼沢か、久しぶりだな」

風野「なんかうまそうな匂いだなあ？」

灼沢「そりゃそうだよ！私たちの出店は炒飯専門店なんだし！」

重山「炒飯？それ、随分手抜きな店だな…」

灼沢「そう思うでしょ？でもね…好きな食材を選んで、自分だけの炒飯が食べれるって斬新じゃない？」

瑠璃「へえ…おもしろそうですねえ？…食べてきましょ？」

風野「…そだな」

そして私たち三人はそこで炒飯を食べ、灼沢さんに瑠奈さん達の教室の場所を聞きました

灼沢「3 Bだと思いますよ？で、私も今から休みなんで私も行きたいんですけど…ついていっていいですか？」

なんか申し訳なさそうに私に聞いてくる灼沢さん。なんでそんなに低姿勢なんだろう…？

瑠璃「じゃ、今度は3 Bいってみよお」

〓 暁大学、3 B 〓

灼沢さんの話した通り3 Bの教室に来たのはいいんだけど、肝心の瑠奈さんが居ません。その代わり同じクラスの日向さん、泉野さんが居ました。日向さん達なら分かるかな…？でも…なんか…

瑠璃「こ、これって…」

重山「お化け屋敷…ですね」

風野「へえ…おもしろそうじゃねえか？」

灼沢「…！！」

日向「あ、いらっしやい皆！瑠奈から話は聞いてるよ」

泉野「…楽しんでって」

どうやら瑠奈さんはここには居ないみたい。…ん、でも下手に動くのもあれだし、ここで待ってるのも…ん

風野「とりあえず、入らね？なんか…楽しそうだしよ？」

風野さんがその様な提案を持ちかけて来ました。ですが皆の反応はばらばらでした。風野さんは乗り気だったんですが、飛鳥と灼沢さんは

重山「ま、まあ、私は怖くはないんですけど、瑠璃様が怖がるのは……」

灼沢「お兄ちゃん…騙したなあ…」

飛鳥は私を気遣ってるみたいだし、灼沢さんはもう今にも泣き出しそう。…怖いものは私も得意じゃないけどね？

瑠璃「なら、とりあえず別の場所で時間潰しますか？もしかしたらこちらがフラフラしてたら偶然会えるかも知れませんが…」

実は瑠奈さんに会いたい理由は私の私的な理由だけじゃないんです。実はこの学校祭の夜にイベントがあつて（飛鳥達に聞いても内容は知らないみたいです…）それに出るために一度瑠奈さんの所に行かなきゃいけないんですよ

日向「およ？入らないの？」

泉野「…たのしーよ」

瑠璃「あ、でもですね、あまり灼沢さんに時間があまりないみたいなんで…とにかく瑠奈さんを探さなきゃ」

日向「瑠奈を探してるのか…じゃ、1つ頼まれてくれない？瑠奈を見つけたら、私たちの所にも連れてきて？何でか知らないけど、私たちも呼ばれてるのよね…」

瑠璃「あ、はい、分かりましたよ」

そして日向さん、泉野さんと別れ、私たち四人はぶらつくことにしました。まあぶらつくって言うっても、食べてばかりでしたけど、てへへ…

〓 暁学園、体育館 〓

大体教室を見て回って、後行っていない所は体育館だけだったんで体育館に行くことになりました。そこでは有音さん（先程神民戦争後とあったんですけど、今の時勢は創成軍との戦いの最中だったんです）がライブをしてました。やっぱり有音さんは歌がうまいなあ…。…ん？有音さん、なんでここに居るんだろ？

有音「ハアイ！皆乗ってるう！？」

学生「イエー！！」

有音「まだ元気かあいつ！？」

学生「イエー！！」

有音「じゃあそのボルテージのまま、ラストに突入だああ！！」
そして最後の曲に突入した有音さん。…ん、本当になんで有音さん居るんだろ…

重山「いい歌ですね、瑠璃様」

瑠璃「うん、そうだね…」

風野「…光？」

瑠璃「はい？」

風野「烈火の奴、多分このフロアにいる、間違いないと思うぜ？」

瑠璃「え！？ほ、本当ですか！？」

風野「声がでけえよ！…室内の温度がこの場所に来てから微かに妙だ。人が多いだけでこの温度になるとは思えねえから…」

瑠璃「確かに暑いですけど…」

風野「ま、とりあえず今は有音のライブを楽しもうじゃねえか？こんな機会、そうそうないぜ？」

瑠璃「は、はい！」

そして大体五分過ぎたくらいで有音さんの最後の曲が終わり…

有音「皆ありがとおおっ！！」

学生「わあああっ！！」

有音「それでね？皆にはもう少しだけ付き合っただけ付き合っただけ…いいかな？」

学生「いいよーっ！！」

有音「それじゃ、パフォーマンススターイムッ！」

するとステージ上へ上がる人影…あ！

瑠璃「瑠奈さん！？」

まさかでした…ステージ上には瑠奈さんが居たんです！刀ももって

…まさか…力を使う気ですかね？

重山「あの馬鹿…そういやそうだったな」

瑠璃「？なんなんですか…？」

灼沢「烈火家一門って剣の扱いに長けてるのと同時に、花火師でもあるんですよ」

瑠璃「はなびし？なんですかそれ…」

日向「花火師って、空に咲く花を作る人の事だよ」

瑠璃「へえ…って、日向さん!？」

日向「弥枝もいるよ？」

泉野「瑠璃さん…こんばんわ…」

瑠璃「弥枝さんも…貴女方はこの事知ってたんですか？」

日向「いや？まさかアイツが花火ねえ…」

泉野「…始まる」

瑠璃「？」

すると瑠璃さんが刀と…爆弾？を取り出しました。花火ってなんなんですよ…？

瑠奈「皆！！待たせたな…学校祭ファイナーは、俺の力で決めるぜ！」

学生「力ってなんだ？」

学生「花火のどこにそんな…」

そして瑠奈さんはその爆弾を地面に置き、刀を突き刺す。そして…力を解放させました！

瑠奈「崩壊花火・噴水玩具」！吹き出せええっ！」

その瞬間、沢山の火花が、色んな色の火花が、噴水のように吹き出していました。それも沢山の数…キレイ…

日向「いやあ…最高のしまり具合だね」

瑠璃「キレイ」

重山「粹な事…だが、一興だな！」

観客の皆さんが感嘆の声をあげています。さすがです、瑠奈さん…

瑠奈「これで暁学園学校祭を終了するぜええ！」

これで学校祭のイベントは終了しました。そしてその日の時間が過ぎ…

「暁学園、屋上」

瑠璃「…」

私はあの後瑠奈さんに呼ばれて屋上に来たんですが…何故かまだ瑠奈さんは来てません…何ででしょう？

瑠璃「でも…瑠奈さんはあれくらいの仕掛けをやってるんですから、疲れてるでしょうし…」

瑠奈「あまり適当な言い訳作んなよ」

そこに瑠奈さんが来ました。手には…爆弾？

瑠奈「お前なあ…まだこれ爆弾って思ってたねえか？」

瑠璃「…ハナビ、でしたっけ？」

瑠奈「そうだ。…ちと、新作をな、作ってみたわけなんだが…まあ、なんだ、その…見てみてくれねえかなって…な」

そしてあの時と同じ様にばくだ…いや、ハナビを床に置き、刀を構えました

瑠璃「で、でも…皆も居た方がいいんじゃない…」

瑠奈「バーカ、気付きやがれよ。…瑠璃、お前の為の花火だ」

そして刀を突き刺すと、そのハナビが吹き出しましたが、またそれがとても…キレイ…。虹色に輝いて…小さいながらアーチを架けてました

瑠璃「…うわあ…」

瑠奈「…そして、外じゃなきゃ出来ない技を見せてやるよ！」

するともう一つハナビを取りだし、放り上げたハナビに飛び上がり、

斬りつけた瞬間大きな花が空に咲いたんです！……これが……ハナビ……！

瑠璃「……！」

瑠奈「よっ、と」

そして私の頭に手を置く瑠奈さん。……やっぱり、私の心は貴方にも

う……

瑠璃「……ありがとう……大好き……」

〓 完 〓

アナザーストーリー 6話：クリスタルケーキ作り！

「暁公園」

瑠奈「どりゃあああっ！」

重山「せええっ！」

：いきなりの叫び声で始まって悪いな。俺は瑠奈。今日も重山と模擬戦の最中なんだ

重山「甘いつ！」

瑠奈「っ!?!」

だが、まだまだ重山には勝てそうもない。手数、そして能力の扱いに長けてるからなあ。剣が弾かれてしまった

重山「……中々良くはなってるが……」

瑠奈「まだまだ……だな」

瑠璃「お疲れさまです 飛鳥、それに瑠奈さん」

瑠璃が冷えたタオルを俺たちに手渡してくる。ふう……気持ちいい

重山「じゃ、悪いが私は先にあがる。休んでからでいいから瑠璃様を連れて来てくれ」

瑠奈「はあ？いつもならお前が連れてくじゃねえか……」

重山「私は野暮用があつてな……じゃ、頼むぞ？」

そして重山が先に帰っていった。……瑠璃と二人か

瑠奈「……」

瑠璃「??」

：慣れねえ。いつもは俺、重山、瑠璃と三人だったからなあ……

瑠璃「あの……瑠奈さん？」

瑠奈「ん？あ、ああ、なした？」

瑠璃「あのですね？私、飛鳥においしいケーキ屋さんがあるって聞いて……行ってきなさいって言われてるんですけど……」

そついうことか。重山…余計なことを

瑠璃「行きませんか？」

瑠奈「ん！？あ、え」と…」

別に甘いものは嫌いじゃない。むしろ好きだ。だがこのシチュエー
ションって…デート、って奴か？

瑠璃「…？」

瑠奈「…分かった。連れてつてくれるか？」

そして俺と瑠璃のケーキデートが始まる…筈だった

〓イオシス、夢村家〓

瑠奈「はあ！？材料が足りねえ！？」

夢村「そゝなのよ…困ってるのよねえ」

瑠璃「ん…」

そのケーキ屋は夢村の家にあつたんだが、そのおすすめのケーキ（
クリスタルモンブランと言うらしいが）の材料、クリスタルマロン
が不足してるらしい。そしてそのクリスタルマロンはスラムグラン
ドの郊外の、クリスタルクラーケンの住み処に生えてるらしい。…
こりゃ、面倒なフラグだな

瑠璃「だったら私たちで取りに行けばいいんですよ　ね、瑠奈さん
？」

夢村「あら、頼まれてくれるの？助かるわあ」

瑠奈「…やっぱりそうなるか。…はあ…分かったよ、行ってくる」

瑠璃「私もお供します　力も使えますし…」

昔の瑠璃ならすぐ断る申し出なんだが、最近の瑠璃は何かと強いん
だよなあ…

瑠奈「ああ、だが自分の身は自分で守れよ？」

瑠璃「はいっ！えへへ、デートですね」

夢村「ガンバってね」

〓スラムグランド郊外、クリスタルグローブ〓

瑠璃「…キレイ…」

瑠奈「なんだよ…全部がクリスタルか？」

俺と瑠璃はクリスタルグローブって森にはいつて、クリスタルマロ
ンを探しに来た。そこら中にある植物は全部クリスタルって鉱物で
出来ていた

瑠璃「こんな所にそんなイカさんいるんですかね？」

瑠奈「さあな。どの道俺らの目的は栗拾いだ。イカには合わないに
越したことはないだろ」

そうだ、イカには俺、前回は負けかけた。だからあまり会いたくな
いんだ

瑠璃「あ、あれ…栗ですかね？」

瑠璃が指を指した先にはこれまたクリスタルで出来た栗の木があった

瑠璃「じゃあ拾いませよ？ 沢山拾って夢村さんを驚かせませよ」

瑠奈「ああ。…しっかし…これが本当に食えるのかよ？」

殻を剥いて中身を取り出すが、中身も透き通ったクリスタルで出来
てたのだ

瑠璃「よおし…こんなものでいいですかね？」

そして結構な数を拾い、その場を後にする俺と瑠璃。…なんかつま
らん。と、その時、お約束かのような地震が起き、後ろからクリス
タルクレーケンが現れた

瑠璃「…！」

瑠奈「はあ…またいいタイミングで出やがるな、クソ野郎が。…瑠
璃、先に戻ってくれ」

瑠璃「え！？でも…」

瑠奈「つべこべ言うな！もしその栗がバラバラになったら、また拾
うの苦労するぜ？」

瑠璃「でも戦力は」

瑠奈「こんな奴俺一人で十分だ。俺を誰だと思っていやがる？」

瑠璃「…分かりました。じゃあ、ケーキを用意して待ってますね？」

そして瑠璃が戦場から離脱する。この場には俺とイカのみになった

瑠奈「ふう…正直またお前とやることになるとは思わなかったぜ…。

だが悪いな、昔の俺とは違うんだ。…せえええいっ！！」

俺は力を解放し敵目掛けて走る。そう…俺の力は前とは違うんだ！！
オオオツ！

だがそうはうまく行かない。イカ野郎は触手を動かし抵抗してくる。

…ち、ちくしよ…邪魔くせえ、だが俺の剣撃は零の銃撃と違ってそこまで精密的じゃねえからな…

瑠奈「だったら…飛んで、一撃で仕留めるか！…烈火流剣術！」不
死鳥天昇斬”！！」

そして刀を前につきだし、相手の目玉に刀を突き刺した！…目玉は
さすがにクリスタルでは出来てないだろ…勝負、ありだ！

グアオオオン！

そしてイカ野郎は無惨に崩れ落ちた。…へっ、こんな屑、相手にし
てねーよ

瑠奈「…ん？…中々キレイだな、この景色…」

イカ野郎が砕けたから周りにクリスタルが散乱、それに人工太陽の
光が当たって辺り一面が光の海になってやがる。…よし

瑠奈「ちよいと細工してやる、か…」

〓イオシス、夢村家〓

瑠奈「…ただいまっ」と

瑠璃「あ、お帰りなさい、瑠奈さん！」

夢村「あら…随分と帰ってくるのに時間がかかったわね。…苦戦し
たの？」

瑠奈「そんなんじゃないよ、あんなの物の数に入るわけがねえ」

夢村の指摘は鋭かった。狩りに出掛けたのは朝、だが今はとうに日

が暮れてる。…誤魔化しは中々利きようがないよな

瑠奈「ちよつとこれを、な」

そして俺はあのイカ野郎の破片を集め、イオシスの鍛冶屋の所で作った…イヤリングを持ち出した。…一応二人分作ったから時間かかったんだぞ

夢村「あら、私たちに？」

瑠璃「うわぁ…ありがとうございますう」

早速二人はそれを身に付ける。…さすが、俺らの中の女子達の中でもトップクラスだからな、似合いやがるな

瑠璃「じゃあ、お返しと言っではなんですけど…はいっ」

すると瑠璃は俺にあのケーキ…クリスタルケーキを差し出してきた瑠璃「ま、まあ私は作り方を知らないの、夢村さんに作ってもらったんですけどね？」

夢村「しばらく振りのクリスタルモンブラン…腕を奮ったわよ？」

そして皆で食べる事になり、三人で口に運ぶ。…なんたる、モンブランの食感とはなんか違う…シャリシャリとした感じ。…それにこのさっぱりとした甘味。…うまい

瑠奈「…」

瑠璃「おいしいです」

夢村「ふむ、悪くない…」

「暁町、市街地」

瑠奈「…行くぜ、エクスカリバー。俺に力を…！」

死創「…やっと本気が、聖騎士…」

重山「…あの剣がエクスカリバー、それに…瑠奈の…あの姿…」

暁町では瑠璃が”変転詩・聖”により憑依した瑠奈が、そして創成軍大将の死創が戦っていた。その中重山、有音は近づけないでいた

重山「…あの剣は…」

有音「重山さん？どうかしたんですか…？」

重山「有音、私たちは出来るだけここを離れるぞ、命が幾つあっても足りない！合流出来る仲間にも伝えて回れ！」

有音「え！？で、でも…」

重山「早くしろ！死にたいのか!？」

有音「…は、はい!」

そして重山は瑠奈に右手側の手袋を渡した

瑠奈「…話が分かるじゃねえかよ。重山…いや、飛鳥」

重山「…武運、祈る」

瑠奈「ああ、そうだ…悪いが万が一の時は瑠璃を頼む。そんなときや空に花火でも打って知らせるからよ」

重山「!…お前、まさか伝説を…」

瑠奈「…俺を誰だと思ってやがる、烈火家の息子だぜ?…知っててもやるしかねえ。これしか…ねえからな」

重山「…分かった」

そして重山、有音が去った。その場には瑠奈、死創が残る

死創「仲間を逃がすか…それも一興だな」

瑠奈「そうでもしなきゃ、満足に戦うことも出来ないんだわ…行くぜ、死創!」

死創「来い！お前のその光、摘み取ってくれるわあ！！」

そして瑠奈と死創が互いの剣で光速の速さで斬り合う

瑠奈「…ちいつ！！」

死創「はあぁっ！！」

瑠奈「悪いな死創…お前を倒さなきゃ平和は無さそうなんだ…だから殺す！」

死創「失われた能力者の誇りを示す為に、お前を…討つ！」

そして両者若干の間合いを取り、今度は能力を撃ち合う

瑠奈「”聖砲・突”！！」

死創「”エビル・オブ・ダークネス”！！」

だがその力も互角。そしてまた鏝迫り合いを始める

瑠奈「…お前には、負けられないんだよ！！」

死創「ほう…お前を突き動かすは義か、愛か、またそれ以外か…興味深いな！」

急に死創が瑠奈の懐に飛び込む。そして素手で殴りかかったので瑠奈は鞘で防いだその時だった。瑠奈の鞘は一瞬のうちに防御した部分がきれいに無くなったのだ

瑠奈「…！！」

死創「俺は死を司る者…物質を死に追いやる事は私の専売特許だ。

…無論人も所詮は物質、原理は同じだよ」

瑠奈「くそっ！」

瑠奈は慌てて距離を取り

瑠奈「…お前、人は物質ならお前自身は人間じゃねえって言うのか！」

死創「左様。俺はもう既に屍だ。屍は消えぬ」

物質を分解する死創に瑠奈はどう戦っていくのか…

92話：バ力野郎

「暁学園、市街」

死創「俺を殺すのは無理な話だ。俺の身体は既に朽ちた。死を許されぬ身体なのだ」

瑠奈「…生ける屍か」

瑠奈と死創との最中、死創は既に死人であることが本人の口から語られる。その言葉を聞いた瑠奈はさらに剣に力を集め、一撃で仕留めようと剣を振るった。だが死創にはそれをいなすようにかわすのだった

瑠奈「…！」

死創「悟ったか？お前達では我を倒せぬ。諦めて投降せよ。…お前の力は世界を掌握出来るのでな」

瑠奈「誰が降るかよ…お前に降るくらいなら死んだ方がマシだ！」
そしてさらに剣を振るうが、死創は全てかわす。少しずつ瑠奈の息が上がってきた

瑠奈「…つつ…はあっ…」死創「こうしてる間にもお前達の仲間は少しずつ蝕まれていくだろうな」

瑠奈「…！…どういう事だ…」

死創「今やこの町は我が手中にあるのだ。…伏兵を伏せることくらい容易いだろう？それにお前達の仲間はけしてお前たちを見捨てない…」

瑠奈「くそっ…重山達がアブねえってのか…！」

死創「だが悲しいかな、お前は其奴等の救援には行けぬ。我がいる限りはな」

瑠奈「…っ…！」

「暁学園郊外」

重山「…さすが敵の大将。伏兵を伏せていたか」

灼沢「ちよつと！感心してる場合じゃない！」

そのころ重山達は話の通り既に隊がばらばらになった状態で伏兵の奇襲を受けていた。今存在が確認できるのは重山と灼沢の二人である
重山「今は時間が惜しい。なんとかして瑠璃様の元へ戻らねばっ…
！！」

灼沢「でもこの数のゾンビ、どうするのさ!？」

重山「…下手に大技を使えば味方を巻き込むかも知れない。だが何もせずやられたくもない…となると、…頼むぜ、零！双葉！」

すると木陰から現れた零と双葉が凄い速さで敵を倒していった

零「…よく気付いたな」

双葉「私は忍…気配を消したつもりだが」

重山「うるさい！この状態で力を出し惜しみする場合じゃない！…力を貸せ！」

聖沢「だったら私はあちらに向かってもいいかしら？」

そこに聖沢も合流したが、聖沢は瑠奈達に合流したいと申し出た

重山「何を言い出すかと思えば…、今この状態が分からないか!？」

私たちも厳しい、そんなことしてる場合じゃ…」

聖沢「死創を倒す鍵、持ってきたわよ？」

重山「!？」

聖沢「…いいかしら」

重山「…頼む」

聖沢「じゃ、行ってくるわね」

そして聖沢は瑠奈達の居る市街地へ向かう…

〓 暁町、市街地 〓

瑠奈「ぐあぁっ!！」

死創「…」

この場の戦いは終結へ向かっていった。瑠奈は少しずつ死創に押さ

れているのだった

瑠奈「くそ……」

死創「その様子だと鍵は揃ってないんだな」

瑠奈「…鍵？」

死創「ふ…皮肉なものだな。その鍵の内の1つを見つけたと言っているの有り様か」

瑠奈「お前…何が言いたい!!」

死創「巫女は一人じゃない。…そういえば分かるな？」

瑠奈「…一人じゃない、だと？」

死創「死ね」

瑠奈が油断したその隙だった。死創が急速に接近し、死創の腕が瑠奈を貫通したのだった

瑠奈「つつ…うあああつ!!」

そのダメージで瑠奈と瑠璃は分離したのだが、瑠璃は振り落とされるのだった

瑠璃「きゃあつ!!」

瑠奈「つつああつ!!」

瑠璃「!? 瑠奈さんっ?」死創「ほう…ダメージをお前自身に集中させることにより巫女を守るか…。器用な真似をしたものだな」

瑠奈「…つくつ…」

瑠璃「なんで…毎回無茶するんですっ!!」

瑠奈「…はあ？」

瑠璃「瑠奈さん、貴方は…」

瑠璃& amp; 聖澤「バカ野郎だあつ!!」

瑠璃「…! 聖澤さん!」

聖澤「貴女の言う通り、烈火は猛烈なバカね。大バカね」

瑠奈「そ、それが今死にそんな仲間に言う言葉か!？」

聖澤「悔しかつたらエクスカリバーを使いこなして見せなさいよ。力は貸すから」

瑠奈「…へっ…！」

瑠奈は力を集中し、死創の腕から逃れた。身体からは血が溢れるが、まだ意識ははつきりしていた

瑠奈「…巫女は一人じゃない…その意味はそれか」

聖澤「さすが、気付いたわね」

瑠璃「聖剣エクスカリバーは二人の巫女の力、そして騎士の力により解放されるんですね」

死創「ふん…さすがは巫女。察するのが早いな」

瑠奈「だったら瑠璃！聖澤！力を貸せ！！」

そして再びエクスカリバーを天にかざす。瑠奈の右腕に聖澤、左腕に瑠璃が抱きつき…

聖澤「行くわ！」

瑠璃「聖剣の力、今ここに！！」

瑠奈「おおおおおっ！！」

エクスカリバーは凄く巨大な剣と化した。それで死創に斬りかかる

瑠奈「食らえええっ！！」

死創「…ふっ」

剣の光は死創を飲み込み、光が消えると死創の姿はそこには無かった

瑠奈「…この力…果てしないな」

瑠璃「そうで…す…！？」

聖澤「烈火！お前、まさか…」

だが、ここで瑠奈の身体に異変が起きた。死創の攻撃の傷は癒えたのだが、なぜか瑠奈の身体が消え始めていたのだった

瑠奈「な、なんだ…こりゃ…！？」

93話：死のカウントダウンゲーム、開始

「暁町、市街地」

瑠奈「な、なんだ、これ…」

瑠璃「きえ…る…?」

瑠奈は死創を退けた。だがその後瑠奈自身が一瞬消えかかり、その場に瑠奈は倒れたのだった

瑠璃「瑠奈さんっ!？」

聖澤「…まずいな」

瑠璃「…聖、どうということ」

聖澤「死創の特殊能力、それは物質の死を与えるもの。それはヒトも例外ではない」

瑠璃「けど同じ攻撃を受けた私は今何も起きてないですよ!？」

聖澤「たしか烈火は（俺にダメージを一点集中させた）ようだからな。多分瑠璃には変化は見られないだろうな」

瑠璃「瑠奈さん!!瑠奈さん!!」

瑠奈「…うう…」

瑠璃の呼び掛けも虚しく、瑠奈は苦しいのか、かすかな唸り声をあげるのが精一杯の様だった。そして時々、瑠奈の姿が透明になるのを二人は確認した

瑠璃「…ということとは」

聖澤「物質の死。それはこの世からの消滅を意味するな」

瑠璃「それに今、瑠奈さんは抗ってる…」

聖澤「髪の色が戻らないということは多分そうだろうな」

聖澤の言う通り、瑠奈の手の甲の字は消えているものの、能力が解放されているのが見てとれた

瑠璃「ということは、瑠奈さんの力が消えた瞬間に…」

聖澤「烈火自身の消滅、ということになるな」

瑠璃「：！！」

聖澤「とにかく瑠奈を安静に出来る場所に連れていこう。まずはそれからだ。それに散り散りになった仲間も合流できる人が居たらその人たちも回収していこう。いいね？」

瑠璃「：瑠奈さん……」

「？？？？」

死創「：さすがは聖騎士。威力は充分だったな」

ある場所に帰ってきた死創は瑠奈の攻撃により失った右腕の箇所を眺めながら

死創「だがその騎士も今は死へのカウントダウンが始まってる頃だろうな……闇本、操、木山田、雪璽」

そこに四人の能力者が集まる

死創「今こそ好機だ。散り散りになった地上、地下の戦士達、そして地上人を殺せ。我らの悲願、能力者の解放、そして牙獣の復活の為に」

「新組織、瑠璃の部屋」

瑠璃達は安静の場所を探したが地上では見つからず、とりあえず聖澤は大門を呼び出し新組織で休ませる事になったのだ

瑠奈「：う……あ……」

瑠璃「酷い熱……」

聖澤「無理もないな、元々炎の能力者でもあるからな……」

瑠璃「：皆、どこに行っただんでしょね」

実はここに来る前に一人でも多くの仲間と合流しようと暁町を探し回ったが、誰一人として見つからなかったのだ

聖澤「正直お手上げだな。今の状態で創成軍に攻めこまれたら次こ

そ世界は終わる」

瑠璃「…」

「???」「有紀、らしくないね。そんな弱気な発言、生前の僕の前では聞いたことないよ」

聖澤「!!!?」

瑠璃「…誰…?」

聖澤と瑠璃はドアに目をやる。そのドアが開き、現れた人物はなんと、死んだはずの天導誘貴だったのだ

天導「やあ光のお嬢さん。生身の僕と会うのは何年ぶりだろうね」

瑠璃「…」

聖澤「私の兄は死んだ。お前は偽物だろう!」

天導の出現により動揺した聖澤が声を荒げる

天導「おいおい、久しぶりの兄妹の再開なんだ。もう少し嬉しそうにしたらどうだい?」

聖澤「黙れ化け猫!」

すかさず聖澤は手元の鎌を振るう。だが天導はそれをトンファーで防いだのだった

聖澤「!!!」

天導「まだ疑うかい?」

瑠璃「…天導さん。瑠奈さんを…救う方法を知りませんか」

天導「烈火君を…?烈火君に、なにかあったのかい?」

瑠璃「…」

瑠璃と聖澤は瑠奈が死創の攻撃を受け、今苦しんでいるという話をすると天導は考え込んだ。そしてある話を持ち出してきたのだ

天導「時に瑠璃さん、あなたは変転詩を使うのは初めてかい?」

瑠璃「え?ま、まあそうですね」

天導「ふむ、なんで今までやったこともないことを君たちは素直に出来たんだろう…私はそう感じるね」

瑠璃「あつ…」

聖澤「確かに…」

天導「多分烈火君の苦しみはあいつの攻撃によるものではなく、変転詩を使用したことによる反作用、と見ていいと思う」

瑠璃「でも、だとすると私に何も現れていないのは変じゃないですか？」

天導「烈火君はダメージなどを自分に一点集中させたって言ったみたんだけど、そんな芸当は能力者には不可能の筈だ。だから烈火君自身の予期せぬ出来事で全てが烈火君に集中した、と見た方がいいと思う」

聖澤「では烈火は助けられないのですか、兄さん」

天導「いや、それはないと思うよ。…数日、いや、数週間は絶対安静だろうけどね」

瑠璃「で、でも治るんですね？良かった…」

瑠奈「…」

天導「だけど気になるのは烈火君が時々透明になることだ。これは間違いなく物質の死を意味する…高熱とかでは無く、これは死創が原因。そしてこれを治すには死創を倒すしかないよ」

瑠璃「死創を倒す…ですか…」

天導「怖いかい？」

瑠璃「いや…やらなきゃいけないんです。怖いなんて言ってもらえせん！」

天導「ふ…いい目だよ。…やらなきゃいけないことは仲間の合流、そして死創を倒すこと、いいね？まずは地上へ赴くといいよ」

瑠璃「で、でも瑠奈さんは」

天導「烈火君は僕が看てるよ。少々なら医療の知識もあるしね」

瑠璃「分かりました、頼みます」

聖澤「…兄さん、行ってくるね」

天導「ああ、頼むよ有紀。しっかりサポートしてあげてね」

聖澤「私はもう有紀じゃない、聖澤聖よ」

天導「分かったよ、聖」

そして瑠璃と聖澤は地上へ仲間を探しに行った…

天導「…ふふ…愛の巫女は騎士を救えるかな？烈火君…君は彼女を信じれるかい？」

瑠奈「…」

天導「ふ、聞こえないよね。さ、僕は僕でやることをやらなきゃね…灼熱の不死鳥、これが君の力に変える為に…」

94話…犠牲者

「春間町、美術館」

聖澤「さて…どうしようか」

天尊に背中を押され地上に出た瑠璃と聖澤。まずはちりじりになった仲間に合流するためまずは比較的被害の小さい春間町を探索することになった。しかし当てもなくの探索はやはり効率も悪く、一向に仲間は見つからなかった

瑠璃「…ふう…」

聖澤「瑠璃、少し休む？」

瑠璃「いえ…こうしてる間にも瑠奈さんは…」

聖澤「信じなさいよ」

瑠璃「…え…」

瑠璃にとつては不意打ちな言葉だった。聖澤がそのような事をいうと思わなかったからだ

聖澤「瑠璃と烈火、貴方達は幾多の苦難を乗り越えてきた…でしょ？それだけ深い絆があるなら信じれるでしょ？…烈火は、大丈夫。

彼はそう簡単に死にはしない。むしろ今貴女に倒れられたら烈火も気の毒でしょうし」

瑠璃「わ、分かりました…休みましょう？」

そして近くのベンチに腰かける。周りは創成軍の侵攻のせいで人影がなかった

聖澤「…春間町に必ず誰か居るはずよ」

瑠璃「え？…何故それを」

聖澤「だって…聞こえないかしら？」

瑠璃は耳をすませると、何やら怒声が聞こえてきた

瑠璃「…！」

聖澤「…やはり、ね。ここで耐えてる人が居る。でなきゃ私たちが

来た瞬間に襲われていただろうし……」

瑠璃「行きましよう……少しでも戦況を覆しましよう！」

「春間町、春間駅」

重山「皆耐えろ！！ここを破られたらこの民の命が危ない！」

日向「そんなこと言っただって……さすがにこの人数じゃ無理があるっ
！！」

春間町の駅では重山、日向を筆頭とした少数の能力者軍が創成軍と戦っていた

重山「無理でもやるんだ！！地上を突破されたら我らは敗けた！」

日向「ちくしょーっ！なんでこんな時に皆が散らば……」

瑠璃「裁きの一閃」！！」

聖澤「セイントフラッシュ」

そこに瑠璃と聖澤が割って入る

瑠璃「飛鳥！よく無事で……！」

重山「瑠璃様……！烈火は……？」

瑠璃「一刻も惜しい状態です……だから力を貸してください！今一人でも戦力が必要なんです！」

日向「へっ、当然でしょ！？瑠奈は皆にとって大事な仲間、見捨て
るわけ無いじゃん！！」

重山「お前達！！今こちらには姫様が来たぞ！」

民「な、なんだと！？」

瑠璃「皆さん！！今、私の、いや、皆のかけがえの無い人の命が危
ないんです。その人を助けるためには創成軍を倒さなきゃ行けませ
ん。それはとても難しいんですけど、皆さんが力を貸してくれたら
私は出来るって信じてます……！お願いします！力を貸してください
！！」

瑠璃が力一杯民に頭を下げる。すると民の士気は一気にあがり、そ
の場を盛り返し始めた

民「姫様があんなに一生懸命になる人だ！その人が死んだら姫様は悲しむ！そんなのさせてたまるかあつ！」

瑠璃「…皆…！」

日向「全く、負けたよ、瑠璃ちゃん。…もう私に入る余地は無さそう、ちよつとだけ悔しいな。…でもあたしも瑠奈が大事なの！それを示してやるうっ！」

そしてこの場の戦闘は勝利を収めた…

瑠璃「やった…勝ちました！」

重山「さすが瑠璃様…飛鳥、感激です！」

だがここに何やら悔しそうな表情の男からの伝令が入る

民「あ、飛鳥様…瑠璃様…」

瑠璃「？」

重山「なんだ？何があつた」

民「も、申し上げます…春間町美術館に伏兵が居て、そこで戦闘があつたのですが我が軍は勝利。…ですが、飛鳥様、瑠璃様の連れの…雷様が…戦死…そして…土屋老が瀕死の重症であります！」

重山「…！」

瑠璃「…う…そ…」

聖澤「私たちが来たときに兵が居なかつたのはこれのせいか…」

民「…土屋老から、瑠璃様への預かりものです…」

そして民は今にも泣き崩れそうな瑠璃の手に二つの石が手渡された。だがそれは血にまみれ、真っ赤に染まっていた

日向「嘘…嘘でしょ…」

瑠璃「あ、あ…」

民「…土屋老と雷様の、思い出の品…二人のお守りだったそうです。今は瑠璃様に持って置いてほしい、との土屋老の…」

そう言い終わる前に、瑠璃が泣き崩れてしまった

瑠璃「嫌ああああああつ…！」

重山「…！！！」

日向「…なんで、こんな…」

聖澤「犠牲はつきものだけど、…やっぱりつらいものね…」
突然の雷の戦死。それはこれからの瑠璃を苦しめるには十分すぎるものだった…

95話…私は…誰一人として死んでほしくなかった！

〓春間町総合病院〓

瑠璃「土屋っ！！」

土屋「…おお、瑠璃姫ではないか。よくおいでなすった…」

雷の戦死報告を聞いた後、聖澤、重山、日向はその雷の場所へ、そして瑠璃は今、土屋の元へ来ていた

瑠璃「…あの…雷が…」

土屋「…戦死、か。武人としては本壊だろうが…雷はまだ幼い少女だった。やりたいことがまだあっただろうに…」

瑠璃「でも、貴方だつて酷い怪我を…！」

土屋「瑠璃姫よ。私がこの程度の傷で死ぬ男だと思われてるか？」

瑠璃「い、いえ…でも…」

瑠璃の心配は無理もない。土屋の斧の刃は砕けており、包帯には血が滲んでいたからだ。土屋はそれでもなお、瑠璃に対し気丈に振る舞う

土屋「雷は油断を付け入られた。相手に突出した能力者が居なかったからだろうが、さすがに雷は接近戦が主体、それくらいは分かっていただろうに…」

瑠璃「…私、誰にも死んでほしくなかった」

瑠璃が大粒の涙を流し、土屋に掴みかかる。そして大声で叫んだ

瑠璃「私はっ！！瑠璃さんの事はもちろん大事ですけど、皆さんも大事な仲間なんです！なのに…そんな冷たい言い方無いじゃないですか！！」

土屋「だが瑠璃姫、それが戦場なのだ。瑠璃姫も見てきたであろう？瑠璃が死創に負ける瞬間、民がやられる瞬間を…！このような状況下では自分の命は自分で守らざるを得ないのですよ…！！」

瑠璃「互いの命を、互いに助け合い、一人でも多くの命を救う…こ

れのどこが綺麗事なんですか！土屋、私は貴方に落胆してます！」

土屋「それが戦場なのだ！！今さら泣き言を言うな小娘！」

そして口論をしてると重山がこの場に着き、急いで瑠璃を抑え込んだ

瑠璃「飛鳥、離して！！私はあの人にまだ……！」

重山「雷は今ここでもめたところで生き返りませんよ」

瑠璃「……！！」

重山「ですが老、姫様がいう事ももつともです。老ほどの方がそのような発言をするとは実に不思議ですよ」

瑠璃「……私は、私はあつ……！！」

土屋「そうかも知れんな……ワシも歳をとってしまったせいで保守的になってしまったようだな……」

重山「ともかく我らは戦わねばなりません。土屋老、ある程度回復したら戦線に復帰し……」

だが素晴らしい終わる前にまた瑠璃が泣き出した

瑠璃「飛鳥！！もういいんです！土屋も失うわけにはいかないんです！もう復帰しないで！」

土屋「……瑠璃姫、気持ちはありがたいが我は武人、武人は姫の為に死ねるならば本望ですぞ」

瑠璃「……バカあつ……！！」

そして瑠璃は重山を振り払い、外に出てしまった

重山「あつ……！！瑠璃様！」

土屋「……飛鳥よ、瑠璃姫は人間的にも成長したのだな……」

重山「はい、……喜ばしい限りですが、烈火の存在が大きくなりすぎて少し怖いな」

土屋「……もう、ワシの出番は無いかもな」

重山「いや、守護騎士の立場は必要なくてもまだ、瑠璃様を守る義務はありそうですよ」

＝ 暁学園、屋上 ＝

瑠璃は病院を飛び出してふらふらしていたが、とうとう暁学園の屋上にたどり着いてしまった

瑠璃「…暁学園、ここが私と、瑠璃さんの、いや、今までの始まりの場所…」

闇本「ヒヒっ…そうだな」

瑠璃「っ！！」

そこに闇本が来た。既に闇本は臨戦態勢だった

瑠璃「…黙りなさい、紛い物」

闇本「そうつれないことを言うな…お前が居なかったら俺は生まれなかった。感謝してるんだぜ？あいつの戦闘能力は素晴らしい…」

そう話す闇本の頬を瑠璃の剣がかすめる。瑠璃も力を解放していた
瑠璃「…黙りなさいと言ったはずです。そして今すぐ私の前から消えなさい、目障りです」

闇本「瑠璃が居ない状態のお前に何が出来る。一介の姫ごときに止められる俺では無いぜ？」

瑠璃「…黙れ…黙れ…！！」

すると瑠璃の周りに黒いオーラが現れ始めた！その現象に闇本も後ずさる

闇本「…！！なんだこの力…常識を越えすぎだろ！」

瑠璃「…貴方が、瑠璃さんを傷つける輩…、私の前から消える…」

闇本「…はっ！…びっくりだなあ…俺の前でそんな口がほざけるなんてなあっ！」

そして闇本が剣を振り下ろすが、瑠璃が片手でその剣を受け止めたのだった

闇本「…！？バカな、そんな筈がっ…！」

闇本はその剣に力を込めるが、まるで吸い込まれるかの様に剣は無力化し、瑠璃が押さえてる部分が砂と化した

闇本「…バカな…！」

瑠璃「残念だ、私の忠告が聞けないとは思わなかった…失せよ、愚民よ」

闇本「…くそがあああつ！」

闇本が拳を振り上げた刹那、闇本の心臓部に禍々しいオーラを放つ光の剣が刺さったのだった

闇本「！！…っは…！」

瑠璃「無念だな…私の力を抑えるには力不足だったか……くたばれ」

そして瑠璃の剣が光を放ち、闇本を内部から砕いていった

闇本「ああああああつ！馬鹿なあああつ！」

瑠璃「…思い出したぞ、私の目的は…！」

瑠璃はなにかを呟きながらその場を去る。闇本は光に飲まれ、消え去っていた…

「新組織、瑠璃のへや」

瑠奈「…」

天導「…ヒトヲツクリシモノ」が動いたか……思ったより早かったよ

うだよ、烈火君」

瑠奈「…」

天導「まあ、まだ聞こえないよね。それに僕の話も理解は出来ないだろう。だが、もうすぐ最大の災厄が復活する。その時にそれを止めるのは多分君になると思うから、早く目覚めるといいね？」

96話…悟れ！己の力で出来ること

〓夏風町〓

創成軍「馬鹿なっ…小娘ごと…き…」

有音「…やっと終わったみたいですね…」

風野「その様だなあ…ふう、虫がわいたように出てきやがって…」

夏風町まで逃げた有音、風野にも創成軍の魔の手が迫っていたが、なんとか撃退し一息をついていた

有音「…お、お腹…空きましたね」

風野「あ？ああ…そういやそうだな。よし、そこら辺の飯屋の厨房借りて飯、作るか！」

有音「で、でもそれって盗みじゃ…」

風野「馬鹿ヤロ、こんだけ必死こいて戦ってんのに今さらそんな固いこと言う人なんざ居ねえよ！とつとと行くぞ、渚！」

有音「…なぎ、さ…？」

風野「あ…、有音、だったか。すまん」

有音「い、いや…下の名前で呼ばれなくて…」

風野「ん？そくなのか？ならいいが…」

〓夏風食堂〓

風野、有音の二人は今や無人となった食堂にあった食材を用いてラーメンを作り、食べることになった。風野は二人分を作り、テーブルに運ぶ

風野「はいよ。…塩でよかったか？」

有音「は、はい！大丈夫…ケホツ…」

風野「？さつきから大丈夫か？」

風野は気になっていた。先程の創成軍との交戦後から有音が咳き込

む姿を見ていたからだ

有音「だ、大丈夫です。気にしないで…ケホッ」

風野「オイオイ、とても大丈夫そうには見えないっての…。とにかく飯食い終わったら少しここで休むか」

有音「で、でも皆さんと早く合流しないと…」

風野「何時どこで追っ手が来るか分からねえ、俺らの味方が全員生存してるか分からねえ。そんな状況で闇雲に動いても仕方ねえよ。とにかく少し休む、いいな!？」

有音「は、はい…」

そして二人はここで一晚を過ごすことになった。そして明け方…

有音「…眠れない…ケホッ、ケホッ…。…?あの光…」

有音は咳のせいで寝付きが悪かったのでなんとなく外を見てると、北の方角で奇妙な光が現れたのが見えた

有音「…風野さん、風野さん…」

風野「んん…渚?いったい何だっただよこんな朝早く…」

有音「…光さん達が居る場所が分かったかも知れませんか…」

風野「光達の居場所が?…それ、信用していいんだな?」

有音「…自信はありませんが、そんな気がするんです」

風野「いいだろう。今からそこへ向かうか!」

そして有音と風野は準備を整え夏風町から出ようとしたりときだった。待ち伏せていた伏兵に見つかってしまったのだった

創成軍「”風”と”音”か…結構な出世の糧にはなるな…」

風野「てめえらの出世の為に死ぬほど俺らはお人好しじゃねえんだよ、なあ有音?」

有音「…」

異変があった。有音の顔の血の気が引いていたのだった

風野「…有音?大丈夫か?」

有音「…うっ…」

そして有音は既にもう意識は無く、その場に崩れたのだった…

風野「お、おい渚！？すっかりしやがれ！」

創成軍「ふっ…敵は一人のようだな」

創成軍「所詮は異端の軍…いずれ精神崩壊を起こすことぐらい分かることさ」

風野「てめえら、あまり簡単な考え方じゃねえか…。俺一人でもお前らの相手は容易いんだぜ？」

創成軍「…もう一人をかばいながらか？笑わせるな小僧」

風野「笑いたきや笑え。…確かにかばいながらは無理だが、一人じやなきや、大丈夫だ。…灼沢あああつ！！」

灼沢「…」フレア・ブラスタ”ああああ！”

だがそこで上空から灼沢が急降下し、刀から炎を噴射し創成軍を駆逐していった

創成軍「な、なんだこいつはっ！」

創成軍「怯むなっ！たかが相手は一人増えただけだあつ！」

風野「おいおい…お前ら馬鹿か？一人増えたら十分すぎるんだよ！

”由風衝烈波”！！」

創成軍「ぐああああつ！！」

そしてほぼ無傷で創成軍を打ち破った風野、灼沢は有音に寄り添う

風野「渚っ！！」

灼沢「有音さん！？どうしたの…」

有音「…あ…」

風野「渚！？大丈夫か！」

有音「う…あ…」

灼沢「有音さん…まさか…」

風野「おい…嘘だろ渚！お前の力はそれが出来なきやダメだろ？おい！何とか言えよ、渚あつ！」

有音「…う…うっ…」

灼沢「有音さん…もう力を使えないんですね…」

有音は力を得た代わりに、声を失うことになったのだ。だが実際有音の力は声が出せなきゃ意味がなく、有音は力を使えなくなっただけじゃなかった

風野「渚、俺に何か出来ることがあるか？…俺自身の能力は対価を払うタイプじゃないから、お前の苦しさは分からねえ…だが、お前の代わりに周りに意思を伝えてやる、だから…無理をすんなよ」

有音「…ん…」

そして有音は風野の左手を取り、何やら字を書いているようだった
灼沢「…何を？」

風野「…わ、た、し、も、ひ、か、り、さ、ん、の、と、こ、ろ、
へ…」

有音「ん…」

風野「…当たり前だ、渚。俺らは仲間だ。置いていくわけ無いだろ？」

有音「…」

灼沢「じゃあとりあえずは、光さんのところですね？」

風野「渚は北の方を指差していた。多分春間町だな。…行くぞ！」

97話…二人で1つ／伝説の牙獣／取り込まれし愛の巫女

〓 暁学園、屋上 〓

瑠璃「…真の力が解き放たれし時、お前の力、無に帰す」

闇本「おおのおおれええつ！」

屋上での戦いは瑠璃に軍配が上がり、闇本は分解されてしまった。残された瑠璃は自我が消えかかっていたが、その残された意思で下へ向かい、歩き出す

瑠璃「…なんでしょう、この力…私…また無造作にひとを…」

宝冥寺「あら…こんな緊急時にお客さんかしら？」

瑠璃「…先生？」

宝冥寺「ふふ…ここであつたのも何かの縁なのかしらね？」

瑠璃「先生はなんでここに…？」

宝冥寺「簡単よ？…倒さなきゃいけない人がここにいたから、来たまでなの。けどもう終わったようね…？」

瑠璃「…生ける災厄の消滅、ですか」

宝冥寺「さすがは愛の巫女、やり方も慈悲深いわよねえ…瑠奈君が変わつたのも頷けるわ」

瑠璃「瑠奈さんが…ですか？」

そこで宝冥寺が懐かしむように昔の話を切り出してきた

宝冥寺「あの子はね、昔はそれこそ感情が無い機械のような子だったの。普段は目立たない子、剣道の大会で優勝したときに周りからちやほやされても気にした素振りはない。面談で話をしたときも必要以上の言葉は話さなかつたわ」

瑠璃「…でも今の瑠奈さんにはそんな感じは全く…」宝冥寺「…多分彼も内心、なにかを変えたかつたんだと思う。彼なりに、日常に退屈して、その日常をなんとか変えたかつた。…そこに」

瑠璃「私たちが現れた…」

宝冥寺「もしかしたら貴女と彼は出会うべくして出会ったのかも知れないわね？全く…最近の若い子たちはドラマチックなのが好きなかしらねえ？」

瑠璃「そ、そんな神秘的な物じゃ…」

そこに宝冥寺は瑠璃の傍により

宝冥寺「でもね瑠璃さん。これは忘れないで。…今回で最後の戦いになると思うけど、瑠奈君はもう既に命をかけている。貴女も、それなりの覚悟はしてもらおうよ？」

瑠璃「…当たり前ですよ。これは私の問題でもあるんですから」

宝冥寺「それと…瑠奈君の為に、死なないでね」

瑠璃「…瑠奈さんの、為？」

宝冥寺「貴方達は既に運命の鎖で繋がれている。今それが切れると、世界が崩れます」

瑠璃「??？」

瑠璃には意味が分からなかった。確かに瑠奈の為に死ぬわけには行かないことは分かったが、世界が崩れるという意味が理解できなかった

瑠璃「あの…世界が崩れるって…」

宝冥寺「私の口から言うことではないわね。…どうなるかは貴方達次第ですからね」

瑠璃「…」

宝冥寺「じゃ、私は行くわね？…貴女に天の加護を」

そして宝冥寺は瑠璃に銀色に光る石を渡し、その場を去った…

瑠璃「…銀色…の石？」

瑠璃は手元に貰った灼熱のルビー、カオス、そして貰った銀色の石を眺める

瑠璃「…ん…なんかよく分らないですけど、まさか…この石も関係してるんでしょうか…」

「新組織、時計台」

天導「…ふつ、光はあの石を集めたか…まさか、宝冥寺が持つてるとはね。…確かに僕に託すよりはいい、か。…さあ、とうとう命運の時計の針が動き出した。烈火君、早く目覚めなきゃだな…」

「色失いし町」

瑠奈「…う…な、なんだここ？」

瑠奈が目覚ました場所に広大な草原が広がっていた。瑠奈にはこの場所に心当たりが無く、とにかく何か目印になるようなものが無いかを探す…

瑠奈「俺は確か…死創を貫いて…」

???「…そうだ、お前はその死創を撃破後、意識だけこちらに流れたのだ」

瑠奈「!? 誰だっ!」

???「冷たいことを言うなよオリジナル。俺はお前でお前は俺だつて忘れたか？」

瑠奈「…ああ、嫌というくらい覚えてるぜ、闇本」

闇本「最も、今回は直ぐに突っかかるつもりは無い…話がしたい」

瑠奈「…何? どういうことだ」

闇本「牙獣を解放する石が今、巫女に渡った」

瑠奈「…牙獣？」

闇本「そうか、お前は地上人だから知らないか…かつて地下を崩壊させた獣だ」

瑠奈「ちよつと待てよ。なんでそんな獣を呼び出す石が今瑠璃に渡つてんだよ。…てめえの仕業か!」

闇本「待てつて、そう早まるな。…俺は殺されたよ、その巫女にな」

瑠奈「!? 瑠璃が、お前を!？」

闇本「やはり俺ごときの力じゃ巫女を倒すことは無理だった、ただ」

問題はそこじゃない。とにかく巫女が今その石を手にしてることが問題なんだ」

瑠奈「…その石を瑠璃が持つてたらどうなるんだよ」

闇本「死創が狙ってる。そして死創が巫女からその石を奪取した時、牙獣が地上を壊しにかかるだろうな」

瑠奈「んなつ…！」

闇本「そこでだ、俺は既に死んだが、何故かお前の意識体に接触している…俺はまだ死にたくない。俺に身体を譲っちゃくれないか？」

瑠奈「何を馬鹿な…そんなことが出来るわけ無いだろ！お前に身体を奪われたら、俺はどうしたらいいんだよ！」

闇本「意識体は一定時間器に収まらないと消滅する。それが決まりだ」

瑠奈「…そんなの聞いて、誰がイエスって言うと思ってるんだよ」

そして瑠奈は剣を取り、切っ先を闇本に向ける

瑠奈「身体を失ったら潔く死ねよ」

闇本「馬鹿が…状況を見る、瑠奈。今お前が戻ったところでもう手遅れ。第一お前じゃ死創には勝てねえよ」

瑠奈「うるせえ！やってみなきゃ…」

闇本「根性じゃ守れねえ物もあるんだよ。それくらい分かるだろ。…その身体を寄越せ」

そして闇本も剣を取る。瑠奈対闇本…戦いの輪廻が渦巻く！

〓春間町〓

風野「…居ないだあ!？」

重山「すまん…」

聖澤「あれだけ探しても居ないのよねえ…」

風野、灼沢、有音の三人は春間町に居る重山、聖澤、土屋と合流した

風野「それに…雷が戦死だあ!？」

重山「…」

灼沢「ま、まあまあ風野君落ち着いて…」

風野「落ち着けるか！こつちだつて渚がこんな状態なのに…」

聖澤「有音？どうかしたのか…？」

有音「…う…「声が出なくなった」」

有音は筆談ではなすようになり、ある程度の仲間が集まりつつあったが、瑠璃の不在、雷の戦死により混乱は必死だった。そこへ…

民「た、たた、大変ですっ！」

重山「なんだ！？」

民「空に大きな門が現れ、不思議そうに眺めてたんですが…伝説の牙獣が現れましたあっ！」

風野「はあ！？」

民「とにかく救援を！このままじゃ世界は…！」

重山「瑠璃様どころでは無くなつたな…出るぞ！」

「暁学園、屋上」

門が現れる数分前、瑠璃は屋上から離れようとするところ…？…「どこに行く」

瑠璃「…！」

死創「察しが早いな小娘。じゃあ俺の言いたいことは分かるな？」

瑠璃「…分かりませんよ」

死創「そうか…」闇奏破！」

瑠璃「…！」

瑠璃の前に死創が現れ、死創がさかさ攻撃をする。瑠璃は攻撃を凌いだが、死創はその攻撃を利用し、瑠璃の持つ石を奪った

瑠璃「ああっ！」

死創「小娘…お前の力、糧にさせてもらうぞ…！」

そして死創は石を瑠璃にかざし、力を解放する

死創「いでよ、殺戮兵器よ…！この腐った地上を…！けせええ！」

瑠璃「いやあああああっ！」

瑠璃と死創は強制的に力を解放し、空に大きな門を作る。そしてその門からは昔地上を一時滅ぼしたと言われる牙獣が現れた

死創「さあ、我を選べ！共に世を破壊しよ…」

牙獣「ウセロ」

だが牙獣は死創を灰に帰したのだった。そして力が暴走する瑠璃を
取り込み、行動を開始する…

98話：次幕予告（夢村、零編）

夢村「はあ〜い 皆、第3章は楽しんで戴けてるかしら？ここからはとうとう最終章の話に入るから、その説明するわよ」

零「…騒がしい、話を早く始める」

夢村「分かったわよ。じゃ、次幕の話はこんな感じね」

「牙獣、復活編」

宝冥寺に石を託された瑠璃、だがそこに死創が現れその石を奪われる。そして上空に門が現れそこから伝説の牙獣が復活してしまう。牙獣は瑠璃を取り込み、地上の破壊を始める…

「地下からの逆襲編」

今だ力の反動で目を覚まさない瑠奈。だがその瑠奈の意識に瑠璃によつてころされた闇本が入ってきた。闇本は瑠奈に身体を要求するが瑠奈は拒み、戦いに勝った方が身体を手に入れる事になった。果たして瑠奈は…

そして天導は地下に押し寄せる創成軍に気付く。天導は単独で迎撃に向かう…

零「とまあこんな感じだ」

夢村「これが最後の戦い…読者の皆も気張っていくわよお！」

最終幕 99話：地下からの逆襲編

「新組織、正面門前」

天導「ふっ、今日も不穏な空気が流れるね、どうも」

天導は白いハットを被り、新組織周辺を散歩していた

天導「多分既に”希石”は奪われてるだろうから、もう時間の猶予は無い…烈火君、間に合うのかな？ねえ…創成軍の皆さん」

操「ほう…素晴らしい。我らの存在を何時から知っていた？」

すると物陰から操、木山田、雪璽が現れた。三人は既に戦闘態勢だった

木山田「…」

雪璽「…一人か」

天導「無口が二人とおしゃべりが一人か…いや、君がおしゃべりで助かったよ」操「それはどうも…誉め言葉として受け取っておこう、”死を許されざる天使”よ」

天導「参ったねどうも…。僕を天使だなんて、それに死を許されなidaanて…僕も人間だからちゃんと死ぬんだよ？」

操「黙れ天導。お前は既に命は尽きている筈なのに今ここにいる。それが何よりの証拠だ」

天導「だったらなんだい？僕をもう復活出来ないぐらいに殺すかい？」

操「いや…その力、むしろ私たちは欲しい。だから天導、同じ地上人を憎む仲間としてこちらに降らないか？」

天導「…へえ、僕を引き抜きかい？」

天導は薄ら笑いを浮かべながら操を見る

操「そうだ、この戦い、地上人の軍勢で特筆するのは烈火、光、重山、明源、有音、零、そして天導、貴様だが…今天導が我らに降れば、烈火は虫の息、光は牙獣に取り込まれ有音は能力を既に失って

いる、そして明源、零は行方が分からない…残るめぼしい敵は重山のみとなる。…無論お前が降るなら、一度失った空中都市の再建を認めると言うのが死創様の条件提示だ。…どうだ、悪い話じゃないだろう?」

だが天導はハットを脱ぎ捨て、吐き捨てるように言った

天導「確かに悪い話じゃないけど…断るよ。君たちについて行っても何もおもしろくなさそうだし、牙獣によって世界は滅ぶ…そんな状況で空中都市は作れないよ」

操「そうか…だったらここをお前を殺して通らせてもらおう。…中に烈火も居る筈だ。そいつも殺さなきゃならないからな」

天導「ふっ…君たちが僕を殺すのかい?…いい心構えだね、僕は好きだよ。だけど参ったね、どうも…僕を倒せるのは烈火君だけだと思ふな…後悔しないでね?」
そして天導が力を解放する…

「色失いし場所」

瑠奈「!??」

闇本「…がっ…」

勝負は一瞬だった。瑠奈と闇本が互いにぶつかりあうように突進したが、闇本がぶつかる瞬間に刀を下ろし、瑠奈の一撃をまともに受けたのだった。闇本はその場に崩れる

闇本「…これで…良い…」

瑠奈「お前…これ以上しゃべるな!傷に響く…」

闇本「は…っ、敗者に情けを…かけるか、つくづく…甘い…」

瑠奈「うるせえよ…それが瑠璃が望むことなんだ。だからあいつはお前を俺の精神域に入らせたんだろうな」

闇本「…俺の力、お前に戻す…しっかり、使いやがれ…」

瑠奈「?戻す?」

闇本「お前は炎の力と同時に、闇の力も備えてる…だから、俺が生

まれたんだ…ガハツ！…頼むぜ、世界…を…」

そして闇本が消え、その場には紺色の石が残った。それを手に取り、ポケットにしまう

瑠奈「…お前に言われなくても分かっている。…待ってる瑠璃、今助けてやるからな！…」

「新組織、瑠璃の部屋」

瑠奈「…戻ってきたのか」

ようやく目を覚ました瑠奈。場所は瑠璃の部屋だとすぐに気付く。だが気になったのは外の騒がしさだった

瑠奈「誰かがやりあってる…？」

瑠奈は剣を取り、すぐさま建物の外へ向かう…

「新組織、正門」

操「…！！」

木山田「不覚…」

雪璽「…この、力…」

天導が産み出した剣に貫かれ、木山田と雪璽は力尽きた。残るは操だけになった

操「お前の強さ…デタラメだっ！」

操は銃を連射するが、天導は天の力で完全に防いでいた

天導「君達はずくづく馬鹿だね、どうも…これでも僕はジレルテイの総裁だよ？」

操「そんなことは…分かっているう！」ホーミングバスター” ああああ！」

操は今度はミサイルを天導に打ち込むが、煙の中からは無傷の天導が現れた

天導「…可哀想だ、君たちがね…」

操「あ、ああ…」

天導「”聖砲・極”」

天導は力を為、光のレーザーを操に撃つが、操は当たる間に撤退したらしく、その場に姿は無くなった

天導「…仕留め損ねたか…困ったね、烈火君？」

瑠奈「気付いてたのか…」

今度は新組織の入り口から瑠奈が現れた

瑠奈「それにしても、お前死んだはずじゃ…」

天導「その質問に関しては答えを避けるよ。今はそれどころじゃないしね…ほら、来たよ」

瑠奈「来た…？」

天導が指を指した方を向くと、そこから大量の獣がこちらに向かい猛進していた

瑠奈「！！なんだありゃ…」

天導「牙獣だよ。重山君からも話は聞いてるだろう？…光が取り込まれて力を増しているけどね」

瑠奈「瑠璃が…とりこまれた…？」

天導「だが落胆してる場合じゃない…まだ救える方法がある。だから烈火君、君にはすぐ地上に向かって貰いたいんだ」

瑠奈「それはいいが…ここの守備は…」

天導「これでも僕はこいつらに負ける気は無いよ。…大船に乗ったつもりで行きなさい。ここの裏門から出たら、軌道エレベーターに近い筈だ」

瑠奈「…分かったよ、頼むぜ、天導！」

瑠奈が急いで地上へ行くのを見送り、天導は力を再び解放する

天導「参ったね、どうも…強がったはいいいけど、数がねえ…、まあ、やれるだけやってみますか。…天上軍総裁、天導誘貴…参ります！」

100話…守る、という意味

「春間町」

重山「…まさか、そんな…!?」

灼沢「なんだよあれ…門にしては大きすぎるよ!!」

春間町に居た重山、灼沢、日向、風野、有音、聖澤、土屋が暁町の方を見てみると、暁町の上空に大きな門が現れていた

聖澤「あの大きさはさすがに大門じゃ召喚は無理だね」

風野「だとすると…」

重山「来るぞ…牙獣が!!封印が解かれ…この世界は崩壊する!」
有音「…」

そしてその門から現れたのは大きな龍と、沢山の獣が放たれた

聖澤「なんだあの化け物は!？」

重山「牙獣…かつて地下を滅ぼした龍…それに獣…だが何故封印がとけた!?あれの封印を解けるのは…」

聖澤「…死創だ。あいつならなにかを掴んで居ても不思議じゃない!」

灼沢「兄さんが居ないのが厳しいね…」

重山は完全に狼狽している。重山は元は組織の守護兵長なので牙獣の存在は知っていたのだ

風野「どうする?このままじゃ暁町は全滅、春間町だっていつまで持つか…」

重山「私と聖澤、灼沢で行く!風野、有音、日向はここを死守!行くぞー!」

風野「おい、まで!いまここで戦力を分散…」

風野が必死に止めようとするが、重山は聞く耳を持たなかった。重山、灼沢、聖澤は暁町に、風野、有音、日向は春間町に留まり防衛することになった

風野「…ちっ、重山の奴、完全に錯乱しちまってんな…」

日向「でも瑠璃ちゃんがいなくなった時期と一致するのは…まさか…」
有音「…」「ここを守ることに専念しなきゃ」「
風野「…ああ…それしかねえか!」
そこに沢山の牙獣が現れた

風野「…早いお出ましたな、オイ!」
牙獣「グルルル…!」
日向「な、なんて数…これから町を守れって…」
有音「…」

だがここで異変が起こる。有音の身体が光出すと、何故か周りの牙獣の動きが止まった

風野「…まだ戦いは始まってねえぜ?有音、何をした?」

有音「…」「分からない」

日向「……とにかく、いまの内だ、一気に叩くよ、風野君!」

風野「ああ!行くぜええつ!」

「暁町」

重山「はあつ、はあつ!」

灼沢「し、重山さん!ま、まって…っ!」

聖澤「焦りすぎだ重山!いま焦っても…」

重山「…うるさいっ!あの中には間違いない…瑠璃様が居るはずなんだ…!」

灼沢「ど、どういうこと…?」

重山「言ったままの意味だ。組織の本来の目的は牙獣封印の継続が目的。瑠璃様は実は封印を解く鍵の1つ…」

聖澤「?だったら同じ王族の私も鍵なんじゃないの?」

重山「問題はそこだ。実は瑠璃様の力”聖”の力の他に”希石”という石が必要なんだが…それ自体は実際前大戦後に消失した筈なんだ…」

聖澤「だが、実際のところ牙獣は復活した。これを指す意味は1つ…」

重山「…消失していなかった…」そしてその門の近くにたどり着くと、そこは暁学園だった

重山「瑠璃様！瑠璃様あつ！」

聖澤「落ち着け重山！瑠璃がどこに居るか分からないのに…」

重山「いや…分かる！あの中だ！」

重山は瑠璃が牙獣の龍の額の部分に居るというのだ。牙獣の龍の額には何やら石のような物がある

灼沢「でも…この数は…」

その龍を守るように沢山の牙獣が守備に着いていた

重山「この程度の数、物の内に入るかあつ！」

聖澤「！？バカっ！」

だがその中に重山は無謀にも突っ込んでしまった。聖澤達も仕方なく突撃する…

|| 龍「アルトロス」精神体 ||

瑠璃「こ、ここは…」

龍にとりこまれた瑠璃はいまその龍の精神に介入していた

龍「…お前が巫女か」

瑠璃「…貴方は誰？」

瑠璃の前には瑠奈と同じ歳であろう男が立っていた。枯れ草色の布を羽織い、銀色の髪が風で靡いていた

龍「…我はアルトロス。世界を浄化せし者」

瑠璃「…世界を、ですか」

龍「人間は世界を汚しすぎた。だから我はその世界を作り替える」

瑠璃「だから私に何をさせたいんですか？」

龍「お前の力を使う」

瑠璃「私の力は人を殺すためのものじゃないですし、人間は必ずしも悪い人ばかりじゃないですよ？」

龍「お前達の仲間が、我らの仲間を殺す。それは許されない」

瑠璃「…？」

そして龍は世界を画面に映し出す。するとそこにはこちらに向かおうとする重山、灼沢、聖澤の姿があった

瑠璃「…！！私の仲間には酷いことしないで！」

龍「だがお前達の仲間は我らの仲間を殺す。それは許されない！」

すると急に龍は光線を放ち、重山達を吹き飛ばした。すると瑠璃に頭痛が走った

瑠璃「あああつ！…やめて…」

龍「お前の力は俺のもの、力、貸してもらおうぞ」

101話：戦列復帰、帰ってきた炎の剣士

「暁学園前」

重山「…まずいつ!？」

聖澤「!!」

灼沢「…!？」

牙獣の群れを掃討中の重山達に門から現れた龍の光線が放たれ、重山達を吹き飛ばした

重山「あああぁっ!？」

聖澤「つう…っ!」

灼沢「…重山さん! 聖澤さん!」

重山「まずい、まずいいいい!」

聖澤「…まさか…重山!」

重山「あの力は…瑠璃様の…生命力を使われてる!」

灼沢「…そんなまさか…お兄ちゃん…早く…!」

重山「あんな馬鹿…待ってられるかああぁっ!」

そこで重山は自分の力を地面に放ち、龍に向け跳躍をした

聖澤「まで重山っ!？」

重山「おとおおっ!」

龍「…愚かなり人間」

重山「!？」

だが重山に龍はまた光線を放つ。重山は防御体制に入れずに吹き飛ばされる

重山「あああぁっ!？」

聖澤「重山ああぁっ!!」

重山は建物に突っ込み、瓦礫の下敷きになる

聖澤「…いままでの相手とは、訳が違う、ね」

灼沢「…お兄ちゃん…」

「ネイチャーガーデン市街」

瑠奈「…つたく、天導、俺は地上人なのに地下の構造なんか分かるわけ無いだろ…」

瑠奈は急いで地上に向かっていたのだが、瑠奈自身地下の構造が分からずさ迷っていた

瑠奈「くそっ…いつその事天井に穴を…」

だがそこに沢山の民が現れた

瑠奈「…なんだよ？」

民「…瑠璃様の言う、大事な人だな？」

瑠奈「ああ？…ああ、多分な」

民「瑠璃様はお前の話をするとき、特に笑顔だ。…今お前と瑠璃様と一緒に居ないってことは、今瑠璃様はつらい思いをしてるはず…

烈火と言ったな。…今、道を造る、それをつたって行け」

だがそうしてる間に牙獣がこのフロアにも侵入してきた

瑠奈「…ちっ！」

民「待て。…お前の力は今使っわけには行かない。…我らで食い止める！」

そういい民は鍬やスコップ等を持ち牙獣に突撃する部隊と魔法で道を錬成する部隊に分かれ、瑠奈に手出しをさせなかった。瑠奈の為、そして瑠璃の為に民は戦いに身を投じるのだった…

瑠奈「お前ら…！」

民「死ぬ気でこの男の道を拓け！！…はあっ！！」

そして魔法で地上への門が開かれた

瑠奈「…いいのか…？」

民「行け。…全滅する前に！」

既に民の半分は牙獣に殺されていた

瑠奈「…わりい！！一発だけぶちこませろ！！」
「ダークネス・オーバーヒート」！！」

瑠奈は門に入る直前に手から闇の炎を放ち、牙獣を焼き払った
民「…！」

瑠奈「俺、急ぐな。…死ぬなよ！」

民「それくらい…」

零「任せろ、烈火」

そこに現れたのは零、明源だった

瑠奈「零！それに明源か！」

明源「烈火おにーちゃんだね！お久しぶり！」

零「この場は俺らで凌ぐ。お前こそ死ぬな」

瑠奈「ああ！！！」

そして瑠奈は門を潜り、地上へ向かった

零「ふっ…さすがにこの数は苦戦は必至だな」

明源「だいじょーぶ 愛が居るから」

零「…行くぜ、明源。…仲間の未来の引き金、俺が引く」

明源「明」の力の使い手、明源 愛！行くよ」

〓春間町〓

風野「だあああっ！！！」

日向「ちえいさ！」

春間町は有音の不思議な力により行動を封じられた牙獣を風野、日向が掃討していたが、門から放たれる牙獣は止まることを知らず、有音に少しずつ疲れの色が出始めてきた

有音「…っ」

風野「くそっ…さすがにきつついかあ…」

日向「でもここを守らなきゃ、暁町での戦線が維持できなかったときゃばいしょ！」

風野「どのみち元を絶たなきゃいずれ押しきられる…戦力が足りねえっ…！」

有音「…!!」

だがここで有音が何かに気付いた。春間町を覆う空気が急に熱されたのだった

風野「…?何だ、この空気…」

日向「風野君っ!手を止めないで!」

有音「…「来る!避けて!」」

風野「来る…?」

そして風野が空を見上げた刹那、真っ赤に燃える炎が降ってくるのが見えた

風野「…はああああっ!?!」

日向「!?!何よあれ!?!」

「?!?!」 烈火流剣術・鳳凰大車輪”!!”

そしてその炎は牙獣の群れに突っ込み、牙獣を焼き払った

「?!?!」…「つたく、地上に戻してくれるのはありがたいが、どうか戻しやがるんだよ…」

風野「…!!お前…復活したのか!」

日向「あの状態から良く…お帰り、瑠奈!」

有音「…「お帰りなさい」」

瑠奈「…ああ、待たせたな!」

そこには…地下から帰還した瑠奈の姿があつた…

瑠奈「…今の俺は簡単には止まらねえ!行くぜ、牙獣とやら!」

「新組織」

天導「…ふ、ふふ…そうか…烈火君は…地上へ…」

天導は牙獣を退けたが、身体中が傷だらけになっていた。天導は壁に腰かける

天導「…ふう…僕も衰えたかな…運命の時に、間に合わない…かな…?」

夢村「あら、随分弱気な発言ね？」

天鳳院「…貴方はまだ働かなきゃならない。ここで倒れるのは許さない」

天導「はは…手厳しいな、君たちは…。…宝命寺が動かしたみたいだね」

夢村「彼女が持つてるのはさすがに想定外よ。道理で死創がすぐに牙獣を呼び出さなかった訳ね…」

天鳳院「…最近全く宝命寺を見ない、逃げた」

天導「…烈火君、早くしなきゃ光君は…」

102話…最終決戦へ…

「オルトロス意識帯」

瑠璃「…!!」

龍「悪いな小娘。だが私はやらねばならぬ。人類の粛清、そして世界の再構築を」

瑠璃は龍の力で身体の自由を奪われていた

瑠璃「わたしの…仲間に…手出ししないで!」

龍「…解せぬ…解せぬぞ愛の巫女よ。お主の力は確かに愛であるが、それは時に粛清の形を取る必要もあるのだ」

瑠璃「…そんなの、間違ってる…私の仲間は…大事な人は…違つから!」

龍「…その大事な人とは」

瑠璃「私の為に、そして仲間の為に命の炎を燃やす…炎の剣士。…それに」

龍「?」

瑠璃「人の悪を断つ断罪の闇の執行者でもあるんです」

龍「…解せぬな。お主とは力が相反するはず。なのに大事な人とは…」

瑠璃「だけど、瑠奈さんはもうその力に飲み込まれはしないんです。…彼は、燃え盛る太陽であると同時に、闇に映える月でもあるんですよ」

龍「…どうやら、その剣士が地上に現れたようだな」

龍の視線が春間町に向けられる

龍「…お前が言う剣士の力、測らせてもらおう」

瑠璃「!!!…うあああっ!」

龍は瑠璃の力を消費し、春間町に向け光線を発射した

「春間町」

瑠奈「…まったく、こんな相手に苦戦すんなよ、風野、香恋」

風野「さつきより数が多かったんだ。むしろ手負いの状況を誉めてもらいてえな？」

日向「私は能力者にしては劣るから、瑠奈と比べないで欲しいんだけど？」

瑠奈、風野、日向、有音は春間町に居た牙獣の掃討を完了していた。門からの増援の気配も無く、これから暁町へ向かおうとするが…

風野「…！おい！」

有音「！」

日向「龍が…こつちに向かってなにかを…」

瑠奈「…春間町を焼くつもりか、そうはさせねえよ」

龍はこちらに最高出力の光線を放とうとしていた。それに真っ向から受ける気の瑠奈が”闇”の力を解放する

風野「！おい烈火、その力！」

瑠奈「闇本からの置き土産…と言うより、元から俺の力だったらしい。全く、今まで知らなかった俺自身が馬鹿みてえだな」

日向「…制御出来るの？」

瑠奈「まあ、あの馬鹿デカイ龍の一撃を相殺するのは多分無理だ。

だが、軌道を変えるくらいなら…」

すると瑠奈は束のみの刀に闇の力を集め、居合斬りの構えを取った。相手の光線の軌道を斬撃で変えようと言うのだ

風野「馬鹿！いくらなんでも無茶だ！」

日向「今度は死ぬよ、瑠奈！」

瑠奈「悪いな、少し後ろに下がってる、風野に香恋。…少し、抑えが利かないかも知れねえからな！」

そして龍から光線が放たれた時、その光線に向かい、瑠奈も闇の力を放出した

瑠奈「カオス・バースト”おおおっ!”

そして放たれた力は光線に接触、そして大爆発をお越し双方が消えたのだった

風野「う…嘘だろ？」

日向「…瑠奈…」

瑠奈「やはり化け物だな…俺も、お前も！」

瑠奈と龍の力の領域は灰に帰っていた。大地は荒廃し、建物は骨組みすら消えていた

瑠奈「…風野、香恋、有音」

風野「行くんだろ、あの龍の所。近くまでならついていくぜ？」

日向「…私も行く！」

有音「…私も」

瑠奈「いや、俺一人で行かせてくれ」

皆で行く、という発言じゃなかったことに風野たちは驚きを隠せない

風野「どういことだ」

瑠奈「…あの龍、只者じゃない。能力の概念を凌駕してやがる」

日向「一体何が言いたいの!？」

瑠奈「気付け。地上一体の能力が”消された”事に」

風野「!!!」

風野達は気付いた。瑠奈はまだ闇の力が解放されているが、風野、日向、有音の力は既に消えていた。しかも再び解放しようにも解放が出来なくなっている

風野「…嘘だろ、こんな時に力の使いすぎなんて…」

瑠奈「そんなじゃない。あいつは今の一撃は人を殺す為にやったと言っよりは”力を封じ、絶望を覚え、死を受け入れさせる”一撃だ」

日向「…そんな力、能力の概念を越えて…」

瑠奈「出来る奴が一人だけいる。…瑠璃だ」

風野「amp・日向& amp・有音「!!」

瑠奈「瑠璃の力は”愛”だがその愛は必ずしも人に恩恵をもたらすわけでは無い。この瑠璃の力は能力の概念に縛られない。だからこ
その他の能力を封印し、自決をさせてあげる”愛”なんだ」

風野「そんなの横暴じゃねえか! だったらいつその事瑠璃を潰せば
…」

風野が言い終わる前に、瑠奈が風野の胸ぐらを掴む

瑠奈「瑠璃がそんな事やると自分からやると思ってたのか!? あいつがやりたいと思うならとうの昔にやってただよ…今あいつは無理矢理やらされてるんだ!! あいつは望んじゃいねえ…なのに、なに!!」

日向「瑠奈! 落ちつい…」

止めに入った日向を殴る瑠奈。その目は涙で溢れていた

瑠奈「あいつは仲間が殺されるのを見させられてる! まるで拷問だ!! そんな状況でもまだそんな事が言えるのかよ!!」

風野「…!!」

瑠奈「牙獣によって食い殺される民、龍によって焼かれる大地。立ち向かって返り討ちに合う俺たち能力者…あいつはそれが見たいと思ってるのかよ!?!」

風野「…」

瑠奈「それをさせない為に、俺はあいつを助ける。これ以上、あいつの涙を見たくない」

風野「だが一人じゃいくらなんでも…」

瑠奈「丸腰のお前たちを見殺しにしろって言うのかよ…そんな事したらまたあいつ悲しむだろうがっ!!」

そして”闇”と”炎”の力を一気に解放する。闇を纏った炎を操る瑠奈。そして手の甲には”哀”とあった

風野「…!!」

日向「何…この力…なんか切ない…」

有音「…」

瑠奈「…やっと、俺の力が解放か。全く…もう少しつらくない場面がよかったぜ…」

そして瑠奈の夢村から貰った剣を日向に渡す

瑠奈「…帰ってくる約束としての担保、お前に預ける」

日向「あれえ？私の告白断ったくせに、私に担保渡して良いの？」

瑠奈「これでも付き合いは長いからな。…頼む」

日向「オツケー、任されたよ！」

瑠奈「風野、香恋、有音。他の仲間と合流が出来たら速やかに地下に降りる。多分地上は死の戦場になる…お前たちさえ生きてれば地上は復興できるだろうからさ」

日向「分かった。…早く、帰ってきてね」

風野「分かったぜ！」

瑠奈「…悲しみの翼」

そして瑠奈の背中に暗い色の翼が現れ、瑠奈が空を飛ぶ

瑠奈「…行く」

そして瑠奈は龍の元に一直線に向かった

風野「…」

日向「瑠奈…」

大門「お、居たっすね皆さん！！」

風野「大門！？なんでこんな所に…」

大門「夢村さんに言われたんす。」烈火以外は地下へ連れてきて」

だそうで…もう既に暁町に居た人たちは退避済みっすから、後は貴殿方だけっす」

風野「了解！」

そして門の中に風野、日向、有音が入る…

大門「…隊長、ここにも居ないっすか…困ったっすね…」

「暁学園付近」

宝冥寺「あら、飛鳥さんですか？」

重山「…き、さま…!!」

春間町にはまだ宝冥寺と重山が居たが、重山は既に龍の一撃を受け意識がはつきりしていなかった

宝冥寺「あら、まだ動けますの？ 凄い執念なのね？」

重山「お、まえのせい…で、瑠璃…様が…」

宝冥寺「…可哀想に、まだ主に遣える従者気取りとは…今、楽にしてあげます」

そして宝冥寺は間合いを詰め、霊を刀に変え、重山を貫いた。重山の身体からはおびただしい量の出血が起きた

重山「……!!!!」

宝冥寺「ごきげんよう、そして…永遠にお休みなさい、守護兵長。

” 憐れみの涙 ”」

そして、重山の身体にさらに刀が刺さる。そして重山はそこに倒れ伏した…

宝冥寺「…彼が来るのね…楽しみだわ…烈火君…先生を越えられるかしら…」

103話…創成神、オルトロス

「暁学園正門」

瑠奈「…よつ、と。あんま飛ぶつて気持ちいいもんじゃねえなあ…」
瑠奈は闇の力により生まれた翼で暁学園の正門まで飛んできた

瑠奈「…頭上には龍、か…ったく、地獄絵図だぜ」

暁学園の頂上には龍の姿が。あれが大将であることは既に瑠奈も重々承知だった

瑠奈「…瑠璃、待ってる…戦いの輪廻、次こそ俺が断ち切つて、真の自由を見せてやる」

そして瑠奈が暁学園に入ろうとした時、不意に後ろから女性の声がし、瑠奈は足を止めた

???「行くのかしら…」

瑠奈「…！…誰だよ、俺は今急ぎだ」

???「…あら、馴染みのある声を聴いても私の事が分からない？」

瑠奈「…イツキ先生か？」すると扉の向こう側からすり抜けるように宝冥寺が現れた

宝冥寺「お久しぶりね、烈火君。お元気にしてましたか？」

瑠奈「ああ、もうすぐぶる元気だ、力を持って余してるくらいにな。

…イツキ先生、そこで何を？」

宝冥寺「クスツ…烈火君は既に私を疑つてかかっているんですか？それは心外ですねえ…」

瑠奈「正直今の俺には人を信じる事は難しい。…瑠璃が龍に取り込まれた」

宝冥寺「あらまあ、それは大変ねえ…私、こうなるとは思わなかったわ」

口に手を当て驚きを表す宝冥寺。だが瑠奈はここで違和感を覚えるのだった

瑠奈（…思わなかった、だと？）

宝冥寺「烈火君？どうなさいましたか？」

瑠奈「…イツキ先生、あんた…」

宝冥寺「”縛”…！」

すると宝冥寺は急に力を解放し、死霊で攻撃を加えてきた。瑠奈は咄嗟に剣を抜き、死霊を消す

宝冥寺「あらあら、簡単に消されちゃいましたねえ…」

瑠奈「お前か…お前が、瑠璃を…！」

宝冥寺「正確には死創がやった事なのだけれど…確かに手引きしたのは私ね」

瑠奈「…！！」

天導「烈火君。そこまでだ」

宝冥寺「…あら、来ちゃいましたか」

瑠奈が剣で今にも飛びかかりそうな所に、後ろから天導が現れ瑠奈を止めた

天導「やはり君でしたか…宝冥寺」

宝冥寺「わからず屋の貴方に言っても無駄でしょうけど、私はこれが最善と考えた…それだけよ？私は教師…もつとも良い解答を見つけるのが仕事だから」

天導「だけどそれは君のエゴだ。…光君は全人類と共に歩む道を懸命に模索している、あの地下の姫君がだ。それをある地下の一人の能力者が潰してもいいことなのかい？」

宝冥寺「彼女は既に地下の姫では無くなった…大悟が死んだ事によってね。その中であの子がどう願おうと私は知らないわ。世界にとって大事な事を見つける方が余程大事よ？」

天導「…その覚悟の現れか、後ろに倒れる守護騎士は…」

瑠奈「…！！？」

天導の言葉を聞き、瑠奈は宝冥寺の後ろを見ると、そこには血まみれで倒れる重山の姿があった

瑠奈「…っ！！」

天導「待て。今君のやるべき事は仇討ちじゃない」

瑠奈「だけど… だけどよおっ！！」

天導「その仇討ちの役目、僕に任せてくれないか？」

瑠奈「…！！」

天導の提案に目を丸くする瑠奈。天導がまさかここまでしてくれるとは思ってなかったからだ

天導「彼女にとっての驚異は君だから今君がここで足止めされると、龍が覚醒してしまうかも知れない。今は光君が拒んでいるようにだけれど、それもいつまでもつか分からない。だから烈火君。君は闇の翼でそのまま屋上へ飛んだらいい」

瑠奈「…」

宝冥寺「なら私の相手は貴方になるのかしら…？折角私の教え子と戦えるかと思ったのに…」

天導「と言うことは、今の君は彼を止める気は無い、ということだな？」

宝冥寺「まあ、今更烈火君が龍と対峙しても手遅れだとは思っけれど、ね？」

天導「…烈火君、君の力を先生に見せるときだよ。…君の力で光君を助けておいで。彼女は僕が食い止めるからさ」

瑠奈「…仕方ねえ、か」

そして瑠奈はまた闇の翼を産み出し、その翼で暁学園の屋上へ飛んでいった

天導「…彼の力、見くびらない方がいいと思うよ？…ミス・ネクロマンサー」

宝冥寺「その呼び方には感心しないわね…聖天使さん？」

天導「いや困ったね、どうも…その呼び名を知られているとはね…」

宝冥寺「死雨”！！”」

天導「光壁陣”」

そして宝冥寺と天導の戦いが始まった

宝冥寺「私は…世界を創り変える！」

天導「困ったね、どうも…僕は今の世界が気に入ってるらしい…君にやられる訳には行かないね」

〓 暁学園、屋上 〓

瑠奈「…デカイな」

瑠奈はとうとう暁学園の屋上にたどり着き、龍と対峙する

瑠奈「…こいつが、大将…」

龍「ようこそ、と言うべきかな？」

瑠奈「…話せるのもなんとなくは分かったが、なんか気味悪いな」

龍「我の名はオルトロス、地下の民からは破壊の神と呼ばれておる」

瑠奈「そんなのこの町の惨場を見たら分かる」

瑠奈が言った通り、牙獣と龍が放った光線によりあらゆる町が炎に焼かれていた

瑠奈「…聞きたいことが二つある」

龍「奇遇だな、我もだ。…まずはお主からそれを申すといい。我は誠心誠意答えるでしょう」

瑠奈「お前が地上を壊す目的を教える。ただ呼び出されたから…って訳でもないだろ？」

龍「いや、我が呼び出された時は世界を創り変えるようなプログラムが施されているのだ。我自身がこの世界を恨んでいるわけでは無い」

瑠奈「…恨みもねえのにぶち壊すか。罪もない民を傷つけるのには痛いねえのかよ？」

龍「我には基本静、怒の感情しかない。お主の言ってる意味が分か

らんな」

瑠奈「…二つ目の問いだ。お前が、瑠璃を取り込んだ張本人か？」

瑠奈にとってこれが一番聞きたい問いだった。その問いに龍は

龍「そうだ。我がその瑠璃と言う名の愛の巫女を取り込んだ。愛の巫女の力で世界を創り変える。それが我らの世界のルール。逆にいえば、愛の巫女が存在しないならその世界を破滅するプログラムだからな」

瑠奈「…瑠璃は、無事なのか」

龍「勿論だ。愛の巫女の死は我の死に直結する」

瑠奈「…！」

龍を倒すには、瑠璃を殺す必要性を、瑠奈に突きつけられた。瑠奈は狼狽をする中、龍は光線を放つのに必要な力を蓄え始めた

龍「我を止めたい、大事な者を救いたいとする覚悟：今こそ我に見せつけよ、人間！」

瑠奈「言われなくても分かってる…お前を倒さなきゃ何も始まらない…これが俺の人生物語の…最終決戦だ…！」

そして瑠奈は雄叫びと共に炎の力を解放し、刀に力を集め龍の口目掛け飛び上がった

瑠奈「おおおおおつ…！」崩壊花火・牙突”…！」

龍「消え失せいっ…！」

104話：希望を失わぬ為の撤退

「暁学園、屋上」

瑠奈「おおおっ！」

龍「失せる、人間！」

瑠奈の炎と龍の光線が激突するが、やはり力の差が比べるレベルではなく、瑠奈はあっさり龍に弾かれた。だが弾かれたお陰で直撃は免れ、瑠奈は屋上に着地する

瑠奈「…へっ、この力の差は分かってたっつーの！」

龍「この力の差を見せつけてもなお我に挑むと言うのか、人間。ここであえて苦しみ果てる必要など無いというのに…」

瑠奈「おいオルトロス！俺の名は烈火：烈火瑠奈だ！覚えやがれ、馬鹿野郎！それに力の差がどんだけあったって俺は引かねえ、負けねえ、倒れねえ！死んでも瑠璃を助けなきゃならねえからな！」

龍「…ふむ、どうやら格の違いを思い知らす必要があるようだ。…

”セイントビット”」

龍は光の珠を沢山産み出すと、その光の珠は小さい龍へ姿を変える。その龍がオルトロスの周りをぐるぐる回っている

瑠奈「…子供ごとき呼び出してどうする気だ」

龍「放て」

龍が一斉に瑠奈の方へ向き、沢山の光線が四方から放たれた

瑠奈「…なっ!？」

瑠奈はその光線をかううじて避けるが、2波、3波と放たれる光線に防戦一方だった

瑠奈「この程度なら、避けるのもさほど苦労はしないが能力の差は明らかだ。…一気に決める！」崩壊花火”」

瑠奈は光線の回避を皮切りに、龍の懐に飛び込み一太刀浴びせ、爆発を起こした。だが…龍の鱗は固く、剣撃が弾かれてしまった

瑠奈「つあつ!?」

龍「散れいっ!」

そして龍は腕を振りかざし、瑠奈を吹き飛ばした。瑠奈は屋上の端でなんとか踏みとどまる。だが瑠奈のダメージは確実にあり、吐血をしていた

瑠奈「がはあつ…!」

龍「所詮人間：我の敵ではない!」セイントアロー」

そして龍は光の槍を産み出し、瑠奈に標準を合わせ一直線に穿つ。

だが瑠奈は一瞬の判断で刀を抜き、槍先をいなす事で窮地を越えた

龍「ほう…中々やるではないか」

瑠奈「…伊達に修羅場はくぐってねえってな!」焰ノ風」!!荒れ狂えっ!」

今度は瑠奈が龍目掛け炎の渦を展開する。だがその攻撃も龍が手で弾かれた

瑠奈「…危険な生き物だなあ、テメエは!こっちの攻撃は通らないつて事かあ!？」

龍「我が創成神であることを忘れたか?創成神はあらゆるものを創り出す…無論、能力も例外ではない。その産み出されたもので我が傷つくと考えるほうが甘いのではないか?」

瑠奈「正論だ。…だがな、世界は正論だけで構成されてる訳じゃねえんだ!こんなハンデ、軽くぶつとばしてやらあ!」

龍「…実に夢現な話だな、気に入った!」

そして龍は両手を胸の前で合わせる。すると巨大な光の珠が生成されていった。瑠奈はそれを見、刀を構える

瑠奈「…!!」

龍「お主を只の人間と見た我の失礼、ここで詫びよう…そしてこの一撃は、その礼だ!!受けとれ、”光滅弾”!!」

そしてその巨大な珠が瑠奈に放たれる…

瑠奈「なめんじゃねえええっ!!俺の炎は…消えねえええ!!」

そしてその珠は瑠奈を巻き込み巨大な爆発を引き起こし、暁学園を吹き飛ばした。龍はその地に降り立つ

龍「…烈火、瑠奈か…まさか、この程度で終わりではあるまいな？」
その言葉通りだった。瑠奈は煙の中から血塗れではあるが、仁王立ちでその場に立っていたのだ

瑠奈「…ゼエ、ゼエ」

龍「あの一撃を食らい、生きるか…お主、炎、闇の力以外にも何か力を持っているのか？」

瑠奈「んなもん…知るかよ…ただ…俺の炎は…消えねえのさ…！」

そして瑠奈の周りから沢山の炎が立ち上る。それは竜巻となり、大きくなる

瑠奈「俺はなあ…！今…！命と引き換えに出来るくらい大事な奴を迎えに来たんだ…こんなところで死んでたまるかよおっ…！」

そしてその炎が全て瑠奈の刀に集まる。龍はそれを見、またも光の槍を産み出す。一撃に全てを賭ける両者が、今対峙している

瑠奈「俺が…瑠璃を…護るんだあああああ…！！”崩壊花火・極”
！！」

龍「よかろう…烈火瑠奈とやら！その魂…我が貰い受けようぞ…！」
そして両者の激突。瑠奈の刀が龍に当たり、大爆発を引き起こす。

そして瑠奈が地面に着地し、幾ばくかの時が流れる。瑠奈は右肩を突かれ血を流していたが、龍の額の宝石にヒビが入ったのだった

龍「…！お主…まさか最初からここを…！！」

瑠奈「そこに…居ることが分かってるんでなあ…！」
そして額の宝石が割れ、瑠璃が放り出される。それを瑠奈がなんとか抱える

瑠奈「瑠璃、しっかりしろ、瑠璃！」

瑠璃「…う…瑠奈…さん…？」

そして瑠奈の腕の中で瑠璃が目覚める。瑠璃の目の前の光景は、瑠奈の血塗れの姿だった

瑠璃「る、瑠奈さん…大丈夫ですか…？」

瑠奈「あ、ああ…まだ、なんとか…だが…」

そして瑠奈は瑠璃を抱き抱えたまま後ろを向く。すると額の宝石を壊され次第に暴走していく龍の姿があった

瑠奈「あの宝石を壊すだけじゃあいつは死なねえのかよ…それに…」
そして龍の頭上の門は龍の暴走による活性化のせいで再び開き、中から牙獣が溢れてきていた

瑠奈「…こりゃ…八方塞がりだな…」

さらに瑠奈の視界が霞み、瑠奈は瑠璃を抱えたまま倒れてしまった
瑠璃「瑠奈さん！？瑠奈さんっ！！」

瑠奈「さすが…に、力の差がありすぎ…たか…。瑠璃…逃げ…ろ…」
瑠璃「嫌です。逃げるくらいなら瑠奈さんと一緒に死にます」

瑠奈「…命あつて…こそ…」

瑠璃「黙りなさい、瑠奈！」

瑠奈「！？」

瑠璃が瑠奈を一喝する。そして瑠璃が大粒の涙を流しながら瑠奈に訴える

瑠璃「私は失わない、自由を！これは瑠奈、貴方にも侵させない！
…私は貴方と共に居たいの。つらいとき、悲しいとき、楽しいとき…
…どんな時でも！私のワガママと違って貰って構わない！だから…
離れないで！」

だが牙獣はそのまま瑠奈と瑠璃の場にたどり着く。牙獣は既に二人をロックオンしていた

瑠璃「…私も、瑠奈さんも…死なない！死なせない！」

瑠奈「…くそ…動けよ、動け、俺の身体よお…今が、その時だろう
があ…っ！」

だがここで奇跡が起こる。その牙獣が急に起きた爆発で吹き飛ばされたのだ

瑠奈「…！？」

瑠璃「…まさか…」

夢村「ふう…まさか、こんな劣勢で出番なんてね…ちょっと烈火君？ だらしないんじゃないかしら？」

瑠奈「…夢村…!？」

瑠璃「夢村さん！」

夢村「果たして、私だけかしらね？」

するとさらに増援からの攻撃が始まる。光の球が飛んできたり、炎が牙獣を焼き払ったり、氷の弾丸が敵を貫いたり…今まで戦ってきた零、日向、灼沢、有音、明源、聖澤、双葉、風野が居た

瑠奈「…おまえら…」

聖澤「良いかお前達。私たちの目的は烈火、光の退却の護衛、および我らの生還だ。…とにかく生きるぞ」

皆「おう！」

瑠奈「撤収って…どういう…」

瑠璃「…聖。何かがあるんですね？」

聖澤「とにかく地下で形勢を建て直す。その為に」

大門「ういーす！ 皆さん早く！」

ここには大門も集まっていた

瑠璃「…瑠奈さん、ここは皆共に一旦退きましよう」

瑠奈「…退く、だと…!？ な、何を考えて…」

風野「命あってこそ、反撃も可能だぜ？ 死んだらそこで終わり…違つか？ とにかく今は風が悪いんだよ」

瑠奈「ま、待てよ…まだ天尊も、重山も…」

日向「飛鳥ちゃんは大丈夫、きつとすぐ来るよ！」

双葉「それに天尊も…彼は簡単に死ぬ人では無いです」

瑠奈「…でも、でもよおっ！」

瑠璃「瑠奈さんっ!!！」

また瑠璃が瑠奈を一喝する

瑠奈「…!!！」

瑠璃「信じて、下さい」

瑠奈「…わかっ、た…」

灼沢「よし、じゃあ行くよ！」
そして皆は門を通り地下に避難したのだった…

「暁学園跡」

天導「…まさか、こんなことになるなんてね」

宝冥寺「…くっ…」

暁学園の近くで行われていた戦いは天導に軍配が上がっていた。傷だらけの宝冥寺の喉元に無傷の天導が剣を突きつける

天導「さあ、君の命運はここで終わりだ。…命を貸してもらおうよ」

宝冥寺「…どういう事よ」

天導「希望は撤退したが、来るべき時に必ず反撃に来る。だがその前に牙獣が地上を突破すると終わりだ。だから牙獣の侵攻を食い止める」

宝冥寺「私たち二人で？笑わせないでくれます？さすがに無茶を通り越してますよ？」

天導「確かに、戦力が二人なら無理だが、四人ならどうだい？」

宝冥寺「…四人、だと？」

天鳳院「…私、居る。宝冥寺、今は手を組むべき」

重山「…わ、私も…まだ、生きてるのよ」

天導「役者は揃った。じゃ、希望が戻ってくるまで私たちが頑張りますか…行くよ、宝冥寺、天鳳院、重山」

宝冥寺「…はっ、おもしろい、お前がそんなに気にする希望とやら…見てみたくなりましたよ！」

105話：「私の命…貴女と共に！」

「新組織、大広間」

瑠璃「…どうですか？」

風野「ダメだ、あいつぁ手に終えねえよ…あの力はなんなんだ…」

瑠璃達は龍の居る地上から撤退し三日が経つ。今は新組織で戦力を整えようとしていたが、瑠奈が撤退した事に憤りを隠せず、今は新組織を飛び出し、外で暴れている様だった

風野「あれじゃ止めるより先に多分バテるんだろっなあ…」

聖澤「只、今彼がバテるのは我らの劣勢を明らかにする要因になる。どの道止めなきゃならないでしょう」

灼沢「でもお兄ちゃんを止められるのは…」

瑠璃「…私、ですよね？」

零「だろっな。あいつの心を静める力を持つのはお前だけだ」

双葉「頼むぞ、姫君。我らの勝利は…」

瑠璃「彼に懸かってますから…」

だがこの言葉を発する瑠璃の表情は暗かった。そして瑠璃は瑠奈の元へ向かう…

「放浪魂の聖域」

瑠奈「がぁぁぁあつー！」

瑠奈はここで現れる人造の敵を血眼になりながら打ち倒して行った。その場に瑠璃がたどり着く

瑠璃「…瑠奈、さん？」

瑠奈「…ハア、ハア…瑠璃か…」

瑠璃「…少し、お話良いですか…？」

瑠奈「…ああ」

Ⅱ 新組織、庭園Ⅱ

瑠璃と瑠奈は新組織の庭園に戻り、その芝生に座り込む

瑠璃「瑠奈さん、やっぱり撤退って言うのは気に入りませんでした？」

瑠奈「当たり前だ。俺は元々地上の人間。自分の生まれた町を見捨てて逃げられるかよ」

瑠璃「…肩、痛みます？」

瑠奈は今黒のタンクトップを着ていて、瑠璃に瑠奈の肩に痛々しくテーピングが巻かれているのが見えたようだ。瑠奈は少し苦笑しながら話を続ける

瑠奈「…まあ、あれだけ単純ながら強い攻撃を受けることはまず無いらな。正直、驚いた。そして悔しかった」

瑠璃「…ですよ。闇本って人が瑠奈さんの元に還って、瑠奈さん自身が復活しても…ですからね」

瑠奈「本音を言うなら独りでもいいから地上に戻りたい。早くあいつ…オルトロスを止めたい」

瑠璃「…だけど瑠奈さんはこの三日間行かなかった。それは何故ですか？」

瑠奈「簡単だよ。…俺が今戻っても、絶対に勝てない。独りでなんて勝てる相手なんかじゃないことは対峙した俺がはっきり分かっている」

瑠璃「…あの龍は、本当に世界を壊す気なんですね」

瑠奈「そんな事は間違ってもさせない。させたくない。だけど…今の俺じゃ、勝てねえ…」

すると瑠奈が涙を流す。瑠奈にとって完全なる敗北、それは自分の好きな町を壊される事に直結していて、そして大事な友が死ぬことに繋がっていたからだっただけ

瑠奈「クラスの奴等と違ってさ、俺だけ…まあ、日向や泉野も使え

だが、俺程戦闘に特化した奴は居ない。だからこんな脅威は戦える奴で凌がなきゃならねえのに…ザマあねえよな、まさかの返り討ちと来たと思えば、仲間に護られて撤退なんて…俺は、クラスの奴等を見殺しにしたのも同然さ」

瑠璃「…瑠奈さん、貴方は間違ってますよ」

そういう瑠璃の目からも涙が流れる

瑠璃「貴方は私を救ってくれた、あんな大きな脅威から、貴方一人で。違う？」

瑠奈「…」

瑠奈は言葉を返さないが、瑠璃は構わず話を続ける

瑠璃「私は理解しかねます。貴方は逃げたわけじゃ無いんですよ？まだ、町を見捨てたわけでも無いんですよ？クラスの皆も逃げ延びてるかもしれないじゃないですか…貴方の事を信じて」

瑠奈「…俺の事を？」

瑠璃「実は、神民戦争に貴方が関わっていることが、クラスの皆にバレたようで、そして貴方が地上を守った、ということも知られてるんです」

瑠奈「だが俺は神民戦争の時も敗けた。闇本にな」

瑠璃「だけどそれからクラスの皆さんはこう思っているそうですよ。

『瑠奈は最強の戦士だ』『命の恩人だ』『そんな瑠奈の為に、帰る場所を作ってやる』って」

瑠奈「…！」

瑠璃「確かに、帰る場所は貴方のクラスにもあるみたいですよ？彼らはその為に今、戦っているの。…貴方だけ逃げてどうするの？」

瑠奈「…」

瑠璃「それに、貴方の帰る場所は、まだ他にもあるんですよ」

瑠奈「…他…？」

瑠璃「…えいつ！」

そっぴい、瑠璃は瑠奈に抱きつく。その行為に瑠奈は戸惑いを隠せなかつた

瑠奈「お、おい、瑠璃…？」

瑠璃「あの獣は…消されるべきもの。私は、貴方に賭けたい…世界の未来、そして、私の未来を」

瑠奈「…！瑠璃の…未来…」

瑠璃「…私たちの戦力も整いました。後は…最後の最後まで力を振り絞り、龍を倒すだけです。…私、夢があるんですよ？」

瑠奈「…奇遇だな、今、俺にも夢が出来た。…それはな」

瑠璃「それはですね…」

瑠奈 & amp; 瑠璃「もう一度二人で一緒に、地上の夜空を眺めたい」

瑠奈「…」

瑠璃「…もう、退きません。世界のために」

瑠奈「分かったぜ、瑠璃…もう、臆さねえ…龍を、ぶつとばす。そして、平和を掴む」

瑠璃「やっと、瑠奈さんらしくなりましたね？」

瑠璃が微笑むと、瑠奈は照れ臭そうに顔を逸らす

瑠奈「う…うるせえよ」

瑠璃「…そんな思いやりのある瑠奈さんが、大好きです」

瑠奈「ん？なんか言ったか？」

瑠璃「…いえ、別に？そうと決まれば、新組織の大広間に戻りますよ…」

瑠奈「ああ！じゃ、行くか！」

瑠璃「あ、ちよつと先行つてて下さい！…戦いも最後になると思うから、おめかししなきゃ」

瑠奈「…おめかし？…まあいいか、先行つてるぞ…」

そして姿を消す瑠奈。そこには瑠璃のみが残る。瑠璃は頭上を見上げ、ぽつりと一言発し、新組織へ足を向けた

瑠璃「…たとえ私の身が減びても、大好きですから…」

「新組織、大広間」

零「…烈火、帰ってきたか」

瑠奈「おう！もう迷わねえし、迷う余地もねえからな！」

灼沢「それでこそお兄ちゃんだね！」

日向「でもあの力は簡単には越えられない…それは明確なんですよ？」

瑠奈「…まあ、な。だが退けば無駄に命が消える。それは避けたいからな。なんとかするさ」

瑠璃「皆さん、揃いましたね？」

そして衣装に身を包んだ瑠璃が最後に現れる。その姿は王女の貴祿を見せるかのような純白のドレスを身にまもっていた

瑠璃「…これが最後の戦いです。これに負ければ世界は終わり。勝てば…普通に帰ります。…全力を尽くしましょう！…そして皆さん、生きて帰りましょう！」

そして大門が産み出した門をくぐり、瑠奈達は再び地上へ向け走り出した

瑠奈「…これで、最後だ」

「暁町」

天導「…ま、参ったね、どうも…。無尽蔵じゃ、やっぱり…きついね…」

宝冥寺「結局門を閉めるのがやっと、か…私たち、もう八方塞がりね…」

重山「…!!」

牙獣の大量出現により、龍との戦闘はおろか門を消す事しか出来なかった天導達は今、牙獣をやっと殲滅し、龍と対峙していたが三人

は既に息も絶え絶えだった

龍「……」

天導「……苦勞、したよ君……烈火君が居なきゃ、こんなにつらいとは……ね」

宝冥寺「……私達、もう終わり……かしら……」

まずは宝冥寺が倒れた。さらに天導も膝をつく

天導「……もう、きついか……」

重山「諦めない。私は諦めない……諦めない諦めない諦めないっ！」

だが重山だけはまた力を解放した。重山の傷は三人の中でも特に深いものだった。だがそれでも立ち上がる重山は既に錯乱していた

天導「し、重山君！？無茶だ、君の傷じゃ、次の一撃を食らったら……」

重山「私は負けるわけにはいかんだああっ！」

そして重山は無謀にも拳に120パーセントの力を加え、龍の腹に一撃を食らわせた。だが……ダメージを受けた方は重山だった。腕に亀裂が入り、血が吹き出した。だがそれでも重山は錯乱がエスカレートし、さらに拳を加える。だが龍にダメージを負わせることは叶わなかった

重山「……ああっ……あ……」

龍「よくぞここまで抗った。その力は称賛に値するぞ、人間」

重山「……まだまだ……まだ……っ」

龍「ただ既にもうお主に勝算は無い。……サヨナラだ、地上の勇士よ。我の前から消えよ」

そして光線を放つ準備にかかる龍。重山は既に力を使い果たして、意識を持つのがやっとだった

龍「消えよ」

重山「うあああああっ！」破戒拳”！！」

そして龍の光線が一带を焼き払ったのだった……

106話…覚悟を決めて

「暁町、郊外」

瑠奈「いよ、っと…」

瑠璃「…最後の、戦いの地がまさかここで…」

風野「最初も、ここだったんだろ？ だったら驚くことは無いんじゃないの？」

瑠奈達はとうとう龍との決着を着けるため、暁町に再び舞い戻った。だが瑠奈達が見た光景は今まで見てきた暁町の姿は無く、ただ見渡す限りの焼け野原だった

瑠奈「…少し、休みすぎたようだな」

灼沢「よく分からないけど…これは酷すぎるよ…」

瑠奈「瑠璃、感じるか？ あいつの気配を…」

瑠璃「…あそこに居るのが、龍…私の力を取り込んだが故に暴走した、悲しい存在…」

瑠奈「瑠璃？」

瑠璃「行きましよう、瑠奈さん、皆さん。…これ以上悲しみは作っては…いけない」瑠奈「んな事言うのはいいが…さて、どう行くかな」

瑠奈達の眼前には行く手を阻むように牙獣が配置していた。さらに倒壊した建物が道を塞いでいる

瑠奈「…最短距離で行ったら戦力が削られるが、かといって回り道は俺らの力が浪費されるか…」

零「空から行ければいくらか楽なんだろうが、空から行けるのは俺と明源、烈火に光だけか…」

双葉「…私は忍術で、瓦礫なんて目じゃない」

天鳳院「…獣化で、瓦礫を飛び越える」

灼沢「でも私、聖澤さん、日向さん、有音さん、夢村さん、風野さ

んは能力では身体能力をカバー出来ないよ？」

瑠奈「…つたく、どうするか…」

瑠璃「正面突破で行きましょう」

ここで瑠璃が正面突破を切り出した。意外な人間が切り出したので、皆が一斉に瑠璃の方を向く

風野「正気か？あの軍隊を突っ切るのかよ？」

日向「いくらなんでも、命いくらあっても足りないんじゃない？確かに私たちの力も普通じゃないって事は分かっているけどさ…」

聖澤「…勝算、あるんだな？光よ」

瑠璃「…その為に、私は皆さんに問いたいです…」

そして瑠璃が次に発した言葉で、全員の表情が凍りつく…

瑠璃「大切なものを失っても、最後まで平和を勝ち取りに行けますか？」

瑠奈「…!!」

風野「…お前、それどーいう意味だよ」

瑠璃「言った通りの意味です。皆さんの動きがばらばらだと、かえって戦力が分散され危険です。だから私は中央突破しか方法は無いと思います。ですが、あの牙獣の群れを退けながら無傷で行くのもまた不可能かと…ですからこれから、世界の平和を勝ち取りに行くのに犠牲を払わざるを得ない、と私は…」

零「冗談はそこまでにしる」

すると零は急に銃口を瑠璃に向ける。犠牲を払ってまで平和が欲しいとは考えていないようだ

零「…大事なものを失って得た勝利になんの価値がある？なんの意味がある？…お前はそれを分かかって言ってるのか」

明源「おにーちゃん！だからって瑠璃さんに銃を向けなくても…」
だが銃を突きつけられた瑠璃の覚悟の眼差しは変わらなかつた。その様子にあきれたかのように銃を降ろす零。そして、各々が覚悟を

口に、突破をすることになる…

零「悪いが死ぬつもりもなければ、なにかを失うつもりもない。…
もう俺は冷酷の氷なんかじゃない」

明源「おにーちゃんと同じ、なにかを失うつもりは愛にも無いよ！
皆で力を合わせれば、何でも出来るよ！」

双葉「…私のような忍も仲間として迎え入れてくれた皆さんの為、
私も尽力します」

天鳳院「…私、負けない」

有音「…私も出来るだけのお手伝いをします」

日向「あゝあ、私そーいう堅つ苦しいのは苦手なだけだなあ…。

まあ、瑠璃ちゃんがそれだけの覚悟があるなら、私たちもそれくらの覚悟はしなきゃね？」

灼沢「…私も兄さんに護られてばかりだった。だから今度は私が皆
さんを守る番だよ」

聖澤「…ふつ、中々おもしろい結束のさせ方だよ、光」

風野「俺の風は、正義を助ける風だ。…しっかり、助けてやるよ」

そして瑠璃は皆に背を向けていた瑠奈の傍に行く。そして瑠奈に

「カオス」という黒い石を手渡した

瑠奈「…なんだよ」

瑠璃「怒ってますか？私の言葉に…」

瑠奈「何でお前に怒らなきゃならねえ？…ただ、俺には…大切なものを失ってまで勝ちにこだわられるか…分からなくてな」

瑠璃「そんなの、私にも、多分皆さんにも無いですよ」

瑠奈「…だろうな。だって、俺らは仲間だもん」

瑠璃「瑠奈さんは日向さん達地上人、私や零さん達地下人、風野さんや明源さん達天上人…不思議な組み合わせ、だけど手を取り合えた…この絆は、失いたくない大切なものです。…だけど私、なんだか自信があるんです」

瑠奈「…どんな自信だよ。まさか、女の勘だとも言いたいのか？」

瑠璃「フフフ…そうかも知れないですね？…飛鳥や天尊さん達もき

つと無事でしょうし…本当に、私の勘ですな」

瑠奈「…なんか真面目に聞いて損したぜ。まさか勘であんなデカイことを言うとはな」

瑠璃「ただちよつと試しかっただけです。そこで首を横に振る人は無理に連れていきたくありませんから」

瑠奈「いい考え方だな、瑠璃。さすがは皆に愛の巫女と言われるだけの事はある。…お前の命は、俺がしっかりと守る。お前もその意思、最後まで貫いてくれよ？」

瑠璃「…はい」

そして、牙獣の群れに向かって瑠奈とその仲間達が力を解放し、突撃を開始した…

瑠奈「おおおおっ！行くぜええっ！」

107話…道を拓け、戦士達よ！

「暁町」

瑠奈「おおおっ！！」

瑠奈達能力者の軍勢は龍の元へ向かい、最終決着をつけるため牙獣が塞ぐ道を突き進み始めた。先陣を切ったのは風野、日向のペアであつた

風野「風は…俺たちを裏切らない！そうだよな…お前達いつ！」
式
の風・鎌鼬”！！」

日向「光は神速を尊ぶ！」
神光穿波”！」

風野は沢山の風を纏うイタチを呼び出し、牙獣を吹き飛ばす。日向は槍を片手に突進した。そこを烈火達が駆け抜ける。だが、牙獣の数は多く、風野と香恋は孤立していく…

瑠奈「！！風野！香恋！」

風野「気にするな烈火ああ！俺らは死なない、絶対になああっ！」

日向「私も負けない…だから、絶対勝つてね！瑠奈あつ！」

瑠璃「…残りの皆さん、出来るだけ隊列を崩さず突き進みます！」

双葉「…やむを得ないか」

天鳳院「…双葉、やる？」

灼沢「じゃあ、私もお供します！」

瑠奈「！？お前らっ！？」

双葉「悪いが烈火殿、この戦況での反論は受け付けかねます。…これだけの数、やはり我らだけで押しきるのは無理。…ならば、私たちが抑えるので、先を！」

瑠璃「…！！」

双葉達の瞳を見た瑠璃は覚悟を感じとり、一度止まった足を再び龍に向けて駆け出した。瑠奈もそれに気付き、一瞬ためらうが

瑠奈「…すまねえっ！！」

瑠奈達も瑠璃の後を追った。その場には双葉、灼沢、天鳳院が残る
双葉「…」忍法、木の葉時雨」
天鳳院「獣化」…がおおっ！」
灼沢「ミニフレア」！！…そして、これが私たちレジスタンスの
！合体奥義！」
双葉& a m p ;灼沢& a m p ;天鳳院「百獣炎時雨」！！」
双葉が産み出した木の葉を灼沢が燃やし火の雨を降らせ、その火の
雨を纏い、天鳳院が牙獣の群れに突進、牙獣は瞬く間に掃討される。
だがそれでも牙獣は沸き、再び灼沢達に襲いかかる…
灼沢「負けられない…絶対につ！！」
双葉「我ら人類の未来がかかっているのだ…我らが屈するわけには
ゆかぬのだ！そこを退きたまえ！」
天鳳院「ガルルオオオツ！」

「暁学園跡」

瑠奈「…追撃は、無いようだな」
瑠璃「はあっ…はあっ…」
有音「…少し休もう烈火さん。光さん、つらそうだから。」
零「…ここがあの町、だった場所か」
明源「…ボロボロだね…」
瑠奈達は暁学園の跡地まで逃げ延びると、牙獣も何故か追っては来
なくなつた。それを見計らい、物陰に隠れて休む一行。瑠奈達の目
線の先には龍の姿があつた
零「…まだこちらには気付いてないか」
明源「…ただどこれをやったのはあのデツカイのなんだよね？」
瑠奈「…だろうな。…たたく…一応俺の住んでた町なんだぞ」
瑠璃「…すぐそこに、龍が…」
零「…だが、そううまくも行かない、か」

零がそう言う通り、牙獣を撒いてはいるがまだそこらじゅうに牙獣が徘徊していた。零はそれを見て

零「明源、シンクロするぞ。…俺たちがあいつらを引き付ける、その際にお前達で決めてこい」

瑠奈「任せていいんだな？…これでもあいつには一度負けてる、今回も負けるかも知れねえぞ」

零「お前と対峙した俺なら分かる。…簡単にはやられない、大丈夫さ。お前と光ならやれる」

瑠奈「…後で後悔すんなよ？…任せた！」

そして瑠奈は瑠璃の手を握り、前へ駆け出し、零はその場に飛び出し、明源と共鳴し、銃口を牙獣に向ける

零「怖いか？明源」

明源「あ、愛は別に怖くないもんっ！むしろ、おにーちゃんこそしつかりしてよね！」

零の銃を持つ手が震えていた。数の差があるだけに恐怖していたのだ
零「…この数、一人て対峙するのはさすがに怖い。一瞬の判断で死ぬるからな」

明源「だいじょーぶ！おにーちゃんには愛がついてるから！」

零「…ふっ、違いない、か。…零冬児、この場は我が命に変えても通さないっ！」

〓 崩壊都市、寒空町 〓

瑠奈「…大丈夫か、瑠璃」

瑠璃「…はあっ、はあっ…な、なんとか…」

瑠奈と瑠璃は龍が居る崩壊都市へたどり着いた。そこに広がるのは瓦礫のみ、龍がやった行為が見てとれた。そして視線の先には龍が待つ

瑠奈「…これで終わりにしてやるよ」

瑠璃「…！！！！瑠奈さん！ここを掘ってもらえますか！？」

瑠奈「？あ、ああ……」

だがここで瑠璃が瓦礫の下に何かあることに気付く。瑠璃の指示の元、その場の瓦礫をどかすと……

天導「……よく、気付きました……ね」

瑠奈「天導！？なんでこんな……」

瑠璃「……誘貴、飛鳥と宝冥寺さんは？」

瓦礫から出てきたのは傷だらけの天導だった。額からの出血で左目が開かずにいる。その天導に瑠璃は重山達の居場所を聞くが、場所はいまいち分かって居ないようだ

天導「さて、困った、ね……どうも……。生きてるかどうかも定かでは無いよ……。あのエネルギー波は……並の能力者じゃ……受けきれないだろうから……ね」

瑠璃「……どういうことですか？」

天導「彼女……君の守護兵長の重山君が自身渾身の一撃でそのエネルギー波を受けたんだ。……彼女がそうしてなければ今ごろ僕達は仏さ」

瑠奈「……おい、それじゃ、飛鳥は……」

天導「多分、助かってないと思うよ」

瑠璃「言うなっ！」

その場で瑠璃が叫ぶ。泣きそうになるのをこらえる瑠璃に、瑠奈はかける言葉が見つからなかった

瑠璃「……あの人……飛鳥が死ぬわけがない。きっとどこかで生きてます！私は……それを信じます！」

天導「信じると言えど、僕は確かにこの目で彼女が……」

瑠璃「黙りなさい、誘貴。……私に、信じさせてください」

天導につかみかかるが、瑠璃はとうとう涙を堪えきれずに頬をつたっていった

瑠璃「……私は、誰も欠けずにこの戦いに勝ちたいんです」

天導「……困ったね、どうも。……よく言えば慈愛、悪く言えば考えが甘い……かな」

瑠奈「……？」

天導「…君に、賭けるしかないんだ。…頼むよ烈火君、瑠璃を任せ
たよ」

瑠璃「…つたり前だ」

瑠奈と天導は拳を合わせると、天導は姿を消した。そして瑠奈達は
眼前の敵に目をやる。龍がこちらに気付き、接近していたのだった
龍「…お前か、我に一太刀浴びせた輩は」

瑠奈「ああ…だがお前は強い。普通の俺なら勝てねえよ。正直和平
で済むならそれが一番いい」

龍「何を言うか。我から巫女を奪った罪、万死に値するぞ、烈火と
やら」

瑠奈「だが…今の俺には沢山の人の想いが、願いが、俺の剣に集ま
ってんだ。…俺、もう負けられねえんだ。瑠璃の為、仲間の為、地
上の為、世界の為…お前を討つ」

瑠奈は剣の切っ先を龍に向ける。龍はそれを見て

龍「ほう…闇雲に我に突撃した以前の姿とは別人よな。…さすがは
人間、と言うべきか…」

瑠璃「オルトロス、まだそれでも戦うと言うの？」

今度は瑠璃と龍が会話をする。瑠璃は真っ直ぐな瞳で龍を見つめる
龍「愚問だな…人々が争い、奪い、私利私欲が渦巻く世なぞ、神は
望んでは居ないのだ。巫女よ、お主の力はそれを粛清するためにあ
るのだぞ？」

瑠璃「確かにそうかも知れないけど、私、地上に来てから短い間だ
ったけれどいろんな物を、人を見てきました。瑠奈さん達と出会っ
て、学校って人が集まるところでは皆が私と仲良くしてくれて、遊
園地とかが楽しくて、お買い物でも色んな物があつて、おいしいも
のも沢山食べて…、そして、私の想像以上に空が綺麗でした。太陽
も、星も、月も、雲も、雷も、雨も、雪も…全部綺麗。そしてその
場所には必ず人間がいました」

瑠璃が話す言葉に瑠奈と龍は静かに耳を傾ける

瑠璃「人間は、貴方が思うほど諦めるものじゃ…ない。人と触れて

ない貴方が勝手に人を裁くなんて…私が許さない！」

龍「…我に齒向かうか…それで掴む平和もあるう。…だが、神が居てこそその平和もあるのだ。巫女が退けぬのなら我は押し通るまで！」

瑠奈「お前の理屈を通す気はさらさらねえ…俺らは生きたいんだ！命をお前の手の中で操作されてたまるかあ！！」

瑠璃「行きます！！…瑠奈さん！」

瑠奈「おおっ！！」

そして瑠奈と瑠璃は手を握り、力を解き放つ

瑠奈& a m p・瑠璃「変転詩・闇」「チェンジソング・シャドウ

」！！」

108話：真覚醒。烈火瑠奈対オルトロス

「寒空町」

瑠奈「…これが、真の、闇の力…か」

龍「覚醒したか…よい力だ。ただ…力のベクトルを間違えてはおらぬか？」

瑠奈と瑠璃が互いに力を覚醒させ、共鳴させる事により瑠奈は闇の力を我が物に変えた

瑠奈「…この期に及んでそんなことは気にしない。この力で世界を守るのなら…な」

龍「ほざけっ！」

そしてそこに龍が光線を放つ。だが瑠奈は闇の障壁を産み出し光線を無力化した

龍「ほう…能力の強さは巫女を擁してるだけあるな…」

瑠奈「…光に対なるは、闇…俺と瑠璃は対なるもの。だがな、俺と瑠璃は絆で結ばれてるんだ。…お前のような存在に負けるわけには行かない」

龍「では…これならどうだっ！」

すると龍は牙獣を呼び出し、瑠奈に突進させる。それに対し瑠奈は剣を構える

牙獣「ガルオオオツ」

瑠奈「…瑠璃、力を貸してくれ！」やみざんそつ「闇斬走」！」

すると瑠奈が剣に力を込め、牙獣の横つ腹に斬り込む。するとその傷から力が溢れだし、牙獣を消し去った

瑠奈「…この程度で俺達を止められると思うのか？」

龍「…なら、その礼に応じるのが…礼儀だろうな」

すると龍の身体が光り、龍は人の姿となって瑠奈の目の前に降り立った。貴公子然の白髪、目は金色で白い甲冑を身に纏っていた。そ

して腰に剣を携えていた

瑠奈「…それがお前の本当の姿か？」

龍「地上に存在するときは基本この格好だな。それにこの格好でお前を倒せば、もう歯向かえなくなるであろう？」

瑠奈「…眩しいな、それが瑠璃の力の本質か？」

龍「賢いな、烈火よ…。巫女の力も我が授けしもの。そしてお主の力、闇もまた、我が授けた能力であるのだ」

瑠奈「という事は…お前には能力が通じない、って事だな？」

龍「そこまで分かっているなら話は早い。…はあっっ！」リフレクビット」！」

龍は光の珠を生み出し、そこから光線を瑠奈めがけて発射する。瑠奈はよけるが…

瑠奈「小賢しい。この程度では止められないと…」

龍「隙有りっ！」

次の瞬間、通りすぎていったと思われた光線が光の珠の出現により跳ね返り、瑠奈の背中を直撃した

瑠奈「がっ…っ…！」

龍「油断したな、烈火よ」

瑠奈「…っ、何の…まだまだ…」

龍「では、耐えきって見せよ。」心・砕」

そして起き上がった瑠奈の懐に一瞬のうちに飛び込み、掌に力を込め、瑠奈を吹き飛ばした。瑠奈は吐血しながら吹き飛ばされ、近くの建物に突っ込んだ

瑠奈「…っっ！」

龍「これが我の力だ」

瑠奈「!？」

そして倒れる瑠奈の胸元に手をおき、さらに一撃、さらに一撃を加える。瑠奈はガードが出来ず、さらに吐血をする

瑠奈「ぐあっ…があっ…！」

龍「どれだけ強い能力者であろうと、我には勝てぬ…我には勝てぬ

のだ！」

そして龍はトドメの剣を振りおろす。だがそれは瑠奈がなんとか剣で受け止めた

龍「まだ意識があつたか」

瑠奈「…バ、力野郎：ナメてんじゃねえぞ…！俺は…期待を、夢を、希望を…背負つてんだあああつ！」

そして瑠奈は炎の力を生み出し、龍を吹き飛ばす

龍「ふう…っ、次は炎か…」

瑠奈「…来い、龍…俺は…俺はあつ！」

そして瑠奈が飛び上がり、炎をまとい突撃する

瑠奈「崩壊花火・地」！

だが…

龍「甘い、甘いぞおお！」

瑠奈「つつ！？」

龍は瑠奈の剣を弾き、手刀を瑠奈の胸目掛けてつきだした。瑠奈はなんとか身を捻るが、かわしきれず肩を貫かれる

瑠奈「があああつ！？」

龍「ふっ…よくぞかわした、と言いたいところだが…右肩を貫かれていては、もう剣は持てまい？」

瑠奈「…つつ！」

瑠奈はその手刀から解放されたが、右肩から大量の出血が見られた
瑠奈「…瑠璃、悪いっ！」

そしてとうとう瑠奈は瑠璃との共鳴を解く

瑠璃「る、瑠奈さんっ！？」

瑠奈「…ワリイな、やっぱ、お前は巻き込めないわ」

そして瑠奈は炎の障壁を生み出し、瑠璃と瑠奈の間が裂かれたのだ
つた…

龍「…貴様、何のつもりだ」

瑠奈「…へっ、へへ…悪いなオルトロス。お前に瑠璃は渡せない…
んだ」

瑠璃「瑠奈さん…」

瑠奈「だが、悪いが俺は死ぬ気も、消える気も無い」

龍「…？死ぬも消えるも意味は同じじゃないか？」

瑠奈「いや、違うな…、俺は、死にも消えもしない。お前にはその意味を分かることはない…俺が、てめえを倒す！」

瑠璃「…瑠奈さん、なら私もここにいます」

瑠奈「！？はあ！？じゃあ今ここで逃がす行為が…」

龍「なら私が負けたら素直に消えてやろう。だが私が勝てば…」

瑠璃「…貴方の好きにしたらいいですよ、世界を。私も逆らいません」

瑠奈「…お、お前、何を言ってるんだよ？世界がどうなってもいいのかよ？」

瑠璃「違いますよ。私は瑠奈さんが勝つと信じてますから」

瑠璃が笑顔で瑠奈に諭す。それを理解したのか、瑠奈は炎を消した

瑠奈「…分かったよ、瑠璃。任せる」

瑠璃「なら、私の地からを貴方に使います…」

そして瑠璃は瞳を閉じ、瑠奈に白いオーラをまとわせる。すると瑠奈の右肩の怪我が消え去った

瑠奈「な、な…！？」

瑠璃「頑張ってくださいね？私、信じてますから」龍「おのれえ…！！烈火、お前は殺すうっ！！」

龍はその一部始終を見終わった瞬間血走った目で瑠奈に突撃を開始した

瑠奈「殺れるものならやってみな…俺は…今…無敵だあああつ！」

そして瑠奈は輝く炎の力を解放する…。瑠奈の手の甲には”聖”の文字が浮かび上がる

瑠奈「この炎は…勝ちを照らす炎になる！」

龍「貴様ああつ…ふざけるなあああつ！」

最終話：燃える烈火！世界の希望を背負って…

〓寒空町〓

龍「許さんぞおおっ！」

瑠奈「負けるかあああっ！」

龍と瑠奈は最大限の力を解放し、斬り合っていた。かたや輝く聖の力、かたや燃える聖の力：僅かに能力の差はあったものの、さつきまでの劣勢は消えていた

龍「何故だ：何故貴様が巫女に選ばれる！？腐れた人間風情がああっ！！！」

瑠奈「それがお前の本性かよ：腐れ外道が、くたばれええっ！」

さらに能力の打ち合い、剣の斬り合いが力を増す。お互いが限界を超え、次第に周りの景色がさらに廃墟と化していく。そんな中でも互いに手加減無く打ち込まれていった

龍「我は神だ：世界を統べるものだ！人間風情に負けるわけがない：負けるわけがないのだあっ！」

瑠奈「ちいっ！」

だが龍の気迫は凄まじく、瑠奈の剣が弾かれる。だが龍の攻撃を巧みにかわしながら瑠奈は炎を使い攻撃を続ける

龍「丸腰の貴様に何が出来る！？所詮人間、武器を持たずして我を倒そうなど笑止千万！！我が力により、ねじ伏せてやるぞぞ！」

瑠奈「…！！」

すると龍は閃光弾を地面に放ち、瑠奈の目眩ましをする。瑠奈はそれを食らい、視界が無くなってしまふ

瑠奈「…ちっ！」

龍「くたばれ人間！滅びの定めを受け入れよおおっ！」

瑠奈「んな事：受け入れられるかあああっ！」爆炎拳”！！！”

だが龍が剣を振りおろす刹那、瑠奈は龍めがけて拳を振り抜くと龍

の腹に突き刺さった。そして龍を吹き飛ばす

龍「ぬおおおっ!？」

瑠奈「…目が見えなくても、感覚だけでも戦える!！」

龍「…」カウンター・ブレイク」

瑠奈「!！」

だがその時だった。龍が指を鳴らすと、瑠奈の身体に衝撃が走り、吐血してしまった

瑠奈「…がっ…は…!！」

龍「…私の衝撃は、貴様の衝撃…簡単には死にはせんよ」

瑠奈「…ぐうっ…これが…俺の一撃…かあ…」

瑠璃「瑠奈さんっ!！」

瑠璃が瑠奈のもとに駆け寄る。知らぬ間に瑠璃は瑠奈の剣を回収していた

瑠璃「…大丈夫ですか？」

瑠奈「…聞くだけ野暮だぜ…」

瑠璃「…剣、です」

瑠奈「気い…きくな、嬉しいぜ…」

瑠璃「でも相手にダメージを与えればその分のダメージが瑠奈さんに向かうのなら、瑠奈さんは二人を相手にしてるようじゃないですか…私にも、力があれば…」

瑠奈「瑠璃…お前は、この戦いを最後まで見届ける…、敗者は消え、勝者が世界を決める大一番だ…こりゃあ、話のネタになるからな」

瑠璃「…勝算は？」

瑠奈「…100%、俺の勝ちだ」

そういつと瑠璃は瑠奈の元を離れる。そこには龍が近づいていた

龍「…貴様にこの技まで出すことになるとは思わなかったぞ…」

瑠奈「俺が与えたダメージがそのまま俺に返る…こりゃ、お前には一本取られた気がしたぜ」

龍「…気がした、だと？」

瑠奈「だったら…その技が出来なくなるまでに押しきる!！」

そして瑠奈は瞬時に龍の懐に飛び込み、拳を打ち込む。龍は反応が出来ず腹に直撃を受けた

龍「ぐほあっ！」

瑠奈「…っつ！”火龍拳”！」

そしてさらに一撃、二撃と龍に拳を打ち込む。龍は耐えきれなくなり膝をつくが、瑠奈も反動を喰らい血を吐きよるめく

龍「…我の一撃をもらいながら…よくぞ…持ちこたえたな」

瑠奈「…倒れる訳には、いかねえ…からな」

龍「…なら我は手段は選ばぬ…死ねいっ！」

すると龍は光線を瑠璃目掛けて発射する

瑠璃「……！？」

瑠奈「…！」

その光線は瑠璃に向かっていったが、それで瑠璃が撃ち抜かれる事は無く、撃ち抜かれたのは瑠奈だった。瑠璃を庇ったのだ

瑠璃「…っ！」

瑠奈「…よく、分かって…るじゃ、ねえ…か…」

瑠奈は派手に血飛沫をあげ、その場に倒れる。瑠璃はその場に呆然と立ち尽くしていた

龍「何がこの戦いを見届けるだ！？自分の足枷だけを増やし、我に勝とうとするなど言語道断！ふざけるのもここまでだな…人間はやはり我にひれ伏すのだ！！ふはははははっ！！」

瑠奈「……ぐっ…」

瑠璃「…よくも…」

龍「？…何だと？」

瑠璃「よくも瑠奈さんを…」

龍「何を言いたい」

瑠璃「許さない…絶対にいいいっ！！」

すると突然瑠璃が力を解放する。だが瑠璃のオーラはいつもの白ではなく、赤みがかかった黒のオーラだった。そして目が真っ赤に染まり、右手にはなにかを握っていた

瑠璃「…私は貴方を許さない、私は…貴方をおおっ！」

そしてその時、黒い翼が瑠璃の背中から現れ、瑠璃が宙に浮く

龍「な…なんだと…そんな…巫女おおっ!!！」

瑠璃「…私は、もう光に囚われている訳じゃないんですよ。消えよ、聖の神よ。早く、迅速に！」

龍「そのような脅しで我が退くと思っているのか？貴様は我が産みし存在。我に敵うはずが…」

瑠璃「黙れ、神のレットルを被った悪魔が」

龍「…!？」

瑠璃「神なんて存在なんか居ない」

瑠璃は凄い剣幕で龍に語りかける。龍はたじろぎながらも瑠璃に反論する

瑠奈「…瑠璃…？」

瑠璃「悪いですね、瑠奈さん。私が出ます」

龍「…はっ、お前が俺を倒すのか？ふざけおって…口だけでは何とでも…」

ただ、そこに光の剣が飛ぶ。瑠璃は本気だった

瑠璃「…」

龍「いいだろう…すぐに片付ける！」

すると龍は瑠璃に向かって突撃する。だが龍の剣が瑠璃に当たる前に瑠奈によって受け止められた

瑠璃「…!？」

龍「なっ…貴様…！」

瑠奈「…お前達…俺を無視して話を進めんなよ。俺は…まだやれる！」

瑠奈は左肩に剣を突き刺し、龍の侵攻を止めていた。そして龍の腹に剣を突き刺す。それを受けた龍は血を流しながら後退する

龍「お…おのれええっ！」

瑠奈「…決めるぞ、瑠璃」

瑠璃「え…？」

瑠奈「悪いが…俺一人の力なら…多分倒せない。だから…瑠璃、頼む」

瑠璃「はい…ありがとうございます、初めて瑠奈さんは私を頼ってくれましたね」

瑠奈「…どうだかな。…行くぜ！」

そして右手の掌を龍に照準を合わせ、力を溜める。瑠奈の背中に瑠璃が抱きつき、力を送る

龍「…我は負けるわけには…負けるわけには…」

瑠奈「これが…俺の、最後の力だ…」

瑠璃「これは…私たちの…、そして世界の意思です！」

瑠奈「うおおおっ！！」

瑠璃「あああああっ！！」

そして瑠奈、瑠璃の最大の一撃が放たれる

瑠奈&瑠璃「カオス・ラストオーダー」！！」

瑠奈が放った黒い光は龍を飲み込んだ。そして…大爆発を引き起こした…

龍「馬鹿なあああっ！！」

瑠奈「うおおおああっ！！」

瑠璃「いやああああっ！！」

「 暁町、仮設テント」

瑠奈「…う…」

瑠奈が目覚めると、自分に毛布がかけられ、テントの中に居た

瑠奈「…戦いは終わった、のか…？」

日向「あ、瑠奈、目を覚ましたんだね」

瑠奈「香恋…？」

現れたのは幼馴染み、日向だった。只日向も左腕が包帯で巻かれていた

日向「てへ…ドジって少し怪我しちゃったよ！」

瑠奈「…おい、牙獣はどうなった!？」

慌てて動こうとするが、瑠奈の身体は言うことを聞かなかった。あの一撃の反動が凄まじいものだったのだ

瑠奈「いつ…!」

日向「あゝ、ダメダメ、安静にしなきゃ!もうかれこれ3日も寝てたけど、まだ傷は治ってないんだからね？」

瑠奈「質問に答える、香恋。…牙獣は…」

夢村「さつきから騒がしいかと思ったら…目を覚ましたのね？」

次に夢村がテントに入ってきた。夢村は右足を引きずっていた

夢村「見て分からないかしら? 私たちは勝ったのよ？」

瑠奈「そうか…」

夢村「ただ、意識を失った貴方と光さんを救出するのに苦労したわ…あんなバリアを張られちゃあね…」

瑠奈「バリア…?」

夢村「多分光さんが張ったんでしょね。…彼女も無事。まあ、よく頑張ったんじゃないかしら？」

瑠奈「…よくもあの軍勢相手にお前ら、無事だったな…」

夢村「さあね? 私たちの力を甘く見ない方がいいんじゃないかしら?」

風野「お、目え覚ましたか、烈火あ!遅かったじゃねえか!」

灼沢「兄さん、やっと起きたね…おはよう!」

そして皆からの祝福を終え…

瑠奈「おい、今瑠璃は…」

風野「暁町の…ある場所にいる」

瑠奈「?何故濁す？」

風野「…行くか、烈火？」

瑠奈「ああ、当たり前だ。あいつにも感謝しなきゃならねえしな!」

風野「…会ってくれるか、分からないぜ？」

その言葉に瑠奈は疑問が浮かんだ。何故会ってくれるか分からない

のか…

瑠奈「…なんか、あつたのか？」

風野「…重山が、死んだ」

瑠奈「！！？」

瑠奈自身、天導から話を聞いていたのでなんとなくは覚悟はしていた、ただ、瑠奈にとって、そして瑠璃にとって認めたくない事実だと言っことは瑠奈自身も分かっていた

風野「墓が今、暁町にあるんだ…」

瑠奈「…それでも俺は行く。重山にも…ちゃんと礼を言わなきゃな？」

風野「なら俺の召喚獣を使え。白虎でも呼び出せば、すぐに着くだろう」

瑠奈「お前…召喚術使えるのか？」

風野「まあな？…もつとも、戦闘には出せないがな？」

瑠奈「何だよ？」

風野「詠唱に時間が掛かりすぎるんだ」

瑠奈「…成る程な」

そして瑠奈はその白虎に乗り、瑠璃がいる墓の元へ向かう…

〓 暁町、墓地 〓

瑠奈「…瑠璃？」

瑠璃「…な…さん？」

瑠奈が白虎から降りるとそこには一面に墓地があり、この戦いで死んだ人間の名が刻まれた大きな墓が建てられていた。そしてそこに小さな女の子…瑠璃が居た。振り向こうとしないところを見ると、多分泣きすぎて目が赤くなってるのを見られたくないからだろうか…

瑠奈「…隣、いいか？」

瑠璃「…はい」

瑠奈は瑠璃の隣に座る。ただそれでも瑠璃は瑠奈から顔を逸らして

いた

瑠奈「…聞いたぜ」

瑠璃「…」

瑠奈「…ごめんな、最後の最後で、お前の希望を守れなかった」

瑠璃「…瑠奈さんのせいじゃない…。それに重山だって…死にたくて死んだ訳じゃ…」

瑠奈「…なあ、瑠璃？俺のさ…母さん、死んだだろ？」

瑠璃「…！」

瑠奈「実は俺…母さんが死んだ現場に居たみたいでさ」

瑠璃「…でもあのとき、瑠奈さんは意識が…」

瑠奈「闇本の記憶の中に、俺の母さんの死に様があった。母さん、牙獣にやられたみたいでさ…で、闇本がそれを家に運んできてた…みたいでさ」

瑠璃「…瑠奈さん…つらい？」

瑠奈「バカ力、もうつらくはねえよ。だけど…大切な人を失う辛さは俺も知ってる…、そんな時、大事な人が傍に居てくれたら…楽になれるんじゃないか？」

瑠璃「…！！」

瑠奈「俺の自意識過剰かも知れねえかもよ…、俺、そのために、ずっとお前の傍にしようと努力した。だけど…最後の最後に、ドジっ たな」

瑠璃「…」

瑠奈「瑠璃にとつちや、俺も重山も大事な人だったんだ…俺は、重山も守れなかった」

瑠璃「…うっ…うっ…」

瑠奈「俺の炎は…勝負に勝った、だけど…負けた」

瑠璃「うああんっ！」

瑠璃は瑠奈に泣きついた。押さえていたものが溢れ出してしまったようだ

瑠璃「うああん…瑠奈さあん…」

瑠奈「…今は泣いたらいい。だけど、明日には生きてる人間で前に進まなきゃならねえからな」

瑠璃「うっ…うん…頑張る…」

瑠奈「…瑠璃、新作を見せたいんだが…いいか？」

瑠璃「…ハナビ、ですか」

瑠奈「ああ…」

そして腰から小さな火薬玉を取り出す。そしてそれを投げあげ…瑠奈は小さな炎を呼び出し、火薬玉にぶつける。すると、小さな火花が広がった

瑠奈「…これが、希望の花だ」

瑠璃「！」

すると瑠奈の掌には急に赤い花が現れた。それを瑠璃に手渡す

瑠璃「…これ…」

瑠奈「我ながらにキザっぽいよな…ははは…」

瑠璃「…ありがとうございますね、瑠奈さん…」

瑠奈「…今更、感謝なんか要らねえよ…」

今度は瑠奈が瑠奈に背を向ける。瑠璃は怪訝そうに瑠奈の行動を見ている。瑠奈の目には涙があった

瑠奈「…行くぞ、瑠璃。これからが、大変なんだ」

瑠璃「…はい！」

そして二人手を繋ぎその場を離れる瑠奈と瑠璃。墓にはいつしか瑠奈のバンダナと瑠璃のリボンが結ばれていた…

俺らの戦いは、まだまだ終わらない、生きてる限り…。だが、皆が、瑠璃が居ればなんとかかなるよな、きつと…

〈終〉

最終話…燃える烈火！世界の希望を背負って…（後書き）

瑠奈達の戦いは龍の消滅により幕を閉じた。重山、雷の死亡、暁町の壊滅等瑠奈達の心身のダメージはかなりのものがあるが、瑠奈達は立ち止まらず、前へと進んでいく。そして灼沢、零、明源、双葉、天鳳院、土屋、天導、夢村、聖澤、大門は地下に帰り、地下の繁栄の礎を作りに戻った。そして瑠奈、瑠璃、泉野、日向、風野、有音、宝冥寺、は地上に残り地上の復興を続けた。そしてある程度の復興が見れたある日…

「暁町、烈火家」

瑠奈「…zzz…」

瑠璃「瑠奈さん…朝ですよ…」

瑠奈「…ん…今日は…日曜日…」

瑠璃「もお…今日は私とデート…」

瑠奈「…zzz…」

瑠璃「…もういいです、瑠奈さんの意地悪…」

瑠奈「…zzz…」

瑠璃「光迅剣」

すると瑠璃は光の剣を生み出し、瑠奈の顔スレスレにおとした。それに気づき、瑠奈が飛び起きる

瑠奈「おわあああっ!？」

瑠璃「あ、やっと起きましたね おはよう、瑠奈さん」

瑠奈「…どんな起こし方だよ…ったく…」

瑠璃「じゃ、瑠奈さん支度してください これから皆さんと野球大会ですよね？」

何故だが知らないが、瑠璃が「皆と野球って遊びがしてみたい!」
と言い出したのがキツカケで、皆で野球をやることになったのだ

瑠奈「つたく…何でこんな事に…」

瑠璃「まあまあ…いいじゃないですか」

瑠奈「それに相手は暁学園高校…一応名門だぜ？」

瑠璃「いいじゃないですか とにかく早く早くっ」

そして球場に向かう…

「暁町、町営グラウンド」

主将「今日はお願ひしますっ！」

瑠奈「あ…、まあ、期待はすんなよ、素人ばっかだし…」

瑠奈達”能力者連合”のオーダーはこんな感じになった

1番 二塁 双葉

2番 中堅 天鳳院

3番 捕手 烈火

4番 DH 風野

5番 左翼 夢村

6番 遊撃 零

7番 一塁 日向

8番 三塁 灼沢

9番 右翼 聖澤

投手 光

主審「プレイボール！」

瑠奈「瑠璃…力を抜いていいぞ？」

瑠璃「…私、嬉しいですよ。このように、また皆さんで集まって楽し

く過ごせる…そこに争いが無いのが嬉しいんですよ…行きまーす

「

そして瑠璃が第一球を投げる…

「終」

あとがき

どうも皆様、こんにちわ。日向剛でございます。

さてさて皆様、「CHAOS」の話は完結するに至りましたが、はてさてどうだったでしょうか？

「おい作者、誤字脱字多すぎんじゃねーの!？」

「更新遅いわ!！」

「キャラ多すぎ!！」

等々、数えきれない不満があったかもしれませんが、いろんな方が私の作品を見てくれたようで、私は幸せです。感無量です。

ずっと書きたかった作品だった「CHAOS」。烈火瑠奈というキャラもずっと自分の中の主人公像で、多分筆者の性格がそのキャラに集中されてるかな、と思います。

一応の完結を見ましたが、ご要望があったり、そして筆者もまだまだ書き足りないので、さらに書いていきたいなあと思います。

そして筆者自身はこーいう道を志望(目標はラノベ作家の井上謙二さんが目標)しているので、よければ、応援をよろしく願います…

それでは、また別の作品で会いましょう…

新章開幕〜remember the CHAOS〜

瑠奈達能力者集団と世界を統べる龍との対決からさらに2年が過ぎた。瑠奈は22歳になり、無事に暁大学を卒業し、現在は何をやっているのかというと…

「新組織、道場」

灼沢「ちえいさあつ！」

瑠奈「甘いつ！」

瑠奈は現在、瑠璃が地下に戻り、地下の代表として就任したため、地下で守護隊長の座についていたのだった。今は灼沢との手合せしていたのだった。

灼沢「あいたつ！！！」

瑠奈が灼沢の木刀をはじめ、勝負ありといわんばかりに木刀を捨てる瑠奈

灼沢「くっ！ま、まだっ……」

瑠奈「ここまでだ紗菜。これ以上の無茶は体に毒だ」

灼沢「…わ、分かった…」

腑に落ちない顔を浮かべながらも木刀を壁にかける灼沢。瑠奈もそこに木刀をかけ、その場に寝そべった

灼沢「…どうしたの？隊長…」

瑠奈「頼むからその呼び方やめてくれ…俺にそんな肩書きは…」

灼沢「でも瑠璃さんを助けたのはお兄ちゃん。それは間違いないんでしょう？」

瑠奈「だったらその呼び方でいい。だから隊長はやめろ」

灼沢「まあ…だったらそうするけどね？」

夢村「あら、やっぱりここにいたのね、烈火君に灼沢さん？」

その場に夢村が現れた。手には飲み物が入ったコップが乗ったオボ
ンがあつた。

夢村「終わったのかしら？手合せとやらは…」

瑠奈「まあ、一応はな」

灼沢「むしろあなたこそ暇なんですか？随分と余裕みたいですけど
…」

夢村「まあ、一応は、ね？最近はこれといった内乱もないし、平和
よねえ？」

瑠奈「平和、な…」

瑠奈と灼沢は飲み物を手に取り、口に運ぶ

瑠奈「…笑えねえな」

夢村「そうね、この違和感は笑えないわね。まるで…」

灼沢「あの事件が無かつたことになつてゐるからね」

瑠奈「…これが何か悪いことの前兆でなきやいいんだがな？」

夢村「烈火君、灼沢さん。おかわりいる？」

瑠奈「…頼む」

〓 新組織、個室 〓

瑠璃「…」

部屋で一人考え事をしている瑠璃の部屋に、ドアがノックされる

瑠璃「…どうぞ？」

零「…入るぞ」

そこに現れたのは零だった。最近零は新組織に姿を見せていなかった
ため、瑠璃は驚いた表情で零を見つめていた

零「…なんだ」

瑠璃「いえ…珍しい来客だなあ、と思ひまして…」

零「…確かに最近は姿を消していたからな。無理もない」

瑠璃「そんな貴方が私の前に姿を見せるってことは、何か問題でも

ありましたか？」

零「…問題があれば、わざわざ俺が出なくても瑠奈が気づいて解決しているだろう。問題は何もなさすぎることだな」

零はまじめな表情で瑠璃に話すが、瑠璃はいまいち理解できていないようだった

瑠璃「…平和、って一言じゃ解決できないんでしょうかね？」

零「…平和…というよりは、“嵐の前の静けさ”といったところか」

瑠璃「なるほど…貴方はそう捉えましたか。瑠奈さんと全く同じことを考えていますね？それに…私も同じ」

零「だろうな。俺たちはあの神を敵に回し、勝利した。だが、それにしてはその惨事が民間に知れ渡っていないことが疑問なんだ」

瑠璃「…」

零「…俺は明源とともに少し調べさせてもらおう。構わないな？」

瑠璃「構いませんよ？…ところで、零さん？」

零「…なんだ？」

瑠璃「愛ちゃんとはうまくいってますか？」

零「んなっ！…なんでそんなことを」

瑠璃「だって、零さんと愛ちゃんは仲がいいでしょう？その…恋人同士になったのかな、って…」

零「…俺は、明源の保護者、的のところだな」

「……………」

「……………」歴戦の雄が、何かに気づいたか…。だが、私の計画に狂いはない。光瑠璃…地下の巫女の命、私が頂く。そして世界を再び混沌へ誘おうじゃないか…。今度は逃がさないよ…、光瑠璃、それに…烈火瑠奈！」

地下で蠢く不穏な影、平和に違和感を覚える能力者、あの事件を忘れる国民…。これから始まる新たな”惨事”の幕開けが、すぐそこ

にまで迫る。そして仮初めの平和が今、破られる…

〈第四章・開幕〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4705o/>

chaos

2011年8月9日02時28分発行